



TITLE:

『眞誥』 譯注稿(三)

AUTHOR(S):

「六朝道教の研究」 研究班

CITATION:

「六朝道教の研究」 研究班. 『眞誥』 譯注稿(三). 東方學報 1998, 70: 567-786

ISSUE DATE:

1998-03-27

URL:

<https://doi.org/10.14989/66790>

RIGHT:

『眞誥』譯注稿（三）

「六朝道教の研究」研究班

眞誥卷之十一

稽神樞第一

金陵者、洞虛之膏腴、句曲之地肺也、履之者萬萬、知之者無一。
〈保命君啜作此言、按啜此應在乙丑年六月已前甲子歲中事、始論此山受福之端也、其地肥良、故曰膏腴、水至則浮、故曰地肺、歷世遊踐、莫有知其處者〉

句曲山源、曲而有所容、故號爲句容里、過江一百五十里、訪索卽得。〈凡此後紫書大字者、竝茅三君傳所記也、傳旣以寶祕、見之者稀、今謹抄取說山事、共相證顯、按山形宛曲、東西迴迴、故曰句曲、從山嶺分界、西及北屬句容、東及南屬延陵、句容旣立爲縣、故其里不復存、昔時應在述墟左右耳、今山去石頭江水步道一百五十里〉

江水之東、金陵之左右閒小澤、澤東有句曲之山是也。〈此蓋呼秣陵之金陵、非地肺之金陵矣、小澤卽謂今赤山湖也、從江水直對望山、東西左右正自如此也〉

此山洞虛內觀、內有靈府、洞庭四開、穴岫長連、古人謂爲金壇之虛臺、天后之便闕、清虛之東窗、林屋之隔沓、衆洞相通、陰路所適、七塗九源、四方交達、眞洞仙館也。〈此論洞天中諸所通達、天后者、林屋洞中之眞君、位在太湖苞山下、龍威丈人所入得靈寶五符處也、清虛是王屋洞天名、言華陽與比竝相貫通也〉

山形似巳、故以句曲爲名焉。〈今登中茅玄嶺、前後望諸峯壘、盤紆曲轉、以大茅爲首、東行北轉、又折西行北轉、又折東北行至大橫、

反覆南北、狀如左書巳字之形

金陵者、兵水不能加、災癘所不犯、河圖中要元篇第四十四卷云、「句金之壇、其間有陵、兵病不往、洪波不登」、正此之福地也、爾心悟焉、是汝之幸、復識此悟從誰所感發耶。〔此河圖者、舜禹所受、及洛書之屬、今猶有四十餘卷存、此語亦是示長史、言相感悟、乃從楊君宣說吾之所啓發矣〕

句曲山、其間有金陵之地、地方三十七八頃、是金陵之地肺也、土良而井水甜美、居其地、必得度世見太平、河圖內元經曰、「乃地肺土良水清、句曲之山、金壇之陵、可以度世、上昇曲城」、又河書中篇曰、「句金之山、其間有陵、兵病不往、洪波不登」、此之謂也。〔後所稱河圖、即是前要元篇語、雖山壇字異、其理猶同、此蓋指論金陵地肺一片地能如此耳、其餘處未必有所免辟耳〕

金陵、古名之爲伏龍之地、河圖逆察、故書記運會之時、方來之定名耳、至於金陵之號、已二百餘年矣。〔尋金陵之號、起自楚時、至秦皇過江厭氣、乃改爲秣陵、漢來縣舊治小丹陽、今猶呼爲故治也、晉太康三年、割淮水之南屬之、義熙九年、移治〔闕〕一闕〕場、元熙元年、徙還今處、此是江東之金陵耳、傳所言二百餘年者、是吳孫權使人採金、屯居伏龍山、因名金陵、自然響會、所以歎河圖之逆兆也〕

句曲山、秦時名爲句金之壇、以洞天內有金壇百丈、因以致名也、外又有積金山、亦因積金爲壇號矣、周時名其源澤爲曲水之穴、按山形曲折、後人合爲句曲之山、漢有三茅君、來治其上、時父老又轉名茅君之山、三君往會各乘一白鶴、各集山之三處、時人互有見者、是以發於歌謠、乃復因鶴集之處、分句曲之山爲大茅君中茅君小茅君三山焉、總而言之、盡是句曲之一山耳、無異名也、三茅山隱蝨相屬、皆句曲山一名耳、時人因事而論、今故有枝條數十作別名、舊不爾也。

〔今以在南最高者爲大茅山、中央有三峯、連岑鼎立、以近後最高者爲中茅山、近北一岑孤峯、上有聚石者爲小茅山、大茅中茅間名長阿、東出通延陵〔句〕曲阿、西出通句容湖〔就〕〔孰〕以爲連石積金山、馬嶺相帶、狀如埭形、其中茅小茅間名小阿、東西出亦如此、有一小馬嶺相連、自小茅山後去、便有雷平燕口方嶠大橫良常諸山、靡池相屬、垂至破罡瀆、自大茅南復有葦山竹吳山方山、從此疊障、達于吳興諸山、至于羅浮、窮於南海也〕

山生黃金、漢靈帝時、詔敕郡縣、採句曲之金、以充武庫、逮孫權時、又遣宿衛人採金常輸官、兵帥百家遂屯居伏龍之地、因改爲金陵之墟名也、河圖已得之於昔、可謂絕妙。〔今大茅山南猶有數深坑大坎、相傳呼之爲金井、當是孫權時所鑿掘也、今此山近東諸處碎石往往皆有金砂、云兵帥仍屯居伏龍、今則無復有、唯小近西有述墟、昔

乃名朮墟、今是良民、述墟前十數里、大茅有吳墟村、以號而言、乃欲相似、而復不關金陵、長史宅西北近長隱小岡下、乃時有故破瓦器、焦赤土甚多、疑是人居處、既經耕墾、基域不復存而了無井、亦恐如長史井堙沒耳、又小茅大橫不見採金處、大茅金井若是、復不應頓如此遠居、二三疑昧

金陵之土似北邙及北谷關土、堅實而宜禾穀、掘其間作井、正似長安鳳門外井水味、是清源幽瀾、洞泉遠沽耳、水色白、都不學道、居其土、飲其水、亦令人壽考也、是金津潤液之所溉耶、子其祕之、吾有傳紀、具載其事、行當相示。〈定錄君受作、密令「爾」示許侯、北邙山在洛陽北數里、北谷關即孟津關也、土色黃黑而肥腴、鳳門即長安北門也、今所擬金陵地、竝無土種植及住止鑿井者、乃是無知察、亦爲眞靈愛護、不使輕得居焉、吾有傳紀者、即是三茅傳也、按長史甲子年書云未見傳記、則啜此書時或在癸亥年中也、傳中亦稱良士甘美、居之度世、故因此而顯言也〉

地處少少耳、隱略十餘頃許、高而平者六七頃也、既知其要、觀其形勢、便朗朗也、故不曲示耳。〈保命君告、按傳中云金陵之地方三十七八頃、恐是其大垠所至、至於實錄、正當十餘頃耳、高平者是可住處也、會登其地、依說觀望、自可領略、粗知其處、若爲仙眞度世及種民者、無患不自然得至、苟其非分、徒攜手築室、必當諸方不立、

趣使移去耳、悠悠凡猥、勿承此強欲居之

金陵之左右、汧谷溪源、陵之左有山也、右有源汧名柃谷、陵之西有源汧名陽谷、名山內經福地誌曰、「伏龍之地、在柳谷之西、金壇之右、可以高樓」、正金陵之福地也。〈按今呼爲柳谷汧者、其源出小茅後田公泉、而西南流至述墟首入大汧、陽谷汧者、今無復其名、而長隱山岡後有小汧、西流南折、亦會述墟首、又父老云、「陽谷汧源乃出中茅前大茅後、數川注合爲一汧、出山直西行北轉、亦會大汧」、論兩汧相交之內、即是此地、大略東西不得極正、故兼以左右爲言、但今之所云二谷、不知即是昔號不、雖有耆「老」相承、傳譯漸失、兼汧源迥異、不必可指的爲據也

上古名此山爲崗山、孔子福地記云、「崗山之間有伏龍之鄉、可以避水辟病長生」、本所以名爲崗者、亦金壇之質也、是以百代百易、非復本名、良可歎也。〈按今小茅東北一長大山名大橫山、云本名鬱崗山、山即在今所謂伏龍之東、世又呼伏龍地爲死蛇崗、亦粗有彷彿、又見其長而高益、呼爲長隱、隱音於覲切、其言可隱障也、此崗山雖多細石、亦可居耳、近東南取長史宅、至雷平間、甚有可住處、義興蔣員葛等、今竝立田舍於崗下、近去長史宅四五里

越桐柏之金庭、吳句曲之金陵、養眞之福境、成神之靈墟也、五倍

堯水東海傾、人盡病死武安兵、其如予何、由我帶近洞臺之幽門、恃此而仿佯耳。〔右弼王王眞人授、令密示許侯、此即桐柏帝晨所說、言吳越之境唯此兩金最爲福地者也、武安者秦將白起、擊趙於長平、一日坑殺四十萬人、古來兵傷、莫復酷此、故別引之爲喻、斯蓋所謂兵病不往、洪波不登矣、既帶近洞天、神眞限衛、故能令三災不干、右前來至此五條楊書〕

- (1) 意をもつて「闕」の字を「闕」の字に改める。
- (2) 「句」は衍字とみなす。
- (3) 意をもつて「就」の字を「孰」の字に改める。
- (4) 愈本が「爾」を「示」に作るのに従う。
- (5) 愈本に従つて「老」の字を補う。

眞誥卷十一

稽神樞第一

金陵は洞天^②の膏腴、句曲の地肺^③である。ここを歩く者は何萬人と數限りないが、このことを知っている者は一人としていない。〔保命君がこの言葉をお授した。按ずるに、これを口授したのは乙丑の年

(興寧三年、三六五) 六月以前の甲子の年(興寧二年、三六四)のことのはずである。初めてこの山が福を授けるきっかけとなることを論じた。その土地は肥沃であるから膏腴といい、水が押し寄せれば浮き上がるので地肺という。何代にもわたって人々が往來しているが、その場所について知っている者は誰もいない〕

句曲の山の奥深い所^④は、曲がりくねって包み容れるので、句容の里と呼ばれるのである。長江を渡ること百五十里、探し求めてゆけば見つかるであろう。〔およそこれ以下の紫書の大字^⑤はいずれも『茅三君傳^⑥』に書いてあることである。その傳は大切に秘藏されているので、見た者はほとんどいない。今ここに謹んで山について説いている事を寫し取り、互いに照らし合せて眞實をはつきりさせよう。按ずるに、山の形が曲がりくねり、東西にうねっているので、句曲と云うのである。山の嶺で境域が分かれ、西から北にかけては句容に屬し、東から南にかけては延陵に屬する。句容は縣となつてしまつてゐるので、その里はもはや存在しない。昔は述壻^⑦のあたりにあつたはずである。今日、その山は石頭^⑧の長江の岸から道を歩くこと百五、六十里にある〕

長江の東、金陵の附近に小さな湖沼があり、湖沼の東に句曲の山がある。これがそうである。〔これは思うに秣陵^⑨の金陵のことをい

ているのであり、地肺の金陵のことではない。小さな湖沼とはすなわち今日の赤山湖^①のことである。長江からまっすぐ山に向かつて眺望すると、東西左右の位置関係はまったくこのとおりである。

この山の洞天の内側の眺めといえば、その中に神靈の役所があり、空洞の廣場が四方に開け、洞窟の峰が長々と連なっている。古人はこれを「金壇の虚臺」、「天后の便闕」、「清虚の東窗」、「林屋の隔沓」と言った。もろもろの洞天が互に通じ、地下通路の到るところ、あれやこれやの道や水源が四方に行き交っている。眞人の洞天、仙人の館である。へこれは洞天の中があちこちに通じていることを説いているのである。天后とは林屋洞中の眞君であり、太湖の菰山下にいまし、そこは龍威丈人が入って「靈寶五符」を見つけた所である。清虚とは王屋洞天の名であり、華陽洞天がともに竝んで互に通じ合っていることをいうのである。

山の形が「巳」の字に似ているので句曲という名で呼ばれるのである。へ今、中茅山の玄嶺に登り、前後に峰々を眺めてみると、くねくねと曲がりくねっている。大茅山からまず出發し、東へ進んで北へ轉じ、さらに曲がつて西へ進んで北へ轉じ、また曲がつて東北に進んで大横山に至る。南と北をひっくり返すと、まるで鏡文字の「巳」の字の形のようにである。

金陵は戦亂や水害が及ぶこともなく、災害や疫病が犯すこともない。『河圖』中の「要元篇」第四十四卷に、「句金の壇、そこには丘陵があり、戦亂や疫病が押し寄せず、大波も届かない」とある。まさにこの福地のことなのである。汝がこのことを心に悟るのは、汝にとつて幸いなことである。さらにこの悟りが誰によつて氣づかされたものか分かるか。へこの『河圖』は舜や禹が授かったものであり、『洛書』の類と合わせて今でもまだ四十餘卷残っている。この言葉もやはり許長史に示したものである。氣づき悟らせたというのは、自分が啓發したことを楊君が述べて説明したという意味である。

句曲山はその山間に金陵の地がある。その地は三十七、八頃四方であつて、これが金陵の地肺である。地味はすぐれて井戸水は甘美であり、その地に住めば必ず登仙して太平聖君にお目にかかることができる。『河圖内元經』に、「すなわち地肺は地味がすぐれ水は清い。句曲の山、金壇の丘陵は、登仙して曲城へと上昇することができる」とあり、また『河書』中の某篇に、「句曲の山、そこには丘陵があり、戦亂や疫病が押し寄せず、大波も届かない」とあるのは、このことを言っているのである。へ後のこの部分で『河圖(書)』と稱しているのは、すなわち前の「要元篇」の言葉である。「山」と「壇」と字が異なっているが、理窟は同じことである。これは思う

に、金陵の地肺という一片の地がこのような機能を有していることを説き示しているのである。その他の土地は必ずしも（災害などを）回避できるとは限らない）

金陵は昔、伏龍の地と呼ばれていたが、『河圖』はあらかじめ察知して、それで運命が巡ってやって来る時の、未來のゆるがぬ名稱を書き記しているのである。金陵という呼び名は、すでに二百餘年來のものである。〈金陵という呼び名をたずねてみると、楚の時に始まる。秦の始皇帝が長江を渡り、その地の氣を封じこめるに及んで、秣陵と改名したのである。漢より以來、秣陵縣はもともと小丹陽を治所とした。今でもまだそこを「故治」と呼んでいる。晉の太康三年（二八二）に秦淮水の南を分割してその管轄とし、義熙九年（四一三）に治所を鬪場に移した。元熙元年（四一九）に今の場所に移した。これが江東の金陵なのである。傳に二百餘年と言っているのは、吳の孫權が人々に金を採掘させ、伏龍山に集住させたために、金陵と呼んだのであるが、これは自然と『河圖』の言葉にかなっているもので、それで『河圖』が豫兆を示したことを贊嘆しているのである〉

句曲山は、秦の世には句金の壇と呼ばれていた。洞天の内部に百丈の黄金の壇があるのでそう名づけられたのである。外にまた積金

山があるので、積金に因んで壇の呼び名としたのである。周の世には、その水源を曲水の穴と呼んでいた。按ずるに、山の形が折れ曲がっているもので、後の人がそれらを合わせて句曲の山としたのである。漢の時に三茅君が現れ、その山の上にやって来て治めた。當時の古老たちは、また名を變えて茅君の山と呼んだ。三茅君はかつてのおのおの一羽の白鳥に乗り、この山々のうちの三つの場所にそれぞれ止まった。當時の人で互いにそれを見た者があり、そこで民謠に歌われた。そこでまた白鳥の止まった場所に因んで句曲の山を分け、大茅君、中茅君、小茅君の三山とした。ひっくり返して言えば、すべて句曲山という一つの山に過ぎないのであり、異名があるわけではない。三茅山はこんもりと聳えてあい連なり、すべてが句曲山という一名に過ぎない。その時々の人が故事に因んでたとえたので、今では支脈數十それぞれに別名ができているが、もともととはそうではなかった。今日、南にあって最も高い山を大茅山としている。中央に三つの峰があり、峰々は連なって鼎立しているが、すぐ後方の最も高いのを中茅山としている。すぐ北側の一孤峰で上に石が積み重なっているのを小茅山としている。大茅山と中茅山の間は長阿と呼ばれ、東は延陵、曲阿へと抜け、西は句容、湖孰へと抜けて、連石と積金山となり、尾根が帯のように連なって、堤のような形になっている。中茅山と小茅山の間は小阿と呼ばれ、やはり同様に東西へ抜け、小さな一つの尾根が続いている。小茅山より後方へ行くと、

雷平^⑬、燕口^⑭、方嶠^⑮、大横^⑯、良常^⑰の諸山があつて延々と連なり、破岡^⑱、瀆^⑲へと落ちこんでいる。大茅より南にはまた葦山、竹吳山、方山^⑳があり、ここから山々が幾重にも重なつて吳興の諸山へと達し、羅浮^㉑まで至つて南海に盡きるのである。

山は黄金を産する。漢の靈帝の時、郡縣に詔敕を下し、句曲の金を採掘して、それを武器庫に満たした。孫權の時に至り、また宿衛の人々を派遣し、金を採掘して常に官に收めさせた。隊長の家族たちはかくて伏龍の地に集住することになり、そこで金陵という村落名に變つたのである。『河圖』はとつくの昔にこのことが分かつていた。とてつもなくすばらしいと言えよう。へ今、大茅山の南にはまだなお深く大きな穴がいくつもあり、あい傳えて金井と呼んでいる。きつと孫權の時に掘鑿したものであらう。今日、この山のすぐ東の各處にある碎石には、しばしばどれにも金の砂が見られる。隊長がそのまま伏龍に集住するようになったというが、今日ではそんな所はもはやない。ただ少し西の方に述城がある。昔は亢城という名であつた。現在では良民の村である。述城の前方十數里の大茅山には吳墟村^㉒がある。呼び名からすればそれらしく思われるが、これもまた金陵とは關係がない。許長史の屋敷^㉓の西北の長隱^㉔に近い小さな岡の下に、時おり古びて壞れた土器が見られ、赤く焦げた土がとても多い。人の住んでいた所のように思われるが、田畑に耕されてし

まつて基礎がもはや残つておらぬうえに、井戸もまったくない。やはり恐らく許長史の井戸のように埋もれてしまつたのであらう。また小茅山や大横山には金を採掘したところは見當たらない。大茅山の金井がもしそうだとしても、(そこで働く人が)このような遠方に住んでいたはずはない。あれこれ考えると疑問が残る^㉕。

金陵の土は北邙山ならびに北谷關の土と同様に堅くしまつていて穀物に適している。そのあたりに井戸を掘れば、長安城鳳門外の井戸水の味とそっくりだ^㉖。清澄な泉源が人知れずさざ波を立てて流れ、奥深い泉水によつてじわじわと潤されているからである。水の色は白っぽい。まったく仙道を學ばなくても、その土地に住まい、その水を飲めば、やはり人を長壽にさせる。黄金のみずみずしい津液^㉗によつてすすがれているからであらうか。汝はそつと祕密にするように。わしは傳紀を持っているが、そのことを詳しく記載している。行くゆく示すことにならう。(定録君が授けて書きとらせ、こつそり許侯に示させたのである。北邙山は洛陽の北數里にある。北谷關とは孟津關^㉘である。土は黄色っぽい黒色をしていて肥沃である。鳳門とは長安城の北門^㉙である。今日、金陵に擬せられる地には、作付けされている土地もなく、またそこに住まつて井戸を掘る者もまるでいないのは、そのことを見抜ける者がいないからであり、また眞靈たちが大事に思ひ召して輕々しく住まわせようとなさらないからで

ある。「わしは傳紀を持つている」というのは、つまり『茅三君傳』のことである。許長史の甲子の年（興寧二年、三六四）の書に「まだ傳記を見ていない」とあること^⑤から考えると、この書を口授されたのはあるいは癸亥の年（興寧元年、三六三）のことなのであろう。『茅三君傳』にも「地味はすぐれ（井戸水は）甘美であり、そこに住めば登仙する」とあり、それでそれに基づいてはつきりと述べたのである。

その場所はごくちつぽけだ。あらかた十餘頃ばかり、高くて平坦なところは六、七頃である。要點が分かつたうえでその形勢を眺めてみれば、明らかに見てとれよう。だからこと細かには示さないのだ。〈保命君のお告げ。按ずるに、『茅三君傳』に「金陵の地は三十七、八頃四方」とあるのは、恐らくその最大範圍の及ぶところなのであろう。實際のところとなると、せいぜい十餘頃だけなのである。高くて平坦とは、住まうのによい場所のことである。きつとその土地に登り、語られているとおりに眺望してみれば、ちゃんと見當がついてあらましその場所が分かるのだ。もし神仙眞人となって登仙する者および種民^⑥であれば、自然にたどり着くことができないなどという恐れはない。もしそのような分際でなければ、助けあつて家を建てたところで無駄骨、きつとあらゆる方術^⑦もうまくゆかず、ただちに立ちのかせることとなるであらう。益體もない凡俗猥雜の徒

は、この教えを受けたとて無理をしてそこに住まおうとしてはならない。

金陵の左右の溪谷と溪谷の源流についていえば、金陵の左に山がある。右に柳谷と呼ばれる源流をなす溪谷があり、金陵の西に陽谷と呼ばれる源流をなす溪谷がある。^⑧『名山内經福地誌』に、「伏龍の地は柳谷の西、金壇の右にあり、高潔な隱棲暮らしにふさわしい」とある。これこそ金陵の福地なのである。〈按ずるに、今日、柳谷溪谷と呼んでいるもののその源流は、小茅山の背後の田公泉^⑨に發したうえ、西南流して述墟村のかかりに達して大きな溪谷に入る。陽谷溪谷は今日もはやその名で呼ばれるものがない。しかし長隱山の丘陵の背後に小さな溪谷があり、西に流れて南に折れ、やはり述墟村のかかりで（大きな溪谷と）落ち合う。さらに故老たちの言によると、「陽谷溪谷の源流は中茅山の前面、大茅山の背後に發し、いくつかの川が注ぎ集まって一つの溪谷となり、山を出るとまっすぐ西に向かつて北に轉じ、やはり大きな溪谷と落ち合う」とのこと。二つの溪谷が交わる範圍内といえ、つまりこの土地なのだ。おおよそ東と西とはかつきり正確に決めかねるから、それであわせて左とか右とかいうのである。ただ、今いふところの二つの谷が昔の呼び名そのままなのかどうなのかは分からない。故老たちの傳承があるとはいえ、言い傳えてゆく間に次第にずれてくるものだし、おまけに

溪谷の源流は位置が変わるから、必ずしもそれをずばりと證據とするわけにはゆくまい

上古にはこの山を崗山^⑤と呼んだ。『孔子福地記』に、「崗山のあたりに伏龍の郷^きがあり、洪水を避け疫病を避けて長生することができ」とある。元來、崗^{やあせ}と呼んだわけは、そこが金壇の本質部でもあるからだ。それで百代の間に百回も(名が)變わつて元來の名で呼ばれないのは、まことに歎かわしいことである。〈按ずるに、今日、小茅山の東北の長大な一山が大横山と呼ばれているが、元來は鬱崗山と呼ばれていたという。その山はつまり今のいわゆる伏龍の東にある。世間ではまた伏龍の地を死蛇崗と呼んでいるが、どこことなくそのような趣がある。またその長く連なつてせり上つてゆくさまを見て長隱と呼んでいる。『隱』の言は於觀の反し。寄りかかり人目を避けるのにふさわしいというわけである。この崗山には細石がごろごろしているけれども、住まうのによい。ほんの少し東南して許長史の屋敷の方向を目指し、雷平山のあたりに達すると、住まうのによい場所が澤山ある。義興の蔣員鶴^⑥たちが今日ではそろつて岡の麓に堀立小屋を立てている。許長史の屋敷からせいぜい四、五里の距離である

越の桐柏山の金庭と吳の句曲山の金陵とは眞を養うための福地、

神仙成就のための神靈の里である。堯の時代の洪水に五倍もする大洪水が起こるとか、東海の水が干あがるとか、人々は残らず病死してしまうとか、武安君の鑿殺^⑦とか、それらのことも自分をどうすることもできぬ。そのような時にも、わしは洞臺の小暗き門を側近くにひかえているからこそ、そのお蔭でぶらぶらしておられるのだ。〈右弼王の王眞人(王子喬)が口授し、こっそり許侯に示させた。これは桐柏眞人・侍帝晨の王子喬が話したことであつて、吳越の地域ではただこの金庭と金陵の二箇所だけが最高の福地だといふのである。武安君とは秦の將軍白起のこと。趙を長平に撃ち、一日にして四十萬人を坑埋めにして殺した。古來の殺戮でこれ以上に残酷なものはない。それでわざわざ引用してたととしたのである。これがいわゆる戦亂や疫病が押し寄せず、大波は届かないということなのであろう。洞天を側近くにひかえ、神仙眞人ががっちり衛つていたので、三災が犯さないようにさせることができるのである。右、先條からここまでの五條は楊羲の書

(1) 稽神樞 『眞話』卷一九葉一表の「眞話敘錄」に「眞話稽神樞第四」とあり、「此卷竝區貫山水、宣敘洞宅、測眞仙位業、領理所闕、分爲四卷」と解説している。

(2) 洞虛 『眞話』卷一一葉七裏「左元放：遂齋戒三月乃登山、乃

得其門、入洞虛、造陰宮、三君亦授以神芝三種、元放周旋洞宮之內經年。

- (3) 地肺 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)七十二福地「第一地肺山、在江寧府句容縣界、昔陶隱居幽栖之處、真人謝允治之」。

- (4) 山源 『漢武帝內傳』「諸仙玉女、聚於滄溟、其名難測、其實分明、迺因山源之規矩、睹河嶽之盤曲」。

- (5) 紫書大字 『真誥』卷一九葉九表「又真誥中、凡有紫書大字者、皆隱居別抄取三君手書經中雜事、各相配類、共爲證明」。

- (6) 茅三君傳 『真誥』卷八葉二表注「李中候名遵、即撰茅三君傳者」。

- (7) 述墟 『真誥』卷一一葉一七表「昔年十餘歲時、述墟閑書宿有見語」、注「此乃應是墟字、而由來皆作虛字、即今之山西村名也」。同卷一一葉九裏注「逮山西諸村、各各造廟、大茅西爲吳墟廟、中茅後山上爲述墟廟」。

- (8) 石頭 謝靈運「初發石首城」(『文選』卷二六)李善注「伏軾北征記曰、石頭城、建康西界臨江城也、是曰京師」。

- (9) 秣陵 『宋書』州郡志一「秣陵令、其地本名金陵、秦始皇改、本治去京邑六十里、今故治邨是也、晉安帝義熙九年、移治京邑、在鬪場、恭帝元熙元年、省揚州府禁防參軍、縣移治其處」。

- (10) 赤山湖 『南史』卷七〇沈瑀傳「湖熟縣方山埭高峻、冬月、公

私行侶以爲艱、明帝使瑀行修之、明帝復使瑀築赤山塘、所費減材官所量數十萬、帝益善之」。『元和郡縣圖志』卷二五句容縣「赤山湖、在縣南三十五里」。

- (11) 靈府 『真誥』卷二三葉一八表「庶以標誠靈府、永垂遠世、而未辦作石」。

- (12) 洞庭 『紫陽真人內傳』「山腹中空虛、是爲洞庭、人頭中空虛、是爲洞房」。

- (13) 天后 『太平御覽』卷六六三「五符曰、林屋山、周四百里、一名苞山、在太湖中、下有洞潛通五嶽、號天后別宮」。

- (14) 清虛 『真誥』卷一葉一一表「南嶽夫人其夕語弟子言、我明日當詣王屋山清虛宮、令汝知之所至也」。同卷五葉一四裏「王屋山、仙之別天、所謂陽臺是也、諸始得道者、皆詣陽臺、陽臺是清虛之宮也」。『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)十大洞天「第一王屋山洞、周迴萬里、號曰小有清虛之天、在洛陽河陽兩界、去王屋縣六十里、屬西城王君治之」。

- (15) 林屋 『真誥』卷一三葉八表「包山中有白芝、又有隱泉之水、正紫色」、注「此即林屋山也、在吳太湖中耳」。『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)十大洞天「第九林屋山洞、周迴四百里、號曰尤神幽居之洞天、在洞庭湖口、屬北嶽真人治之」。

- (16) 天后者：得靈寶五符處也 『太上靈寶五符序』卷上爲參照。

- (17) 華陽 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)十大洞天「第八

句曲山洞、周廻一百五十里、名曰金壇華陽之洞天、在潤州句容縣、屬紫陽真人治之」。

(18) 中茅玄嶺 『眞誥』卷一一葉九裏「中茅山玄嶺獨高處」。

(19) 大橫 『眞誥』卷一一葉一七表「雷平山之東北有山、俗人呼爲大橫山、其實名鬱岡山也、名山記云所謂岡山者也」。同卷一三葉七裏「毘山東北有穴、通大句曲南之方山之南穴、…」、注「此毘山猶是大橫山、故後云掾恆與方山五人往來」。

(20) 兵水 『眞誥』卷一一葉一三表「好道者欲求神仙、宜預齋戒、待此日登山請乞、篤志心誠者、三君自即見之、抽引令前、授以要道、以入洞門、辟兵水之災、見太平聖君」。

(21) 災癘 『眞誥』卷一一葉九表「後有郭四朝、又於其處種五果、又此地可種奈、所謂福鄉之奈、以除災厲」。

(22) 河圖 『周易』繫辭傳上「河出圖、雒出書」。

(23) 福地 『眞誥』卷一一葉五裏「越桐柏之金庭、吳句曲之金陵、養眞之福境、成神之靈墟也…」、注「…唯此兩金最爲福地者也」。

(24) 此河圖者、舜禹所受 『尚書中候』(『藝文類聚』卷一一)「伯禹曰、臣觀河伯、面長人首魚身、出水曰、吾河精也、授臣河圖」。

(25) 河圖內元經曰… 『太平御覽』卷一七〇潤州「河圖曰、乃有地肺、土良水清、句曲之山、金壇之陵」。

(26) 河書中篇 「河書」は「河圖」の誤りか。『無上祕要』卷四靈山品所引の『道迹經』は同文を引いて「河圖中篇」に作る。

(27) 方來 『越絕書』記吳王占夢「王孫聖爲人、幼而好學、長而慕遊、博聞彊識、通於方來之事」。

(28) 秦皇過江厭氣、乃改爲秣陵 『三國志』卷五三張紘傳注「江表傳曰、紘謂權曰、秣陵、楚武王所置、名爲金陵、地勢岡阜連石頭、訪問故老、云昔秦始皇東巡會稽經此縣、望氣者云金陵地形有王者都邑之氣、故掘斷連岡、改名秣陵、今處所具存、地有其氣、天之所命、宜爲都邑」。

(29) 小丹陽 『三國志』卷五六呂範傳「後從策攻破廬江、還俱東渡、到橫江當利、破張英于麋、下小丹陽湖孰、領湖孰相」。

(30) 故治 注(9) 參照。

(31) 割淮水之南屬之 『宋書』州郡志一「建康令、本秣陵縣、漢獻帝建安十六年置縣、孫權改秣陵爲建業、晉武帝平吳、還爲秣陵、太康三年、分秣陵之水北爲建業、愍帝即位、避帝諱、改爲建康」。

(32) 鬪場 注(9) 參照。

(33) 積金山 『眞誥』卷一一葉一〇表「大茅山中茅山相連長阿中有連石、古時名爲積金山、此山中甚多金物、其處宜人住、可索有水處爲屋室靜舍乃佳」。

(34) 漢有三茅君、來治其上 『太元真人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)を參照。

(35) 連石 注(33) 參照。

- (36) 雷平 『眞誥』卷一三葉一六裏「許長史今所營屋宅、對東面有小山、名雷平山、周時有雷氏養龍、來在此山」。
- (37) 燕口、方嶠 『眞誥』卷一四葉二裏「雷平山之東北、良常山之東南、其間有燕口山、三小山相隅故也、一名曰方隅、山下古人曾合九鼎丹於此間也、幽人在世時、心嘗樂居焉、今常遊此、方隅山下亦有洞室、名曰方源館、亦有二口常見外也」。
- (38) 良常 『眞誥』卷一一葉八表「茅山北垂洞口一山名良常山、本亦句曲相連、都一名耳、始皇三十七年十月癸丑、始皇出遊、十一月行至雲夢、祠虞舜於九疑、浮江下、觀藉柯、度梅渚、過丹陽、至錢塘、臨浙江、水波惡、乃至西百二十里、從峽中度、上會稽、祭夏禹、望于南海、而立石刻、頌秦德於會稽山、李斯請書、而還過諸山川、遂登句曲北垂山、埋白璧一雙、於是會群官、饗從駕、始皇歎曰、巡狩之樂、莫過於山海、自今已往、良爲常也、爾乃群臣竝稱壽、喚曰良爲常矣、又鳴大鼓、擊大鍾、萬聲齊唱、洞駭山澤、讚樂吉兆、大小咸善、乃改句曲北垂曰良常之山也、良常之意、從此而名」。
- (39) 破罡濱 『建康實錄』卷二「(赤烏八年)使校尉陳勳作屯田、發屯兵三萬鑿句容中道、至雲陽西城、以通吳會船艦、號破崗濱、注「案：晉宋齊因之、梁避太子諱(綱)、改爲破墩濱、遂廢之」。
- (40) 方山 『眞誥』卷一四葉一表「大茅山之西南有四平山、俗中所謂方山者也」。
- (41) 羅浮 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)十大洞天「第七羅浮山洞、周迴五百里、名曰朱明輝真之洞天、在循州博羅縣、屬青精先生治之」。
- (42) 吳墟村 注(7)參照。
- (43) 長史宅 『眞誥』卷一九葉一〇表「長史掾立宅在小茅後雷平山西北」。詳細は『眞誥』卷一三葉一六裏「葉一七表に見える」。
- (44) 長隱 『眞誥』卷一一葉五表注「按今小茅東北一長大山名大橫山、云本名鬱崗山、山即在今所謂伏龍之東、世又呼伏龍地爲死蛇崗、亦粗有彷彿、又見其長而高益、呼爲長隱、隱音於觀切、其言可隱障也」。同卷一三葉一七表「許長史今所營屋宅」：注「其西北即有長岡連亘、呼爲長隱者也」。
- (45) 二三疑味 『眞誥』卷一二葉九裏注「魏書王修傳又云、修往來南陽、多止張奉舍、奉舉家病、修嘗拯之、按張範兄弟乃嘗避地往揚州投袁術、又非劉表、不應在南陽、二三爲疑也」。『晉書』卷五二郗詵傳「雖明之弗及、猶思與羣賢慮之、將何以辨所聞之疑味、獲至論於謙言乎」。
- (46) 北邱及北谷關士：『後漢書』列傳七三逸民梁鴻傳「因東出關、過京師、作五噫之歌曰、陟彼北芒兮、噫、顧覽帝京兮、噫。『水經注』卷一六穀水「穀水又東逕廣莫門北、漢之穀門也、北對芒阜、連嶺修亘、苞總衆山、始自洛口、西踰平陰、悉芒隴也」。『晉書』卷三三王祥傳「及疾篤、著遺令訓子孫曰、…西芒

- 上土自堅貞、勿用壁石、勿起墳壠」。
- (47) 正似長安鳳門外井水味 『眞話』卷一三葉一七表注「今有好事、水色小白、或是所云似鳳門外水味也」。同卷一三葉一九表「土懷北邙色、井冽鳳門泉」。
- (48) 金津 『眞話』卷一一葉一一表「其山左右有泉水、皆金玉之津氣」。
- (49) 孟津關 『洛陽記』(『初學記』卷七)「漢洛陽四關、東成臯關、南伊闕關、西函谷關、北孟津關」。『水經注』卷一五洛水「靈帝中平元年、以河南尹何進爲大將軍、率五營士屯都亭、置函谷廣城伊闕大谷轅轅旋門小平津孟津等八關、都尉官治此、函谷爲之首、在八關之限、故世人總其統目有八關之名矣」。
- (50) 長安北門 『三輔黃圖』卷一「長安城北出東頭第一門曰洛城門、又曰高門、漢宮殿疏曰、高門、長安北門也、又名鶴雀臺門、外有漢武承露盤、在臺上、長安城北第二門曰廚城門、長安廚在門內、因爲門名、長安城北出西頭第一門曰橫門」。
- (51) 長史甲子年書云未見傳記 『眞話』卷一一葉一七裏參照。
- (52) 種民 『正一法文天師教戒科經』「大道家令戒」新故民戶、見世知變、便能改心爲善、行仁義、則善矣、可見太平、度脫厄難之中、爲後世種民」。
- (53) 諸方 『抱朴子』雜應「歷覽諸方書、有月三服意以子」。
- (54) 柳谷、陽谷 『眞話』卷一三葉八裏注「此水今從地涌出、狀如沸、水味異美、取浣垢衣、便自得淨、卽所呼爲柳谷汧者、在長史宅東南一里許也」。同卷一三葉一七表注「田公泉今具存、左右甚多水柳樹、故名柳汧」。同卷一三葉一九表「左帶柳汧水、右浚陽谷川」。
- (55) 田公泉 『眞話』卷一三葉八裏「華陽雷平山有田公泉水」。同卷一三葉一七表「後有姜叔茂田翁亦居焉、其山北有柳汧水、或名曰田公泉、以其人曾居此山取此水故也」。
- (56) 崗山 『眞話』卷一三葉一七裏「雷平山之東北有山、俗人呼爲大橫山、其實名鬱岡山也、名山記云所謂岡山者也」。
- (57) 隱障 『眞話』卷一一葉一〇裏注「其處隱障、甚可合丹」。
- (58) 蔣員翳 『三洞珠囊』卷二敕追召道士品「(道學傳)又云、蔣負翳、義興人也」。
- (59) 成神之靈墟 『上清黃庭內景經』若得章第十九(『雲笈七籤』卷一一)「五斗煥明是七元」、注「生魂者、玄父、變一成神、生魄者、玄母、化二生身」。『雲笈七籤』卷三靈寶略紀「丘聞童謠云、北上包山入靈墟、乃入洞庭竊禹書」。
- (60) 五倍堯水東海傾 『孟子』滕文公上「當堯之時、天下猶未平、洪水橫流、氾濫於天下」。『神仙傳』麻姑「麻姑自說云、接待以來、已見東海三爲桑田」。
- (61) 武安兵 『史記』卷七三白起傳「白起遷爲武安君、秦使左庶長王齕攻韓、取上黨、上黨民走趙、趙軍長平、以按據上黨」。

民、…秦軍射殺趙括、括軍敗、卒四十萬人降武安君、武安君計曰、前秦已拔上黨、上黨民不樂爲秦而歸趙、趙卒反覆、非盡殺之、恐爲亂、乃挾詐而盡阬殺之、遺其小者二百四十人歸趙、前後斬首虜四十五萬人、趙人大震」。

大天之內有地中之洞天三十六所、其第八是句曲山之洞、週迴一百五十里、名曰金壇華陽之天。《傳中所載至第十天、并及鄧都五嶽八海神仙遠方夷狄之洞、既非此限、竝不獲疏出》

洞墟四郭上下皆石也、上平處在土下、正當十三四里而出上地耳。《此當是至〔太〕^①〔大〕山頂爲言也》

東西四十五里、南北三十五里、正方平、其內虛空之處一百七十丈、下處一百丈、下墟猶有原阜壠、上蓋正平也。《向云高處一百七十丈、下處一百丈、則是中央高、四邊漸下、今云上蓋正平、是言其實平無凹凸處耳、非直去如板也、亦可登離阜之上、則於天爲下耳》

其內有陰暉夜光日精之根、照此空內、明竝日月矣、陰暉主夜、日精主晝、形如日月之圓、飛在玄空之中。《按諸洞天日月、皆各有此名、亦小小不同、蓋猶是大天日月分精照之、既云晝夜、便有出沒、

亦當與今日月同其明晦、今天崖畔、了不得窮、此小天邊際殆可捫觀、日月出入、則應有限、當是忽然起滅、不由孔穴、但未知其形若大小耳》

句曲之洞宮有五門、南兩便門、東西便門、北大便門、凡合五便門也。《今山南大洞即是南面之西便門、東門似在柏枝離中、北良常洞即是北大便門、而東西竝不顯、中君告云、「東便門在中茅東小茅阿口、從此入至洞天最近、而外口甚小、又以石塞之」、事具在後、則西便門亦當如此、正應在今所呼作石墳處也、柏枝乃有兩三洞口、恐眞門外亦不開、此三門精齋尋之、自可見爾、今南便門外雖大開而內已被塞、當緣穢惡多故也、北大洞猶有鬼神去來、而眞仙人出入、都不由五門、皆歛爾無聞、設此門者、爲示是山洞體製、或外人應入故耳》

虛空之內、皆有石階、曲出以承門口、令得往來上下也、人卒行出入者、都不覺是洞天之中、故自謂是外之道路也、日月之光既自不異、草木水澤又與外無別、飛鳥交橫、風雲翳鬱、亦不知所以疑之矣、所謂洞天神宮、靈妙無方、不可得而議、不可得而罔也。《世人採藥、往往誤入諸洞中、皆如此、不便疑異之、而未聞得入華陽中、如左元放之徒、是所不論、然得入者、雖出亦恐不肯復說之耳》

句曲洞天、東通林屋、北通岱宗、西通峨嵋、南通羅浮、皆大道也、

其間有小徑雜路、阡陌抄會、非一處也、漢建安之中、左元放聞傳者云江東有此神山、故度江尋之、遂齋戒三月乃登山、乃得其門、入洞虛、造陰宮、三君亦授以神芝三種、元放周旋洞宮之內經年、宮室結構、方圓整肅、甚憚懼也、不圖天下復有如此之異乎、神靈往來、相推校生死、如地上之官家矣。《今按地域方面、則林屋在東南、羅浮在西南、惟岱宗峨嵋得正耳、直道亦當五六千里、此路至潁川間、便應徑通王屋清虛天也、元放當是爲魏武所逼後仍來、後眞嘏乃云、「清齋五年、然後乃得深進内外官耳」、三種芝恐是下品者也》

(1) 愈本が「太」を「大」に作るのに従う。

大宇宙の中に地中の洞天三十六箇所がある。^①その第八番目が句曲山の洞天であつて、周圍は百五十里、金壇華陽の天と呼ばれる。《茅三君傳》中に記載するところは第十洞天にまで至り、あわせて羅酆都、五嶽、八海^②の神仙や遠方の夷狄の洞天にまで及んでいるが、この範圍内のことではないので、いずれも書き出すわけにはゆかない。

洞天内の空間は四壁上下すべて石である。上方の平らな部分は地

下にあり、たったの十三、四里で上方の土地に出る。《これはきつと大(茅)山の頂上に達することを言っているであろう》

東西は四十五里、南北は三十五里、きつちりと四角で平らである。その内部の虚空の部分は(高いところは)百七十丈の高さ、低いところは百丈の高さ。基底部にはやはり原野や丘陵、塚や堰があるが、上部の蓋の部分は眞つ平らである。《まず初めに高いところは百七十丈、低いところは百丈と言っているのからすると、中央が高く、四隅に向かつて次第に低くなっているのである。あらためて上部の蓋の部分は眞平らと言っているのは、つるつと平らでどこばこした部分がないことをいうのである。板のようにまっすぐなわけではない。丘陵の上に登ってみれば、そこはやはり天よりも低いということなのである》

その内部には陰暉夜光と日精の根とがあつてこの空間内部を照らし、その明るさは日月に匹敵する。陰暉は夜を支配し、日精は晝を支配し、形は日月のように圓く、小暗い空間の中を飛行している。《按ずるに、あらゆる洞天の日月はすべてそれぞれこのような名を持つているが、ほんの少しずつ違っている。思うに、大宇宙の日月が(陰陽の)精を分け與えて照らす^③ようなものなのであろう。晝と夜と言っているからには出没があるのであり、またきつと現在の日

月と昏明をとにもするのであろう。今、大宇宙のはてはまったく窮めることができないが、この小宇宙の邊際はまるで手につかみ目で確かめることができそうである。日月がそこに出入するには制限を受けるに違いない。きつと突然に點いたり消えたりするのであって、孔を通つて來るのではない。ただ、その形や大小は分らない。

句曲の洞宮には五つの門がある。^④南に二つの通用門、東西に各一つの通用門、そして北に大きな通用門、全部で五つの通用門である。〔現在の山南の大洞窟が南側の西よりの通用門である。〔南側の〕東よりの通用門は柏枝隴の中にあるらしい。^⑤北良常洞は北側の大きな通用門であるが、東側と西側の通用門はともに所在がはつきりしない。中茅君のお告げに、「東通用門は中茅山の東、小茅山に續く丘のとつきにあり、ここから入るのが洞天へ至る最短路であるが、^⑥外口はとても小さいうえに、石で塞いである」とある。この事は後に詳しく述べられており、西通用門もやはりこのような具合のはずで、^⑦今、石墳と呼びならわしている所にあるのに違いない。柏枝隴には二、三の洞窟口があるが、恐らく本當の門の外側は開かれていないのであろう。この〔南面の東通用門と東西面の二通用門との〕三門は精進潔齋して探せば自然と見つけられる。現在、南側の通用門は外側は大きく開いているが、内部はすでに塞がれている。きつと穢雑な氣が多いために違いない。北面の大洞窟は今もなお鬼神が

通行しているが、真人や仙人はまったくこの五門からは出入りせず、あつという間に隙間のない所を通り抜けるのである。これらの門を設けてあるのは、句曲山の洞天の結構を示すためであり、あるいは外界の人間が入つて來ることがあるからなのである。

洞天の内部空間には、いずれも石段があり、くねくねと曲がつて門口へと續いており、往來し上下できるようになっている。忽卒に出入りする者はここが洞天の中だとはまったく氣がつかないで、あい變わらず自分では外界の道路だと思つてゐる。日月の光が違わないうえに、草木や川沼も外界と異ならず、飛ぶ鳥があちこちを横切り、風雲が垂れこめてゐるので、何か疑問を感じる手がかりもないのである。いわゆる洞天や神仙の宮殿は、たとえようもなく靈妙で、あれこれあげつらうこともできなければ、みだりにいい加減なことを言うこともできないのである。〔俗人が藥草を採集して、誤つて洞天の中に迷ひこむことがままあるが、その中はみんなこんな具合だから、疑つたり不思議に思つたりはしない。ところで、華陽洞天に入れた者のことを聞いたことはない。もつとも、左元放などの連中は論外である。しかし、入れた者がいたとして、出て來てもやはり恐らくそのことを話そうとはしないであらう〕

句曲の洞天は、東は林屋山に通じ、北は泰山に通じ、西は峨嵋山

に通じ、南は羅浮山に通じていて、いずれも大きな道が通っている。その間には小道や脇道があり、縦横に入り組んでいる所も少なくはない。漢の建安年間(一九六―二二〇)、左元放は江南にはこのような神仙の山があるという言い傳えを聞いたので、長江を渡って訪ねて来た。彼は三箇月齋戒してから山に登り、やっとその門を探し當てて洞天の中に入り、陰宮^①にたどり着いた。三茅君も神芝三種を彼に授け、左元放は洞宮の内部を何年もかけて經巡った。宮室のしつらは、きちんと整っていて、恐ろしいほどである。彼はこう考えた。「世の中にこのように不思議なところがあるだろうか。神靈が往來し、人の生死を計り考えている様子は、まるで地上の役所のようにだ」。(今、地域や方角を考えてみると、林屋山は東南にあり、羅浮山は西南にある。ただ泰山と峨嵋山だけが正確な方角にあつて、直線距離では五、六千里である。この道は潁川のあたりにくると、すぐに王屋山の清虛洞天に通じているはずである。左元放は魏の武帝に追われてからやつて来たのに違いない。^②後の眞人の誥授には、「精進潔齋すること五年、そのうえで始めて内外の宮殿に奥深く進み入ることができた」という。三種の芝とは、恐らく最もランクの低いものであろう)

(1) 地中之洞天三十六所 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)は

十大洞天、三十六小洞天を數え、句曲山洞天は十大洞天の第八。
② 八海 陶弘景「水仙賦」(『華陽陶隱居集』卷上)「淼漫八海、沍泊九河、中天起浪、分地瀉波」。

③ 大天日月分精照之 『晉書』天文志上「張衡云、…日者陽精之宗、月者陰精之宗、五星、五行之精」。

④ 句曲之洞宮有五門 『眞誥』卷一二葉三裏「句曲有五門」。

⑤ 便門 『三輔黃圖』卷一「長安城南出第三門曰西安門、北對未央宮、一曰便門、即平門也」。^①『眞誥』卷一四葉三裏「東北有小口、…穴口大小俱如華陽三便門、便門亦用小石塞其口」。

⑥ 東門似在柏枝礪中 『眞誥』卷一一葉二三表注「此即南面之東便門、應在柏枝礪石穴中、此礪小穴甚多、難卒分別、必須精感得開、乃可議入」。

⑦ 東便門在中茅東小茅阿口 『眞誥』卷一一葉一二表「中茅山東有小穴、穴口纔如狗竇、劣容人入耳、愈入愈闊、外以盤石掩塞穴口、…使山靈守衛之、此盤石亦時開發耳、謂之陰宮之阿門、…其中多沙路曲僻經水處、不大便易、又道路遠、不如小阿穴口直下三四里、便徑至陰宮東玄掖門」、注「此即洞天東門也」。同卷一一葉一八裏注「此道南面之東門與小阿東門相似者」。

⑧ 從此入至洞天最近 『眞誥』卷一一葉一八裏「告中茅山東有小穴、陰宮之阿門、入道差易」。

⑨ 西便門亦當如此 『眞誥』卷一四葉三裏「鹿迹山中有絕洞、…

亦或以一小石掩穴口、穴口大小俱如華陽三便門、便門亦用小石塞其口、注「此云如華陽三便門、則南洞北洞本大開、餘東西及東南皆是塞矣」。

- (10) 無聞 『老子』第四十三章「天下之至柔、馳騁天下之至堅、無有人無聞、吾是以知無爲之有益」。

- (11) 山洞 『述異記』卷下「荊州清溪秀壁諸山洞往往有乳窟。『真誥』卷一三葉一八表「隱居今所安經昭靈臺前、欲立小石碣子、刻書華陽頌十五篇、皆讚述此山洞內外事」。

- (12) 神宮 沈約『梁宗廟登歌』「神宮肅肅、靈寢微微」。『真誥』卷一〇葉一七裏「生值清眞之氣、死歸神宮」。

- (13) 左元放 『真誥』卷一二葉三裏注「左慈字元放、李仲甫弟子、即葛玄之師也、魏武父子招集諸方士、慈亦同在中、建安末、渡江尋山、仍得入洞、又乞丹砂合九華丹」。

- (14) 齋戒 『周易』繫辭傳上「聖人以此齊戒、以神明其德夫」、韓康伯注「洗心曰齊、防患曰戒」。『抱朴子』金丹「必入名山之中、齋戒百日、不食五辛生魚、不與俗人相見、爾乃可作大藥」。

- (15) 陰宮 『真誥』卷一一葉一七裏「告小阿口直下三四里、便徑至陰宮東玄掖門、入此穴口二百步、便朗然如晝日」。同卷一一葉一八裏「告中茅山東有小穴、陰宮之阿門、入道差易、後當以漸齋修而尋求之、靈宗垂念、便以爲造金門而登玉房也」。

- (16) 神芝 『紫陽真人內傳』「以平旦燒香、北向再拜、服此神芝、

五年之間、視見千里之外、身輕能超十丈、日步行五百里」。

- (17) 推校生死 『無上祕要』卷二「三界宮府品」「元始靈寶北天大聖衆至眞尊神無極大道太上老君妙行真人常以月八日會於其上、推校地上兆民簿錄年命算籍」。

- (18) 地上 『上清大洞眞經』第一章「天上內音、…地上外音」。

- (19) 元放當是爲魏武所逼… 『後漢書』列傳七下方術左慈傳作參照。

- (20) 後眞授乃云… 『真誥』卷一二葉一三表作參照。同卷一九葉九表「今謹依眞授檢求」。

- (21) 清齋 『真誥』卷九葉一八表「清齋休粮、存日月在口中」。

- (22) 內外宮 『真誥』卷一五葉一表「山上爲外宮、洞中爲內宮、制度等耳」。

良常北垂洞宮口直山領、南行二百步、有秦始皇埋藏白璧兩雙、入地七尺、上有小磐石、在嶺上以覆塔處、李斯刻書璧、其文曰、「始皇聖德、章平山河、巡狩蒼川、勒銘素璧」、若掘即可得、始皇所履山川、皆祀以玉璧、不但句曲而已。《從此後墨書皆定錄眞君授以告長史、掾寫本前紙所失、恐非起端語、尋埋璧時、在三茅得道之前、而後乃具見如此、明眞人無所隔蔽矣、按傳所稱、即是登山時、但云一雙爲異、或應二字、雙璧之書亦如禹山所刻作篆跡也、今尋檢其處、

亦可見石蓋、亦殊自不小也

茅山北垂洞口一山名良常山、本亦句曲相連、都一名耳、始皇三十七年十月癸丑、始皇出遊、十一月行至雲夢、祠虞舜於九疑、浮江下、觀藉柯、度梅渚、過丹陽、至錢塘、臨浙江、水波惡、乃至西百二十里、從峽中度、上會稽、祭夏禹、望于南海、而立石刻、頌秦德於會稽山、李斯請書、而還過諸山川、遂登句曲〔此〕「北」垂山、埋白璧一雙、於是會群官、饗從駕、始皇歎曰、「巡狩之樂、莫過於山海、自今已往、良爲常也」、爾乃群臣竝稱壽、喚曰良爲常矣、又鳴大鼓、擊大鍾、萬聲齊唱、洞駭山澤、讚樂吉兆、大小咸善、乃改句曲北垂曰良常之山也、良常之意、從此而名。〔檢外書、始皇三十七年正月、出遊雲夢丹陽浙江、上會稽、祭夏禹、望南海、刻石紀功、還過吳、渡江〔來〕〔乘〕、竝北海、至琅琊、至平原得病、七月丙寅、崩於沙丘、九月葬驪山、如此之時、皆未有瀆、即是從延陵步道、上取句容江〔來〕〔乘〕路仍過停饗設耳、非必故詣句曲、所以止住山北邊下處、遂不進前嶺、且於時亦未驗此山之靈奇、祀璧之意者、爲通是望山設、所以中君云、「所履山川、皆祀以玉璧也」、夫號從主人、名由地表、小君以漢成帝時受紫書云治于良常北洞、蓋內因此成稱也、又檢始皇崩、不發喪、令車載鮑魚以亂烝、此應夏月中、如外書所說相似、今依傳言、乃是三十六年十月建亥之月爲秦正月爲出遊、是至雲夢耳、不爾則是三十〔八〕〔六〕年秋崩也、未作秦曆、不能得定癸丑

是何月中、比別更詳正之

王莽地皇三年七月戊申〔此七月二十四日也〕、遣使者章、齎黃金百鎰、銅鍾五枚、贈之於句曲三仙君。〔王莽制金爲貨、名鎰、形如錢無孔、重一兩、直錢一千、百鎰則百兩也〕

光武建武七年三月丁巳〔此三月二十四日也〕、遣使者吳倫齎金五十斤、獻之於三君、今竝埋在小茅山上獨高處、塹上有聚石、入地三四尺也。〔此則今小茅山積石上最高處是也、此二事不顯眞誥中〕

漢明帝永平二年、詔敕郡縣、修守丹陽句曲眞人之廟。〔按三君初得道、乘白鶴在山頭、時諸村邑人互見、兼祈禱靈驗、因共立廟於山東、號曰白鶴廟、每饗祀之時、或聞言語、或見白鶴在帳中、或聞伎樂聲、於是競各供侍、此廟今猶在山東平阿村中、有女子姓尹爲祝、逮山西諸村、各各造廟、大茅西爲吳墟廟、中茅後山上爲述墟廟、竝歲事鼓舞、同乎血祀、蓋已爲西明所司、非復眞仙僚屬矣〕

中茅山玄嶺獨高處、司命君埋西胡玉門丹砂六千斤於此山、深二丈許、塹上四面有小盤石鎮其上、其山左右當泉水下流、水皆小赤色、飲之益人、此山下左右亦有小平處、可堪靜舍、左元放時就司命乞丹砂、得十二斤耳。〔今此嶺前後甚多大石、而山上左右無正流水、東

南近下有一長澗、西南近下亦有小水、度嶺南隱居住處、近山上有湧泉、冬夏無窮、而水色不甚覺赤耳、平處可住、東西唯當近澗左右爲好、左氏乞丹砂、當是入洞時所請、以合爐火九華丹、右楊書

大茅山中茅山相連長阿中有連石、古時名爲積金山、此山中甚多金物、其處宜人住、可索有水處爲屋室靜舍乃佳、此數處亦任意耳、快可合丹以修上道、中茅之前、大茅之後、下麓長澗東西、亦出山外對館。〈此即隱居今所住東面一橫壘也、此壘純絕石、石形甚環奇、多穿穴側傍、磐紆下深、乃有無底處、屢投脆物、在中聞玲玲之響久之、此云多金物、亦當是久來眞仙所投也、西南有大石〔壁〕〔壁〕、簞而圻開、內有洞、入數丈漸峽小、不復容人、乃縹緲有風、外數步便有一湧泉、冬夏清流、卽下解所資、近外澗口又有一湧泉、水勢乃駛上者、冬溫而夏冷、今正對邏前小近下復有一穴、湧泉特奇、大水大旱、未嘗增減、色小白而甘柔弱、灌注無窮、但恨在山西、自不得東流耳、亦別開決作東流用之、又渡此嶺東南有一石穴水、東流極好、其處隱障、甚可合丹、卽後所云園山之前也、正患去徑路近、車聲人響、殆欲相聞、今若斷此路、不復聽車聲人行、便是第一處、方當思爲其宜、茅山住止、惟有隱居今所住及南洞口長史宅處乃極好、所恨迴曠、且此一山通無虺蝮毒螫、時有青蛇、都不犯物、虎亦甚少、自古來未聞害人、山居不問道俗、皆少溫病、山德寬容、不到險阻、但恨無青林冬夏常鬱如東閩諸山耳、自隱居住來、煥養成秀、於形望大好、山

出好朮并雜藥、絕宜松柏、而本無人植、不容自生、今亦分布、歲種之耳

茅山天市壇、四面皆有寶金白玉各八九千斤、去壇左右二丈許、入地九尺耳、昔東海青童君曾乘獨飄飛輪之車、通按行有洞天之上、曾來於此山上矣、其山左右有泉水、皆金玉之津氣、可索其有小安處爲靜舍乃佳、若飲此水、甚便益人精、可合丹、天市之壇石、正當洞天之中中央窗之上也、此石是安息國天市山石也、所以名之爲天市盤石也、玄帝時、召四海神、使運此盤石於洞天之耳、非但句曲而已、仙人市壇之下、洞宮之中央窗上也、句曲山腹內虛空、謂之洞臺仙府也、玄帝時、召四海神、使運安息國天市山寶玉璞石、以填洞天之中央窗之上也、東海青童君曾乘獨飄飛輪之車、通按行有洞臺之山、皆埋寶金白玉各八九千斤於市石左右四面、以鎮陰宮之嶺、諸有洞天皆爾、不但句曲而已、邑人呼天市盤石爲仙人市壇、是其欲少有彷彿而不了也、青童飄輪之迹、今故分明。〈句曲之山諸記說、今悉分明、唯天市壇石未知的何所在、以論迹而言、隱量正應大茅左右、而踐行不見其異處、或恐爲土木蕪沒、所不論耳、按保命趙承每登壇長嘯、風雲立至、此則不應在小處、長見雲氣出入、恆先起大茅北陰、此或當高而陰故也、夫眞人常御九龍、左驂名鳳、右服名豹、既履山頂、故指乘其右驂、今大茅嶺上、向東行有路、傍山平治、狀如人功、足通軌轍、相傳皆呼此爲飄輪迹、乃無埋沒、石壇既未顯、金寶亦難測所

埋、又疑洞天中央玄窗之上、不應乃近南門、復恐在中茅間、邑人耆老亦不復知仙人市壇處、自隱居來此山七八年、尚未得窮歷踐行、而況悠悠之徒令其究竟之耶、所以「來」「未」得遍履者、患於無良侶可同登陟之艱、獨行又覺蹣跚、是以遂爾淹稽、常所恥恨、比日方負杖孤遊、庶當委曲所聞所見耳

中茅山東有小穴、穴口纔如狗竇、劣容人入耳、愈入愈闊、外以盤石掩塞穴口、餘小穿如盂大、使山靈守衛之、此盤石亦時開發耳、謂之陰宮之阿門、子勤齋戒尋之、得從此入、易於良常洞口、其中多沙路曲僻經水處、不大便易、又道路遠、不如小阿穴口直下三四里、便徑至陰宮東玄掖門、入此穴口二百步、便朗然如晝日。〈此即洞天東門也、隱量乃可知處、自未敢輕索入耳、前傳云洞宮出土上計十三四里許、今此云三四里便至掖門者、是近山下已薄、而門勢又未平、計入門復應向下數里乃得至宮耳、入口便明者、此爲內光出照、不必關外日者也〉

大茅山亦有小穴在南面、相似如一、謂之南便門、亦以石填穴口、但精齋向心於司命、又常以二日登山、延迎請祝、自然得見吾也、誠之至矣、陰宮何足不觀乎、左慈復何人耶。〈此即南面之東便門、應在柏枝礪石穴中、此礪小穴甚多、難卒分別、必須精感得開、乃可議入、云二日者、謂十二月二日、依傳說年有兩日、恐三月十八日諱譚

雜聞、非專請之宜故也、左慈以成仙人、質見易於俗、所以三月清齋、便得入洞、長史雖挺分高邈、而形識猶昧、豈可相比、此語是欲相獎勵耳、長史後答亦作此意仰酬之也

三月十八日十二月二日、東卿司命君是其日上要總眞王君太虛眞人東海青童合會於句曲之山、游看洞室、好道者欲求神仙、宜預齋戒、待此日登山請乞、篤志心誠者、三君自即見之、抽引令前、授以要道、以入洞門、辟兵水之災、見太平聖君。〈按中君書云、「常以二日登山、延迎請祝」、即請十二月二日、不見道三月十八日者、屢有正月中耳、今臘月二日多寒雪、遠近略無來者、唯三月十八日、輒公私雲集、車有數百乘、人將四五千、道俗男女、狀如都市之衆、看人唯共登山、作靈寶唱讚、事訖便散、豈復有深誠密契、願覩神眞者乎、縱時有至誠一兩人、復患此諠穢、終不能得專心自達、如此抽引乞恩、無因得果矣、唯隱居所住中巖、禁斷清〔年〕〔嚴〕、得無遊雜、既去洞隔嶺、人自不知至於此也

良常山西南垂有可住處、是司命往時別宅處也、亦可合丹。〈司命初過江、立宅於此、以自蕩滌、質對神鬼、今按垂之爲言、如是邊際、此正應在長史宅後大橫之西、今父老相傳〔言〕、如是邊際、此正應在長史宅後大橫之西、今父老相傳、乃言大茅之西北平地、棠梨樹間、名下薄處、言是司命君故宅、耕墾至肥良、多見磚瓦故物、似經住止

處、亦驗烈不可穢犯、《君》「若」此審是、則宜言中茅之西、不應遠舉良常、大都真人語自不正的、遇所引處便言耳、昔時山下遠近諸處、長林榛莽、遮天蔽日、無處不可隱密、即今斫伐耕稼、四通九達、山中亦皆顯露、時移事異、不復可准、乃言未久如此、正復五六十年來漸劇耳。

良常東南又有可住處、其間常有累石如竈形、竈間或有寄生樹、樹如曲蓋形、此處至好、但恨淺耳、雖爾自足。《此處今亦存、但無復有寄生曲樹耳、亦帶北洞流水、其左右竝近大路、所以言淺、即今洞迴、無復可《往》^①「住」也。

洞口西北有一地、地小危不安、要自足立外靜舍也。《今此中以去多荒蕪、漸近村墟、竝不足復居、昔時言去縣小近、往來爲易、又近洞口、所以屢及之耳、外靜舍當以俟游賓從憩止、非自往修行之所、益知是欲相近之意也、顧居士所撰本、此中向近所標精舍地一篇、今視橡書者、不以相次、乃別出在長史所營宅前耳、此後長史答書、道西北地危、仍次菌山、不酬金鄉室室語、明知本別噉之也。

句曲之山有名菌山、此山至佳、亦有金、乃可往探、入土不過一二尺耳、吾昔臨去時、曾埋金於此、欲服金者可往取、但當不中以營私累耳。《今人不復識呼菌山者、尋此山形當如菌孤立、亦或是困《倉》^①

「倉」之困、形如困也、按大茅後長阿積金東凹地有一山子、獨秀如博山爐、且又近積金山、恐此或當是、即今多石及樹木、但金之所在、指一兩處、亦難可尋索、唯啓乞垂賜、所不論耳、意欲營轉鍊之事、亦指此山前臨長澗東流水、至幽隱、有形勢、若基構有期、當更宣述耳。

大茅山有玄帝時銅鼎《古鼎字》、鼎可容四五斛許、偃刻甚精好、在山獨高處、入土八尺許、上有盤石掩鼎上、玄帝時、命東海神使埋藏於此。《此亦當是移安息石時所埋也、今最高處乃多石、每吉日、遠近道士咸登上、燒香禮拜、無復草木、累石爲小壇、昔經有小瓦屋、爲風所倒、尋古來帝王竝重鼎器者、以其兩鉉法日月、三足法三才、能烹飪熟成萬物、兼自能輕重、神變隱顯故也、中君後答云鑄羽山之銅以作之、諸有洞天之山皆爾。

大茅山下亦有泉水、其下可立靜舍、近水口處乃佳、當小危不安耳。《今近南大洞口有好流水而多石、小出下便平、比世有來居之者、唯宋初有女道士徐漂女、爲廣州刺史陸徽所供養、在洞口前住積年亡、女弟子姓宋、爲人高潔、物莫能干、年老而亡、仍葬山南、宋女弟子姓潘又襲住、于今尙在、元徽中、有數男人復來其前而居、至齊初、乃敕句容人王文清仍此立館、號爲崇元、開置堂宇廂廊、殊爲方副、常有七八道士、皆資俸力、自二十許年、遠近男女互來依約、周流數里、廨舍十餘坊、而學上道者甚寡、不過修靈寶齋及章符而已、近有一女

人來洞口住、勤於灑掃、自稱洞吏、頗作巫師占卜、多雜浮假、此例亦處處有之、大茅東西亦有澗水、有曾未得道者任敦住處、合藥竈墟猶存、今有薛彪數人居之、又有朱法永、近小山上、快囑眺而乏水

良常山對穴口東視小山之嶺、其上有埋銅數千斤、以盤石填其上、漢時其山下有屈氏、家大富、財有巨億、埋銅器於此、于今在也、亦有錢、錢在西北小山上向也。〈今此山具存、無知其錢銅處、縱有彷彿、亦不識、尋視此山、明地高下澗澗、不似經墟村住處、恐歲代久遠、勢迹乖異故也〉

曾得往年三月一日八月八日二書〈此乙丑所受、則長史往年書是甲子年中、按答云直置書於述墟朱家靜中、則非因華僑楊君送之也〉、

三月一日書云、「今當舉赤石田、日爲往來之階」、亦竟不就事也、復云、「豈可遐棄坐觀存沒哉」、此道自決求真之精誠也、心不在我、不可責人使必成之也〈赤石田、今中茅西十許里有大塘食澗水、久廢不修、隱居今更築治爲田十餘頃、長史昔意欲避形迹、因作田之階、得數處望靈山、而遇旱塘壞、竟不果、所以此書譏之耳〉、

都不齋而有書云齋戒也〈此亦有答、明辭奏不可輕妄、動靜必皆聞徹矣〉、

八月八日書云、「謹操身詣大茅之端、乞特見採錄、使目接溫顏、耳聆玉音」、此語爲求道之甚急也、得近書、具至心、可勤道獎志也、司

命君自在東宮、又書不應總合、德有輕重之故也。〈司命常住大霍之赤城、此間唯有府曹耳、具位有高卑、故不宜共作辭啓、二君雖同居華陽、而官府各異、不得同紙、凡書奏不如口啓、於此可具鑒其儀格耳〉

吾等已自相知之、厚薄書疏、亦甚爲班班、欲停之如何。〈此是長史輕脫置書於他家靜中而去、恐方將人到、又致漏泄、眞靈慎密、故有此語、欲戒試其心事耳、長史後答此言、亦殆爲巧便〉

此書疏慎示俗人、脫有見者、掘壞靈山、爾之罪大也。〈恐俗人貪狡之徒知此金寶處、堪能鑿掘、則事由宣泄、此罪眞爲不輕、非但爾時教戒、亦傳貽無窮、將來諸子咸共祕之〉

右定錄中君答長史前書、說句曲山事訖此、長史前書無本出、今唯有後答、亦隨條奉酬、次第如左。

右從前良常來凡二十一條、竝有據寫。

- (1) 宮內廳藏正統道藏本(宮本)が「此」を「北」に作るのに従う。
- (2) 『史記』秦始皇本紀が「來」を「乘」に作るのに従う。
- (3) 意をもって「來」の字を「乘」の字に改める。

- (4) 意をもって「八」の字を「六」の字に改める。
- (5) 『茅山志』卷六が「壁」を「壁」に作るのに従う。
- (6) 意をもって「來」の字を「未」の字に改める。
- (7) 俞本が「年」を「嚴」に作るのに従う。
- (8) 以下二十二字は衍文とみなす。
- (9) 意をもって「君」の字を「若」の字に改める。
- (10) 俞本が「往」を「住」に作るのに従う。
- (11) 俞本が「蒼」を「倉」に作るのに従う。

良常山の北側の洞窟の入口は峰のところに當たっている。南へ二百歩行くと、秦の始皇帝が白玉二對を地下七尺に埋めたところがあり、その上に小さな平たい岩があつて、峰の上で穴を覆っている。李斯が壁に文字を刻んだ⁽¹⁾。その文には、「始皇帝は聖人の徳あり、山河を平らげられた。青々とした川を巡狩して、白き璧玉に銘文を刻まれた⁽²⁾」とある。もし掘ればすぐに見つかるであろう。始皇帝が足跡を印した山川では、どこでも玉璧で神を祭祀した。なにも句曲だけではないのだ。ここから以後、墨書⁽³⁾の部分はずべて定録眞君⁽⁴⁾が誥授して許長史に告げたものである。許掾の寫本は前の方の紙が失われており、これは多分お告げの出だしの言葉ではなからう⁽⁵⁾。壁を埋めた時期を調べてみると、三茅君の得道以前のことである。それな

のに後からかくも具體的に（銘文の内容を）見ることが出来るのは、眞人はものに遮られたり覆われたりすることがないからである。按ずるに、『茅三君傳』に言っているのは、（始皇帝が）山に登った時のことである。ただ、（白璧）「一」對というのが異なるが、あるいは「二」の字なのかも知れない。一對の壁に書かれた文字は、禹山で刻したものと同様、篆字體である。今、その場所を調べてみると、やはり石の蓋が見られるが、ちっとも小さくはない。

茅山の北側の洞窟の入口のある一山を良常山という。もともとやはり句曲山と連なっていて、同一の呼び名であった⁽⁶⁾。秦始皇の三十七年十月癸丑⁽⁷⁾、始皇帝は天下巡遊に出發した。十一月に雲夢に到着し、舜を九疑山に祠り、長江を船で下り、藉柯を見、梅渚を渡り、丹陽を通り、錢塘に至つて、浙江に臨んだ。波が荒れていたので西へ百二十里迂回し、峽中から渡つて會稽山に登り、夏の禹王を祭り、南海を望祀し⁽⁸⁾、石碑を立てて秦の徳を會稽山に讃えた。李斯が請うて銘文を書き、歸りにはもろもろの山川を通り、かくて句曲山の北側の山に登り、白璧一對を埋めた。そこで百官を集め、從者を饗した。始皇は嘆じて言つた。「巡狩の樂しみは、山や海に勝るものはない。今後は良に常例としよう⁽⁹⁾」。そこで群臣たちはそろつて始皇の長壽をことほぎ、「良に常例といたしましょう」と叫んだ。また太鼓を打ち鳴らし、大きな鐘を撞き鳴らし、全員が聲を合せて歌い、そ

の聲は山澤に轟きわたった。吉兆を讀え樂しみ、ものども一様に歡喜したので、そこで句曲の北側を「良常の山」と改稱したのである。「良常」の意味は、ここから名づけられたのだ。〈世俗の書物を調べてみると、始皇帝は三十七年正月に出發して雲夢、丹陽、浙江に遊び、會稽山に登って夏の禹王を祭り、南海を望祀して、石を刻んでその功績を記録した。歸りには吳を通って、江乘を渡り、北海に沿って琅琊に至り、平原に着いたところで病にかかり、七月丙寅、沙丘で崩御し、九月に驪山に葬られた。この時にはまだ運河はなかったのだから、延陵から陸路を通り、句容、江乘を目指し、途中良常に立ち寄り駕を止めて饗宴を設けただけのことである。必ずしもわざわざ句曲山に來たわけではなかったもので、山の北側の低地に止まって、結局、前方の峰には行かなかったのである。そのうえ、當時はまだこの山がすぐれて靈妙であることが明らかにされていなかった。璧玉を埋めて祀った意圖は、なべて山を望祀するためであった。だから茅君は、「(始皇帝が)足跡を印した山川では、どこでも玉璧で神を祭祀した」と言っているのである。そもそも(山の)通稱は主人公によってつけられ、本名は土地の形によってつけられる。小茅君が漢の成帝の時に授けた『紫書』には、「良常の北洞に治せ」とあった。思うに、眞仙の世界ではこれによって(良常という)名稱が成立していたのである。また調べてみると、始皇帝の崩御の際には、喪を發せずに、馬車に鮑魚を積んで惡臭をまぎらわせたとい

うから、これは夏のことであったはずで、世俗の書物に説くところのようである。今、『茅三君傳』の言うところによれば、「三十六年の十月、つまり秦の正月である建亥の月に巡遊に出發した」とあるが、それは雲夢に出かけただけのことである。そうでなければ、三十六年秋に崩じたことになる。まだ秦の曆を作っていないので、癸丑が何月中的のことなのかを定めることができない。いずれ別にあらためてもっとはつきりさせよう

王莽は、地皇三年(二二)七月戊申の日(七月二十四日である)に、使者の章莖を遣わし、黄金百鎰と銅の鍾五個とを攜えて、それを句曲の三仙君に贈らせた。王莽は金で貨幣を作り、それを鎰と呼んだ。形は錢のようであるが、まん中の孔がない。重さは一兩、錢一千文に相當した。百鎰だと百兩ということになる

光武帝は、建武七年(三一)三月丁巳の日(三月二十四日である)に、使者の吳倫を遣わし、金五十斤を攜えて、それを三君に献上させた。現在は、いずれも小茅山上のひとときわ小高くなっているところに埋められている。その穴の上には石が集まっており、地表から三、四尺下がったところがその位置である。これは現在の小茅山の石が積み重なったあたりの最も高い地點がそれである。この二つの出來事については、眞人のお告げの中には見えていない

漢の明帝の永平二年（五九）に、郡と縣に詔敕が下り、丹陽郡の句曲眞人の廟を建ててそれを管理させることとした。（按ずるに、茅三君は、初め仙道を體得すると白い鶴に乗って山頂に現れた。その時、村々の住民たちは、みんなしてそれを眺め、同時に靈驗を垂れていただきますようにと祈った。そこで共同して山の東に廟を建てて白鶴廟と呼んだ。神を饗して祀る時には、いつも神々の語る言葉に耳にする者や、白い鶴が帳の中にいるのを見る者や、樂隊の音樂を耳にする者があつた。そうしたことから、人々はそれぞれ競つて神をもてなし奉仕した。^⑪この廟は、現在も山の東の平阿村にあり、尹という姓の女性が巫祝を務めている。山の西の村々までが、それぞれに廟を作った。大茅山の西にあるのを吳墟廟といい、中茅山の後ろの山の上にあるのを述墟廟という。ともに歳ごとに太鼓や舞で神を祀つて、犠牲を用いた祭祀^⑫と擇ぶところがない。思うに、すでに西明公の所管となつてしまつており、もはや眞仙の配下ではないのである）

中茅山の玄嶺のひとときわ高くなつた場所。司命君は、西胡の玉門の丹砂六千斤をこの山の下の深さ二丈ばかりのところに埋めた。穴の上の四面には小型の平たい岩があつて、その上に鎮座している。その山の左右には、泉水が流れ下つており、その水はいずれもいさ

さか赤味を帯びて、それを飲めば健康によい。この山の麓の左右にも小さい平地があつて、靜舎を建てるのもつてこいだ。左元放は、（この山に入った）當時、司命君に丹砂を乞うて十二斤を得たのであつた。（現在、この峰の前後には大きな石がとて澤山あるが、山上の左右にはしかるべき流れがない。東南の麓に近いところに一つの長い谷があり、西南の麓に近いところにも小さな流れがある。峰を越えて南に行けば、隱居^{わかし}の住まいがあり、山の上の近くに湧き水があつて、冬も夏も涸れることがない。ただ水の色はそれほど赤いようにも感じられない。平地で住めるところは、東と西とでただ谷に近いあたりだけが適當である。左慈が丹砂を乞うたというのは、きつと洞天に入つた時に求めたもので、それで爐火九華丹を調合したのであらう。右は楊羲の書

大茅山と中茅山とを連ねる長い尾根の中ほどに連なつた石があつて、古くは積金山と呼ばれた。この山の中には黄金などのものごとでも多く、人が住まいするのによい場所である。水のある場所を探して、住居や靜舎を建てればうれしい。これら數箇所のうち、どこを選ぶのも自由である。丹藥を調合してすぐれた道を修するのうつつけなのである。中茅山の前、大茅山の後ろに當たる山麓の長い谷は東西に延び、山から出ると、これも（華陽）館の正面に當たる。（これは、隱居^{わかし}が今住んでいるところの東面の横に連なる尾根

のことである。この尾根はすべてきり立った石からなっており、その石の形はとてもグロテスクである。かたわらが穴だらけで、くねくねと曲がって下方に深く、底のないものすらある。しばしば供え物を投げこむと、途中でころころと音高く鳴って、しばらくは反響が止まない。「黄金などのものが多い」とあるのは、これもきつと古くより眞仙たちが投げこんだものであろう。西南に大きな石壁があり、聳え立って割れ目が入っている。その内部には洞穴があり、數丈も入ると、だんだん狭まって、もう人は入れなくなるが、ひゅうひゅうと風が吹いている。その外側の數歩のところに勢よく湧き出す泉があつて、冬も夏も澄んだ水が流れ出ている。これは麓の宿房が利用するものである。山を出てすぐの谷の口に、さらにもう一つの湧きだす泉があつて、勢よく水が上にほとばしり、冬は温かく夏は冷たい。現在では、見張所の正面から少し下つたところにもまた一つの穴があつて、そこから湧きだす泉はとりわけすぐれている。大水の時にもひどい旱魃の時にも、水量が増減したことがない。色はいささか白みを帯び、口当たりがよく柔らかであつて、絶えることなく流れ出している。ただ残念なのは、山の西に位置して、東流することができぬことである。別に川筋を切り開いて、東流させてその水を用いたものだ。さらにこの峰を越えて東南に行くと、一つの石の穴から湧く水があり、東流して極上のものである。その場所は人目にたたず、丹藥を調合するのに最適である。後に見

える「菌山の前²¹」というのがこの場所のことである。ただ、道路から近くて、車馬の音や人聲が聞こえてしまいそうなことだけが心にそまない。今、もしこの道を遮断してしまえば、車馬や人通りの音も聞こえず、最高の場所なのであつて、今やそのための適當な方法を考えてみなければならぬまい。茅山での住まいとしては、隱居²²が現在住んでいる所と南洞の入口に當たる許長史の住居²³とだけが、とびきりすぐれている。残念なのは遠く離れていることである。さらにまた、この一山全體を通じて蝮や毒蟲がいない。時に青蛇はいるが、まったく危害を加えない。虎もめつたにおらず、古來、人に危害を加えたということを聞かない。山中に住めば、修行者と俗人との區別なく、ともに疫病に罹²⁴ることが少ない。この山のありようは寛容であつて、險しい様子を示したりすることがない。ただ残念なのは、東方地域の山々のように、冬も夏も變わることなくこんもりとして青々とした林がないことである。隱居²⁵がここに住むようになって以來、草燒きをして木々の成長をうながしたため、見映えがずっとよくなった。山からは、良質の朮や雑多な藥草が産出する。特に松や柏に適しているが、元來、植える人がいないと、自然に生えるわけではない。現在ではあちこちに分布しているのは、歳どしに植林をしたからである。

茅山の天市壇。その四面にはすべて寶金と白玉とが埋まつていて、

それぞれ八、九千斤はある。壇から二丈ばかり離れた、地下九尺の位置である。昔、東海青童君は獨飄飛輪の車に乗って、あまねく洞天のある山々を巡察してまわり、この山の上にもやって來たのであった。この山の左右には泉水があり、すべて金や玉の津液の氣なのである。少し落ち着いた場所を探して、靜舎を作ればすばらしい。もしその水を飲めば、人の精氣を甚だ増進させ、丹藥を調合するのにもよい。天市壇の石は、ちょうど洞天の中央の玄窗の上に當たっているのである。この石は安息國の天市山の石である。だから、これを天市の盤石と呼ぶのである。玄帝の時代、四海の神々を召し寄せて、この盤石を（それぞれの）洞天の上に運ばせた。句曲山だけに限ったことではない。仙人市壇の下が洞宮の中央の天窗の上に當たる。句曲山は、その内部がからっぽになっいて、そこを洞臺仙府と呼ぶ。玄帝の時代、四海の神々を召し寄せて、安息國の天市山の寶玉や玉の原石を運ばせ、洞天の中央の玄窗の上に鎮めとして置かせたのである。東海青童君はかつて獨飄飛輪の車に乗って、あまねく洞臺のある山々を巡察してまわり、それぞれに寶金と白玉のおのの八、九千斤を市石の近くの四面に埋め、陰宮の峰の鎮めとした。洞天のあるところは、みなそのようにしたのであって、句曲山だけに限ったことではない。村人たちは天市の盤石を仙人市壇と呼んでいる。これは、いささかそれらしくは思わせても、あからさまにはしないのである。青童君の乗った飄の車のわだちの跡は、現在も

とどおりはつきりと残っている。〈句曲山についてのさまざまな記録や説明は、現在、みなはつきりと知ることができる。ただ天市壇石についてだけは、明確な所在の場所が知られない。その痕跡から考えてみるに、およそ大茅山の附近であろうと推測される。しかし實際にそこへ行ってみても、特に變つた場所はない。土や樹木の下に埋没してしまったのかも知れぬが、あげつらわないでおう。按ずるに、保命府の丞である張威伯は、いつもこの壇に登って長く口笛を吹くと、風や雲がたちどころにやって來たという。そうだとすれば、小さな場所にあったはずがない。長年雲氣の出入を見てきたが、いつもまず大茅山の北の山陰から起こる。これは、そこが高く、山陰になっているためなのであろう。そもそも眞人は、いつも九匹の龍の牽く車に乗り、左の添え馬を飄と呼び、右の添え馬を疾風と呼ぶ。山頂に足を留めたところから、特にその右（左？）の添え馬に乗って來たというのである。現在、大茅山の峰の上には東に向かう道があつて、山に沿って平らになられ、その様子はまるで人の手に成るものようであり、馬車を通すことができるほどの幅がある。言い傳えでは、みなこれを飄の車の跡と呼んでおり、すると埋没はしていないことになる。石の壇がまだ明らかになっていない以上、金や寶玉もその埋められた所を推測するのは困難である。さらに疑問に思うのは、洞天の中央の玄窗の上はそんなに南の門に近いはずがない。あるいは中茅山のあたりにあるのであろうか。村の古

老たちも、もはや仙人市壇の場所を知らない。隱居^{ひんきょ}がこの山にやって来てから七、八年になるが、まだとことんくまなく歩きまわることでできずにいる。ましてや俗事に流されている人たちに、つきとめさせたりさせようか。まだくまなく歩きまわることができずにいるのは、登攀の困難をともにできるよい伴侶が得られず、一人で行くのは心がはずまないからであつて、³³そのため延び延びになつてしまい、いつも恥ずかしく心残りに思っている。近いうちに杖をついて一人で足を運び、聞いているところ見ているところを詳しく調べてみたいと願っている」

中茅山の東に小さな穴がある。穴の口はやつと犬ぐり³⁴ほどで、人が辛うじて入れる大きさしかない。入るにつれて次第に廣くなる。外側は盤石で穴の口を塞ぎ、それ以外の小さな穴は盃ほどの大きさである。山の精靈³⁵にここを守らせ、この盤石も時々開くのだ。これを陰宮の阿門³⁶という。汝はねんごろに警戒して探すがよい。ここから入ることができれば、良常山の洞口³⁶よりも簡単である。良常山の内部は沙路やくねくね曲がつたところや水を渡らなければならぬところが多く、それほど簡単ではない。また道のりが遠く、この小阿の穴口からまっすぐ三、四里下ると、ただちに陰宮の東の玄掖門に到着するのに及ばない。この穴口から二百歩進むと、晝間のように明るい。〈これが洞天の東門である。推量すれば場所は分かるが、

自分はまだ軽々しく探索して入ったことはない。前傳では「洞宮から地上に出るには十三、四里ばかり」と言っていたのに、³⁷今ここで三、四里でただちに掖門に到着すると言っているのは、山の麓に近くて掖門に接近しているうえに、掖門の配置が平坦なところになく、門に入ってからさらに下に向かつて數里進むと、やつと陰宮に到着できるということなのである。穴口から入ると途端に明るいのは、内部からの光が照らし出しているからで、必ずしも外部の日光とは關係がない」

大茅山にもやはり小穴が南面にあつて、そっくり同じであり、南の通用門という。やはり石で穴口を塞いでいる。ただ精進潔齋して司命君(茅盈)に心を向けなさい。また常に二日の日に山に登り、お迎えしてお願ひすれば、自然に私に會うことができよう。それこそ誠の極みというものだ。陰宮をどうして見られないはずがあらうか。左慈(左元放)だってどれほどの人間だというのか。〈これは南面の東よりの通用門であり、きつと柏枝礪の石穴中にあるのに違いない。この礪には小穴がたいそう多いので、すぐには見分けにくい。必ずひたむきな氣持が通じて門が開くのを待ち、そのうえで入れるか否かが論議できる。二日³⁸というのは十二月二日のことである。『茅三君傳』の所説によると、一年のうちに(三月十八日と十二月二日)の二日あるが、恐らく三月十八日は騒々しく雜踏するの

で、專一にお願いするのに不適當だからなのだ。左慈はすでに仙人となり、資質として俗人よりも神に會うことがたやすく、それで三月清齋するだけで洞宮に入ることができたが、許長史は天分は高邁であるとはいえ、肉體と意識はまだ闇昧なのだから、どうして比べられよう。この言葉は相手を勵まそうとしてのことなのだ。許長史の後の答えも、このような意味にとつてお答えしている。

三月十八日と十二月二日、東卿司命君は、この日に總眞王君（王延）、太虛真人（赤松子）、東海青童（方諸青童君）を天上から迎えて、句曲の山で會合し、洞室^④を見てまわられる。仙道を好む者で神仙たらんと志求する者は、あらかじめ齋戒し、この日を待つて山に登って請乞するのがよい。志篤く誠の心を持つ者には、三君が親しく會つて下さり、御前に招き入れて要道を授け、洞門に入らせ、兵水の災を避け、太平聖君に見えさせて下さる。〔按ずるに、茅中君の書には、「常に二日の日に山に登り、お迎えしてお願ひする」とある。つまり請乞するのは十二月二日であつて、三月十八日と言わぬのは、（十二月二日には）しばしば正月中のあの出来事と同じようなことが起こるからだ。いま十二月二日は、寒くて雪が多いから、遠きも近きもやつて来る者はほとんどいない。ただ三月十八日には、いつも官吏や庶民たちが雲集し、車は數百乘、人は四、五千人にもなる。道俗男女でまるで都の市場の賑わいのようにであり、見物人た

ちは、ただ一緒に山に登って、靈寶唱讚^④を行うだけで、それが終わるとさっさと散らばつてしまふ。どうして深い誠と密なる契をもつて神仙真人たちを目にしたいと願う者などいようか。たとえ時に至誠の心を持った者が一人や二人いるとしても、やはりこのような喧噪猥雑に煩わされて、結局のところ專心に目的を遂げることはできない。このように招き入れて恩を願わせても、よい結果を得る由はないのである。ただ隱居^{わたり}の住む中巖は、禁斷^④が嚴清で、有象無象の連中はやつて來られない。洞穴から遠く山嶺によつて隔てられているために、人々はここまでやつて來ることを知らないのである。

良常山の西南垂に住むのによい場所があり、司命君の往時の別宅があつた場所である。ここも丹藥を調合するのによい。〔司命君は初めて長江を渡つた時、ここに宅舎を立てて、親しく身を清めて神鬼と應答した。今按ずるに、「垂」という言葉の意味は、このような邊際ということだ。ここはきつと許長史の宅舎の後ろ、大横山の西に位置するのであらう。今、故老たちの傳えるところでは、太茅山の西北の平地の棠梨の樹々の間で、下薄と名づけられた場所が司命君の舊居であり、耕すと地味は至つて肥沃だし、磚瓦などの古物が澤山發見されるので、人が生活していた場所のようである。また應驗がはつきりしているので穢してはならぬとのこと。もし本當にそのとおりならば、中茅山の西と言うべきで、遠くの良常山の名を

擧げるべきではない。およそ眞人の言葉はそうかつきり正確ではなく、たまたま言及したついでにものを言うのである。昔は山麓の遠近の諸處は、森や草叢が天を遮り日光を蔽い、どこもこんもりと隠されていたが、今では切り開いて耕作し、四通八達、山の中もすべて丸裸である。時代が移り事情が変わっているので、準據することはできない。聞なしにこのようになったのだと言うけれども、ここ五、六十年來、次第にひどくなつたのである」

良常山の東南にも、また住むのによい場所がある。そのあたりに竈のような形をした積み重ねた石がある。竈形の石のあたりには寄生樹があり、その樹は曲がつた蓋の形をしている。この場所はいえ、そう好ましいが、ただ奥深くないのが缺點である。そうとはいえず、それなりに條件を満たしている。この場所は今も存在している。ただし曲がつた蓋形の寄生樹はもはやない。また北洞からの流水が回り、その左右はいずれも大路に近いので、奥深くないと言っているのである。今ではすっかり荒廢して、もはや住めない状態である」

洞口の西北に一地があり、その地はいささか高くて不安定だが、外靜舎を建てる條件にはなっている。〈今ではここから先は荒れはてて、村や堰埭に次第に近づくので、もはや居住にはまったく向かない。昔は縣にいくぶん近く、往來しやすかつたということであ

り、その上洞口にも近いので、しばしば言い及ぶのである。外靜舎とは、きつと賓客が来るのを待ちうけ休憩させる所であつて、一人で出かけて修行する場所ではない。いよいよもつて近くにあるのが望ましいというわけが理解できる。顧居士(顧歎)が撰述したテキストでは、ここに「近所標精舍地」の一篇を置いている。今、許掾の書寫したものをみると、この記事の續きに配列しないで、別出して許長史が宅舎を造營した記事の前に置かれている。この後の許長史の答書^⑭の中で、西北の地は危なっかしいことを言い、その次に菌山の記事を配列して、「金郷至室」の語には答えていない。明らかにもともとは別の口授であつたことが分かる」

句曲の山に菌山と名づけられるがある。この山はたいそうすばらしく、また金があり、出かけて採掘できる。地下一、二尺に過ぎぬ。私は昔、立ち去る際に、かつて金をここに埋めておいた。金を服したいと思う者はそこに行つて取り出してもよいが、ただしそれで私腹を肥やすことは認められない。〈今の人にはもはや菌山と呼ぶのがどれか分らないが、この山の形を考えると、ちょうど菌が一本だけ立っているようだからなのであろう。あるいは困倉の困で、穀物倉のような形をしているのであろう。按ずるに、大茅山の後ろの長阿にある積金山の東の凹地に一山があり、博山爐^⑮のようにひとときわ秀でているうえに、しかも積金山に近い。恐らくこれが

そうなのであろうが、今では石と樹木が多い。ただ金の所在について、一、二の場所を指示されても、探索するのは難しい。ただ下賜されんことを請乞すれば、それは論外である。鍊丹^⑧を行おうと心に願っているの、この山の前は長い溪谷の東流する水に臨み、極めて幽隱で、ふさわしい形勢があると指示しているのである。建物を構える時がくれば、あらためて詳しく述べてくれるのであろう。

大茅山には玄帝の時の銅の鼎がある（古の鼎の字である）。およそ四、五斛の容量のある鼎で、その陰刻は極めて精好である。大茅山上のひとときわ小高くなった所の土中八尺ばかりにあり、その上に平たい石があつて鼎の上を覆っている。玄帝の時、東海神に命じてここに埋めさせたのである。〈これも安息國の石を移した時に埋めたのに違いない。今でも最も高いところは石が多く、吉日ごとに遠近の道士達がそろつて登つて来て、焼香し禮拜している。もはや草や木はなく、石を積み重ねて小さな祭壇が作られている。かつては瓦葺きの小屋があつたが、風に吹き倒されてしまった。古來の帝王がみな鼎を大切にしたわけは、その兩耳が日月をかたどり、三足が天地人の三才をかたどつたものであり、煮炊きすることによってあらゆるものを熟成することができ、さらに重さが自在で、不思議に變化して姿を隠したり現したりできるからである。定録中君の後の答えに、羽山の銅を鑄て鼎を作つたとある。洞天のある山々ではみな

そのようにしたのである。

大茅山の山麓にもまた泉水があり、そのあたりに靜舎を建てるのがよい。水源に近い所がすばらしいが、いささか高くて不安定である。〈今、南の大きな洞口の近くに好ましい流れがあるが、石だらけである。少し下になると平坦になる。近世になってここにやつて来て住まう者が現れた。宋初には、女道士の徐漂女が廣州刺史陸徽^⑨に供養されて、洞口の前に長年住していたが亡くなった。宋姓の女弟子がおり、高潔な人柄で何物も犯し難い人物であつたが、年老いて亡くなり、大茅山の南に葬られた。宋に潘姓の女弟子がおり、跡を繼いで住し、今なお健在である。元徽中（四七三—四七七）に、數人の男子がまた洞口の前にやつて来て居住した。齊の初めになつて、句容の人王文清^⑩に敕してこの地に道觀を建立させ、崇元館と號した。堂宇や廂廊を設けること、誠に様式になつたものであつた。常に七、八人の道士がおり、俸錢と力役を支給された。およそ二十年來、遠近の男女があちこちからやつて来て結びつきを持つようになり、數里にわたつて十余坊もの建物規模になつた。しかし、すぐれた道を學ぶ者は極めて少なく、もっぱら靈寶齋や章符^⑪を行ふだけであつた。最近になつて、一人の女性がやつて来て洞口に住し、清掃に勤めて洞吏と自稱し、いささか巫師の占卜^⑫を行っているが、その多くはいい加減なものである。このような輩はどこにでもいるも

のである。大茅山の東西にはまた谷川が流れており、晉末の得道者の任敦^{①7}の住居跡があり、丹藥を合成した竈の跡がまだに残っている。今では薛彪^{①8}ら數人が居住し、さらに朱法永という者がいる。近くの小山の上はまことに眺望がよいが、水が乏しい

良常山の穴口から東の方に小山の嶺が見える。その上には數千斤の銅が埋められており、平たい石で上部が塞がれている。漢代、その山麓に屈氏が住んでいた。屈家は大富豪で、巨億の財産を有し、ここに銅器を埋めた。今も存在する。また錢もあり、錢は西北の小山の上方にある。《今もこの山ははつきりと存在するが、錢や銅の埋藏場所は分からない。たとえそれらしき所があるとしても、やはり見分けがつかない。この山を踏査してみると、その土地は高低のある傾斜地や谷ばかりで、かつて村里があつて人が住んでいたようには見えない。恐らく、長い年月がたつて地形が變化してしまつたらであらう》

かつて、往年の三月一日と八月八日の二通の書簡を受け取つた。《これは乙丑の歲(興寧三年、三六五)に授けられたものであつて、そうだとすれば許長史の往年の書簡とは甲子の年(興寧二年、三六四)のものである。按ずるに、許長史の答に、書簡を述墟村の朱家の靜舎中に放置した^{①9}、と言っているから、華僑や楊君を介して送つ

たものではない》

三月一日の書簡には、「今は赤石田を開墾して、日々往來するための階段を作らねばなりません」とあつたが、ついに完成させることができなかった。さらに、「どうしておつぱり出して事の成り行きを坐視してよいものでしょうか」とある。これは決然と眞仙たらんことを求めるひたむきな眞心を述べたものである。心、我に在らずして、他人に必ずこれを成就せしめることを求めてはならぬ。《赤石田は、今の中茅山の西十里ばかりに谷川の水を引いた大きな溜池があり、長らく放置されたまま修築されることがなかったが、今では隱居^{わたくし}があらためて工事を施して田十餘頃を開いている。許長史は昔、俗世から逃れようと考へ、そこで田の階段を作り、數箇所から靈山を望み見ることができるようになつたが、日照りに遭つて溜池が壞れてしまい、結局完成しなかつた。それでこの書簡で非難しているのである》

まったく齋戒もしていないのに、書簡に「齋戒しております」とあるのはどういふことか。《これにもやはり答へがある。奏上する言葉は輕々しくでためであつてはならず、舉動はことごとくお見通し^{②0}であること明らかだ》

八月八日の書簡に、「謹んで足を運んで大茅山の山麓に赴き、特に(眞仙として)採録され、この目で溫顔に接し、この耳で玉音を拜聽させて下さい」とある。このように言っているのは、道を求め

る氣持がとても切迫しているからである。最近の書簡を受け取ったが、眞心が備わっている。道に勤め志を勵ますがよい。司命君はもと東宮におられ、書簡をすべて一まとめにしていけない。徳に軽い重いの違いがあるからである。〔司命君は常に大霍山の赤城に住してあり、ここ（茅山）には出先の役所があるだけである。身分地位に高下の差があるから、一まとめに辭啓の文書を作成するわけにはいかない。〕（定録君と保命君の）二君はともに華陽洞天に住まっているとはいえ、官府はそれぞれ異なるのだから、同じ紙を使用するわけにはいかない。すべて文書による上奏は、口頭でのそれとは異なるのであって、ここに具體的にその形式を知ることができる。

われらは舊知の間柄である。二人の間柄に關わる書簡のやり取りは餘りにも目立ち過ぎる。これを止めようと思うが、どうであろうか。〔これは許長史が輕率にも書簡を他人の家の靜舎中に放置して去ったので、もし誰かがやって来て漏れるようなことがあつては、と恐れたのである。眞靈は慎重隱密であるから、このように言ったのであり、心中の事を戒め試そうとしたのである。許長史は後でこの言葉に答えているが、まったく言葉巧みである。〕

この書簡を世俗の人間に見せることは慎まねばならぬ。もし見る者がいて靈山を掘り荒らせば、汝の罪は大きいぞ。〔俗人の貪欲で狡

猾な輩が金寶の在りかを嗅ぎつけ、掘り出すことができるならば、事が漏れてしまうのを恐れたのである。その罪は極めて重い。その場限りの戒めではなく、永代に送り傳え、將來の者もすべてともにこの事を祕密にするのである。〕

右は定録中君が許長史の前の書簡に答えられたもの。句曲山について説くことは、ここで終わりである。許長史の前の書簡はテキストが残っていない。今はただ後の答えがあるだけで、各條ごとに答えてゆくこと、その次第は以下の如くである。

右、前の「良常」からここまでの全部で二十一條は、すべて許掾の寫しがある。

(1) 李斯刻書壁 『史記』卷八七李斯傳を參照。

(2) 巡狩倉川 『尚書』舜典「歲二月、東巡守、…五載一巡守」、傳「諸侯爲天子守土、故稱守、巡行之」。『孟子』梁惠王下「天子適諸侯曰巡狩、巡狩者、巡所守也」。桓譚「仙賦」（『藝文類聚』卷七八）「觀倉川而升天門、馳白鹿而從麒麟」。

(3) 勒銘素壁 『後漢書』列傳三隗囂傳「夫以二子之賢、勒銘兩國、猶削跡歸愆、請命乞身、望之無勞、蓋其宜也」。江淹「傷

- 友人賦」「懷愛重於素壁、結分珍於黃金」。
- (4) 墨書 『周氏冥通記』卷二「願更作墨書、勿同前語」。
- (5) 定錄眞君 『眞靈位業圖』第六中位「右禁郎定錄眞君中茅君、注「治華陽洞天」。
- (6) 據寫本前紙所失、恐非起端語 『眞話』卷一一葉一七裏注「今有所起草存、故得撰錄、而前紙斷失、亦非起端語也」。
- (7) 本亦句句相連、都一名耳 『眞話』卷一一葉三表「總而言之、盡是句句之一山耳、無異名也、三茅山隱禪相屬、皆句句山一名耳」。
- (8) 始皇三十七年… 『史記』秦始皇本紀三十七年の條にほぼ同様の記事が見られる。
- (9) 梅渚 『史記』秦始皇本紀は「海渚」に作る。正義に引く『括地志』には、「舒州同安縣東、按舒州在江中、疑海字誤、即此州也」とある。
- (10) 望于南海 『尚書』舜典「望于山川、偏于羣神」、孔傳「九州名山大川五嶽四瀆之屬、皆一時望祭之、羣神謂丘陵墳衍古之聖賢、皆祭之」。
- (11) 檢外書… 『史記』秦始皇本紀三十七年の條を参照。
- (12) 小君… 『太元眞人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「以漢元帝永光五年三月六日、渡江求兄於東山、遂與相見、…後授紫素之書各百字以付固衷、固衷拜受、…紫素文曰、…又曰、盈固弟衷挺業該清、…今屈司三官保命建名、總括岱宗、領死記生、位爲地仙、…治于良常之山、帶北洞之口、鎮陰宮之門也」。
- (13) 建亥之月爲秦正月 『史記』秦始皇本紀「始皇推終始五德之傳、以爲周得火德、秦代周德、從所不勝、方今水德之始、改年始、朝賀皆自十月朔」、正義「周以建子之月爲正、秦以建亥之月爲正、故其年始用十月而朝賀」。
- (14) 王莽地皇三年七月戊申… 『太元內傳』(『茅山志』卷六)「王莽地皇三年七月戊申、遣使者章蠶齎黃金白玉銅鐘五枚、贈於句曲三仙君、光武建武七年三月丁巳、遣使者吳倫齎黃金玉帛、獻三仙君」。
- (15) 王莽制金爲貨… 『漢書』食貨志下「王莽居攝、變漢制、以周錢有子母相權、於是更造大錢、徑寸二分、重十二銖、文曰大錢五十、又造契刀錯刀、…更作金銀龜貝錢布之品、名曰寶貨、…黃金重一斤、直錢萬」。
- (16) 眞授 『眞話』卷一九葉二裏「今檢眞授中有年月最先者、唯三年乙丑歲六月二十一日定錄所問」。
- (17) 供侍 『眞話』卷一九葉一四表「山陰何道敬、志向專素、頗工書畫、少遊剡山、爲馬家所供侍」。
- (18) 血祀 『後漢書』列傳六鄧鸞傳「大司農朱寵…上疏追訟鸞曰、…奉承血祀、以謝亡靈」、李注「血祀謂祭廟殺牲取血以告神也」。

- (19) 左元放時就司命乞丹砂 『真誥』卷一二葉三裏「慈顏色甚少、正得鑪火九華之益」、注「慈：建安末、渡江尋山、仍得入洞、又乞丹砂合九華丹、九華丹是太清中經法」。
- (20) 合丹 『抱朴子』金丹「合丹當於名山之中、無人之地、結伴不過三人」。
- (21) 後所云菌山之前 『真誥』卷一二葉一四裏「句曲之山有名菌山、此山至佳」；注「今人不復識呼菌山者、尋此山形當如菌孤立、亦或是困倉之困、形如困也」。
- (22) 住止 陶弘景「許長史舊館壇碑」(『華陽陶隱居集』卷下)「天監十三年、敕買此精舍、立爲朱陽館、…於館西更築隱居住址」。
- (23) 南洞口長史宅 『真誥』卷一三葉一七表注「長史宅自湮毀之後、無人的知處、至宋初、長沙景王檀太妃供養道士姓陳、爲立道士廨於雷平西北、卽是今北廨也、後又有句容山其王文清、後爲此廨主、見傳記、知許昔於此立宅」。
- (24) 溫病 『抱朴子』道意「姓李名寬、到吳而獨語、…寬亦得溫病、託言入廬齋戒、遂死於廬中、而事實者猶復謂之化形尸解之仙、非爲眞死也」。
- (25) 東間 『真誥』卷一四葉一二表注「右四條、有人於東間鈔得、云是眞書、而不知誰跡」。「重修政和證類本草」卷七草部上品之下茜根「東間諸處乃有而少、不如西多」。
- (26) 東海青童君曾乘獨飄飛輪之車 『真誥』卷一三葉九裏「時乘飄輪、宴我句曲」。
- (27) 玄窗之上 『真誥』卷一三葉二〇表「刊石玄窗上、顯誠曲階門」。
- (28) 玄帝 『真誥』卷一一葉一八表「不審玄帝是何世耶、後生蒙、多所不及、願告」、注「顓頊水王、故號玄帝、外書亦爾」。
- (29) 四海神 『諸病源候論』卷十溫病候「養生方導引法云、常以雞鳴時、存心念四海神名三遍、辟百邪正鬼、令人不病、東海神名阿明、南海神名祝融、西海神名巨乘、北海神名禺強」。
- (30) 隱量 『真誥』卷一一葉一九表「穆自見傳記、鄙心竊志、欲尋司命君往昔之舊宇、高棲之所托、患未能審知耳、今輒當隱量求處」。
- (31) 保命趙承每登壇長嘯、風雲立至 『真誥』卷一三葉一二表「趙威伯者、東郡人也、…昔亦來在華陽內爲保命丞、…受范丘林口訣云、善嘯、嘯如百鳥雜鳴、或如風激衆林、或如拔鼓之音、時在天市壇上、奮然北向、長嘯呼風、須臾雲翔其上、衝氣動林、或冥霧飄合、或零雨其濛矣」。
- (32) 真人常御九龍 『雲笈七籤』卷七三太清神丹中經敘「元君者、上帝之師也、其人大神、…驂駕九龍十二白虎」。
- (33) 獨行又覺踽踽 『毛詩』唐風杕杜「有杕之杜、其葉湑湑、獨行踽踽、豈無他人、不如我同父」、毛傳「踽踽、無所親也」。
- (34) 狗寶 『晉書』卷四九光逸傳「逸將排戶入、守者不聽、逸便於戶外脫衣、露頭於狗寶中、窺之而大叫」。

- (35) 山靈 『眞誥』卷一九葉一表「山靈即火燒其屋」。
- (36) 良常洞口 『眞誥』卷一葉六裏注「北良常洞即是北大便門」。
- (37) 前傳云：『眞誥』卷一葉六表「洞墟四郭上下皆石也、上平處在土下、正當十三四里而出上地耳」。
- (38) 依傳說：『太元真人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「臨去、告二弟曰、吾今去矣、便有局任、不得復數相往來、旦夕相見、要當一年再過來於此山、三月十八日十二月二日、期要吾師及南嶽太虛赤真人游盼於二弟之處也、將可認識之、及有好道者待我於是乎、吾自當料理之、以相教訓未悟」。
- (39) 形識 『眞誥』卷一九葉一表「眞誥闡幽微第五」、注「此卷竝鬼神宮室、官司氏族、明形識不滅、善惡無遺、分爲二卷」。
- (40) 長史後答 『眞誥』卷一一葉一八裏を参照。
- (41) 總眞王君 『眞靈位業圖』第二左位「左輔後聖上宰西域西極眞人總眞君」、注「姓王、諱遠、字方平、紫陽君弟子、司命茅君師」。
- (42) 洞室 『眞誥』卷二〇葉九裏「恆願早遊洞室、不欲久停人世、遂詣北洞告終」。
- (43) 正月中 『眞誥』卷四葉二表および卷一二葉一二表のことを指すか。
- (44) 唱讚 『無上祕要』卷三五授度齋辭宿啓儀品「若都講不讚唱、右件各罰禮九十拜、右出敷齋經」。
- (45) 禁斷 『三國志』卷五九孫霸傳「孫霸字子威、和弟也、…頃之、和霸不穆之聲聞於權耳、權禁斷往來、假以精學」。
- (46) 顧居士所撰本 『眞誥』卷一九葉二表「眞誥者、眞人口授之誥也、猶如佛經皆言佛說、而顧玄平謂爲眞迹、當言眞人之手書迹也、亦可言眞人之所行事迹也」。同卷一九葉七裏「又按衆眞辭旨、皆有義趣、或詩或戒、互相酬配、而顧所撰眞迹、枝分類別、各爲部卷、致語用乖越、不復可領」。また、顧歡については、『南齊書』卷五四高逸顧歡傳を参照。
- (47) 近所標精舍地一篇 『眞誥』卷一三葉一六裏を参照。
- (48) 此後長史答書 『眞誥』卷一一葉一九表を参照。
- (49) 博山爐 『西京雜記』卷一「長安巧工丁緩者、…又作九層博山香鑪、鏤爲奇禽怪獸、窮諸靈異、皆自然運動」。
- (50) 轉鍊之事 『雲笈七籤』卷七六・九轉鍊鉛法を参照。
- (51) 燒香禮拜 『眞誥』卷二〇葉一〇表注「耆老傳云、掾乃在北洞北石壇上燒香禮拜、因伏而不起、明日視形如生」。
- (52) 中君後答云：『眞誥』卷一二葉二裏を参照。
- (53) 陸徽 『宋書』卷九二良吏陸徽傳を参照。
- (54) 王文清 『眞誥』卷二〇葉二裏「楊書王君傳一卷、本在句容葛永眞間、中又在王文清家、後屬茅山道士葛景仙、掾書飛步經一卷、本在句容嚴虬家、大明七年、饑荒少糧、其里王文清、以錢食與嚴、求得之、因在王家」。同卷一三葉一七表注「後又有句

容山其王文清、後爲此廨主、見傳記」。

- (55) 靈寶齋及章符 『無上祕要』卷四七齋戒品「其功德重者、唯太上靈寶齋、右出洞玄請問上經」、『登真隱訣』卷上注「當以向書服三元符竟、佩此章符、竝不得以履穢」、『眞誥』卷一九葉一四裏「樓既善於章符、五行宿命、亦皆開解」。

- (56) 巫師占卜 『後漢書』和帝陰皇后紀「有言后與(鄧)朱共挾巫蠱道」、注「巫師爲蠱、故曰巫蠱」、『晉書』卷二〇〇張昌傳「張昌、本義陽蠻也、少爲平氏縣吏、武力過人、每自占卜、言應當富貴」。

- (57) 任敦 『茅山志』卷一七樓觀部篇「崇壽觀：晉真人任敦成道之故宅也」。

- (58) 薛彪 『茅山志』卷一五采眞游篇「薛彪之、晉陵人也、少不狎俗、無羨榮秩、齊建武二年、停東川、採訪眞秘、三年迺反啓、敕於大茅山東嶺洞天館行道、松殮澗飲、彌歷年歲也」。

- (59) 直置書於述墟朱家靜中 『眞誥』卷一一葉一九裏を參照。

- (60) 動靜必皆聞徹 『眞誥』卷一一葉二〇表注「長史玄挺、動靜聞徹、屑辭所向、便已關奏蒙報」。

- (61) 司命常住大霍之赤城 『眞誥』卷九葉二裏注「霍山赤城亦爲司命之府」。

- (62) 二君雖同居華陽、而官府各異 『周氏冥通記』卷一「定錄保命二府同在一域、而名界有分、各天真守之、二君竝姓茅、是兄

弟、兄守定錄、弟守保命」。

昔年十餘歲時、述虛〔此乃應是墟字、而由來皆作「墟」^①「虛」字、即今之山西村名也〕閑書宿有見語、茅山上故昔有仙人、乃有市處、早已徙去、後見包公問動靜、此君見答、今故在此山、非爲徙去、此山洞庭之西門、通太湖苞山中、所以仙人在中住也、唯說中仙君一人字、不言有兄弟三人、不分別長少、不道司命君尊遠、別治東宮、〔未〕^②見傳記、乃知高卑有差降、班次有等級耳、輒敬承誨命、於此而改。〔此長史又更答書云、今有所起草存、故得撰錄、而前紙斷失、亦非起端語也、包公是鮑觀、句容人悉呼作包也、答書時已是蒙示傳記、是乙丑年初矣〕

告「小阿口直下三四里、便徑至陰宮東玄掖門、入此穴口二百步、便朗然如晝日」、不審此洞天之別光、爲引太陽之光以映穴中耶、此洞天中、官府曠大、云宮室數百間屋、官屬正三仙君兄弟、復有他仙官、男女凡有幾許人、爲直是石室、亦有金堂玉房耶、宮室與洞庭苞山相連不、包公及妹朱氏、昔在世曾得入此宮不、二人爲未得登舉作地下主者耶、治在何處、愚昧昌啓、懼有干忤〔包公及妹事、前中君書無有、當復是別授、今更重問、并洞中事、定錄又答有後也〕、市山之盤石、市名之存、由於此也、今之孜孜志慕於道、無心金玉、

尊靈所置、唯助令彌密耳、豈有掘犯理耶、此故爲未之照察也、山左右泉水、金玉津液、其地亦可立靜舍合丹、輒當以爲意（此上答天市泉水可住事、而竟無所立也）、

不審玄帝是何世耶、後生蒙蒙、多所不及、願告。（顓）（與）（項）水王、故號玄帝、外書亦爾、長史脫致疑問耳、此條復有答在後

告「中茅山東有小穴、陰宮之阿門、入道差易」、後當以漸齋修而尋求之、靈宗垂念、便以爲造金門而登玉房也、但存遲速之間、不敢悞遲。（有如此教示、而不速求游關、一何可恨、所以衆靈每勤勤引勸）

告「大茅山亦有小穴在南面、相似如一、謂之南便門」、欣見啓悟、喜稟德音、精誠注向、沐浴自新、既聞吉日、至時密造、區區之誠、靈寔鑒照。（此道南面之東門與小阿東門相似者）

告「左慈復何人也」、此見獎勗之言、思念下逮、益令欣慕。（傳上亦載此事）

告「良常西南垂有可住處、是司命君往時別宅、亦可合丹」、穆自見傳記、鄙心竊志、欲尋司命君往昔之舊宇、高樓之所托、患未能審知耳、今輒當隱量求處、臨時告悟。（傳上亦載此事、基陸湮沒、難可必審、故更乞告示也）

告「良常東南又有可住處、累石如竈、寄生樹如曲蓋爲誌、往當尋其所。」

告「洞口西北有一地、地小危不安、可立外靜舍」、愚意本自欲立外靜舍、輒當瞻量在宜。（亦不聞立此外靜事、而今有一累石壇歷然、相傳乃言據於此壇化遯也、每往拜視、輒感嘆纏心）

告「菌山至佳、司命臨去、埋金於此、欲服金者可取」、且竊有合金液意、今未敢議此、若山居積年、修學日進、後而事可得密者、臨時啓質。（中君書云吾昔臨去埋金、不道司命、長史此答誤耳）

告「大茅山有玄帝時銅鼎、在山獨高處、入土八尺許、此帝王之所□□□□器、疏示後生、益增稟厲、承「下亦可以立靜舍」、感備告悟。

告「昔屈氏埋銅及錢」、此通非所擬向也、聞此遠事、世代變易、能不悲歎、昔初拜八月八日書、已操身至述虛（此猶是前村）徐汎家、尋家信見報云得應言未可登山、便承此而歸、直致此書於朱家靜中耳、愚心鄙近、亦以肉人穢濁、精誠不懇、無能上達、不悟已暢高聽、得蒙省察、辭與事違、悚息而已。（長史玄挺、動靜聞徹、屑辭所向、便

已關奏蒙報、或是得楊君所傳者、徐汎家今猶存、後所云徐偶、即應是汎後、所以知井宅處、亦云其祖曾爲長史門生也

昔占赤石田、利近山下、爲往來之階、此乃丹誠、尋遇天旱、佃不收塘壞、穆尋見用出、此事力未展、非爲息懷、今方居山下、故當修墾、以此去洞口遠、故不欲安耳。〔此田既在大茅中茅之西、去大山近、瞻仰禮拜乃佳、而言去洞口遠、當是道去北洞口遠耳、此田雖食澗水、旱時微少、塘又難立、不知後當遂墾之不、今塘尙決、補築當用數百夫、則可溉田十許頃、隱居館中門人亦於此隨水播種、常願修復此塘以追遠跡、兼爲百姓之惠也〕

告「書疏班班、欲停之如何」、凡書疏之興、所以運達意旨、既蒙眷逮、親奉觀對司命君二仙靈顏、則天啓其願、沐浴聖恩、豈復煩書疏耶、所謂得魚而忘筌也。〔此蓋不欲停之辭、故引以回見、於理極好〕

不審左公今何在、又有葛孝先、亦言得道、今在何處、肉人喁喁、爲欲知之。〔葛既鄉人、所以及問、此條亦〔右〕〔有〕答在後〕

右長史答書訖此、竝是自起本、多難治、用白牋、次第如此。〔歲乙丑、此一行本題紙背〕

- (1) 俞本が「墟」を「虛」に作るのに従う。
- (2) 意をもつて「未」の字を「末」の字に改める。
- (3) 俞本が「與」を「頃」に作るのに従う。
- (4) 俞本が「右」を「有」に作るのに従う。

昔、十餘歳の頃、述虚〔これはきつと「墟」の字であろう。これまではすべて「虚」に作っている。現在の山の西の村名である〕村の隱居の古老が次のように言っていました。茅山の上には昔は仙人がいて、市場があつたが、ずっと以前にどこかへ行つてしまつたと。その後、包公に會つて動靜をたずねたところ、その御仁はこう答えました。「今ももとどおりこの山にいて、他所に行つてしまつたわけではない。この山は洞庭の西門であり、太湖の苞山に通じている^①。だから仙人がその中に住んでいるのである」。ただ、中仙（茅）君一人の名字について話すだけであつて、兄弟三人がいるとは言わず、長幼の區別もつけず、司命君が尊い身分で、別に東宮を治所としているとも言いませんでした。後になつて傳記（『茅三君傳』）を読み、やつと（眞仙の）身分に高卑の差等があり、（仙官の）席次に等級があることを知りました。敬んでお教えを頂戴しましたので、ここにこれまでのやり方を改めます。〔これは許長史があらためて答書し

ているのである。今、彼の筆にかかる草稿が残っており、それで撰録することができるのである。しかし、前紙はちぎれて失われ、また書きだしの言葉でもない。包公とは鮑靚のこと^②。句容の人はすべて包と呼んでいる。答書した時には、すでに傳記は示されていたのである。これは乙丑の年(興寧三年、三六五)の初めのことである。

お告げに、「小阿の穴口からまっすぐ三、四里下ると、ただちに陰宮の東の玄掖門に到着する。この穴口から二百歩進むと、晝闇のように明るい」とあります^③。これは洞天内の別の光なのです。か、それとも太陽の光を引きこんで洞窟内を照らしているのです。この洞天内の官府は廣大で、宮室は數百間もあるとのことですが、その官屬はただ仙君の二人の兄弟だけなのです。か、他の仙官もいるのです。か。男女合わせて全部で何人ほどがいるのです。か。そこはただの石室なのですか、それともやはり金堂や玉房があるのです。か。宮室は洞庭の苞山と通じているのです。か。包公と妹の朱氏は、昔この世にいた時にかつてこの宮室に入ることができたのです。か。二人はそれとも昇仙できずに地下主者となっているのです。か。その治所はどこにあるのです。か。愚昧ながら覚えておたずねいたします。お氣持に逆らったのではないかと懼れます。〈包公と妹のことは、前の定録中君の書簡には見えていない。きつと別のお告げなのであろう。今ここであらためて質問し、同時に洞天内部のことを問うている。定録

中君の答えは後に見える^④。

天市山の盤石とあつて、市場の名が残っているのは、これに因むのでしよう。今、懸命に勵んで道を慕い、金玉には關心がありませんが、尊靈が埋め置かれたもので、ますますもつていよいよ親密な氣持にさせるのです。掘り出して犯すようなことをいたしましょう。か。こんな風に言われるのは、私の心をまだ十分に分かつていただいていないからです。山の左右の泉は金や玉の津液であり、その地は靜舎を建てて丹藥を調合するにもよいとのこと。このことをしっかりと心に留めておきます。〈以上は天市山の泉水の所は住むのによいということに答えたもの。しかし、ついに(靜舎は)建てられなかった〉

玄帝はいつの時代の人なのでしょう。か。無知蒙昧な後世のわれわれには、及びもつかないことばかりです。どうかお告げ下さい。〈顓頊は水徳の帝王であるから、玄帝と號されるのである。世俗の書にもそのようにある。許長史はついつかり疑問を持ったまでである。此の條もやはり後に答えがある^⑤。〉

お告げに、「中茅山の東に小さな穴がある。これが陰宮の阿門で、ここから入るのがやや簡單である」とあります^⑥。今後、段階を追って齋戒修養し、探し求めます。すぐれた神靈の思召しのお蔭で、金門に至り玉房に登れると思います。ただ、遅いか早いかだけのこ

と、遅くなっても別段構いません。〈こうした教示があるのに、速やかにそこに出かけて門から入ろうと努めないのは、何と残念なことか。だから、神霊たちはいつもねんごろに勧誘するのである〉

お告げに、「大茅山にもやはり小穴が南面にあつて、そっくり同じであり、南の通用門という」^⑩とあります。喜ばしくも啓發して悟らせて下さり、立派なお言葉を授かったことがうれしく、心をこめて精進し、沐浴して氣持を一新します。嘉き日はもう聞いておりますので、その時が来れば密かに参ります。取るに足りぬ私の心ではありますが、神霊がたにはどうかまなくご照覽下さい。〈これは南面の東門が小阿の東門と似ていることを言っているのである〉

お告げに、「左慈だつてどれほどの人間だとか」とあります。^⑪これは、勵ましのお言葉であつて、思し召しを忝くして、ますます喜び慕い申し上げます。〈傳記にもやはりこの事は載っている〉

お告げに、「良常山の西南垂に住むのによい場所があり、司命君の往時の別宅があつた場所である。ここも丹藥を調合するのによい」とあります。^⑫穆は傳記を目にしてから、卑しい心でもつて密かに司命君の往昔の舊居、高潔な隱棲をされた場所を探したいと思つておりますが、はつきりと分からなくて困っています。今は推量して場

所を探したいと思いますが、その時になったらお教え下さい。〈傳記にもやはりこの事は載っている。基壇階陛は埋もれていて、はつきりと突きとめることは難しいので、再度教示を乞うているのである〉

お告げに、「良常山の東南にも、また住むのによい場所がある。竈のような形をした積み重ねた石と、曲がつた蓋のような寄生樹が目印だ」とあります。^⑬そのうちその場所を探しに参ります。

お告げに、「洞口の西北に一地があり、その地はいささか高く不安定だが、外靜舎を建てることのできる」とあります。^⑭私はもともと内靜舎と外靜舎を建てようと思つていましたので、どう建てたらよいかを考えてみます。〈この外靜舎を建てたということは聞いていないが、今は石を積み重ねた一つの祭壇がはつきりと残つていて、言い傳えでは許掾がこの祭壇のところで仙化して身を隠したという。そこへ出かけて拜見するたびに、感嘆の念が心から離れない〉

お告げに、「菌山はたいそうすばらしく、司命君が立ち去る際に、金をここに埋めておいた。金を服したい者は取り出してもよい」とあります。^⑮私は金液を調合したいと密かに考えておりますが、今は敢えてその事については申しません。もし山中の隱棲で年を重ね、仙道を修めて進歩があれば、そのうえで、内密にすべき事柄につい

ては、その時になって質問申し上げます。〈定録中君の書簡には「私は昔、立ち去る際に金を埋めておいた」と言っていて、司命君とは言っていない。許長史のこの答えは間違っている〉

お告げに、「大茅山には玄帝の時の銅の鼎がある。大茅山上のひときわ小高くなつた所の土中八尺ばかりにある」とあります。^⑩此帝王之所：器。後世の私たちに書いてお示し下さり、ますます身の引きしまる思いです。「(大茅山の)山麓にも静舎を建てるのがよい」とのこと、お諭し下さったことに深く感じ入りました。

お告げに、「昔屈氏が銅と錢を埋めた」とありますが、そのどちらにも心を奪われたりなど致しません。このような遙か昔の事を聞くと、時代の變化に悲嘆なしですまされましようか。以前、八月八日の書簡を拜呈してから、足を運んで述^⑪虚へこれはやはり先の村であるの徐汎の家に赴きました。やがて家からの使者が、「返事があり、まだ山に登つてはならないとのことですよ」と知らせてきたので、その教えによって引き返しましたが、その書簡をそのまま朱家の静舎に放置してきてしまいました。私は心が卑しく、俗人の穢れに染まっております、眞心は不十分ですから、御心を理解することができません。私の言葉をお聴き届け下さり、心をお察し頂いていることに気づきませんでした。奏上の言葉は事實に反しており、恐れて息も

つもらんばかりです。〈許長史はすぐれた資質^⑫を持っていて、その舉動はすべてお耳に達し、ちよつとした文字の意向についても、すぐに取り次^⑬がれて答えがもらえる。あるいは楊君が傳えたものを手に入れたのかも知れない。徐汎の家は今でも残っている。後に言う徐偶^⑭が徐汎の後裔なのであろう。だからこそ井戸や家の場所を知っているのであるし、また「その祖先はかつて許長史の門生であつた」と言っているのである〉

昔、赤石田を占有^⑮し、山の麓に近い利點を生かして、往來するための階段を作ろうとしました。これこそ私のひたむきな氣持だったのです。ところが、まもなく旱魃に遭つて收穫できず、溜池は壊れてしまいました。穆^⑯はやがて召されて出仕しました。これは人夫が動員できなかったからで、決してあきらめたわけではありません。今はちようど山麓に居を構えているので、修築して開墾すべきなのですが、ここは洞口から遠いので、ここに落ち着きたくないのです。今この田は大茅山と中茅山の西にあつて、大茅山から近いので、仰ぎ見て禮拜するのに格好の場所であるのに、「洞口から遠い」と言っているのは、きつと北の洞口から遠いことを言っているのであらう。この田は谷川の水を引いているが、日照りの時には水量が少なく、溜池もなかなか造れないので、その後ここを開墾したかどうかは分からない。今も溜池は壊れたままである。補修には數百人の人手を

要するであろうが、十頃ばかりの田を灌漑できよう。隠居^{わんし}の道館の門人たちもここで水量に應じて植えつけをしている。常々この溜池を修復して昔の事跡を追想し、あわせて民衆に恵施したいものだと思願っている。

お告げに、「書簡のやり取りは目立つので、これを止めようと思うが、どうであろうか」とあります。²⁶。そもそも書簡は意思を傳達するために始まったものです。眷顧を受け、親しく司命君と（定録と保命の）二仙の尊顔を拜しましたならば、天は私の願いを聴き入れて下さり、聖恩にどっぴりとつかることになります。どうしてそのうえ書簡のやり取りをしなければならないでしょうか。「魚が捕れたらその道具である筈のことは忘れてしまふ²⁷」というわけです。へこれは止めたくないことを言っているのであらう。だから筈のたとえを引いて返答しているのであって、理窟としてはとてもよい。

左公（慈）は今どこにいますのでしょいか。また、葛孝先²⁸（玄）も道を得たと言われていますが、今どこにいますのですか。俗人たる私は慕わしくてならず、どうしても知りたいのです。へ葛玄は同郷人なので、それで質問した。この條もやはり後に答えがある。²⁹

右、許長史の返書はここまで。いずれも自書本で、塗りつぶして

書き直したところが多い。白牋紙³⁰を使っており、順序はこのとおりである。へ乙丑（興寧三年、三六五）の年のもの。この一行はもともと紙背に書きつけてあった。

- (1) 通太湖苞山中 『眞誥』卷一一葉一裏注「此論洞天中諸所通達、天后者、林屋洞中之眞君、位在太湖苞山下」。
- (2) 包公是鮑靚 『晉書』卷九五藝術鮑靚傳、『雲笈七籤』卷八五陰君傳鮑靚尸解法を参照。
- (3) 告小阿口直下… 『眞誥』卷一一葉一二裏を参照。
- (4) 定録又答有後也 『眞誥』卷一二葉二裏以下を参照。
- (5) 市山之盤石 『眞誥』卷一一葉一一表を参照。
- (6) 其地亦可立靜舍合丹 『眞誥』卷一一葉一一表を参照。
- (7) 顓頊水王 『初學記』卷九總敘帝王「帝顓頊高陽氏、帝王世紀曰、顓頊、黃帝之孫、昌意之子、姬姓也、…二十登帝位、以水承金、位在北方」。
- (8) 此條復有答在後 『眞誥』卷一二葉二表以下を参照。
- (9) 告中茅山東有小穴… 『眞誥』卷一一葉一二表を参照。
- (10) 告大茅山亦有小穴… 『眞誥』卷一一葉一二裏を参照。
- (11) 南面之東門 『眞誥』卷一一葉一三表注「此即南面之東便門、應在柏枝礪石穴中」。

- (12) 告左慈：『真誥』卷一一葉二三表を参照。
- (13) 告良常西南垂：『真誥』卷一一葉一三裏を参照。
- (14) 告良常東南：『真誥』卷一一葉一四表を参照。
- (15) 告洞口西北：『真誥』卷一一葉一四表を参照。
- (16) 今有一累石壇歷然：『真誥』卷二〇葉一〇表注「耆老傳云、據乃在北洞北石壇上燒香禮拜、因伏而不起、明日視形如生、此壇今猶存歷然、則是故求隱化、早絕世塵也」。
- (17) 告蘭山至佳：『真誥』卷一一葉一四裏を参照。
- (18) 修學『真誥』卷一九葉一一表「王顯先爲孔寫、輒復私繕一通、後將還東修學、始濟浙江、便遇風淪漂、唯有黃庭一篇得存」。
- (19) 告大茅山有玄帝時銅鼎：『真誥』卷一一葉一四裏を参照。
- (20) 告昔屈氏：『真誥』卷一一葉一五裏を参照。
- (21) 拜八月八日書：『真誥』卷一一葉一六表を参照。
- (22) 玄挺『真誥』卷一九葉三裏「又按二許雖玄挺高秀、而質撓世迹、故未得接眞」。
- (23) 關奏『真誥』卷一〇葉一四裏「爾既小佳、亦可上冢訟章、我當爲關奏之也」。
- (24) 徐偶『真誥』卷二三葉一七表注「有術虛老公徐偶、云其先祖伏事許長史、相傳識此宅只在今廨前烏柏樹處、應是似猶有齋堂前并存、于時草萊蕪沒、王卽芟除尋覓、果得磚井、土已欲滿、仍掘治、更加甃累」。

- (25) 昔占赤石田：『真誥』卷一一葉一六表を参照。
- (26) 告書疏班班：『真誥』卷一一葉一六裏を参照。
- (27) 得魚而忘筌『莊子』外物「筌者所以在魚、得魚而忘筌、蹄者所以在兔、得兔而忘蹄、言者所以在意、得意而忘言、吾安得夫忘言之人而與之言哉」。

- (28) 葛孝先 陶弘景「吳太極左宮葛仙公之碑」(『華陽陶隱居集』卷下)「仙公姓葛、諱玄、字孝先、丹陽句容都鄉吉陽里人也」。
- (29) 葛既鄉人『真誥』卷二〇葉四裏「眞胄世譜、謹按許長史六世祖名光字少張、…以中平二年乙丑歲來渡江、居丹陽之句容縣都鄉吉陽里」。
- (30) 此條亦有答在後『真誥』卷一二葉二表を参照。
- (31) 白牋『真誥』卷一九葉七表「又按二君多書荊州白牋」。

眞誥卷之十二

稽神樞第二

昔累得書見意、深照旨趣、先書以「年行西戾、衰頹待老、中夜慨歎、莫與酬諮」、夫誠感有在、亦得之無晚也、
次書告「有年之志、疇昔之好、恆願眞人稟受要訣、仰接容景、親

奉徽音」、夫勤未上徹、精未廣釐、眞要之聘未可豫及也、

後〈漢〉書云、「吾發自玄、授金闕素名、跨邁世迹、超登清虛、何玄標之渺邈、奇洞之淵遠哉、欲克己洗心、沐浴芳流、若能斯者、今其時矣、」

末書云、「廁聞要旨、當修五靈、自謂西造閭闔、東遊玄洲、不爲邈絕、求矜而誘之、引而致之、是爲言貫于心、良可啓矣、恭校〔音效〕五靈、亦復至耳、然道浮外迹、未關內眞、是以雲車靈輶、相適猶遐、昔曾軫華僑〔依此而言、則知華僑先亦蒙眞降矣、蓋應會敖世、事有出嘿、涂不必靜、苟有分無志、申公所病、遇至不爲、覆水始悔、是以古唱有云、「逢時不遇、山客并聚」者矣、夫學道者、固不宜恃其質分、必當保任於清全矣、於焉騁逸松期、回輪紫清、靈觀四響、玄音合唱、玉振靈奏、不謀而和、可謂祕道藏珍、眞暉之上挺也、子建志有年、今因以反子昔旨耳。〔此一書似是裴君言、且楊書、此亦不與後玄帝相連、恐非中君答也、又長史此四書本、今竝不存矣〕

〔一〕意をもって「漢」は衍字とみなす。

眞詰卷十二

稽神樞第二

以前、そなたの氣持を述べた書簡を何度ももらい、考えはよく分かつてゐる。最初の書簡には、「人生はたそがれに向かい、身體は衰えて老いを待つばかり、夜中に慨嘆して、御下問にお答えしませんでした」とあった。そもそも、眞心からの感應は確かにあるのであつて、道を得るのは遅くないのである。

次の書簡には、「年來の志、以前からの好尚として、眞人から祕傳の奧義を授かり、仰いで麗しいお姿に接し、すぐれたお言葉をじきじきに拜聴したいと常々より願つておりました」とあった。そもそも勤勉ぶりが上に傳わらず、精勵に廣く努めなければ、眞仙の要訣のお恵みに與かることはできないのである。

後の書簡には、「私は仙界の思し召しによって、金闕に眞人としての名前が刻まれる旨を授かつてから、世俗の穢れを超えて進み、清虚宮に登る覺悟でおります。玄妙なしるしは何と遙遠で、すばらしい洞天は何と深遠なことか。おのれに克ち心を洗い清め、香わしい流れに沐浴したいと思います」とあった。そのようにできるのは、今こそがその時である。

最後の書簡には、「重要な教えを耳にすることができたので、これから五靈を修行することに致します。そうすれば、西は閭風や玄圃に至り、東は玄洲まで赴くことも遠く遙かなことではないと考えます。どうか哀れんで誘い、導いてお招き下さい」とあった。これは眞

心から出た言葉であつて、まことに啓發してやるにふさわしい。謹んで五靈を校^{マツ}言は「效」ぶと言っているのもたいしたことだ。しかし、(そなたの歩んでゐる)道は外の俗世をふわふと漂い、まだ内なる眞人の世界には繋がっていないから、靈妙な轅^{セン}の雲車に乗って仙界へ行けるのは遙か先のことである。

以前かつて華僑の所へ車で下つたが(この事から言えば、華僑にも先に眞仙の降臨のあつたことが分かる)、恐らくそれは機會があつて俗世に遊んだだけのことなのであらう。ものごとには出處語默があつて、方途はいつも靜默と限つたわけではない。かりに天分があつても志がないのは、申公の惱みとしたところであり、いざという時に何もできなければ、水をひっくり返して始めて後悔するようなものである。だから昔の諺に、「せっかくの機會に出會つても進まない」と、山中の人は手をたいて大笑い」と言うのだ。そもそも道を學ぶには、もとより自分の素質を頼みとしてはならず、心を清らかに全うするように心がけなければならぬ。そうすれば赤松子や安期生のもとへ馳せ参じ、紫清の空へ車を回らすことができるのだ。(ここでは)靈妙な樓觀が四方に向かつて聳え、玄妙な音色の合唱が起こり、玉の響きと雲の調べが、はからずして調和を醸し出している。道を秘め寶を隠し、眞人の輝きの至上のものと言ふべきである。そなたは志を立ててから何年にもなる。今そこでそなたを初心にたち返らせてやろう。(この一書は裴君の言葉であつて、しかも楊羲が書

いたものようである。これは後の「玄帝」のものとは關連していないから、恐らく茅中君の答えではないのであらう。また許長史のこの四通の書簡のテキストは、今はいずれも存在しない)

(1) 容景 『無上祕要』卷六五專誠品「神精煒燦、容景煥日、…右出洞玄玉訣經」。

(2) 閻圃 『無上祕要』卷四靈山品「崑崙山、高平地三萬六千里、上有三隅、面方萬里、形似優盆、其一隅正北、主于辰星之精、名曰閻風臺、一隅正西、名曰玄圃臺、…右出洞眞太霄隱書」。

(3) 雲車 『紫陽眞人內傳』「蘇子玄後亦被玄洲召爲眞、命上卿、一旦於陳留乘雲車、驂龍虎、侍者羽蓋而昇天也」。『眞話』卷一四葉一〇表「今年八月五日、西王母遣迎、即日乘五色雲車登天、今在積石臺」。

玄帝者、昔軒轅子昌意娶蜀山之女生高陽、德號顓頊、顓頊父居弱水之鄉、瑁身陶七河之津、是爲玄帝也、仗萬靈以信順、監衆神以導物、役御百氣、召致雷電、於是乘結元之輦、北巡幽陵、南至交趾、西濟流沙、東至蟠木、動靜之類、小大之神、日月所照、莫不屬焉、四行天下、周旋八外、諸有洞臺之山、陰宮之丘、皆移安息之石、封

而填之、鑄羽山之銅爲寶鼎、各獻以一於洞山神峯、不獨句曲一山而已、此所謂玄帝也。〔此後竝中君言前所諮問四條事、復以關上紙也、說顓頊與五符語正同、五符唯無「理」〔埋〕一事耳〕

鮑靚、靚及妹、竝是其七世祖李湛張慮、本杜陵北鄉人也、在渭橋爲客舍、積行陰德、好道希生、故令福逮於靚等、使易世變練、改氏更生、合爲兄弟耳、根冒雖異、德蔭者同、故當同生氏族也、今竝作地下主者、在洞宮中、靚所受學、本自薄淺、質又撓滯、故不得多也、欲知之、其事如此、亦如子七世祖父許肇字子阿者、有賑死之仁、拯飢之德、故令雲蔭流後、陰功垂澤、是以今得有好尚仙眞之心者、亦有由而然也、物皆有因會、非徒爾而得之者矣。〔此書時、先生誠事未授、所以論及子阿功蔭也、鮑亦通神、而敦尚房中之事、故云撓滯、後用陰君太玄陰生符爲太清尸解之法、當是主者之最高品矣、緣運事乃如此相關、今人之善惡、豈曰徒然〕

問葛玄、玄善於變幻、而拙於用身、今正得不死而已、非僊人也、初在長山、近人蓋竹、亦能乘虎使鬼、無所不至、但幾於未得受職耳、亦恆與謝稚堅黃子陽郭聲子相隨。〔葛玄字孝先、是抱朴從祖、即鄭思遠之師也、少入山得仙、時人咸莫測所在、傳言東海中仙人寄書呼爲仙公、故抱朴亦同然之、長史所以有問、今答如此、便是地仙耳、靈寶所云太極左仙公、於斯妄乎〕

左慈今在小括山、常行來數在此下、尋更受職也、慈顏色甚少、正得鑪火九華之益。〔左慈字元放、李仲甫弟子、即葛玄之師也、魏武父子招集諸方士、慈亦同在中、建安末、渡江尋山、仍得入洞、又乞丹砂合九華丹、九華丹是太清中經法、小括即小括蒼山、在永嘉橋谿之北、凡此諸人、術解甚多、而仙弟猶下者、竝是不聞三品高業故也、許先生所以興歎〕

句曲有五門、有心立志、清齋三月、登尋此門、皆可即得、得可入、但人自不能齋尋之耳、來問欲知宮室所作闊狹多少、男女主領人數、當更相示、來疏亦復泰盡邪、勤自當見、亦何事爾、亦何事爾、又當先呈啓司命、司命令答道宮室之委曲者、吾乃敢言之耳、此自是司命之別宮、吾人亦不得爲洞臺之正主也。〔按後所論諸官僚人物、當是已爲啓司命、乃具得受說之耳、右定錄後書、答長史所問訖此、〔後〕〔從〕玄帝來凡五條竝楊書〕

(1) 愈本が「理」を「埋」に作るのに従う。

(2) 愈本が「後」を「從」に作るのに従う。

玄帝というのは、昔、軒轅の子の昌意が蜀山氏の娘を娶って高陽を生み、高陽は德によって顓頊と號した。顓頊の父は弱水の郷にいたので、顓頊は七河の津で自らを陶冶した。これが玄帝である。あらゆる神靈を頼みとしておのれを信じ従わせ、多くの鬼神を監督して萬物を導き、百氣を思いどおりに使役して雷電を招きよせた。そこで、根元の氣を結んで作った車に乗って、北は幽陵を巡り、南は交趾に至り、西は流沙を渡り、東は蟠木に至り、あらゆる動植物、大小の神々、日月の照らすところのものは、すべて彼のもとに服屬した。天下の四方を巡り、八方のはてまであまねく回り、洞臺のある山、陰宮のある丘にはすべて安息國の石を移し、盛り土をしてそれを填めた。また、羽山の銅を鑄て寶鼎を作り、洞山神峰にそれぞれ一つずつ獻じた。句曲山だけに限ったわけではない。これがいわゆる玄帝である。(ここから後は、ならびに茅中君が以前に(許長史から)質問された四條の件に答えた事柄である。これもやはりすでに上紙が缺けている。顓頊を説明する言葉は、『五符』(『靈寶五符序』の語とまったく同じである。『五符』にはただ鼎を埋めるという一事がないだけである)

鮑靚だが、靚とその妹は、その七世の祖の李湛と張慮がともにもと杜陵北郷の人であった。(李湛と張慮は)渭橋において旅舎を作り、陰德を積み行い、道を好み長生を願った。だから、その福徳を

靚らに及ばせ、何度も生まれ變わって肉體を變化鍊成し、氏を改めて再生し、二人をあわせて兄妹にならせたのである。血筋は異なっているけれども、(七世の祖の)遺德のお蔭を蒙っている點では同じである。だから、(兄妹として)同じ氏族に生まれることになったのである。今はどちらも地下主者となつて、洞宮の中にいる。靚の授かった學は、もともと淺薄なものであり、その肉體もまた世俗の中に滞っていたので、多くを得ることができなかったのである。それについて知りたいとのことだが、その事はこのようである。ちょうど、そなたの七世の祖父である許肇、字は子阿が、死者に憐れみをかけ飢えた者を救済する仁德を行つたので、その恩恵が雲のように覆つて子孫に流れ、人知れずになした功徳が恩澤を垂れているのと同じである。だからこそ今、(そなたたち許氏が)仙眞を好む心を持つてるのも、やはりしかるべきゆえんがあつてそうなのである。物にはすべて因縁があるのであり、いたずらにそれが得られるわけではないのである。(この書簡の時には、先生(許邁)の戒めの事柄はまだ授けられていない。そこで、子阿の功徳の恩恵に論及したのである。鮑靚もやはり神靈に通じていたが、房中の事をとても重んじていた。だから、「世俗の中に滞っていた」と言っているのである。後に、陰君の「太玄陰生符」を用いて太清尸解の法を行つた。これは、地下主者の中の最高のランクのものである。因縁の運りのことは、何とこのようにからまり合っているのだ。今の人の

善惡は、どうして（原因のない）いたずらなものと見えようか

葛玄についての質問だが、葛玄は變幻の術には巧みであったものの、わが身を用いることは下手であった。今はただ不死を得ているだけである。仙人ではない。初めは長山におり、近ごろ蓋竹山に入った。やはり虎に乗り鬼神を使役し、どんなことでもすることが出来る。ただ、まだ仙職を授かることができないようだ。やはりいつも謝稚堅^⑬、黃子陽^⑭、郭聲子^⑮と連れだっている。葛玄、字は孝先は、抱朴（葛洪）の從祖であり、鄭思遠の師である。若くして山に入り、仙道を體得した。當時の人々はみな彼がどこにいるのか分からず、東海中の仙人が書簡を寄せて（彼のことを）仙公と呼んだと言いつづけている。だから、抱朴もやはり同じくそのように考えている。許長史が質問したのはそのためである。今、このように答えているのだから、（葛玄は）地仙に過ぎない。靈寶經典に「太極左仙公」と言っているのは、これででたらめだと分かる

左慈は今、小括山にいる。常に往來して、しばしばここにもやって来る。まもなくあらためて仙職を授かることになっている。慈は顔つきは非常に若い。まったくもって鑪火九華丹のお蔭なのだ。左慈、字は元放、李仲甫の弟子、葛玄の師である。魏の武帝父子が方士たちを招き集めた時、左慈もその中にいた。建安年間（一九六―

二二〇）の末に、長江を渡り山をたずね、洞天に入ることができた。また、丹砂を請い求めて九華丹を合成した。九華丹は『太清中經』の法である。小括とは小括蒼山のこと、永嘉の橋谿の北にある。これらの人々は、道術の技能が極めて多方面にわたるのに、仙界のランクが低いのは、いずれも（上眞・中眞・下眞の）三品の高度の教えを聞かなかつたからである。許先生が嘆きの言葉を發したのは、そのためである

句曲山には五つの門がある。（仙を求める）心を持つて志を立て、三箇月間清齋してから、山に登つてこの門をたずねるならば、誰でもみなただちに探し當てることができ、探し當てれば、中に入ることもできる。ただ、人々が清齋してたずねることができないだけなのだ。そなたからの質問では、宮室のつくりと廣さと數、および洞宮内をつかさどっている男女の人數を知りたがつていた。あらためて書いて示そうとも思うが、そなたの手紙は餘りにも欲張り過ぎてはいないだろうか。努力して自分で（洞宮の中を）見るべきだ。それは別に何ほどのことでもないのだ。何ほどのことでもないのだ。また、（われわれは）まず初めに司命君に文書を差し出さなければならぬ。司命君が宮室の詳細を答えるようにお命じになれば、私はそれについて話すであろう。この洞宮はもと司命君の別宮なのだから、われわれだつて洞臺の正式の主というわけにはゆかない

のだ。(按するに、後に論じているもろもろの官僚やその他の人々のことは、きつとすでに司命君に上啓して、詳しく説いて聞かせることができたものであろう。右は定録君の後の書簡。許長史の質問に對する答えは、ここまでである。「玄帝」から後のあわせて五條は、いずれも楊羲の書)

- (1) 玄帝者：『史記』五帝本紀および『大戴禮記』五帝德篇を參照。
- (2) 所諮問四條事 『真誥』卷一一葉一八表以下を參照。
- (3) 說顓頊與五符語正同 『太上靈寶五符序』卷上を參照。
- (4) 易世變練、改氏更生 『真誥』卷一六葉一二表「先世有功在三官、流逮後嗣、或易世鍊化、改氏更生者、此七世陰德、根葉相及也」。
- (5) 質又撓滯 『真誥』卷一九葉三裏「又按二許雖玄挺高秀、而質撓世迹、故未得接眞」。
- (6) 陰功垂澤 『真誥』卷一六葉一裏注「在世行陰功密德、好道信仙者、既有淺深輕重、故其受報亦不得皆同」。
- (7) 先生誠事 『真誥』卷四葉九表、葉一二裏を參照。
- (8) 通神 『抱朴子』地眞「守一存眞、乃能通神」。『真誥』卷二〇葉一三裏「僑初頗通神鬼、常夢共同饗醴」。

- (9) 主者之最高品 『真誥』卷一三葉一表「地下主者、復有三等、鬼帥之號、復有三等、…其第三等、地下主者之高者、…」。
- (10) 緣運 『周氏冥通記』卷二「馮眞人曰、諸人所述、足以相勸戒、可自思緣運、剋列單心」。
- (11) 變幻 『搜神記』卷一八「於時燕昭王墓前有一斑狐、積年能爲變幻」。
- (12) 長山、蓋竹 『抱朴子』金丹「又按仙經、可以精思合作仙藥者、有…長山…此皆是正神在其山中、其中或有地仙之人、…今中國名山不可得至、江東名山之可得住者、有霍山在晉安、長山太白在東陽、四望山大小天台山蓋竹山括蒼山竝在會稽」。
- (13) 謝稚堅 『真誥』卷五葉八表を參照。
- (14) 黃子陽 『真誥』卷五葉九表を參照。
- (15) 郭聲子 『真誥』卷五葉八裏を參照。
- (16) 是抱朴從祖、卽鄭思遠之師也 『抱朴子』金丹「余師鄭君者、則余從祖仙公之弟子也」。『晉書』卷七二葛洪傳「從祖玄、吳時學道得仙、號曰葛仙公、以其鍊丹祕術授弟子鄭隱、洪就隱學、悉得其法焉」。
- (17) 傳言東海中仙人寄書呼爲仙公 陶弘景「吳太極左宮葛仙公之碑」(『華陽陶隱居集』卷下)「于時有人漂海隨風、渺漭無垠、忽值神島、見人授書一函、題曰寄葛仙公、令歸吳達之、由是舉世翕然號爲仙公、故抱朴著書亦云余從祖仙公乃抱朴三代從祖也、

俗中經傳所談、云已被太極銓授、居左仙公之位、如眞誥并葛氏舊譜、則事有未符、恐教迹參差、適時立說」。

- (18) 靈寶所云太極左仙公 宋文明『通門論』靈寶經目(ベリオ二五六號)「…太極左仙公請問經上一卷、仙公請問經下一卷、仙公請問本行因緣衆聖難一卷、太極左仙公神仙本起內傳一卷、太極左仙公起居經一卷」。

- (19) 李仲甫 『眞誥』卷九葉二二表注を参照。

- (20) 葛玄之師 『神仙傳』葛玄「葛玄字孝先、從左元放受九丹金液仙經」。『抱朴子』金丹「昔左元放於天柱山中精思、而神人授之金丹仙經、…余從祖仙公又從元放受之、…江東先無此書、書出於左元放、元放以授余從祖、從祖以授鄭君、鄭君以授余、故他道士了無知者也」。

- (21) 魏武父子招集諸方士、慈亦同在中 曹植『辯道論』(『廣弘明集』卷五)「世有方士、吾王悉所招致、甘陵有甘始、廬江有左慈、陽城有郗儉、始能行氣導引、慈曉房中之術、儉善辟穀、悉號三百歲、本所以集之於魏國者、誠恐斯人之徒、接茲詭以欺衆、行妖惑以惑人、故聚而禁之」。

- (22) 太清中經 『抱朴子』祛惑「五原有蔡誕者、好道而不得佳師要事、廢棄家業、但晝夜誦詠黃庭太清中經觀天節詳之屬、諸家不急之書、口不輟誦、謂之道盡於此」。

- (23) 小括蒼山 注(12) 參照。

- (24) 三品高業 『無上祕要』卷四二修學品「經有三品、道有三眞、…右出洞眞太上素靈大有經」。『眞誥』卷一九葉一四裏「但何性鄙滯、不能精修高業」。

- (25) 許先生所以興歎 『眞誥』卷一八葉一〇裏「聞弟遠造上法、偶眞重幽、心觀靈元、忝陶太素、登七闕之巍峩、味三辰以積遷、虛落霄表、精即九玄、此道高邈、非是吾徒所得聞也、亦由下挺稟淺、未由望也」。

- (26) 句曲有五門 『眞誥』卷一一葉六裏「句曲之洞宮有五門、南兩便門、東西便門、北大便門、凡合五便門也」。

- (27) 來問欲知宮室所作闊狹多少… 『眞誥』卷一一葉一七裏を参照。
(28) 司命之別宮 『眞誥』卷一一葉一六裏注「司命常住大霍之赤城、此間唯有府曹耳」。

東卿司命監太山之衆眞、總括吳越之萬神、可謂道淵德高、折衝羣靈者也、賈玄道李叔升言城生傳道流往竝受東卿君之要也、玄道、河東人、周威王之末年生、叔升、涿郡人、漢元帝時生、道流、北地人、漢靈帝殿中將軍也、城生、吳人、後漢劉聖公時爲武當郡尉也、受學至勤、竝得眞道、今在太山支子小陽山中、此所謂地眞者也、諸來作試者、非一律而往矣、或亦因人犯者、此最難了也、於斯之際、可不慎乎。(此四人隸司命、主察試學道者、所以長史有書與賈、賈即呈司

命、司命亦答之、竝以在上卷、此諸人名位小、不顯外書、周威王卽應是六國時威烈王也、于時雖未立河東郡、而卽地已有其名矣、漢官無正殿中將軍、或應中郎將也

此紫陽眞人六月二十日受。

右一條有掾寫。

東卿司命君は太山の眞人たちを監督し、吳越の萬の神々を統べ治めており、奥深い道と高い徳を備え、多くの神靈たちを支配するお方とすることができ、賈玄道、李叔升、言城生、傳道流は、かつてそろって東卿君に招かれた。玄道は河東の人、周の威王の末年の生まれ。叔升は涿郡の人、漢の元帝の時の生まれ。道流は北地の人、漢の靈帝の殿中將軍である。城生は吳の人、後漢の劉聖公（劉玄、更始帝）の時、武當郡の尉となった。（この四人は）學を受けてまじめに努力し、そろって眞道を得た。今は太山の支脈の小陽山の中にいる。これらの人々はいわゆる地眞である。（道を學ぶ者を）試しにやってくる者たちは、一つの決まった方法でやるのではない。ある時には、人のすきに乘じて犯すこともある。これは最も始末をつけるのが難しい。このような際には、慎重にしなければならぬ。この四人は司命君に隸屬し、道を學ぶ者を觀察し試すことをつかさどっている。だから、許長史は書簡を賈玄道に與え、賈はそれを

司命君に上呈し、司命君がそれに答えたのである。（これらの書と答えは）いずれもすでに上卷にある。^③これらの人々は名位が低く、世俗の書には見えていない。周の威王とは、きっと六國の時の威烈王のことであろう。當時、まだ河東郡は立てられていなかったが、その地にはすでにその名があったのであろう。漢代の官には、正式の殿中將軍はない。あるいはきっと中郎將のことであろう。

これは紫陽眞人が六月二十日に授けたもの。
右の一條は許掾の寫しがある。

① 羣靈 『智慧消魔眞經』卷二入定品「太上八術智慧滅魔神虎隱文、…皆是天下萬精群靈之名、千魔萬妖之隱諱也」。

② 賈玄道李叔升言城生傳道流 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「賈玄道、李叔勝、言城生、傳道流」、注「四人竝隸司命、主察試學道者、在太山」。

③ 竝以在上卷 『眞誥』卷二葉一四裏、葉一五裏を參照。

七月十五日夜、茅中君受書與許卿。〈卽長史也、後當爲上清左卿〉玄感凝會、精期遠範、標神映挺、雙理自分、必能鵬飛辰阿、雲扇靈元、高振玉宇、攜轡秀眞、可謂邈乎其奇、落絕之視也、於是洞陰之

宮、内臺下觀、風無羽琅之鼓、草無瓊金之流、嚮雖淳光正明、動回五象、固乞屈之夾觀、小天之浮景耳、何足絳卿司之至念、紆蘭眞以盼汜邪、然鑒無不應、圓想必通、所以興詠事外、迹亦竝市、苟誠之所企、吾無隱也、想善建重離之明、以期於必詣之會、皓清明朗、賢亦俱學而得耳、不令我等有覺頽下風矣、弘之而已。〔此是受前書後一月日復受此、猶論答欲見洞宮事、所以有後說也、善建重離之明、如似指魏傳青錄文、而長史名字不相應、既已稱俯玄仰白在瓊刃前、則此別當有義況也〕

右一條楊書。

七月十五日之夜、茅中君が書を授けて許卿に與えた。〔すなわち許長史である。後に上清左卿になることになっている〕^①

神祕的な感應が一つに形を結び、深遠な規範を心をこめて目指し、高い精神が抜きん出て輝き、神仙と一體となる道理が自ずから分として備わると、必ず大鵬のごとく星辰の丘を飛翔し、雲のように盛んに靈元^②の氣を煽り、玉の殿宇^③で高尚に振る舞い、秀れた眞人たちとともに手綱を手にとることになる。これこそ、遙かに類いまれなること、さいはての眺めというべきものである。それに比べれば、洞天の陰宮の内部の臺や地下の樓觀には、風に響く羽琅の鼓の調べもなく、草を潤す金玉の水の流れもない。たとえ、みぎわの光がき

らりと輝き、五つの星が運っていたとしても、それはもとより窮屈な狭い眺め、ちつげな洞天のつまらぬ光景に過ぎない。どうして、上清の卿司になるという至上の思いをそこに懸け、香わしき眞人の本性を曲げて小さな横道を顧みる必要があろうか。しかし、鏡はすべてものを映し出し、缺けるところのない完全な思いは必ず通じるものだ。それ故、眞人は世俗の外で詩を詠じ、その具體的な事跡をあまねく示すのである。いやしくも、誠の心から願ひ求めたものである限り、私も隠すことはしない。思うに、日月のような明るさを立派に打ち立てて、必ず至るはずの出会いに期待を寄せたいものだ。清く明らかなあり方は、そなたもともに學んで得ることができぬのだ。そなたがつまらぬ地位にいてことでわれわれを憂い顔にさせないでほしいものだ。弘大な志を持ちなさい。〔これは前の書簡を授かつて後、一月してまた授かったものである。やはり、洞宮を見たいと言ったことに對して論じ答え、それで後の説明があるのである。〕日月のような明るさを立派に打ち立て」とは、『魏傳』の「青錄文」^④を指しているようであるが、許長史の名字はこれと合わない。「俯玄仰白」を「瓊刃」の前に述べているのだから、これはきつと別に意味するところがあるはずだ^⑤。

右の一條は楊羲の書。

- (1) 後當爲上清左卿 『眞誥』卷二〇葉八裏「(長史) 挺分所得、乃爲上清眞人、爵登侯伯、位編卿司、治仙佐治、助聖牧民」。
- (2) 靈元 『眞誥』卷一八葉一〇裏「心觀靈元、炁陶太素」。「太清中黃眞經」釋題(『雲笈七籤』卷二三)「先除慾以養精、後禁食以存命、是知食胎氣、飲靈元、不死之道、返童還年、此蓋聖人之所重也」。
- (3) 玉宇 『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「第五章、…此皆太微之所館、天帝之玉宇也」。
- (4) 勳回五象 『智慧消魔眞經』卷二「瓊玕表眞、倂停五象、香華散煙、雲葩三景」。
- (5) 重離 『眞誥』卷一三葉一九裏「方嶠遊瓊刃、華陽棲隱居、重離儼或似、七元乃扶霄」。傳咸「贈何劭王濟」(『文選』卷二五)「雙鸞遊蘭渚、二離揚清暉」、李善注「二離、日月也」。
- (6) 魏傳青錄文 『眞誥』卷一九葉二裏「南嶽夫人傳載青錄文云」。
- (7) 稱俯玄仰白在瓊刃前 『眞誥』卷二葉一三表「七月十五日夜、清靈眞人授詩、企望人飛、若感若成、威不內接、驕女遠屏、三四縱橫、以入帝庭、歷紀建號、得爲太齡、亦必秀映、四司元卿、翻然縱羽、遂登上清、與許玉斧、鳳巢高木、素衣衫然、履順思眞、凝心虛玄、五公石映、彼體所便、急宜服之、可以少顏、三八令明、次行玄眞、解駕偃息、可誦洞篇、瓊刃應數、精心高栖、隱嘿沈閑、正氣不虧、尤散除疾、是爾所宜、次服醮

飯、兼穀勿違、益髓除患、肌膚充肥、然後登山、詠洞講微、寅獸白齒、亦能見機、遂得不死、過度壬辰、偃息盛木、玩執周書、太極植簡、金名西華、學服可否、自應靈符、理異契同、神洞相求、定錄中候告」。但し、右の引用部分には「俯玄仰白」の句は無いが、陶弘景が見た「青錄文」にはその四字があったのかも知れない。

定錄官寮有左右理中監、準今長史司馬職、又有北河司命、主水官考、此職常領九宮禁保侯、禁保侯職主領應爲種民者。(今洞宮自二君以下、便次此三職爲大矣)

左理中監準太府長史、昔用韓崇以居之、崇字長季、吳郡毗陵人也、少好道、林屋仙人王瑋玄曾授之以流珠丹一法、崇奉而修之、大有驗、瑋玄語之、「子行此道、亦可以出身仕宦、無妨仙舉也」、崇遂仕、稍至宛陵令、行仁以爲政、用道以撫民、虎狼深避、蝗不集界、遷汝南太守、拔書佐袁安、安後位至司徒、時人通以崇有識物之鑒也、陰皇后葬、京師近郡二千石妻嘗會園陵、而崇獨居清素、妻忿崇哭泣、詔問其故、太常馮案答曰、「汝南太守韓崇清苦遠尚、味道忘形、身享重官、而妻自紡績、政化仁簡、視民如傷、深達奇博、有君子之鑒、斯則昏夕之夜光、陛下之子產也、妻不通寒儉之節、哭怨無衣、將足以

顯崇明德耳」，上奇之，加崇俸祿，秩中二千石，後孝明皇帝巡狩汝南、上治崇府，崇使妻出任孤獨老嫗家，上聞歎曰：「韓崇所謂百鍊不銷也」，賜縑五十匹，崇在郡積十四年，政化洽著，舉天下最，年七十四，瑋玄乃授以隱解法，得去入大霍山，受瑋玄遁化泥丸紫白術以度世，今在洞中爲左理中監。《漢書》所載事迹亦略同，而置辭小異耳，袁安字邵平，初爲縣功曹，被舉歷仕，遂至三公，和帝時卒，即袁紹高祖也，晉世又有馮奚，亦爲大常，名位同耳，韓既隱解，必是《記》「託」尸，今晉陵上有韓冢，崔巍高大，從來相呼爲韓冢，疑如桃君，或即是此虛墳，而世呼爲孫策將韓當冢也，云「王瑋玄是楚莊王時侍郎，受術於玉君」。《若是春秋時楚莊王者，疑侍郎之官不似古職，而漢楚王又無莊諡》

右理中監、準職如司馬，今有劉翊字子翔者居之，翊本潁川人，少好道德，而家世大富，常周窮困爲事，好行陰德密惠，陳留張季札當弔師喪，車敗牛困，翊於汝南界逢之，與語，不示名字，即推車牛與乘之，恤死救窮非一人矣，後都長安，翊舉計掾到都，帝嘉其心，拜郎中，遷陳留太守，出長安五百里中，斂死恤窮，損己分人，行達陽平，遂遇馬皇先生，告翊曰：「子仁感天地，陰德神鬼，太上將嘉子之用情矣，使我來攜汝以長生之道，吾仙官也，爾乃能隨我去不」，翊於是叩頭自搏，「少好長生，幸遇神仙，乞願侍給」，馬皇先生因將翊入桐柏山中，授以隱地八術服五星之華法，今度名東華，來在洞中，爲

定錄右理中監。《漢書》云：「翊字子翔，潁陰人，家世豐富，常能周施，而不以爲惠，曾行於汝南界中，有陳留張季札，遠赴師喪，遇寒水車敗，頓滯道路，翊見而謂曰：『君愼終赴義，行宜速達』，即下車與之，不告姓名，策馬而去，季札意其子相也，後故到潁陰，還所假乘，翊閉門辭行，不與相見，常守志，臥疾不屈聘命，河南种拂臨郡，引爲功曹，後黃巾賊起，翊救給乏絕，資其食者數百人，鄉族死亡，則爲殯斂，鰥寡則助其妻娶，獻帝遷都西京，舉上計掾，爾時道路寇阻，翊夜行畫伏，乃到長安，上嘉其忠勤，拜議郎，遷陳留太守，翊又散珍寶，唯餘車馬，自載東歸，出關數百里，見士大夫病亡道次，仍以馬易棺，脫衣斂之，又逢故知飢困於路，不忍委去，因殺所駕牛以救其乏，衆人止之，翊曰：『視沒不救，非志士也』，遂俱餓死」，此說大同小異，故備載之，論翊字子翔，於字例相得，而翊義亦是相，相作息亮切音，二者未詳孰正，馬皇出列仙傳，黃帝時馬師也。

定錄府有典柄執法郎，是淳于斟字叔顯，主試有道者，斟，會稽上虞人，漢桓帝時作徐州縣令，靈帝時，大將軍辟掾，少好道，明術數，服食胡麻黃精餌，後入吳烏目山中隱居，遇仙人慧車子，授以虹景丹經，修行得道，今在洞中爲典柄執法郎。《易參同契》云：「桓帝時，上虞淳于叔通受術於青州徐從事，仰觀乾象以處災異，數有效驗，以知術故，郡舉方士，遷洛陽市長」，如此亦爲小異，吳無烏目山，婁及吳興並有天目山，或即是也，慧車子無別顯出。

十二月一日夜、定錄君所道。〈此即同是丑年所受

云北河司命頃闕無人、昔以桃俊兼之耳、俊似錢唐人、少爲郡幹佐、
〔未〕²「未」負笈到太學受業、明經術災異、晚爲交趾太守、漢末棄世、
入增城山中學道、遇東郭幼平、幼平、秦時人、久隱增城得道者也、
幼平教俊服九精鍊氣輔星在心之術、俊修之道成、今在洞中、兼北河
司命、主水官之考罰、此位雖隸定錄、其實受事於東華宮中節度、桃
俊字翁仲者也。〈漢書無此事、今家在錢唐臨平、墳壇歷然、苗裔猶
存、鄉近時聞顰角之響、故人不取侵毀之、皆知呼爲桃司命家、錢唐
杜徵士〔事〕³京產、先與隱居共有詩詠、以贊述斯德、別在集中、幼
平亦無所顯出

張激子當爲太極仙侯、激子者、河內張奉者也、字公先、少時名激
子耳、此人亦少發名字、太傅袁隗歎其高操、妻以女、女服飾奢麗、
奉不顧眄、無異路人、婦改服、乃後成室家也、後棄世人剡山、遇山
圖公子、山圖公子、周哀王時大夫仙人者也、授激子九雲水強梁鍊桂
法、激子修此得道、今在東華宮、行爲太極所署也、或領九宮尙書、
與北河侯對職治水考、北河司命或爲禁保侯、亦併共業故也、北河司
命亦治在洞天之中、與張激子對局。〈魏書云、「張範字公儀、河內修
武人、祖歆、漢司徒、父延、太尉、袁隗欲以女妻範、範辭不受、性
恬靜樂道、徵命不就、後爲議郎、參丞相魏武軍事、甚見敬重、好賑

救窮乏、家無餘財、以建安十七年卒、弟承字公先、亦知名、以方正
拜議郎諫議大夫趙郡太守、後隨魏武西征、至長安病亡、此說名字、
翻覆大異、承與奉乃相類而非袁墳、若是範、又其字不同、詳按事迹、
恐多是兄也、魏書王修傳又云、「修往來南陽、多止張奉舍、奉舉家
病、修營拯之、按張範兄弟乃嘗避地往揚州投袁術、又非劉表、不應
在南陽、二三爲疑也、山圖公子出列仙傳」

中候夫人所道。〈尋洞中事、皆二君所說、如此兩條獨是中候夫人
者、當本是東華中職寮故也〉

我聞易遷中人寶氏言云、「北河司命禁保侯、似有所擬、想當審爾」。
〈寶氏即瓊英也、似有所擬者、當是長史、故中君受云北河司命方驗
也、恐受業高後、定不復爲此職、然主領種民、事亦相符〉

保命府多女官、司三官、官屬有七人、四女三男、明晨侍郎七人、
如今世上御史中丞之職、竝隸東華方諸宮、保命君總關之耳。

明晨侍郎周爰支者、漢河南尹周暢伯持之女也、暢、汝南安成人、
好行陰德、功在不覺、曾作河南尹、遭大旱、收葬洛陽城旁客死骸骨
萬餘人、爲立義冢祭祀之、應時大雨豐收、所行多是此輩、太上處以
暢有陰行、令爰支從南宮受化得仙、今在洞中、爰支亦少好道、服伏

答三十年、後遇石長生、教之以化遁、化遁、上尸解也。《暢》即周嘉從弟也、性仁慈和篤、某帝時爲河南尹、永初二年夏旱、久禱無應、因收葬萬餘人、應時大雨、位至光祿勳

明晨侍郎張桃枝者、漢司隸校尉朱寓季陵母也、沛人、寓往與陳蕃俱誅、寓母行陰德、久聞在易遷、始得爲侍郎耳。《朱寓、沛人、桓靈時八俊、後同黨人之例、李膺杜密俱下獄死、非陳蕃同時》

明晨侍郎夏馥字子治、陳留人也、少好道、服朮餌、和雲母、後入吳山、從赤須先生受鍊魂法、又遇桐柏真人、授之以黃水雲漿法、得道、今在洞中、馥少時被公府辟召、懸辟書著桑樹乃去、其用懷高邁如此。《後漢及高士傳並云、「陳留閭人、少爲書生、桓帝時舉直言不就、性質直、不同時黨、爲閭人所疾、陷於黨錮之限、避難乃翦鬚髮、變形逃林慮山中、爲人治作、後還家、杜門不出、不與人相見、黨禁未解而亡」、赤須子出列僊傳、桐柏即右弼王》

餘數人不能一二道之、例皆取平貞正直、體隱神清、即侍郎之才不限男女也。《前云有七人、今唯說二女一男》

右保命君所道。《此當是接中候告後乃言之》

童初府上師用劉文饒、文饒者、弘農劉寬也、少好道、曾舉漢方正、稍遷南陽太守、視民如子、怒不形顏、口無疾言、行陰德、拯寒困、萬民悅而附之如父母焉、後爲司徒太尉、上賜酒、伏地睡、詔問故、乃答曰、「臣任重責大、恆憂心如醉、旦使奴至市買菜、奴盜用錢飲酒、晏乃還、臥於閣內、又不得菜、既醒、乃罵之爲死狗、罵畢、即束帶來《人》^④「入」、恐奴從後自殺、所以慮之、不覺忽然睡耳、願見哀恕」、寬用心仁愛、觸類如此矣、年七十三、一旦遇青谷先生降之於寢室、授其杖解法、將去入太華山、行九息服氣、及授以鑪火丹方、修之道成、今在洞中作童初府師上侯、主始學道者。《後漢書云、「劉寬字文饒、弘農華陰人、父名崎、順帝時爲司徒、寬爲人謹厚、常行有人失牛、乃就寬車中認之、寬無言解駕牛與之、步歸、頃有《誌》^⑤「認」者、得牛而送還慚懼、寬乃謝遣之、桓帝延熹八年爲南陽太守、恆用蒲鞭、靈帝嘉平五年爲太尉、嘗於御坐被酒睡伏、帝問「太尉醉邪」、寬仰答、「臣不敢醉、但任重責大、憂心如醉耳」、嘗有客來詣寬、寬遣奴市酒、迂久大醉而還、客罵爲畜產、寬須臾遣人視奴、疑恐自殺、語左右曰、「此是人而罵爲畜產、爲辱孰甚、故吾懼其死耳」、後封逮鄉侯六百戶、中平二年亡、年六十六、贈車騎將軍《時》^⑥「特」進、謚曰昭討侯、子松嗣」、按此說復爲同異、故詳載之、青谷先生無別顯出、凡此諸引教仙人恐皆是下教限、不爾則不應得輒然

華陽中事、當更示爾。

正月二十三日、東宮上人來看洞中、時或有龜山賓共集、高會眞仙之日、寧可暫登伏龍之鄉、以禮拜於靈岫邪、可示許侯令知之。〔此亦應是中君仍前十二月一日言也、東宮上人即青童君、龜山賓即西王母、上卷亦有此告、令登伏龍以望山禮拜、便異乎陟嶺、非必以近易爲言、恐當宜然也〕

⑦昔有一人好道而不知求道之方、唯朝夕拜跪、向一枯樹輒云乞長生、如此二十八年不倦、枯木一旦忽然生華、華又有汁、甜如蜜、有人教令食之、遂取此華及汁竝食之、食訖即仙矣、如是用心精誠之至也、枯木尚能生繁華、濯甘津、況三秀之靈阿、五芝所播植、而不能數恭山岫、洗拔滓穢者、良可悲也、世人所以〔僂此一字、非眞〕每不得如意者、亦如子所不得如意耳、豈異邪。

昔有劉少翁、曾數入太華山中、拜禮向山、如此二十年、遂忽一日得見西嶽丈人、授其仙道。〔禁山符有西嶽君西嶽公、不知是此丈人邪〕昔有一人、數旦旦詣河邊拜河水、如此十年、河侯河伯遂與相見、與其白璧十雙、教授水行不溺法、此人見在中嶽得道。〔河侯河伯故當是兩神邪〕

左慈初來、亦勤心數拜禮靈山、五年許乃得深進內外東西宮耳。〔前云三月便得進、與此大殊、恐以深進爲異也〕

學道當如山世遠、去人事如清虛眞人、步深幽當如周紫陽、何有不得道邪。〔世遠傳未出、其捨家尋學、事在讖書、即尹公度弟子、已得爲太和山眞人、清虛王君紫陽周君各自有傳〕

建志當令勤、研神令虛、所爲所作當令密。〔青童戒南眞亦云學道唯須勤密、勤即晝夜而勿怠、密則非我而不知、今中君復說此、實爲至論、可謂一言以蔽之〕

右定錄君所道使疏。〔此一條又有楊書〕

夫望林者、豈不想易遷之若人、羨彼子之濯景邪、可謂瞻之在前、忽焉在後。〔長史妻既已在易遷、爲長史今眺望林嶺、豈無羨想之懷、昔自謂勝之、今翻在後、蓋以勸激長史之辭也〕

右南嶽夫人言。

張姜子、西州人、張濟妹也。〔濟、後漢末西涼州人、爲董卓將、後攻穰城、被射死、即張繡從叔也、其妹不顯外書、不知出適〔未〕〔未〕〕

李惠姑、齊人、夏侯玄婦也。《玄、魏末人、與李豐俱爲晉文王所誅、不知婦亡在玄之前後、李豐乃是馮翊人、非齊人、不知此是李誰之女》

施淑女、山陽人、施績女也。《施績、吳興人、孫皓時爲驃騎將軍、守西陵、今云山陽、恐女或出適取夫家郡、不爾則乖》

鄭天生、鄧芝母也。《鄧芝字伯苗、南陽新野人、在蜀爲劉禪車騎將軍、後行見媛抱子行、引弓射殺、因感念而亡、母不知鄭誰之女》

此數女子、昔世有仁行令問、竝得在洞中、洞中有易遷館含眞臺、皆宮名也、計今在易遷館東廂中、此館中都有八十三人、又有協辰夫人者、九宮之女也、太上往還來教此等法、皆以保命授書、協辰夫人主教領之也、夫人、漢司空黃瓊女黃景華也、韓終授其岷山丹、服得仙。《黃瓊、江夏人、字世英、漢順帝時司空司徒太尉、年七十九亡、父名香、章和帝時爲尚書令、救活千餘人、瓊子琬、司徒太尉、爲李權所殺、夫人亦不知出適《未》^⑤「未」、今此諸人或稱女、或稱婦、或稱母、蓋各取名達者而言之、非必因附其功福所及也》

含眞臺是女人已得道者、隸太元東宮中、近有三百人。《前云八十三人、止是易遷耳、含眞既爲貴勝、當須遷轉乃得進入也》

此二宮盡女子之宮也、又有童初蕭閑堂二宮、以處男子之學也。《其男女名氏又出後、竝是略稱標勝者也》

計與數人共止、最於鄧伯苗母相親愛、餘亦厚耳。《伯苗母即鄭夫人也》

設牀待靈、誠孝子之長想也、計亦已爲其兒作惠益也、計前與爾杯布、殆相與爲贈、當往洞室之際耳、仙官有禁、不得道實、故假以他惠也、此亦意之至也、其亦欲設牀寢、令精氣之往有所棲者也、可密《諸》^⑥「詣」其兒道如此。《此令告據也、其事皆有指趣、不容顯注之、從定錄官寮來凡三十一條竝有據寫、注之一卷相隨》

- (1) 愈本が「記」を「託」に作るのに従う。
- (2) 愈本が「未」を「未」に作るのに従う。
- (3) 「事」は衍字とみなす。
- (4) 宮内廳藏正統道藏本(宮本)が「人」を「入」に作るのに従う。
- (5) 愈本が「誌」を「認」に作るのに従う。
- (6) 愈本が「時」を「特」に作るのに従う。
- (7) この段、『無上祕要』卷六五專誠品に同文が見える。
- (8) 學本が「未」を「未」に作るのに従う。

(9) 學本が「未」を「未」に作るのに従う。

(10) 愈本が「諸」を「詣」に作るのに従う。

定録府の官僚には、左右の理中監があり、今の長史、司馬の官僚になぞらえられる。また北河司命があり、水官の考罰を主管している。この職掌は、常に九宮の禁保侯を兼領する。禁保侯は職掌として、種民となるべき者を統括することをつかさどっている。(1) 今、洞宮では、二君以下にこの三つの官職が配置されて重要である。

左理中監は太府の長史になぞらえられる。昔、韓崇⁽²⁾を登用してこの官に就けた。崇は字は長季、吳郡毗陵の人である。若い頃から仙道を好んだ。林屋山の仙人の王瑋⁽³⁾玄はかつて彼に流珠丹⁽⁴⁾の一法を傳授し、崇はそれを奉受して修め、大いに效驗があつた。瑋玄は彼に、「そなたはこの道を實踐する際、世に出て仕官してもかまわぬ。昇仙にとって妨げにはならない」と語った。崇はそこで仕官し、次第に昇進して宛陵の縣令となった。仁に努めて政治を行い、道を用いて民をいたわつたので、虎や狼は山奥深く逃げ去り、蝗も領内には集まつて來なくなつた。汝南郡の太守に遷ると、書佐の袁安を拔擢した。安は後に司徒の位にまで昇つた。當時の人々は口をそろえて、「韓崇は人物を鑑識する眼を持つている」と言いあつた。陰皇

後の葬儀に當たつて、都の近隣諸郡の二千石の官僚の妻は陵墓に集まらなければならぬことになつたが、韓崇はひととき清貧な暮らしを送つていたので、妻は崇に腹を立て、聲をあげて泣いた。詔によつてその理由を下問したところ、太常の馮奚は答えた。「汝南太守の韓崇は、とても清貧で高遠な操を立て、道を樂しみ外形のことなど忘れています。自身は重い官位を授かりながら、妻は自ら絲紡ぎをしているありさま。その政治教化は慈しみ深くて簡素であり、民をまるで傷ついたもののように扱い、深く道理に通達して見識はすばらしく廣く、君子の鏡となる徳を備えております。これこそ暗夜の夜光珠、陛下にとつての子産のような存在であります。妻はつましやかな生活の節義に通ぜず、衣裳がないことを泣いて怨んでいますが、これこそ韓崇の明德を輝かすに充分であります」。帝はそのことをめで、韓崇の俸祿を増して、秩中二千石とした。その後、明帝が汝南を巡狩した時、帝は韓崇の役所を行在所とした。韓崇は妻を追い出して身寄りのない老婆の家に住まわせた。帝はそのことを聞くと、「韓崇こそ、いわゆる『百度うち鍛えても目減りしない』⁽⁵⁾というものだ」と感嘆し、絹五十匹を下賜した。韓崇は、郡に在任すること十四年の歳月を重ね、政治教化はあまねく顯著で、天下第一の成績に推された。七十四歳になつて、王瑋玄はやつと隱解の法⁽⁶⁾を傳授し、世俗を離れて大霍山に入ることができた。さらに王瑋玄の遁化泥丸紫戸の術⁽⁷⁾を傳授されて昇仙した。今は洞天の中に

いて、左理中監となっている（『後漢書』の記載する事跡もほぼ同じであるが、措辭が少しく異なっている。^⑨袁安は字は邵平、最初は縣の功曹となり、推舉されていくつかの官を歴任し、三公にまで昇り、和帝の時に死んだ。袁紹^⑩の高祖父である。晉の時代に、また馮奚なるものがあり、やはり太常となったが、名と官位が同じなだけである。韓崇は隠解したのだから、必ず尸解に身を託したのである。^⑪今、晉陵に韓冢があつて、高々と聳えている。これまで韓冢と呼ばれてきたが、あるいは桃君の場合と同様に、虛冢であるのかも知れない。^⑫ところが世間では孫策の將軍の韓當の墓と呼んでいる。王璋は楚の莊王の時の侍郎であり、道術を玉君より授けられたという。（もし春秋時代の楚の莊王であるとすれば、侍郎の官は上古の官職に似つかわしくないという嫌いがあるが、漢の楚王だとしても、また莊なる諡の者はいない）

右理中監は司馬のような官職になぞらえられる。今、劉翊^⑬、字は子翔なる者がその職に就いている。劉翊はもと潁川の人で、若い頃から道徳を好み、家は代々大いに富裕であつたが、常に困窮した人々に施しをすることに努め、人知れず密かに恩恵を與えることを好んで實踐した。陳留の張季札が師のおくやみに出かけようとした時、車が壊れ牛が行きなやんだ。劉翊は汝南の郡内でその場に行きあわせ、語りかけて、名前を明かさず、すぐに車と牛を譲り與えて乗せ

てやった。死者を哀れみ困窮した人を救つたためしは、一人にとどまらない。その後、都が長安に遷ると、劉翊は計縁に推舉されて都にやつて來た。帝はその心ばせをよみし、郎中を拜命し、さらに陳留郡の太守に遷つた。長安を出て五百里行くうちに、死人を棺に收めたり困窮した人を救つたりし、おのれを犠牲にして他人に分け與えた。さらに旅して陽平に至つたところで、馬皇先生に出會つた。先生は劉翊に告げた。「そなたは慈しみ深さによつて天地を感動させ、鬼神に陰徳を積んだので、太上道君はそなたの心がけをよみせられた。私を遣わし、長生の道によつてそなたを導かせることとされた。私は仙官である。そなたは私について來られるか」。劉翊はそこで頭を地に打ちつけ激しくわが身をたたいて言つた。「若い頃から長生を望んでおりましたところ、幸いにも神仙にお會いできました。どうか仕えさせていただきたく思います」。馬皇先生はそこで劉翊を率いて桐柏山の中に入り、隱地八術と五星の華を服する法とを傳授した。今では東華宮に名を登録され、洞天の中によつて來て、定錄府の右理中監となっている。（『後漢書』には次のようにある。^⑭劉翊は字は子翔、潁陰の人である。家は代々豊かであり、いつもよく施しをしていたが、恵みを與えているなどとは思わなかつた。かつて汝南の郡内を旅していた時のこと、陳留の張季札なる者がはるばる師匠の葬儀に駆けつけようとしていた。たまたま寒くて凍結していたため車が壊れ、路上で立ち往生していた。劉翊はそれを見て、『あ

あなたは、死者への禮節を大切にし道義のために馳せ参じようとしておられるのだから、速やかに到着されるのがよろしかろう」と言う
と、すぐさま車を降りて彼に與え、姓名も告げず、馬に鞭打って立ち去った。季札は劉子相に違いないと思った。その後、わざわざ額陰にやつて来て、借りた車を返そうとしたが、劉翊は門を閉じ外出中だと斷つて、會おうとはしなかった。劉翊は常に志を守り、病臥の身であると稱して招聘の命に屈しなかった。河南の种拂が郡の太守として赴任して来ると、彼を功曹に招いた。後に黃巾の賊が蜂起すると、劉翊は困窮者の生活を助け、その食糧を頼りとした者は數百人にのぼった。同郷や一族の者が死亡すれば埋葬をしてやり、やもめたちには再婚を助けてやった。獻帝が長安に遷都すると、上計の掾に推舉された。その時、街道は盜賊に阻まれていたので、劉翊は夜に旅し晝は隠れ、やつとのことで長安に到着した。帝は彼の忠勤ぶりをよみして議郎を拜命、陳留郡の太守に遷ったが、劉翊はまたた財寶を散施し、ただ車と馬だけを殘して、それに乘つて東に戻った。關所を出て數百里のところ、ある士大夫が路傍で病死しているのを見かけたので、さらにまた馬を買つて棺にかえ、着物を脱いで納棺してやった。また舊知の者が路上で飢えのために行きなやんでゐるのに出會うと、見捨てて去るに忍びず、そこで車を引かせていた牛を殺してその窮乏を救つてやった。多くの者が止めさせようとしたところ、劉翊は『死んでゆくのを坐視して救つてやらな

ければ、志ある人間ではない』と言い、そのまま一緒に餓死した。この説は大同小異なので、一部始終記載しておいた。翊の字が子翔であるという點を考えてみるに、字をつける通例になつてゐるが、「翊」の意味はやはりまた「相」である。「相」は息亮の切の發音である。二者のうち、いずれが正しいのか分らない。馬皇は『列仙傳』に見えており、黃帝の時の馬師である。

定錄府には典柄執法郎がいる。淳于斟^①、字は叔顯であつて、仙道を身につけた者を試すことをつかさどつてゐる。斟は會稽上虞の人である。漢の桓帝の時、徐州の縣令となり、靈帝の時、大將軍が掾に召した。若い頃から仙道を好み、術數^②に明るく、胡麻と黃精の藥餌を服用した。後に吳の烏目山中に入つて隱棲し、仙人の慧車子に出會つて『虹景丹經』^③を傳授され、修行して仙道を體得した。今では、洞天の中にいて典柄執法郎となつてゐる。『周易參同契』には次のようにある。^④「桓帝の時、上虞の淳于叔通は青州の徐從事から道術を授かり、天象を觀察して、災害異變に對處し、しばしば效驗があつた。術數のわきまえがあつたので、郡は方士として推舉し、洛陽の市場の長官に遷つた」。このようであるとすれば、(傳承は)少しく異なつてゐる。吳には烏目山はない。婁と吳興にはともに天目山^⑤があるが、あるいはその山かも知れない。慧車子については、この他にはっきりと記述したものはない。

十二月一日の夜、定録君が言われたもの。〈これは、同じく丑の年（興寧三年、三六五）に誥授されたものである〉

北河司命は、近年は缺員となつてゐること。昔は桃俊²³が兼任していた。桃俊は錢唐の人のようである。若くして郡の幹佐となり、その後、笈を背負つて太學に遊學して學業を授かり、經術と災異に明るかつた。晩年、交趾郡の太守となつた。漢の末葉、世俗を捨て、増城山²⁴中に入つて仙道を學び、東郭幼平²⁷に出會つた。幼平は秦の時代の人で、久しく増城山に隱棲して仙道を體得した者である。幼平は桃俊に「服九精鍊氣輔星在心之術²⁸」を教えた。桃俊はそれを實修して仙道が成就し、今では洞天の中にいる。北河司命を兼任し、水官の考罰をつかさどつてゐた。この位は定録君に隸屬してゐるが、實際は東華宮の指令に従つてゐる。桃俊は、字は翁仲という者である。『漢書』にはこの事はない。今、墓は錢唐の臨平にあり、墳丘や壇ははつきりと残つており、子孫は今なお生存してゐる。その村里では、最近、太鼓と角笛の響きが聞こえたので、人々は足を踏み入れて壊したりしようとはせず、誰しも桃司命の墓であると知つてそう呼びならわしている。錢塘の杜徵士京産は、以前、隱居²⁹とともに詩を歌ひ交わし、この人物の徳を讃えたことがあり、それらは別に文集の中に收められてゐる。幼平についても、やはりはつきり記述したものは存在しない。

張激子は太極仙侯となるはずである。³⁰ 激子とは河内の張奉のことである。字は公先といい、幼い時の名前が激子なのである。この人物も若い時から有名で、太傅の袁隗は彼の高尚な操に感嘆して娘をめあわせた。しかし、娘の服裝や裝飾品が贅澤で華美だったので、張奉は見向きもせず、道行く人を相手にするのと何ら變わりがなかった。妻は服裝を改め、そのうえでやつと夫婦となつた。その後、世間を捨てて剡山に入り、山圖公子³¹に出會つた。山圖公子は、周の哀王の時代の大夫で仙人となつた者である。激子に「九雲水強梁鍊桂法」を授けた。激子はそれを實修して仙道を體得した。今は東華宮にいて、やがて太極宮から職務を與えられるであらう。あるいは九宮尙書の職を兼領するであらう。（この職は）北河侯と一對の職務で、水官の考罰を執り行ふ。北河司命は禁保侯となることもある。仕事を共同するからである。北河司命も洞天の中を治所としており、張激子と部局が向かい合つてゐる。『魏書』には次のようにある。³² 「張範、字は公儀は、河内修武の人である。祖父の歆は漢の司徒、父の延は太尉であつた。袁隗は娘を範にめあわせようとしたが、範は斷つて承知しなかつた。性格は物靜かで道を樂しみ、官に召されても就任しなかつた。後に議郎となり、丞相の魏の武帝の參軍事となり、とても尊重された。好んで窮乏した人々をいたわり救済し、家には餘分な財産などなかつた。建安十七年（二二二）に亡くなつた。

た。弟の承、字は公先も、名を知られた。方正科に擧げられて議郎、諫議大夫、趙郡太守となった。後に魏の武帝の西方遠征に従い、長安に着いたところで病死した。ここで、名と字について言っているところは、がらつと大いに違い違っている。張承は張奉と(字が)似ているが、袁隗の娘婿ではない。もし張範ならば、字が同じではない。事跡を詳しく考えてみるに、たぶん兄の方なのであろう。『魏書』王修傳にまた次のようにある。「王修は南陽に行き來し、しばしば張奉の館に泊まった。奉の家族みんなが病氣にかかると、修は看病して助けた。按ずるに張範兄弟は避難して揚州に行き、袁術に身を寄せたのであって、(荊州の)劉表の所ではない。だから(荊州の)南陽にいるはずはない。あれやこれやと疑問が残る。山圖公子は『列仙傳』に見える」

中候夫人が言われたこと。(洞天中の事を(述べたお告げを)調べると、すべて(定録と保命の)二君が説かれたものである。この二條だけが中候夫人のお告げであるのは、本来東華宮中の官職であるからに違いない)

私は、易遷宮中の寶氏が次のように言われるのを聞いた。「北河司命禁保侯には任命される人が決まっているようです。そのうちにはつきりすることでしょう」。(寶氏とは寶瓊英である。①②「任命される

人が決まっているようです」とは、許長史のことに違いない。だから中君のお告げに、「北河司命について今にはつきりするでしょう」とあるのである。③恐らく、高い位業を授かったその後には、きつともはやこの職には就かなかつたのであろう。しかし、種民を統べることをつかさどるといふ點では、事柄がよく似ている)

保命府には女性の官僚が多く、三官をつかさどる。官屬に七人おり、女性四人、男性三人で七人の明晨侍郎がいる。現在の世俗の御史中丞の職のようなものである。いずれも東華方諸宮に所屬し、保命君が全體を監督している。

明晨侍郎の周爰支は、後漢の河南尹の周暢、字は伯持の娘である。周暢は汝南安成の人。好んで陰德を施し、人々に氣づかせないようにながけた。かつて河南尹であった時、大旱魃となり、洛陽城のかたわらの行き倒れた人々一萬人餘りの遺骸を收容して葬り、義家を建ててやつてお祭りした。するとただちに大雨が降り、豐作となった。彼の行いにはこのような類が多かったので、太上君は周暢を陰行がある者として處遇し、爰支を南宮で鍊化を受けさせて仙人とならせた。④今は洞天中にいる。爰支も若い時から仙道を好み、伏苓を三十年間服用していた。後に石長生に出會い、化遁の術を教えられた。化遁とは上戸解の事である。(周暢は周嘉の從弟である。性質は

慈しみ深く人情に篤かった。某帝の時、河南尹となった。永初二年（一〇八）の夏、早魃になり、長い間お祈りをしたが應驗がなかった。それで二萬人餘りを收容して葬ったところ、ただちに大雨が降った。位は光祿勳にまで上った。

明晨侍郎の張桃枝は、後漢の司隸校尉朱寓、字は季陵の母親である。沛の人である。寓はかつて陳蕃とともに誅殺された。寓の母親は陰德を施し、かねてから易遷宮にいと聞いていたが、今やつと明晨侍郎となることができた。朱寓は沛の人、桓帝、靈帝時代の八俊である。その後、黨人とひとしなみに扱われ、李膺、杜密たちとそろって下獄して死亡した。陳蕃と同時にではない。

明晨侍郎の夏馥、字は子治、陳留の人である。若い時から仙道を好み、兪餌を服用し、雲母を調劑していた。後に吳山に入り、赤須先生から鍊魂の法を授けられた。また、桐柏真人に出會い、黃水雲漿法を授けられて仙道を體得した。今は洞天中にいる。夏馥は、若い時に三公府から辟召されたが、辟召の文書を桑の木に懸けたうえで立ち去った。その高邁な心ばせはこのとおりである。『後漢書』と『高士傳』にはいずれも次のようにある。「陳留國の人で、若くして書生となった。桓帝の時に直言科に推舉されたが就任しなかった。性格は質朴正直であり、時の黨人に同調しなかったが、宦官に

憎まれ、黨錮の仲間であると陥れられた。難を避けてそこで髭と髪を切り、姿を變えて林慮山中に逃れ、他人の小作となった。後に自宅に戻り、門を閉ざして外出せず、他人と會おうとはしなかった。黨錮の禁がまだ解除されないうちに死亡した」。赤須子は『列仙傳』に見える。桐柏真人は右弼王（王子喬）である。

他の數人については一々詳しく言うことはできない。おしなべて公平貞潔で實直、身を隠して精神が清淨な者を採用し、侍郎となる才能には男女の差別はないのである。前に七人いると言いがら、今ここではただ女性二人と男性一人だけについて説明しているからである。

右は保命君が言われたこと。これは、きつと中候夫人のお告げの後に續いて言われたのであろう。

童初府の上帥には劉文饒を起用している。文饒は弘農の劉寛である。若い時から仙道を好み、かつて後漢の方正科に推舉され、次第に南陽太守に移った。民衆をあたかもわが子のようにみなし、怒りを顔に表さず、大聲でしゃべることもなく、陰德を施して困窮した人々を助けたので、萬民は悦んで父母のようになつていた。後に司徒、太尉となった。天子が酒を賜ると、地面に伏して眠ってしまった。

た。詔してわけを問うたところ、こう答えた。

「臣は責務が重大であり、いつも心配で酒に酔ったようです。明け方に下男を市場へ野菜を買いに行かせましたところ、下男は金をくすねて酒を飲み、夕暮れになってやっと戻って来ましたが、奥座敷で寝てしまい、さっぱり野菜を手にする事ができません。酔いから醒めると、『くたばり犬め!』と罵り、罵り終えてからすぐに束帶をつけて参内致しました。下男が後になって自殺するのではないかと心配になり、それでその事が氣にかかって、ついうとうと眠ってしまったのです。願わくば哀れみをおかけ下さいように」。劉寛が仁愛に心を配ること、いつの場合にもこのとおりであった。

七十三歳のある朝のこと、青谷先生が寢室中に降臨されるのに出會い、杖解法^⑤を授けられ、連れられて太華山^⑥に入って九息服氣法^⑦を行った。また、鑪火丹方^⑧を授けられ、それを實修して仙道が成就した。今は洞天中^⑨にあり、童初府の帥上侯となり、初めて仙道を學者たちがつかさどっている。『後漢書』には次のようにある。^⑩「劉寛、字は文饒、弘農華陰の人である。父の名は崎、順帝の時に司徒となった。寛の人柄は謹嚴そのものであった。ある時外出すると、牛をなくした一人の男が、寛の牛車の牛がそれだと認めた。寛は黙って車を引かせている牛をはずして與えたうえ、徒歩で戻った。しばらくして自分の牛だと認めた男が、自分の牛を見つけて送り返し恥じ入ったが、寛は斷つて引きとらせた。桓帝の延熹八年(一六五)

に南陽の太守となると、いつも蒲の鞭を使うだけであった。靈帝の嘉平五年(一七六)に太尉となった。ある時、天子の御座で酒を飲んで横になって寝てしまった。帝が『太尉は酔ったのか』と問うと、寛はふり仰いで答えた。『私は酔ったりは致しません。ただ責務が重大なため、心配で酒に酔ったようなのです』。ある時、客人が寛の所にやって来た。寛は下男に酒を買いに行かせたところ、随分たつてからぐでんぐでんに酔つ拂つて歸つて来た。客人は『畜生め!』と罵った。寛はしばらくしてから人をやって下男の様子を見させた。自殺するのではないかと心配したからである。そして左右の者に言った。『こいつは、人間であるのに畜生と罵られた。これ以上の恥辱があるか。だからわしは死ぬのではないかと心配したのだ』。後に遼郷侯六百戸に封ぜられ、中平二年(一八五)に死んだ。六十六歳であった。車騎將軍特進を贈られ、昭討侯と諡された。息子の劉松が跡を繼いだ。按ずるに、この話はやはりまた違った點がある。だから詳しく載せたのである。青谷先生は、他の所には見えない。およそこれらの導き教えてくれた仙人たちは、恐らくすべてこの世に下つて来て教えを垂れる者たちなのであつて、もしそうでなかったならば、このようにうまくゆくはずはない」

華陽洞天内の事については、あらためて示すであらう。

正月の二十三日に東宮の上人がやって來られて洞天の中を見てまわられる。その時、事によつては龜山の賓客もともに集まれるかも知れない。眞仙たちが盛大に會合されるその日には、しばし伏龍の郷に登つて神靈の嶺を禮拜してどうか。この事を許侯に示し、知らせてやるがよろう。〈これもまたきつと茅中君が以前と同様の十二月一日に語つた言葉なのであらう。「東宮の上人」とは（方諸）青童君のこと。「龜山の賓客」とは西王母のこと。上巻にもやはりこのお告げがある。伏龍の郷に登つて、山を望んで禮拜させるといふのは、山嶺に登ることとは別だ。必ずしも手近で容易なためにこのように言つたのではない。恐らくそのようにすべきなのであらう〉

昔、一人の男がおり、仙道を好んではいたが仙道を求める方法が分からなかつた。ただ朝な夕なに跪拜し、一本の枯れ木に向かつて、いつも「長生を願ひ申し上げます」と言い、このようにすること十八年、あくことがなかつた。すると枯れ木にある朝突然花が咲き、その花には花汁もあり、蜜のように甘かつた。それを食べるようにと教える者があつたので、花と花汁を取つて、どちらも食べたところ、食へ終わるとたちまち仙人になつた。このように心を込め、ひたむきな眞心を盡くすならば、枯れ木でさえも紫の花を咲かせ、甘い汁をしたたらせるのだ。ましてや三つの秀でた嶺の神靈の丘、五芝が植えつけられた山ならば、なおさらのことだ。それなのに何度

も何度も山嶺をかしこみ、汚れや穢れを洗いそぐことができないでいるとは、まことに悲しむべきである。世人がいつも思いのままにならぬ所以（この一字は塗りつぶされていて、眞迹ではない）は、そのままそなたが思いのままにならぬところでもあるのだ。どうして異なつた點があるうか。

昔、劉少翁⁶⁶なる者、しばしば太華山に入り、山に向かつて禮拜した。かくのごとくすること二十年、ある朝突然、西嶽丈人⁶⁷にお目にかかることができ、仙道を授けられた。〈禁山符〉に、西嶽君や西嶽公が現れるが、この（西嶽）丈人なのかどうかは分からない〉

昔、ある一人の男が來る日も來る日も黃河の岸に出かけて、黃河を拜していた。かくのごとくすること十年、かくて河侯と河伯⁶⁸が彼の前に現れ、白璧十雙を與えて水行不溺の法を教へ授けた。この男は今、中嶽にいて仙道を體得している。〈河侯と河伯はやはり二人の神なのであらうか〉

左慈もやつて來た當初、しきりに心を込めて何度も神靈の山を禮拜し、五年ほどたつて、ようやく内外、東西の洞宮に深く進み入ることができるようになつたのだ。〈前には（清齋すること）三箇月で進み入ることができた⁶⁹とあり、ここは大いに異なっている。恐ら

く(洞宮に)深く進み入ることができたという點が異なるのである

仙道を學んでは山世遠のごとくにし、俗事を避けては清虛眞人のごとくにし、深山幽谷を歩いては周紫陽のごとくにしなければならぬ。(そのようにすれば)どうして仙道を體得できないことがあろうか。(山世遠の傳記はまだ世に出ていない。彼が家を捨て仙道をたずね學んだ事跡は識書に見える。尹公度の弟子であり、すでに太和山の眞人となっている。清虛王君と紫陽周君はそれぞれ傳記がある)

志を建てたならば勵むように、精神を研くには心をからつとさせるように、爲すことやることすべて祕密にするべきだ。(青童君も南眞を戒めて、「仙道を學ぶにはただひたすら勵んで祕密にするようにしなければならぬ」と言っている。勵めとは、晝も夜も怠ることなかれということであり、祕密にするようにとは、自分以外には知る者がないようにすることである。今、茅中君が重ねてこのように言っているのは、まことにこの上ないお諭しであり、「一言にして之を蔽う」といふべきものである)

右は定錄君が言われて書きとらせたもの。(この一條にはまた楊羲の書がある)

そもそも、山林を眺望すれば、易遷宮の彼の人が慕わしく思われ、彼の人(景)に洗われているのを羨ましく思われようか。「前にいるかと思つていたのに、たちまち後ろになつてしまつた」といふべきだ。(許長史の妻はすでに易遷宮にいるのだから、許長史が今、山林山嶺を眺望すれば、羨み慕わしく思う氣持を抱かないことがあろうか。「昔は自分の方が勝つてゐると思つていたのに、今では反對に後ろになつてしまつた」といふのは、許長史を激勵する言葉なのであろう)

右は南嶽夫人のお言葉。

張姜子^⑦は西州の人、張濟^⑦の妹である。(濟は後漢末の西涼州の人。董卓の將軍となり、後に穰城を攻めた時、矢にあたつて死んだ。すなわち張繡^⑧の從叔である。その妹(張姜子)のことは世俗の書には見えず、嫁いだのかどうか分らない)

李惠姑^⑨は齊の人、夏侯玄^⑩の妻である。(玄は魏の末の人。李豐とともに晉の文王に誅された。その妻が死んだのが玄よりも先だったのか後だったのかについては分らない。李豐は馮翊の人であり、齊の人ではない。(李惠姑)李姓の誰の娘なのかは分らない)

施淑女^⑪は山陽の人。施績^⑫の娘である。(施績は吳興の人。孫皓の時

に驃騎將軍となり、西陵を守った。今、ここで山陽の人と言っているのは、ひよっとすると娘は嫁に行つて、夫の家の郡の名を名乗ったのかも知れない。そうでないとしたら矛盾する」

鄭天生は鄧芝の母である。〈鄧芝、字は伯苗、南陽新野の人である。蜀において劉禪の車騎將軍となつた。後に行軍している時、手長猿が子供を抱いて歩いて見かけ、弓を引いて射殺したが、心の痛みを感じて死んだ。〉(鄧芝の)母は鄭姓の誰の娘なのかは分からない

この數人の女性たちは、そのかみ仁慈の行いや令名のあつた者たちだから、そろつて洞天の中に入ることができたのである。洞天の中には易遷館と含眞臺があり、ともに宮殿の名である。(この女性たちは)今、易遷館の東の棟に在るものと思われ。この易遷館にはあわせて八十三人がいる。また協辰夫人という者がおり、九宮の女眞である。太上からかつて遣わされてこれらの女性たちに仙法を教えている。それぞれみな保命府から辭令を授かり、協辰夫人がもつぱら女性たちを教導しているのである。(協辰)夫人は漢の司空黃瓊の娘の黃景華である。韓終が岷山丹を授け、それを服用して仙人となれたのである。〈黃瓊は江夏の人、字は世英。漢の順帝の時の司空、司徒、太尉であり、七十九歳で死んだ。父の名は香。章帝、和帝の

時に尙書令となり、千餘人の命を救った。瓊の子の琬は司徒、太尉であつたが、李權(催)に殺された。協辰夫人も結婚したのかどうかは分らない。今、これらの諸人は、ある娘と稱し、あるいは妻と稱し、あるいは母と稱しているけれども、思うにそれぞれ世間によく知られた名を取つてそう言っているものであつて、必ずしもその人の功業福德が及んだ相手にちなんだものではないのであろう

含眞臺に在るのは、女性ですでに仙道を體得した者たちであつて、太元(真人)の東宮に隸屬し、二百人近くがいる。〈前に「八十三人」とあるのは、易遷宮だけの人數である。含眞臺は貴くすぐれたところであるので、昇進してはじめて進み入ることができるのである

この二つの宮殿はいずれも女性の宮殿である。また董初と蕭閑堂の二つの宮殿があり、そこに男性の修行者を置いている。〈それらの男女の姓名はあらためて後に出てくるが、いずれも高くすぐれた者たちをざつと擧げているのである

思うに、(陶科斗は)數人の者とともに暮らし、とりわけ鄧伯苗の母と仲がよいが、その他の者たちともねんごろだ。〈鄧伯苗の母とは鄭夫人である

靈牀を設けて神靈を待ち受けるのは、まことに孝子が思いを募らせてのことなのだ。思うに(陶科斗も)やはりすでにわが子のために恵みと利益を與えてやろうとしているのであろう。思うに以前そなたに杯や布を與えたが、それはどうやら贈り物としたのであり、洞室のあたりまで出かけてみるがよい。仙官には禁令があつて、本當のことを言うことができない。それで別の恵みにこと寄せたのである。これもまたこのうえない心配りなのだ。靈牀を設けさせようとしているのも、精氣がやつて來るときに止まる所があるようにしようとしてのことなのである。こつそりその子のところに出かけてこのように話すがよい。〈これは許掾に告げさせたものである。それらの事にはみなども意味するところがあるけれども、はつきりと注記するわけにはゆかない。『定錄府の官僚』からのすべて三十一條は、いずれも許掾の寫しがある。注の一卷がその後についていた

- (1) 北河司命、禁保侯 『眞誥』卷一五葉一二裏「玄德今爲北河侯、與韓遂對統、今屬仙官」、注「仙官又有北河司命禁保侯、亦司三官中事、乃隸東華宮、保命君領之、此則是北河侯必是相統屬矣」。
- (2) 韓崇 『眞靈位業圖』第六左位「左理中監韓崇」、注「如大府長史左如司馬」。

- (3) 林屋仙人王瑋玄 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「林屋仙人王瑋玄」。

- (4) 流珠丹 『三洞珠囊』卷三服食品「(登眞隱訣卷七)」又云、：「流珠丹」、『太清石壁記』卷中「流珠丹、雄黃一斤、右搗篩細研、酢拌浥浥、一依四神、唯以鹽末拌和布置、更以鹽蓋上固濟一日夜、文火以漸加武火、使猛火三日夜、寒之、取飛三轉也」。
- (5) 視民如傷 『左傳』哀公元年「臣聞、國之興也、視民如傷、是其福也、其亡也、以民爲土芥、是其禍也」。

- (6) 百鍊不銷 『三國志』卷一二崔琰傳「涿郡孫禮盧毓始入軍府、琰又名之曰、孫疏亮亢烈、剛簡能斷、盧清警明理、百鍊不消、皆公才也」。

- (7) 隱解法 『三洞珠囊』卷三服食品「(登眞隱訣卷七)」又云、：「隱解法」。

- (8) 遁化泥丸紫戶術 『眞誥』卷一八葉二裏注「明年掾便遁化也」。
- 『雲笈七籤』卷八五女眞趙素臺「趙素臺者、漢幽州刺史趙熙之女也、熙少有善行、：熙得未詣朱陵、兒子得遁化、遊洞天」。同卷四二存大洞眞經三十九眞法「帝君、讀皇上玉帝君道經、當思帝君延陵梵眞氣、紫光鬱鬱、從兆泥丸中入、下布兩眉中間紫戶之外宮」。

- (9) 漢書所載事迹亦略同、而置辭小異耳 『漢書』は『後漢書』か。ただし、范曄『後漢書』には韓崇の傳はなく、周磐傳附蔡順

傳にその名が見える。また謝承『後漢書』に斷片的に記事が残る。

(10) 袁安 『後漢書』列傳三五袁安傳を参照。

(11) 袁紹 『三國志』卷六袁紹傳を参照。

(12) 託尸 『雲笈七籤』卷三靈寶略記「至夏禹登位、…遂得帝學所封靈寶真文、於是奉持出世、依法修行、禹唯自修而已、不傳於世、故禹得大神仙力、能鑿龍門、通四瀆、功畢、川途治導、天下乂安、乃託尸見死、其實非死也」。

(13) 疑如桃君、或即是此虛曠 『真誥』卷一二葉八裏、葉九表を参照。

(14) 韓當 『三國志』卷五五韓當傳を参照。

(15) 劉翊 『真靈位業圖』第六右位「右理中監劉翊」。

(16) 漢書云：『後漢書』列傳七一劉翊傳を参照。

(17) 馬皇出列仙傳 『列仙傳』卷上馬師皇を参照。

(18) 淳于斟 『真靈位業圖』第六右位「典柄執法郎淳于斟」。

(19) 術數 『漢書』藝文志「歆於是總羣書而奏其七略、故有輯略、有六藝略、有諸子略、有詩賦略、有兵書略、有術數略、有方技略、…數術者、皆明堂羲和史卜之職也」。

(20) 胡麻 『抱朴子』仙藥「巨勝、一名胡麻、餌服之不老、耐風濕、補衰老也」。

(21) 慧車子 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「惠車子」、注「淳

于典柄之師」。

(22) 虹景丹經 『真誥』卷一四葉八裏「衡山中有學道者張禮正治明期二人、…後俱授西城王君虹景丹方、從來服此丹、已四十年」。

(23) 易參同契云：『周易參同契』序「蓋聞參同契者、昔是古龍虎上經、本出徐真人、徐真人、青州從事、北海人也、後因越上虞人魏伯陽造五相類、以解前篇、遂改爲參同契、更有淳于叔通補續其類、取象三才、乃爲三卷、叔通親事徐君、習此經、夜寢不寐、仰觀乾象、而定陰陽」。

(24) 天目山 『天地宮府圖』（『雲笈七籤』卷二七）三十六小洞天「第三十四天目山洞、周迴一百里、名曰天蓋滌玄天、在杭州餘杭縣、屬姜真人治之」。

(25) 桃俊 『真靈位業圖』第六左位「北河司命保禁侯桃俊」。

(26) 增城山 『隋書』地理志下「南海郡、…增城、舊置東官郡、平陳廢、有羅浮山」。

(27) 東郭幼平 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「東郭幼平」、注「桃北河之師」。

(28) 服九精鍊氣輔星在心之術 『太上九丹上化胎精中記』（『雲笈七籤』卷二九）「天地交運、二象含眞、陰陽降炁、上應九玄、流丹九轉、結炁爲精、精化成神、神變成人、故人象天地、氣法自然、自然之氣、皆九天之精」。同卷五三太上隱書八景飛經八法

- 〔微祝曰、…上宴玉晨、迴靈下降、鎮固我身、保精鍊氣、五華結鮮、紫氣流映、洞得御神、驂乘飛景。』太上飛行九神玉經」
- 〔雲笈七籤』卷二〇〕「丹元星在右脛上、北極星在右膝頭上、天關星在右足胚上、輔星在臍上、弼星在頭上」。
- (29) 錢唐杜徵士京產 『真誥』卷二〇葉一表「孔瑛賤時、杜居士京產將諸經書往剡南墅大墟住、始與顧歡戚景玄朱僧標等數人共相料視」。また、『南齊書』卷五四高逸杜京產傳を参照。
- (30) 張激子：『真靈位業圖』第五中位「九宮尚書」、注「姓張、名奉、字公先、河內人、先爲河北司命禁保侯、今爲太極仙侯、公領北職、位在太極矣」。
- (31) 袁隗 『後漢書』列傳三五袁隗傳を参照。
- (32) 山圖公子 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「山圖公子」、注「周哀主時大夫、張禁保之師」。『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)三十六小洞天「第二東嶽太山洞、…屬山圖公子治之」。
- (33) 魏書云：『三國志』卷一一張範傳を参照。
- (34) 魏書王修傳又云：『三國志』卷一一王修傳を参照。
- (35) 寶氏即瓊英也 『真誥』卷一二葉三表「易遷中有高業而蕭條者、有寶瓊英…」。
- (36) 故中君受云：『真誥』卷七葉一六表「北河之命方旌、遷擢之華亦顯、豈不快哉、…右夜荀中候言此、故書以示」、注「北河之命、即易遷所聞寶氏之言、似有所擬者也」。
- (37) 保命府 『無上祕要』卷二・三界宮府品「太元府、定錄府、保命府、右在句曲山、三茅君所居、…右出洞真經及道迹眞迹經」。
- (38) 周爰支 『真靈位業圖』第六右位「明晨侍郎七人、比御史中丞、三男眞、夏馥字子恬、陳留人、桐柏眞人弟子、二人不顯、四女眞、周夏友、汝南安城人、河南尹周暢之女、張桃枝、沛人、司隸朱寓之母、二人不顯」。
- (39) 周暢 『後漢書』列傳七一獨行周嘉傳を参照。
- (40) 從南宮受化得仙 『真誥』卷一二葉一表注「洞玄即大洞玄經、讀之萬遍、七祖已下竝得鍊質南宮、受化胎仙」。同卷一六葉一裏「其中宿運先世有陰德惠救者、乃時有徑補仙官、或入南宮受化、不拘職位也、在世之罪福多少、乃爲稱量處分耳、大都行陰德、多恤窮厄、例皆速詣南宮爲仙」、注「在世行陰功密德、好道信仙者、既有淺深輕重、故其受報亦不得皆同、有即身地仙不死者、有託形尸解去者、有既終得入洞宮受學者、有先詣朱火宮煉形者、有先爲地下主者乃進品者、有先經鬼官乃遷化者、有身不得去、功及子孫、令學道乃拔度者、諸如此例、高下數十品、不可以一概求之」。
- (41) 石長生 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「石長生」、注「周明晨之師」。『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)三十六小洞天「第三南嶽衡山洞、…仙人石長生治之」。
- (42) 張桃枝 注(38) 参照。

- (43) 朱寓 『後漢書』列傳五七黨錮朱寓傳を参照。
- (44) 陳蕃 『後漢書』列傳五六陳蕃傳を参照。
- (45) 桓靈時八俊 『後漢書』列傳五七黨錮傳「李膺荀翌杜密王暢劉祐魏朗趙典朱寓爲八俊、俊者、言人之英也」。
- (46) 李膺、杜密 『後漢書』列傳五七黨錮李膺傳および同杜密傳を参照。
- (47) 夏馥 注(38) 参照。
- (48) 尤餌 『抱朴子』仙藥「尤餌令人肥健、可以負重涉險、但不及黃精甘美易食、凶年可以與老小休糧」。
- (49) 雲母 『重修政和證類本草』卷三玉石部上品「雲母、味甘、平、無毒、主身皮死肌中風寒熱如在車船上、除邪氣、安五藏、益子精明目、…久服、輕身延年」。
- (50) 赤須先生 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「赤須子」、注「夏明晨之師」、『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)七十二福地「第六十七現山、在漢州、是赤須先生治之」。
- (51) 黃水雲漿法 『雲笈七籤』卷七五方藥「雲漿法、雲母粉一斤、硝石四兩、朴硝三兩、白蜜五升、右蜜煎令相得、和雲母粉、如煎餅麪、以竹筒盛之用蓋、蓋之以泥四邊、勿令洩洩、埋地中一二尺許、一百五十日、熟服之、光澤肌膚、顏如童子、又方…」。
- (52) 後漢及高士傳並云… 『後漢書』列傳五七黨錮夏馥傳を参照。
- (53) 劉文饒 『眞靈位業圖』第六右位「童初府師上侯劉寬」、注「即保命府」、『無上祕要』卷八三得地仙道人名品「劉寬、字文饒、弘農人、後漢南陽太守司徒太尉、仁和善政、年七十三、入太華山服丹、來爲童初府師正侯」。
- (54) 視民如子 『左傳』襄公二十五年「晉程鄭卒、子產始知然明、問爲政焉、對曰、視民如子、見不仁者誅之、如鷹鷂之逐鳥雀也」。
- (55) 口無疾言 『論語』鄉黨「升車、必正立、執綏、車中不內顧、不疾言、不親指」。
- (56) 憂心如醉 『毛詩』秦風晨風「未見君子、憂心如醉、如何如何、忘我實多」。
- (57) 死狗 『三國志』少帝紀「昔諸葛恪圍合肥新城、城中遣士劉整出圍傳消息、爲賊所得、考問所傳、語整曰、諸葛公欲活汝、汝可具服、整罵曰、死狗、此何言也」。
- (58) 青谷先生 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「青谷先生」、注「劉上縕之師」。
- (59) 杖解法 『三洞珠囊』卷三服食品「(登眞隱訣)又云、…杖解法…行九息服氣服三氣玄眞法…鑪火丹」、『雲笈七籤』卷八五太極真人遺帶散「真人曰、凡尸解者、皆寄一物而後去、或刀或劍或竹或杖、及水火兵刃之解」。
- (60) 九息服氣 注(59) 参照。
- (61) 鑪火丹 注(59) 参照。
- (62) 後漢書云… 『後漢書』列傳一五劉寬傳を参照。

- (63) 高會眞仙 『真誥』卷一三葉一九表「降轡龜山客、解駕青華童、寢宴含眞館、高會蕭閑宮」。
- (64) 靈岫 『真誥』卷一三葉一〇表「清池帶靈岫、長林鬱青葱」。
- (65) 上卷亦有此告 『真誥』卷四葉三裏を参照。
- (66) 劉少翁 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「劉少翁」、注「華山」。
- (67) 禁山符有西嶽君西嶽公 『抱朴子』登涉「以此法入山、亦不畏虎、或用七星虎步、…或立西嶽公禁山符、皆有驗也」。
- (68) 河侯河伯 『無上祕要』卷八四得太清道人名品「河侯河伯、又有河伯少女者、非必胎生、皆化附而已、此三條是得道人所補」。
- (69) 水行不溺法 『三洞珠囊』卷三服食品「登眞隱訣」又云、…水行不溺法」。
- (70) 前云三月使得進 『真誥』卷一一葉七表を参照。
- (71) 清虛王君紫陽周君各自有傳 『清虛眞人王君內傳』(『雲笈七籤』卷一〇六)、紫陽眞人內傳(『道藏』洞眞部)、紫陽眞人周君內傳(『雲笈七籤』卷一〇六)がある。
- (72) 研神 『真誥』卷一七葉一表「蕭寂羣門、研神保形」。
- (73) 一言以蔽之 『論語』爲政「詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」。
- (74) 濯景 『真誥』卷一三葉二表「其第三等、地下主者之高者、便得出入仙人之堂寢、遊行神州之鄉、出館易遷童初二府、入晏東華上臺、受學化形、濯景易氣」。
- (75) 瞻之在前、忽焉在後 『論語』子罕「仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後」。
- (76) 張姜子 『無上祕要』卷八三得地仙道人品に見える。『真誥』卷一三葉二裏「張姜子等先在第二等中、亦始得入易遷耳」。
- (77) 張濟 『後漢書』孝獻帝紀および同列傳六二董卓傳に見える。
- (78) 張繡 『後漢書』列傳六〇荀彧傳に見える。
- (79) 李惠姑 『眞靈位業圖』第六女眞「李惠姑」、注「夏侯玄婦」。
- (80) 夏侯玄 『三國志』卷九夏侯玄傳を参照。
- (81) 與李豐俱爲晉文王所誅 『三國志』少帝紀「嘉平六年、…庚戌、中書令李豐與皇后父光祿大夫張緝等謀廢易大臣、以太常夏侯玄爲大將軍、事覺、諸所連及者皆伏誅」。
- (82) 施淑女 『眞靈位業圖』第六女眞「施淑女」、注「施績女」。
- (83) 施績 『三國志』卷五六朱然傳附朱績傳を参照。
- (84) 鄭天生 『眞靈位業圖』第六女眞「鄭天生」、注「鄧芝母」。
- (85) 鄧芝 『三國志』卷四五鄧芝傳を参照。
- (86) 協晨夫人 『眞靈位業圖』第五右位「協晨夫人黃景華」、注「黃瓊之女」。
- (87) 九宮 『真誥』卷五葉一五裏「崑崙上有九府、是爲九宮、太極爲太宮也、諸仙人俱是九宮之官僚耳」。
- (88) 韓終 『真誥』卷九葉二二表注「韓衆在南方」。「抱朴子」金丹「又韓終丹法、漆蜜和丹煎之、服可延年久視、立日中無影」。
- (89) 黃瓊 『後漢書』列傳五一黃瓊傳を参照。

(90) 父名香 『後漢書』列傳七〇上黃香傳を参照。

(91) 瓊子琬、司徒太尉、爲李權所殺 『後漢書』列傳五一黃琬傳を参照。同傳によれば李權は李催の誤りである。

(92) 含眞臺是女人已得道者、隸太元東宮中 『眞誥』卷一三葉四裏「含眞臺、洞天中皆有、非獨此也、此一臺偏屬太元府隸司命耳、其中有女眞二人總之、其一女眞是張微子、…其一女眞是傅禮和…」。

(93) 童初蕭閑堂二宮 『無上祕要』卷八三得地仙道人名品「王少道…、范叔勝…、李伯山…、此三人童初府蕭閑堂中學」。

眞誥卷之十三

稽神樞第三

地下主者、復有三等、鬼帥之號、復有三等、竝是世有功德、積行所鍾、或身求長生、步道所及、或子弟善行、庸播祖稱、或諷明洞玄、化流昆祖。《洞玄即大洞玄經、讀之萬遍、七祖已下竝得鍊質南宮、受化胎仙、非今世所稱洞玄靈寶經也》

夫求之者非一、而獲之者多途矣、要由世積陰行、然後皆此廣生矣、

鬼帥武解、主者文解、俱仙之始也、度名東華、簡刊上帝、不隸鄴宮、不受制三官之府也。《又別云、「心勤於事欲、兼味於清正、華目以隨世、畏死而希仙者、亦多作文武解主者」》

其一等地下主者、散在外舍、閑停無業、不受九宮教制、不聞練化之業、雖俱在洞天、而是主者之下者、此自按四明法、一百四十年依格得一進耳、一進始得步仙階、給仙人之使令也《依劔經、主者大有品秩、遷轉年限、除促懸殊、此等數之目、異於品名、反以多爲貴、如此階秩矣、

其二等地下主者、便徑得行仙階、級仙人、百四十年進補管禁位、管禁之位、如世間散吏者也、此格即地下主者之中條也、

李東等今在第一等中《李東、曲阿人、乃領戶爲祭酒、今猶有其章本、亦承用鮑南海法、東才乃凡劣、而心行清直、故得爲最下主者使、是許家常所使、永昌元年、先生年二十三、就其受六甲陰陽行廚符、既相關悉、聊復及之耳、

其第三等、地下主者之高者、便得出入仙人之堂寢、遊行神州之鄉、出館易遷童初二府、入晏東華上臺、受學化形、濯景易氣、十二年氣攝神魂、十五年神束藏魄、三十年棺中骨還附神氣、四十年平復如生人、還遊人間、五十年位補仙官、六十年得遊廣寒、百年得入昆盈之宮、此即主者之上者、仙人之從容矣。

張姜子等先在第二等中、亦始得入易遷耳、鬼帥之位次亦如此矣。
〈主者之位亦不限男女、按此年限、得棺中之骨、便得出生世中、亦往往有此改變隱適、難已意量、殆人不可思議之境耳〉

易遷童初二宮是男女之堂館也、其中閒靜、東海青童君一年再遊、校此諸宮、觀見羣輩也。〈二年再遊、似依傳中曰、而前書云、「正月二十三日、東宮上人來」、便是不必復有定期也〉

趙素臺在易遷宮中已四百年、不肯徙、自謂天下無復樂於此處也、趙素臺是趙熙女、漢時爲幽州刺史、有濟窮人於河中、救王惠等於族誅、行陰德數十事、故其身得詣朱陵、兒子今竝得在洞天中也、熙恆出入在定錄府、素臺數微服遊行道巷、盼山澤以自足矣。〈趙熙、漢書不顯、微服遊行、蓋謂在洞天中耳、不應乃出世中也〉

易遷中有高業而蕭條者、有寶瓊英韓太華劉春龍王進賢李奚子郭叔香、此數人竝天姿鬱秀、澄上眇邈、才及擬勝、儀觀駭衆、此則主者之高者、仙官之可才、其次及得張善子輩、鄧伯苗母有善行、故後來人多宗比之。

寶瓊英者、寶武妹也、其七世祖有名峙者、以藏枯骨爲業、以活死爲事、故祚及於英身矣。〈寶武字游平、寶融玄孫、峙則應是融祖也、

武亦恆以財物散施天下貧乏、靈帝時爲大將軍、與陳蕃俱被誅、其母產武時、并產一蛇、蛇出即走上南山、至母死、無何而來、哀泣良久又去、亦所以爲異、但未解俱承七世之慶、兄戮而妹仙、當【是復籍先身之功罪乎、然武以至忠而亡、必復入仙品矣】

韓太華者、韓安國之妹也、漢二〔帥〕〔帥〕將軍李廣利之婦也、利宿世有功德、利今亦在南宮受化。〈廣利爲漢武名將、伐大宛時、所殺戮殊不少、以先世功德、遂能消之、韓氏字安國、家福遠、不應關李相扶、夫妻既同條、恐人脫致疑、是以復標別言之、亦或由因結致此也〉

劉春龍者、漢宗正劉奉先之女。〈奉先、漢某帝時爲宗正〉

李奚子者、李忠之祖母也、忠、晉初東平太守、忠祖父、田舍人耳、而多行陰德、常大雪寒凍、而不覆積稻、常露穀於園庭、恆恐鳥雀饑死、其用心如此。〈李忠不顯晉書、如此說、則妻復似是緣夫之功、而夫身反不見有所果、亦難可詳言〉

王進賢、王衍女也。〈事詳在後〉

郭叔香者、王脩母。〈王脩字叔治、北海人、爲魏武郎中令、年七歲喪母、母以〔杜〕〔社〕日亡、不知是郭誰女也〉

其童初府有王少道范叔勝李伯山、皆童初府之標者、少^③好^④道、漢時人、王遯兒也、漢時山陽太守、范叔勝、北地人也、魏文帝黃門郎、李伯山、李冲父也、冲、漢時爲白馬令、行陰德、或積世有道、中行所鍾、

此二府仙人、皆一進再進得入此^⑤府耳、未必盡徑來也、別更一二、密可示爾同氣、令知斗處幽閒之泰也、道業可不勗哉。〈此三人外晝竝不顯、後漢有李雲、亦爲白馬令、以直言忤旨死、令示同氣者、謂以告長史掾也〉

七月二十四日夜、保命君告。〈按前受長史司馬諸人、雖定錄所告、而應是初說洞中事、是丑年十一月、今此說雜人、乃宜繼後、反爲七月、復不應是寅年、進退^⑤〔極〕難詳、從地下主者來凡十四條、竝有掾寫、共一卷也

- (1) 以下原テキストに錯簡あり。原テキスト卷一五葉三裏一行注「是復籍先身之功罪乎」から同葉四表八行「皆一進再進得入此」までと、卷一三葉三裏三行「非道家之北斗也」から同葉四表一行末尾までを入れ換える。
- (2) 意をもって「帥」の字を「師」の字に改める。

- (3) 意をもって「杜」の字を「社」の字に改める。
- (4) 俞本に従って「好」は衍字とみなす。
- (5) 意をもって「拯」の字を「極」の字に改める。

眞誥卷十三

稽神樞第三

地下主者にも三ランクがあり、鬼帥の稱號にも三ランクがある。いずれも、代々功德があつて、善行の積み重ねが一身に集まつた結果であつたり、あるいは本人自身が長生を求めて仙道を歩んで行き着いた結果であつたり、あるいは子弟の善行が父祖にひろがり及んだり、あるいは『洞玄』を諷詠し理解してその徳化が遠い祖先に流れたりするのである。『洞玄』とはすなわち『大洞玄經』^①である。これを一萬遍讀むと、七祖以下の祖先がいずれも形質を南宮で鍊成し、仙胎を宿すことができる。今世間で『洞玄靈寶經』と呼んでいるものではない^④。

そもそもこれらを求める手段は一つではなく、獲得されるものはさまざまである。要するに代々陰德善行を積むことによつて、そのうえですべて生命を擴充するのである。鬼帥は武解であり、(地下)

主者は文解であり、ともに仙人としての出發點である。^⑥東華宮に名前を登録され、上帝の書類に記入され、羅酆宮に隸屬せず、三官の役所^⑦から指圖を受けない。(また別に、「心は世俗の欲に務めながらも、清らかな正しさを玩味し、華美を求めて世俗に身をまかせながらも、死を怖れて登仙を願う者は、やはりしばしば文解の地下主者や武解(の鬼帥)となる」とある)^⑧

その一等地下主者は、外の建物に散らばり住み、ぶらぶらして仕事もなく、九宮の教育と指圖を受けないし、鍊成變化の業^⑨を耳にすることもない。同じように洞天にいるけれども、地下主者の中の下位の存在であり、これらは「四明法」^⑩に準じて、百四十年ごとに規定によって一ランク昇進できるに過ぎない。一ランク昇進して始めて仙人の階梯^⑪を歩むことができ、仙人の召し使いに當てられる^⑫『劒經』によれば、地下主者には澤山品秩があり、昇進の年限は遅速の差がとてかけ離れている。この(地下主者の上に冠する)等數の表示は、官位の品名と異なり、逆に數の多いほど身分が高く、このようにランクづけされているのである^⑬。

その二等地下主者は、ただちに仙人の階位に進み、仙人の仲間入りができ、百四十年で昇進して管禁の位に補任される。管禁の位は、世俗の散吏^⑭のようなものである。この身分はつまり地下主者の中級である。

李東^⑮たちは今第一等(地下主者)の中にいる(李東は曲阿の人、信者の家を統領して祭酒となった。今もなお彼の上章のテキストが残っている。やはり鮑南海の法を受け繼いで用いた。李東は才凡庸で劣っていたが、心ばせは清廉で正直であつたから、それで最下の地下主者という仙人の召し使いとなることのできた。彼はかつて許家に使われていた人物である。永昌元年(三三二)、先生(許邁)が二十三歳の時、彼からじきじきに「六甲陰陽行廚符」を授かつた。關係があるので、ちよつとまた言及したまでである^⑯。

その第三等地下主者は、地下主者の高位のもので、仙人の奥座敷に出入りし、神州の村里に遊行することができる。外では易遷と童初の二府を館とし、内では東華宮の上臺に憩う。仙學を授かつて肉體を變化させ、景^⑰の中で洗い清めて氣を取り替え、十二年で氣が神魂を養い、十五年で神魂が五臓の魄を繋ぎ留め、三十年で棺の中の骨に再び神氣が付着し、四十年でまるで生きている人間のような姿に戻つて再び世の中に遊び、五十年で仙官の位に補任され、六十年で廣寒宮に遊行でき、百年で崑崙や瀛州の宮殿に入ることができる^⑱。これはつまり地下主者の上位の者であり、仙人さながらの存在である。

張姜子たちはまず第二等(地下主者)の中にいて、それから始めて易遷宮に入ることができたのである。鬼帥の序列もまた同様であ

る。(地下主者の位には、男女の區別はない。この年限に準じて、棺の中の骨を得ると、世の中に生まれて來ることができるのであるが、やはり往々にしてこのように姿を變えてこつそりどこかへ行つてしまふ。頭で推し量ることは難しく、まったく不可思議の境に踏みこんでしまふ)

易遷宮と童初宮の二つの宮殿は男女の仙人の堂館である。その内
部は閑靜である。東海青童君は、一年に二回やつて來て、これらの諸宮を檢べて、連中を觀察するのである。(一年に二回やつて來るとは、『傳』の中の言葉に基づくようだが、前の書簡に「正月の二十三日に東宮の上人がやつて來られる」と言っているので、必ずしも決まった時期があるわけではない)

趙素臺²³は、易遷宮の中にもう四百年もいる。他に移ろうとはせず、「天下にここ以上に楽しいところはない」と自ら言っている。趙素臺は趙熙の娘である。(趙熙は)漢の時代に幽州刺史となり、困窮している人を河中で救ったり、王惠たちを族誅から救ったり、數十事の陰徳を行つたので、本人自身は朱陵宮に至ることができ、子供たちも今そつて洞天の中にいることができるのである。趙熙はいつも定録府に出入りし、趙素臺はしばしばおしのびで街頭を遊行し、山澤を眺めては自足している。(趙熙は『漢書』には見えない。「おし

のびで遊行する」とは、恐らく洞天の中でのことであろう。俗世間に出て行くわけではあるまい)

易遷宮の中には、徳業にすぐれながらあまり目立たない者がいる。寶瓊英、韓太華、劉春龍、王進賢、李奚子、郭叔香である。²⁴これら數人は、いずれも生まれついでに容姿は匂わんばかりに美しく、澄みわたつてうっとりするほど氣高く、才は第一番に擬してもよく、威儀は衆を驚かす。これらは地下主者の高位の者、仙官としてなかなかの才の持ち主である。その次に位する者として張善子²⁵たちがいる。鄧伯苗²⁶の母には善行があつた。だから後からやつて來る者は彼女を頼みとすることが多い。

寶瓊英は寶武²⁷の妹である。その七世の祖に峙という名の者がいた。枯骨を埋葬することを業とし、瀕死の者を生き返らせることを務めとしていた。だから幸いが瓊英の身に及んだのである。(寶武、字は游平は、寶融²⁸の玄孫である。峙はきつと融の祖父であろう。武もやはり常に財物を天下の困窮者に散施した。靈帝の時に大將軍となつたが、陳蕃とともに誅された。母は武を産んだ時、一緒に一匹の蛇を産んだ。蛇は生まれ出るとすぐに南山に逃げ上つた。母が死ぬと、まもなくしてやつて來て、しばらく悲しみ泣いたうえ、また立ち去つた。やはり不思議なことである。ただ解せないのは、同様に七世の

慶福を繼承しながら、兄は殺され、(一方)妹は仙人になったことである。これはやはり前身の功罪によるものであろうか。しかし、寶武は至忠をもつて死んだので、きっとまた仙品に入ったのであろう。

韓太華は韓安國^①の妹であり、漢の二師將軍李廣利^②の妻である。李廣利は宿世^③で功德があつた。(だから)李廣利も今は南宮で鍊化の業を受けている。李廣利は漢の武帝の名將である。大宛を征伐した時、殺戮したところはとりわけ多かつたが、宿世^④の功德のお蔭で、帳消しにすることができた。韓氏は字は安國。韓家の福德が及んだのであつて、李氏の功德に支えられたなどということとは關係あるまい。夫と妻とが同じくだりに出てくるために、人がうっかり(そのような)疑いを持つのではないかと恐れ、それであらためてはつきりと述べたのである。あるいは因が結び合はつてこのような結果を招いたのかも知れない。

劉春龍は漢の宗正の劉奉先の娘である。(劉奉先は、漢の某皇帝の時に宗正となつた)

李奚子は李忠の祖母である。李忠は晉初の東平太守である。李忠の祖父は田舎者に過ぎなかつたが、陰德を数多く行つた。いつも大雪が降り寒さに凍える時には、積み上げた稻を覆わず、常に穀物を

庭先に野ざらしにしておいた。鳥たちが飢え死にするのをいつも恐れたからだ。彼の氣配りはこのようであつた。(李忠は『晉書』には見えない。このように言っているのであれば、妻はやはり夫の功德のお蔭に與かつたようだが、夫自身にはかえつて果報があつたとは見えぬ。そのわけを詳しく述べることは難しい)

王進賢は王衍の娘である。(その事は後に詳しく見える)

郭叔香は王脩^⑤の母である。(王脩、字は叔治、北海の人である。魏の武帝の郎中令となつた。七歳の時に母を喪つた。母は社の祭の日死んだ。彼女が郭氏の誰の娘なのかは分からない)

童初府には王少道、范叔勝、李伯山がいる。^⑥いずれも童初府の代表たる者たちである。王少道は漢の時の人であり、王遜の子である。漢代の山陽太守であつた。范叔勝は北地の人である。魏の文帝の黃門郎。李伯山は李冲の父である。李冲は漢の時に白馬令となつた。(これら三人が昇仙できたのは)陰德を行い、あるいは何代にもわたつて道を身に備え、正しい行いを踐み行つたことが一身に集まつたからである。

この(易遷と童初との)二つの役所の仙人たちは、いずれも一ランクまたは二ランク昇進して、これらの役所に入ることができたの

である。必ずしも全員がそろってただちにやって来たというわけではない。別にあらためて委細を述べるであろう。氣を同じくする者たちに密かに示し、陶科斗が幽冥界の安泰なところにいることを知らせるがよい。道教修行に勵まなくてよからうか。〈これら三人は、世俗の書にはいずれも見えない。後漢の時に李雲^⑩がおり、やはり白馬の令となった。直諫して帝の意に逆らって死んだ。氣を同じくする者たちに示させるとは、それを許長史と許掾とに告げることをするのである〉

七月二十四日の夜、保命君のお告げ。〈按ずるに、先に（定録府の）長史と司馬になぞらえられる職の者たちについて誥授したのは、定録君のお告げであつたけれども、それがきつと最初に華陽洞天中の事を説いたものであり、丑年（興寧三年、三六五）の十一月のことであつた。ところが今、ここでは雑多な職の者たちについて説いているのであるから、當然その後には續くはずであるが、かえって七月のこととなっている。さりとて寅年（太和元年、三六六）のことであるはずがない。どうにもこうにも、極めて詳かにし難い。「地下主者」から以下のあわせて十四條は、いずれも許掾の寫しがあつて、まとめて一卷になっている〉

① 大洞玄經 『眞誥』卷五葉一四裏「君曰、大洞者、神州是也、神州別有三山、三山有七宮、七宮有七變、朝化爲金、日中化爲銀、暮化爲銅、夜化爲光、或化爲山、或化爲水、或化爲石、謂之七變、七變有七經、七經有二十一玉童隨此書、故曰、大洞眞經、讀之萬過便仙、此仙道之至經也」。同卷一九葉一〇裏「見大洞眞經、說云、誦之萬遍、則能得仙」。

② 鍊質 『元始無量度人上品妙經四注』卷一「後皆得作尸解之道」、李少微注「按上經、尸解有四種、一者兵解、…四者大陰鍊質」。

③ 胎仙 『上清黃庭內景經』上清章第一（『雲笈七籤』卷一一）「琴心三疊儼胎仙」、注「胎仙卽胎靈大神、亦曰胎眞、居明堂中」。

④ 非今世所稱洞玄靈寶經 『道教義樞』卷二・三洞義「今檢三洞、經目不同、洞神則言洞神三皇、洞玄則言洞玄靈寶、洞眞雜題諸名」。

⑤ 廣生 『周易』繫辭傳上「夫神、其靜也翕、其動也闢、是以廣生焉」。

⑥ 鬼帥武解、主者文解、俱仙之始也 『眞誥』卷七葉七裏「眞司科云、有用力於百鬼、聘帥御於天威者、宜須此詭、地下主者、解下道之文官、地下鬼帥、解下道之武官、文解一百四十年一進、武解二百八十年一進、武解、一解之下者也」。

⑦ 三官之府 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「元始符命、時

剋昇遷、北都寒池、部衛形魂、嚴東注「元始天尊說經之時、命召十方無極世界地獄之中、一刻之時、幽夜之中、寒水夜庭、三官九府、一時各部領鬼神、侍衛將從、得出長夜之府、竝皆開度、得見光明也」。

(8) 又別云：『真誥』卷七葉八表を参照。

(9) 練化之業 『真誥』卷一六葉二表「先世有功在三官、流逮後嗣、或易世鍊化、改氏更生者、此七世陰德、根葉相及也」。

(10) 四明法 『無上祕要』卷九七玉清品「太玄都四明科曰：、右出洞真太元左宮女青四極三十一獨立寶經明科律文」、『三洞珠囊』卷六立功禁忌品「(太玄都中宮女青律)又云、凡上學之士受三天正法四明之科」。

(11) 仙階 『真誥』卷一六葉一一表注「此事是高士逸民之品也、從主者以去、是入仙階、不復爲鬼官耳」。

(12) 仙人之使令 『真誥』卷一六葉一〇表注「一百四十年一進、便入第二等、給仙人使、乃得稍受道教耳」。

(13) 劍經 『真誥』卷四葉一七表「右一條是掾抄寫劍經後論尸解事」。

(14) 散吏 干寶「晉紀總論」(『文選』卷四九)「王彌者、青州之散吏也」。

(15) 李東 『真誥』卷二〇葉一三裏「有云李東者、許家常所使祭酒、先生亦師之、家在曲阿、東受天師吉陽治左領神祭酒」、『無上祕要』卷八三得地仙道人品「李東、曲阿人、晉元明帝時爲祭

酒、甚清勤得道」。

(16) 章本 『登真隱訣』卷下「書章時、燒香向北書之」、注「又見晉泰興中曲阿祭酒李東章本、辭事省直、約而能當」。

(17) 鮑南海 『晉書』卷九五藝術鮑靚傳「靚學兼內外、明天文河洛書、稍遷南陽中部都尉、爲南海太守」。

(18) 先生年二十三、就其受六甲陰陽行廚符 『真誥』卷二〇葉七裏「先生名邁、字叔玄、小名映、清虛懷道、遐棲世外、故自改名遠遊、與王右軍父子周旋、子猷乃修在三之敬、按手書授六甲陰陽符云、永昌元年、年二十三歲、則是永康元年庚申歲生也」。

(19) 易氣 嵇康「答子期難養生論」「又練骸易氣、染骨柔筋、滌垢澤穢、志凌青雲、若此以往、何五穀之養哉」。

(20) 氣攝神魂 『真誥』卷六葉三裏「強內攝魂、益血生腦、逐惡致眞、守精衛命」。

(21) 百年得入昆盈之宮 『雲笈七籤』卷八六化形濯景に引く「眞誥」では「百年得入崑崙之宮」に作る。

(22) 前書云：『真誥』卷一二葉一二裏を参照。

(23) 趙素臺 『眞靈位業圖』第六女眞「趙素臺」、注「熙女」。

(24) 高業而蕭條 『後漢書』列傳二五鄭玄傳「融素驕貴、玄在門下、三年不得見、乃使高業弟子傳授於玄」、『眞誥』卷七葉三表「此子蕭條氣遠甚矣」。

(25) 寶瓊英、韓太華、劉春龍、王進賢、李奚子、郭叔香 『眞靈位

- 業圖』第六女眞「寶瓊英、韓太華（注：安國妹、李廣利娘）、劉春龍、李奚子、王進賢（注：衍女）、郭叔香」。
- (26) 張善子 張姜子の誤りか。『無上祕要』卷八三得地仙道人名品「張姜子、西州人、張濟妹」。
- (27) 鄧伯苗母 『眞誥』卷一二葉一五表「計與數人共止、最於鄧伯苗母相親愛、餘亦厚耳」。
- (28) 寶武 『後漢書』列傳五九寶武傳を参照。
- (29) 寶融 『後漢書』列傳五九寶武傳および同列傳一三寶融傳を参照。
- (30) 先身 『無上祕要』卷一五衆聖本迹品中「上天以其先身好色、故轉爲女子、…右出洞眞外國放品經」。
- (31) 韓安國 『史記』卷一〇八韓長孺傳を参照。
- (32) 漢二師將軍李廣利 『漢書』卷六一李廣利傳を参照。
- (33) 宿世 『法華經』授記品「我及汝等、宿世因緣、吾今當說、汝等善聽」。『周氏冥通記』卷二「爾宿世已生周家、君之餘嗣也」。
- (34) 先世 『眞誥』卷一六葉一裏「其中宿運先世有陰德惠救者、乃時有徑補仙官」。
- (35) 家福逮 『眞誥』卷二〇葉一三裏「長史婦、陶威女、雖入易遷、恐此自承陶家福耳、不必關許氏五人之數也」。
- (36) 事詳在後 『眞誥』卷一三葉六表を参照。
- (37) 王脩 『三國志』卷一一王脩傳を参照。
- (38) 王少道、范叔勝、李伯山 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「王少道、范叔勝、李伯山」、注「三人童初府標表」。
- (39) 道業 『眞誥』卷一六葉七表注「雖有道心而無道業、故不得便居仙品也」。
- (40) 李雲 『後漢書』列傳四七李雲傳を参照。
- (41) 前受長史司馬諸人… 『眞誥』卷一二葉五裏を参照。
- 含眞臺、洞天中皆有、非獨此也、此一臺偏屬太元府隸司命耳、其中有女眞二人總之、其一女眞是張微子、漢昭帝時將作大匠張慶女也、微子好道、因得尸解法而來入此、亦先在易遷中、微子常服霧氣、自云、「霧氣是山澤水火之華精、金石之盈氣也、久服之、則能散形入空、與雲氣合體」、微子自言受此法於東海東華玉妃淳文期、文期、青童之妹也、微子曾精思於寢靜、誠心感靈、故文期降之、授以服霧之道也、服霧之道授微子、微子亦時以教諸學在含眞易遷中者、我昔嘗得此方乃佳、可施用者也、
- 服霧法、常以平旦、於寢靜之中、坐臥任己、先閉目內視、髻髯如見五臟、畢因口呼出氣二十四過、臨目爲之、使目見五色之氣相繞纏在面上鬱然、因又口內此五色氣五十過、畢咽唾六十過、畢乃微呪曰、「太霞發暉、靈霧四遷、結氣宛屈、五色洞天、神煙合啓、金石華眞、藹鬱紫空、鍊形保全、出景藏幽、五靈化分、合明扇虛、時乘六雲、

和攝我身、上昇九天、畢又叩齒七通、咽液七過、乃開目事訖、此道神妙、又神州玄都多有得此術者、爾可行此法邪、久行之、常乘雲霧而遊、此服霧法、已別抄用、事在第三篇中、今猶疑存此、與本文相隨也、

其一女眞是傳禮和、禮和是漢桓帝外甥侍中傳建女也、北地人、其家奉佛精進、女常旦夕灑掃佛前、勤勤祝誓、心願仙化、神靈監其此心、亦得來此、久處易遷、今始得爲含眞臺主也、常服五星氣以得道、禮和善歌、歌則鳥獸飛聚而聽聲焉、

右定錄君言。〈張傳二人、外書不顯、或應各在家譜中〉

〔又〕「右」一條有楊書、又掾寫。

(1) 愈本が「又」を「右」に作るのに従う。

含眞臺は、洞天の中すべてにあつて、ここだけとは限らない。この含眞臺だけは、ひとえに太元府に所屬し、司命君に管轄されている。その中に二人の女眞がいて統括している。その一人の女眞は張微子^①であつて、漢の昭帝の時の將作大匠張慶の娘である。微子は仙道を好み、尸解の仙法を體得したことによつて、この中にやつて來た。やはり先には易遷宮にいたのである。微子は、いつも霧氣を

服用し、自らこう言っている。「霧氣は、山と澤、水と火の精華であり、金石に充滿している氣である。久しく服用すれば、肉體を飛散させて虛空中に入り、雲氣^③と合體することができるようになる」。微子自身が言うところでは、この仙法を東海東華玉妃淳文期から授かつた。文期は東海青童君の妹である。微子は、かつて寢臥している靜室において精神を集中して存思していた時、誠心が神靈を感動させ、それで文期が降臨して、霧氣を服用する道術を授けたのである。霧氣を服用する道術は、微子に授けられ、微子もまた時おり含眞臺と易遷宮にいるもろもろの修行者たちに教えている。わしは、昔かつてこの方法をものにしたが、なかなかすばらしい。やつてみる値打ちがあるぞ。

服霧の法。常に夜明け方、寢臥している靜室の中で行う。坐つても横になつてもよい。まず、目を閉じて内視し、さながらに五臟を見るようにする。それが終わると、そのまま口から氣を二十四回吐き出す。わずかに目を開けてこれを行い、五色の氣がからまりあつて顔の上で鬱然としているのを見るようにする。そして、この五色の氣を口に入れることを五十回行う。それが終わると、唾液を六十回呑みこむ。それが終わると、小聲で次の呪文を唱える。「太霞が輝きを發し、靈妙な霧は四方に移る。結ばれた氣はしなやかにわだかまり、五色の氣が天を貫く。神煙がすべてを包んで開け起こり、金石が眞實の輝きを發する。氣が一面に立ちこめる紫の天空

で、體を鍊成して完きを保つ。光を外に出し幽玄さを内に秘め、五靈は變化し分かれてゆく。明るさと一體になって大空に上がり、時には六雲に乗る。わが身を調え養つて、九天に上昇する」。呪文が終わると、さらに七回叩齒し、唾を七回呑みこみ、そこで目を開いて、事がすべて終わる。この道は神妙であり、また神州玄都にはこの道術を體得した者が澤山いる。そなたは、この仙法を修行するのがよいのではないか。長い間これを行えば、常に雲霧に乗って遊ぶことができるようになる（この服霧の法は、すでに別にその具體的な修行方法を第三篇に抄出しておいた^③。今ためらいながらも、ここにそのまま残したのは、本文と續いているからである）。

いま一人の女眞は、傳禮和^⑤である。禮和は、漢の桓帝の外甥の侍中傳建の娘である。北地の人である。その家は、佛教を信仰し、精進に努めていた。娘は、いつも朝な夕なに佛前に水を撒いて掃き清め、たゆまず呪文を唱えて誓願し、心から神仙になりたいと願っていた。神靈たちが、彼女のこのような心をみなわし、やはりここにやって來ることができたのである。ずっと久しく易遷宮にいて、今やっと含眞臺の主になることができた。いつも五星の氣を服用して仙道を體得した。禮和は歌が上手で、歌を唱うと、鳥や獸たちが飛び集まって來てその聲に聞きほれている。

右は定録君のお言葉。張微子と傳禮和の二人は、世俗の書物には見えない。あるいは、きっとそれぞれの家の家譜の中に記されてい

るのであろう

右の一條は楊羲の書があり、また許掾の寫しがある。

(1) 張微子 『眞靈位業圖』第六女眞「張微子、傳和」、注「二人含眞臺主」。

(2) 山澤水火之華精 『周易』說卦傳「天地定位、山澤通氣、雷風相薄、水火不相射、八卦相錯、數往者順、知來者逆、是故易逆數也」。同「故水火相逮、雷風不相悖、山澤通氣、然後能變化、既成萬物也」。『上清大洞眞經』第二十四章「通幽達微、朗耀華精、使我內徹、五孔開明」。

(3) 雲氣 『莊子』逍遙遊「藐姑射之山有神人居焉、肌膚若冰雪、淖約若處子、不食五穀、吸風飲露、乘雲氣、御飛龍、而游乎四海之外」。

(4) 事在第三篇中 『眞誥』卷一〇葉二裏を参照。

(5) 傳禮和 注(1) 参照。

王衍爲晉武帝尙書令、其女字進賢、爲愍懷太子妃、洛陽亂、劉曜石勒略進賢、渡孟津河、於河中欲妻之、進賢罵曰、「我皇太子婦、司徒公之女、而胡羌小子敢欲干我乎」、言畢、即投河中、其侍婢名六出

復言曰、「大既有之、小亦宜然」、復投河中、時遇嵩高女眞韓西華出遊而愍之、撫接二人、遂獲內救、外示死形、體質密濟、便將入嵩高山、今在華陽宮洞內易遷之中、六出時年二十三許、體貌亦整、善有心節、本姓田、漁陽人、魏故浚儀令田諷之孫、諷曾有陰德之行、以及於六出耳。《晉書》云、「王衍長女名景風、貌美、賈后爲弟謚娶之、少女名惠風、以配愍懷太子、恨之」、如此則不甚美也、「永嘉五年六月、王彌劉曜石勒破洛、賊欲逼妃、妃拔刀曰、『我太尉公之女、皇太子之妃、有死而已』、終不爲逆虜所辱、遂見害、家人收葬於城西南洛水之北、追謚曰貞定妃」、與此說小異

范幼冲、遼西人也、受胎化易形、今來在此、恆服三氣、三氣之法、存青氣白氣赤氣各如繩、從東方日下來、直入口中、挹之九十過、自飽便止、爲之十年、身中自有三色之氣、遂得神仙、此高元君太素內景法、且且爲之、臨目施行、視日亦佳、其法雖鮮、其事甚驗、許侯可爲之。《此法亦以重抄、書在第三篇修》⁽¹⁾《有》《用》事中

范監者即其人也、昔得爲童初監、今在華陽中。《又別云、「曾爲漢尙書郎、善解地理、以家宅爲意」、此亦在第三篇、右三條竝楊書

(1) 俞本が「有」を「用」に作るのに従う。

王衍⁽¹⁾は、晉の武帝の尙書令であつた。その娘で字を進賢という者は、愍懷太子の妃であつた。洛陽の戦亂の際、劉曜と石勒が進賢を掠奪し、孟津の渡しで黄河を渡つた。黄河の上で、彼女を妻にしようとした。進賢は罵つて言つた。「私は皇太子の妻であり、司徒公の娘です。にもかかわらず、胡羌^{えびす}の小わっぱども、私を犯そうとするのか」。そう言い終わると、ただちに黄河に身を投げた。彼女の小間使いの六出という者も、「ご主人様がそうされたからには、つまらぬ私も當然そうすべきです」と言つて、やはり黄河に身を投げた。その時、たまたま嵩高山の女眞の韓西華が外をぶらついてたが、哀れに思つて二人に救いの手をさしのべた。かくて内々の救済を獲得し、うわべは死んだ姿を示したものの、實際には目に見えない形で救済されたのであり、そのまま連れられて嵩高山に入つた。今は華陽宮の洞天内の易遷宮の中にいる。六出は、その時、年が二十二、三ばかりで、體つきや顔かたちもよく整い、節操も立派であつた。本姓は田、漁陽の人、魏の故の浚儀縣令の田諷の孫である。田諷にはかつて陰徳の行いがあつたので、それで六出にまで及んだのであつた。《晉書》に次のようにある。⁽²⁾「王衍の長女、名は景風は、美貌であつた。賈皇后は弟の賈謐のために彼女を娶らせ、惠風という名の末娘を愍懷太子の配偶者とした。太子は、そのことを恨みに思つて

いた」。そうだとすると、たいして美人ではなかったのである。「永嘉五年（三二一）六月に、王彌と劉曜と石勒は洛陽を撃破した。賊どもは太子妃に迫ろうとした。妃は刀を抜いて言った。『私は太尉公の娘であり、皇太子の妃です。死あるのみ』。あくまで夷狄の逆賊に辱められることなく、殺害されたのであった。家族の者は遺骸を收容して、洛陽城の西南、洛水の北に葬った。後に諡して貞定妃とあった」。この話とやや異なっている」

范幼冲は遼西の人である。胎化を受けて肉體を變え、今、ここにやって来て、常に三氣を服している。三氣を服する法というのは、青氣、白氣、赤氣がそれぞれ絲筋のようになって、東方の日の下からやって来て、そのまま口の中に入るのを存思し、それを九十回くみ入れて、腹一杯になればそこで止める、というものである。これを十年間行えば、體の中に自ずから三色の氣が生じ、神仙になることができる。これは高元君太素内景法である。毎朝これを行い、わずかに目を開けて實行する。日を見ながらやってもよい。この仙法は分かりやすいが、實のところとても効果がある。許侯はこれを行うがよい。この仙法もやはりすでに重複して抄出し、第三篇の具體的な修行方法の中に書いてある³⁾。

范監とは、つまりこの人のことである。昔、童初監となることが

でき、今は華陽洞天中にいる。〈また別に「かつて漢の尙書郎となり、風水を理解していたので、冢墓のことに關心があった」とある。これも第三篇にある³⁾。右の三條はならびに楊羲の書

(1) 王衍 『晉書』卷四三王衍傳を参照。

(2) 其女字進賢 『晉書』卷九六列女愍懷太子妃王氏傳を参照。

(3) 晉書云：『晉書』卷五三愍懷太子傳「初賈后母郭槐欲以韓壽女爲太子妃、太子亦欲婚韓氏以自固、而壽妻賈午及后皆不聽而爲太子聘王衍小女惠風、太子聞衍長女美而賈后爲諡聘之、心不能平、頗以爲言」。

(4) 此法亦以重抄、書在第三篇修用事中 『眞誥』卷一〇葉一表を参照。

(5) 此亦在第三篇 『眞誥』卷一〇葉一六表を参照。

河内李整、昔受守一法并洞房得道、初在洛陽山、近來入華陽中、又主諸考崇民間之事、整往爲常道鄉公傳、受道入山時、已年六十。〈不知李作何位、亦應是監職、常道鄉公、魏元帝本封也〉

河内の李整は、昔、守一の法と洞房存思の法を授かつて仙道を體得した。最初は洛陽山にいたが、最近になって華陽洞天にやって來た。また、人間世界を考罰し崇をもたらずさまさまなことについての職務をつかさどっている。整はかつて常道郷公^①の教育掛であつた。仙道を授かつて山に入つた時には、すでに六十歳になつていた。〈李がどのような位であるのかは分らないが、やはりきつと監の職なのであらう。常道郷公は、魏の元帝の本來の封號である〉

(1) 常道郷公 『三國志』卷三少帝紀を參照。

罡山東北有穴、通大句曲南之方山之南穴、姜伯眞數在此山上取石腦、石腦在方山北穴下、繁陽子昔亦取服〈此罡山猶是大橫山、故後云掾恆與方山五人往來、但不知有路通洞天中不爾、繁陽子即鹿迹洞中何苗也〉、

此北崢山中亦有此物〈未詳崢山在何處、今句曲北鹿迹山西有名崢角山、似當是其處也〉、

石腦故如石、但小斑色而輒耳、所在有之、服此、時時使人發熱、又使人不渴、李整昔未入山時、得風痺疾、久久乃愈耳、此人先多房內事、殆不同今者疾之輕薄也。〈石腦、今大茅東亦有、形狀圓小如曾

青、而質色似鍾乳狀、下乃皎白、時有黑斑而虛輒、服之乃熱、爲治亦似鍾乳也

^① 羅江大霍有洞臺、中有五色隱芝。〈此則南眞及司命所任之處也〉

華陽洞亦有五種夜光芝。〈此則司命所請以植句曲内外者也〉

^② 良常山有熒火芝、此物在地如熒火狀、其實似草而非也、大如豆形、紫華、夜視有光、得食一枚、心中一孔明、食七枚、七孔明、可夜書、計得食四十七枚、壽萬年。〈從來未聞有見之者、當是無至心尋求耳

^③ 包山中有白芝、又有隱泉之水、正紫色〈此即林屋山也、在吳太湖中耳〉、

華陽雷平山有田公泉水、飲之除腹中三蟲、與隱泉水同味、云是玉砂之流津也、用以浣衣、不用灰、以此爲異矣。〈此水今從地涌出、狀如沸、水味異美、取浣垢衣、便自得淨、即所呼爲柳谷汧者、在長史宅東南一里許也〉

昔高辛時有仙人展上公者、於伏龍地植李、彌滿其地、展先生今爲九宮內右司保、其常向人說、「昔在華陽下食白李、味異美、憶之未久、而忽已三千年矣」〈諸曆檢課謂堯元年戊戌至齊之己卯歲二千八百

三年、高辛即堯父、說此語時、又應在晉世而已、云三千年、即是堯至今不啻二千八百年、外曆容或不定、如此丁亥之數、不將已過平、汲〔冢〕^④「冢」紀年正二千六百四十三年、彌復大懸也、

後有郭四朝、又於其處種五果、又此地可種柰、所謂福鄉之柰、以除災厲。

秦時有道士周太賓及巴陵侯姜叔茂者、來住句曲山下、又種五果并五辛菜、叔茂以秦孝王時封侯、今名此地爲姜巴者是矣、以其因叔茂而名地焉（地號今亦存、有大路從小茅後通延陵、即呼爲姜巴路也、但秦孝公時未併楚置郡、巴陵縣始晉初、不知那有巴陵之封、恐是巴蜀之巴故也）、此二人竝已得仙、今在蓬萊爲左卿、今南鄭諸姜、則叔茂之後、

茂曾作書與太極官僚云、「昔學道於鬼谷、道成於少室、養關於華陽、待學於逸域、時乘編輪、宴我句曲、悟言永歎、代謝之速、物存人亡、我勞如何、」

太賓亦有才藝、善鼓琴、昔教糜長生孫廣田、廣田即孫登也、獨絃能彈而成八音、眞奇事也（孫登即嵇康所謂長嘯者、亦云見彈一絃之琴、斯言非虛矣、

叔茂種五辛菜、常賣以市丹砂而用之、今山間猶有韭薤、即其遺種邪。（今呼爲韭山、在大茅西、甚多大韭、又餘處亦有蒜薤耳、非（山）^⑤〔出〕姜巴一處也）

今舍前有塘、乃郭四朝所造也、高其牆岸、蓋水得深、但歷代久遠、塘牆頽下耳。（今舍語似是論長史宅、宅前今乃有塘、近西爲堤牆、即是遇柳汧水、而去郭千甚遠、郭千在北洞西北、今有大陂塘、四朝先應住此、未解舍前之意、恐長史於彼復立田業、又有說在後）

④ 四朝常乘小船、遊戲其中、每叩船而歌曰、

清池帶靈岫、長林鬱青葱、玄鳥藏幽野、悟言出從容、鼓機乘神波、稽首希晨風、未獲解脫期、逍遙丘林中。（晨風謂上清玉晨之風、非毛詩所謂鷦鷯晨風之鳥也）

浪神九垓外、研道遂金眞、戢此靈鳳羽、藏我華龍鱗、高舉方寸物、萬吹皆垢塵、顧哀朝生惠、孰盡汝車輪。（女龍不幣席、男愛不盡輪、朝生、蜉蝣也、以喻人之在世、易致消歇耳）

遊空落飛飄、靈步無形方、圓景煥明霞、九鳳唱朝陽、暉翮扇天津、菴謁慶雲翔、遂造大微宇、挹此金梨漿、逍遙玄垓表、不存亦不亡。（玄垓九垓、皆八極之外、九霞之頂名也、飛登木星、亦名玄朗東陽之垓、故若士語盧敖云吾與汗漫期於九垓之上矣）

駕欵舞神霄、披霞帶九日、高皇齊龍輪、遂造北華室、神虎洞瓊林、

風雲合成一、開闔幽冥戶、靈變玄迹滅。〈四朝爲玉臺執蓋郎、故云高皇齊龍輿〉

定錄言。〈右十二條掾寫、共一篇〉

- (1) この段、『太平御覽』卷六七〇服餌下に見える。
- (2) この段、『太平御覽』卷六七〇服餌下に見える。
- (3) この段、『太平御覽』卷六七〇服餌下に見える。
- (4) 俞本が「家」を「冢」に作るのに従う。
- (5) 學本が「山」を「出」に作るのに従う。
- (6) この段、『雲笈七籤』卷九六郭四朝常乘小船游戲塘中叩船而歌
および同卷一一一洞仙傳に見える。

罌山の東北に穴があり、大句曲山(大茅山)の南にある方山の南穴に通じている。姜伯眞はしばしばこの山の上で石腦を採取した。石腦は方山の北穴の下にあり、繁陽子も昔やはり採取し服用した。〈この罌山はやはり大横山のことである。だから後に、「許掾はいつも方山の五人とともに行き來した」と言うのである。ただし洞天に通ずる路があるのかどうかは分からない。繁陽子つまり鹿迹山の

洞天内の何苗である〉⁽⁴⁾

ここの北にある竈山にもこの藥物がある。〈竈山がどこにあるのか詳らかではない。今、句曲山の北方の鹿迹山の西のところに竈角山という名の山があり、そこではないかと思われる〉

石腦⁽⁵⁾は元來石のようである。ただし少し斑色をしていて柔らかい。あちこちにある。これを服用すると、往々發熱させ、また喉が渴かないようにする効果がある。李整は昔まだ山に入らなかった時、風痺の病を患っていたが、長く服用してやっと治った。この人は初めやたらと房事を行い、現在病氣が軽くなったのはまったく違っていた。〈石腦は今大茅山の東にもある。形状は圓形で小さく曾青⁽⁶⁾のようであるが、質感や色はちょうど鍾乳床⁽⁷⁾のようで、その下は眞つ白で、時に黒く斑があつて中空で柔らかい。これを服用すると體がほてる。治療効果も鍾乳に似ている〉

羅江の大霍山に洞臺があり、その中に五色の隱芝⁽⁸⁾がある。〈ここが南眞と司命君が任命されている場所である〉

華陽洞にも五種の夜光芝⁽⁹⁾がある。〈これは司命君が頼んで句曲山の内外に植えさせたものである〉

良常山には熒火芝がある。この藥物は地上にあつてまるで螢のよ

うである。その實は草のように見えるがそうではない。大きさは豆粒ほどであり、紫の花をつける。夜に見ると光っている。一本服食すると心臓の一つの孔が明るくなり、七本服食すると七つの孔が明るくなり、夜でも文字が書けるようになる。合計四十七本服食すると壽は萬年となる。〈今までこれを見た者があると聞いたことがないのは、きつと眞劍に探し求める者がいないからであらう〉

包山に白芝^①がある。ここにはまた隱泉水があり、まさしく紫色をしている。〈これはつまり林屋山である。吳の大湖の中に存在する〉。

華陽の雷平山には田公泉水がある。^①その水を飲むと腹中の三蟲が取り除かれる。隱泉水と味は同じであり、「玉砂の流津である」と言われる。この水を用いて洗濯すれば、灰を用いる必要はない。この點ですぐれている。〈この泉水は今地中より湧き出し、その様子はあたかも沸騰しているかのようだ。水の味はすばらしくおいしい。この水で汚れた衣服を洗濯すると、それだけできれいになる。これがつまり柳谷汧と呼ばれるもので、許長史の家の東南一里ほどのところにある〉

昔、高辛氏の時代に仙人の展上公^③なる者がいた。伏龍の地に李を植え、その土地一面に廣がった。展先生は今は九宮内の右司保^③の官に就いている。彼がいつも人に語るには、「昔、華陽の麓で白い李

を食べたが、その味は特にすばらしくおいしかった。あれからいかほどもたためと思ううちに、たちまち三千年が過ぎ去ってしまった」『諸曆檢課』によると、堯帝元年戊戌の年より齊の己卯の年（永元元年、四九九）までで二千八百三年だという。高辛とは堯の父である。^⑤さらに、（展上公が）これを語った時は、晉の時代に違いない。「三千年」と言っているのだから、つまり、堯より今に至るまでは二千八百年どころではないのである。世間の曆にはあるいはきちつとしないところがあり、そうだとすれば、丁亥の數^⑥はすでに過ぎ去っているのではなからうか。汲冢の『紀年』ではちょうど二千六百四十三年であつて、一層ますます大きくかけ離れてしまう。

その後、郭四朝^⑦という者がいた。またこの土地に五種の果實を植えた。またこの土地は柰^{かたなし}を植えるのにもよい。いわゆる福郷の柰というもので、これは災害や流行病を除いてくれる。

秦の時代に道士の周太賓^⑧および巴陵侯の姜叔茂^⑨なる者がいた。句曲山の麓にやつて来て居住した。また五種の果實と五種の辛菜を植えた。叔茂は秦の孝王の時代に（巴陵）侯に封ぜられた。今この土地を姜巴^⑩と呼ぶのはそのためである。叔茂に因んで土地に命名したのである（姜巴という）地名は今も残っている。小茅山の後部から延陵に通ずる大きな路があるが、それを姜巴路と呼んでいる。ただし、秦の孝公の時代はまだ楚を併合してそこに郡を置いてはいな

かつたし、巴陵縣は晉初に始まったのであるから、どうして巴陵侯に封ぜられるということがあったのか分らない。恐らく、巴蜀の巴という意味であろう。この二人はともにもう仙道を體得している。今は蓬萊山で左卿の官に就いている。今の南鄭の姜氏一族は叔茂の後裔である。

姜叔茂はかつて太極宮の官僚に手紙を書き送った。「私は昔、道を鬼谷先生^①に學び、道は少室山において完成した。華陽で羽を養い、遠く遙かな地域に推擧されるのを待っている。時にはつむじ風の車に乗ってわが句曲山で安らいで下さい。ともに語り合い永く歎ずるのは、物の移ろい行くの速やかなこと。物は残るが人の命は盡き、私の辛さはどうしようもない」^②。

周太賓もまた才藝を持ちあわせていた。琴を奏するのがうまく、昔、糜長生と孫廣田に教えた。孫廣田とは孫登である。一絃琴を弾きこなして八種の音色を出した。實にすばらしいことである。《孫登は、嵇康のいう「長嘯」の者である。また「一絃琴を弾いているのを見た」とあるが、この言葉は嘘ではない》。

姜叔茂は五種の辛菜を植え、常日頃それを賣つて丹砂を買い、それを用いた。今でも山あいには葦や薤^{おろし}があるのは彼が植えた遺り種であろうか。《今は韭山と呼び、大茅山の西にある。大きな韭がとても多い。また、別の場所にも蒜^{にんにく}や薤がある。姜巴の土地にだけ産出するわけではない》。

今の舎屋の前に溜池がある。郭四朝が造つたものである。^③溜池の土手を高くすれば、溜めこまれる水は深くなるであろう。ただ、何代も遙か昔のことなので、溜池の土手は壊れ落ちてしまっている。

《今の舎屋》というのは許長史の家のことを言っているように思われる。彼の家の前には、今、溜池がある。西のあたりが土手となっており、これは柳汧水をせき止めているのである。しかし郭千から非常に遠い。郭千は北洞の西北にあり、今大きな陂塘がある。郭四朝は初めきつとここに住んだのであろう。(こう考えても)「舎屋の前」の意味がまだ判然としない。恐らく、許長史はかしこの郭千にも田地を設けたのであろう。さらに後に記事がある^④。

郭四朝は常々小舟に乗り、その溜池の中に遊んだ。いつも舟ばたをたいて次のように歌っていた。

清き池は靈峰にとりまかれ、
長廣なる林は青々と繁茂する。^⑤

玄妙な鳥は奥深き野に隠れ、
私が語りかけるとゆつたりとやって来る。^⑥

權を漕いで神波に乗り、
稽首して晨風を希求する。

解脱の時をまだものにしていない、

丘林の中を逍遙するばかり。『晨風』とは上清玉晨の風をいう。

『毛詩』に「鵲たる彼の晨風」と言うところの鳥ではない」

心を九垓の彼方に漂わせ、

道を研ぎ澄まし金眞をなし遂げ、

この靈鳳の羽をおさめ、

わが華龍の鱗を藏す。

心に思うところを高く掲げれば、

萬物はすべて垢塵。

朝に生まれて夕べに死ぬかげろうほどの恵みを哀れに思う、

誰が車の車輪が摩滅し盡き果てるほど永えに生きられようか。〈女

への寵愛も坐っている席が破れるほど長くは續かず、男への愛情も

乗っている車の車輪を摩滅し盡くすほど長く續くものではない。『朝

に生まれて』とは蜉蝣である。それによって人間がこの世におい

ていともはかなく消え盡きることにとえたのである

虚空に遊びつむじ風に乗って降下し、

靈妙なる歩みは自由自在。

太陽は明霞宮に輝き、

九鳳は朝日に唱和する。

輝く羽を天の渡し場にはばたかせ、

もうもうと慶雲はかけ上がる。

かくて大微の宮宇に至り、

この金梨の漿を汲む。

玄垓の彼方に逍遙し、

存せずまた滅せず。『玄垓』と『九垓』はすべて八方のさいはて

の彼方であり、九霞の頂の名である。飛行して木星に登ることにつ

いても「東陽の垓に玄朗す」と呼んでいる。それ故、若士は盧敖に

「私は汗漫と九垓の上方で落ち合う」と語っているのである

つむじ風に乗って神祕の霄に舞い、

霞を纏い九つの太陽を身に帯びる。

高皇は私と龍輪をひとしくし、

かくて北華の宮室に至る。

神虎の鳴き聲は玉の林に轟き、

風と雲は合して一つとなる。

幽冥の扉を開きまた閉ざし、

靈妙に變化して玄妙なる跡は滅する。〈郭四朝は玉臺執蓋郎であつ

た。だから「高皇は私と龍輪をひとしくする」というのである

定録君のお言葉。〈右の十二條は許掾の寫し。あわせて一篇であ

る

- (1) 繁陽子 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「謝稚堅、王伯遼、繁陽子何苗、馮良、郎宗」、注「五人在鹿跡洞」。
- (2) 此聖山猶是大橫山 『真誥』卷一三葉一七表「雷平山之東北有山、俗人呼爲大橫山、其實名鬱岡山也、名山記云所謂岡山者也」。
- (3) 故後云… 『真誥』卷一四葉二裏を参照。
- (4) 繁陽子即鹿迹洞中何苗也 注(1) 参照。
- (5) 石腦 『重修政和證類本草』卷四玉石部中品「石腦、味甘、溫、無毒」、集注「此石亦鍾乳之類、形如曾青而白色黑斑、軟易破、…真誥曰、李整探服、療風痺虛損、而得長生」。
- (6) 曾青 『重修政和證類本草』卷三玉石部上品「曾青、味酸、小寒、無毒、…久服、輕身不老、能化金銅」。
- (7) 鍾乳牀 『重修政和證類本草』卷四玉石部中品「孔公孽、味辛、溫、無毒」、集注「此即今鍾乳牀也、亦出始興、…凡鍾乳之類、三種同一體、從石室上汁溜積久盤結者爲鍾乳牀、即此孔公孽也」。
- (8) 五色隱芝 『茅君內傳』(『太平御覽』卷九八六)「勾曲山上有神之五種、第一曰龍仙芝、似交龍之相負、服之爲太極仙卿、第

二曰名參成芝、赤色有光、扣其枝葉、如金石之音、折而續之即如故、服之爲太極大夫、第三曰燕胎芝、其色紫、形如葵葉、燕象如欲飛狀、光明洞徹、服一株、拜爲太清龍虎仙君、第四曰名夜光芝、其色青、實正白如李、夜視其實如月光照洞一室、服一株、爲太清仙官、第五曰玉芝、色白如玉、剖食、拜三官正真御史也」。

- (9) 華陽洞亦有五種夜光芝 前注を参照。
- (10) 白芝 『雲笈七籤』卷四四・三九素語玉精真訣存思法「思素靈真人乘雲氣入我身中、安鎮肺內、便三呼少陰素靈真人尋明子、齋白芝玉精、補養我身」。
- (11) 華陽雷平山有田公泉水 『真誥』卷一三葉一六裏「許長史今所營屋宅、對東面有小山、名雷平山、周時有雷氏養龍、來在此山、後有姜叔茂田翁亦居焉、其山北有柳汧水、或名曰田公泉、以其人曾居此山取此水故也」。
- (12) 除腹中三蟲 『紫陽真人內傳』「可先服制蟲細丸、以殺穀蟲、蟲有三名、一名青古、二名白姑、三名血尸、謂之三蟲」。『列仙傳』朱璜「朱璜者、廣陵人也、少病毒瘕、就睢山上道士阮丘、丘憐之言、卿除腹中三屍、有真人之業可度教也」。
- (13) 展上公 『真靈位業圖』第五右位「右保司展上公」。
- (14) 九宮內右司保 『真誥』卷一五葉六表注「邵輿爲東明公、行上補九宮右保」。

- (15) 高辛即堯父、『史記』五帝本紀「帝嚳高辛者、黃帝之曾孫也、：帝嚳娶陳鋒氏女、生放勳、娶嫫毘氏女、生摯、帝嚳崩、而摯代立、帝摯立、不善、而弟放勳立、是爲帝堯」。
- (16) 丁亥之數、『眞誥』卷八葉一四表「唐承卽列紀所云四十六丁亥之期」。
- (17) 郭四朝、『眞靈位業圖』第五左位「左仙公郭四朝、兼玉臺執蓋郎」。また、『雲笈七籤』卷一一一洞仙傳を参照。
- (18) 周太賓、『眞靈位業圖』第四左位に見える。また、『雲笈七籤』卷一一一洞仙傳を参照。
- (19) 姜叔茂、『眞靈位業圖』第四左位「蓬萊左卿姜叔茂」。また、『雲笈七籤』卷一一一洞仙傳を参照。
- (20) 姜巴 陶弘景「許長史舊館壇碑」(『華陽陶隱居集』卷下)「源出田公之泉、路通姜巴之軌」。
- (21) 鬼谷、『眞靈位業圖』第四左位「鬼谷先生」。「無上祕要」卷八四得太清道人品「鬼谷先生、周時人、在城陽山鬼谷中」。
- (22) 物存人亡、我勞如何 魏文帝「與朝歌令吳質書」(『文選』卷四二)「節同時異、物是人非、我勞如何」。
- (23) 糜長生、孫廣田、『眞靈位業圖』第五右位散位「孫田廣(注：一名登)、糜長生(注：周大賓弟子)」。
- (24) 孫登卽嵇康所謂長嘯者、『晉陽秋』(『三國志』卷二一王粲傳注)「康見孫登、登對之長嘯、踰時不言、康辭還、曰、先生竟無言乎、登曰、惜哉」。
- (25) 亦云見彈一絃之琴 臧榮緒『晉書』(『初學記』卷一六)「嵇康見孫登彈一絃琴」。
- (26) 今舍前有塘、乃郭四朝所造也、『茅山志』卷七「郭干塘在長隱山東數里、村名郭干、迺郭四朝眞人外解、有一塘水常滿、鄉人涸之、輒有雷電、至今請雨有驗、每朝眞日、異香襲人、定錄君受言四朝往曾使人種植於此地、年年四朝每行、皆過詣此山、以造恩和、游看原阜」。
- (27) 又有說在後、『眞誥』卷一三葉一〇裏を参照。
- (28) 鬱青葱 張衡「南都賦」(『文選』卷四)「章陵鬱以青葱、清廟肅以微微」、李善注「爾雅曰、青謂之葱、林木茂盛之貌」。
- (29) 出從容 『莊子』秋水「鯈魚出遊從容、是魚之樂也」。
- (30) 鼓櫂 木華「海賦」(『文選』卷二二)「飛駿鼓楫、汎海凌山」。
- (31) 解脫期 「奉法要」(『弘明集』卷二三)「經云、卒闕殺人、其罪尚輕、懷毒陰謀、則累劫彌結、無解脫之期」。「無上祕要」卷九七玉清品下「在屈厄之中便得解脫、：右出洞眞紫度炎光神元變經」。
- (32) 晨風：非毛詩所謂鷦鷯彼晨風之鳥也、『眞誥』卷四葉五表「晨風鼓丹霞、朱煙灑金庭」。「毛詩」秦風晨風「猗彼晨風、鬱彼北林」。
- (33) 九垓 司馬相如「封禪文」(『史記』卷一一七)「大漢之德、：

- 上暢九垓、下泝八埏」。
- (34) 金眞 『真誥』卷五葉四裏「君曰、仙道有金眞玉光、以映天下」。
- (35) 藏我華龍鱗 嵇康「卜疑集」「寧隱鱗藏彩、若淵中之龍乎、寧舒翼揚聲、若雲間之鴻乎」。
- (36) 萬吹皆垢塵 『莊子』齊物論「夫吹萬不同、而使其自己也、咸其自取、怒者其誰邪」。釋僧順「答道士假稱張融三破論」(『弘明集』卷八)「滌爾無寄、塵垢無能攪其方寸」。
- (37) 女寵不幣席、男愛不盡輪 『戰國策』卷一四「是以嬖女不敵席、寵臣不避軒」。
- (38) 朝生、蜉蝣也 『毛詩』曹風蜉蝣「蜉蝣之羽、衣裳楚楚」、毛傳「興也、蜉蝣、渠略也、朝生夕死、猶有羽翼、以自脩飾」。
- (39) 明霞 『上清大洞真經』卷二太微天帝君道經第五「大洞玉經曰、…金房尉明霞、九戶朗高瓊」。「雲笈七籤」卷八釋大洞真經三十九章「第五章、太微天帝君曰、…金房在明霞之上、九戶在瓊闕之內、此皆太微之所館、天帝之玉宇也」。
- (40) 朝陽 『毛詩』大雅卷阿「鳳皇鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽」。
- (41) 菴藹 李嵩「述志賦」(『晉書』卷八七)「蔭朝雲之菴藹、仰朗日之照煦」。
- (42) 八極 『淮南子』地形訓「八紘之外、乃有八極」。
- (43) 九霞 『無上祕要』卷一九天帝衆眞儀駕品「高聖太上大道君、…顯蓋九霞、迴天傾光、…右出洞眞靈書紫文上經」。
- (44) 飛登木星、亦名玄朗東陽之垓 『無上祕要』卷九二昇上清品上「登飛木星之道、歲星圓鏡、木精玄朗、東陽之陔星、中有九門、…右出洞眞八素眞經」。
- (45) 故若士… 『淮南子』道應訓「若士者竄然而笑曰、…吾與汗漫期于九垓之外、吾不可以久駐」。
- (46) 神霄 『無上祕要』卷二〇仙歌品「迴我神霄輦、遂造玉嶺阿、…右出道迹經」。
- (47) 高皇 『無上祕要』卷一九天帝衆眞儀駕品「東海水帝神王、常以立春春分之日、乘碧輦飛龍、上詣高皇玉帝、創罪簡、注仙錄、列言上帝之前、…右出洞眞飛行羽經」。
- (48) 北華 『無上祕要』卷三〇經文出所品「北華上仙曰蕭條九曜豁落七元上經、…右出洞眞大洞眞經」。
- (49) 開闔幽冥戶 『老子』第十章「天門開闔、能爲雌乎」。『周氏冥通記』卷一「夫生爲人、實依依於世上、死爲神、則戀戀於幽冥、實而論之、幽冥爲勝」。
- (50) 靈變玄迹滅 木華「海賦」(『文選』卷一一)「廓如靈變、惚恍幽暮」。戴逵「顏回贊」(『藝文類聚』卷二〇)「契彼玄迹、冥若影響」。

四朝、燕國人也、兄弟四人竝得道、四朝是長兄也、眞法、其司三官者、六百年無違坐超遷之、四朝職滿、上補九宮左仙公、領玉臺執蓋郎、中間久闕無人、後以思和代四朝也、山下居民、今猶呼一平澤地爲郭千者、是四朝之姓尙存於民口也、四朝往曾使人種植於此地也、年四朝每行、皆過詣此山、以造思和、遊看原阜。〈此是茅傳中言也、按如此說、郭千止是種植處、非居止也、住處則長史宅果應是矣、今塘牆既頽決、水不復甚停、人皆以爲田耳、然其地〔汙〕〔汙〕閭、小壅猶自成池、可得汎舟而歌、但無人能追蹤遠世、可歎如何、後云此四朝年年行過遊看、是上補去後、猶復憶羨舊居、所以數宴良常、眷盼朋好〉

張玄賓者、定襄人也、魏武帝時、曾舉茂才、歸鄉里、事師西河翦公、服朮餌、兼行洞房白元之事、後遇眞人樊子明於少室、授以遊變隱景之道、昔在天柱山中、今來華陽內爲理禁伯、理禁伯主諸水雨官也、此人善能論空無、乃談士、常執本無理云、「無者大有之宅、小有所以生焉、積小有以養小無、見大有以本大無、有有亦無無焉、無無亦有有焉、所以我目都不見物、物亦不見無、寄有以成無、寄無以得無、於是無則無宅也、太空亦宅無矣、我未生時、天下皆無無也」、其所論端據如此、桐柏諸靈亦不能折也、自云、「昔曾詣蓬萊宋晨生、晨生者、蓬萊左公也、與其論無、粗得人意、過此已去、尙未能本有、安能本無邪、與餘人論空無、天下中皆無人焉」、其高氣秉理如此、東卿

君紫微玄清亦莫得而〔干〕也、理禁伯官亦保命之監國也。〈此論空無之理、乃殊得無宗、而玄玄固難可曲覈矣、眞人之才義、亦是甚有優劣、東卿桐柏紫微玄清、蓋相推竝言談之英辯者、故舉此爲標也、按左傳稱「君之世子、從曰撫軍、守曰監國」、監國之任、則是副貳、疑此監國或因作監司也〉

趙威伯者、東郡人也、少學邯鄲張先生、先生得道之人耳、晚在中嶽、授玉佩金鑑經於范丘林、丘林乃是漢樓船將軍衛行道婦也、學道得仙、遂授行挹日月之道、又服九靈明鏡華、遂得〔仙〕、昔亦來在華陽內爲保命丞、河圖云吳楚多有得見太平者、其常語人云、「此語不虛、此驗不久」〈如此、諸學者何可不彌加勤勵也〉、其存明鏡、非世間常法也、受范丘林口訣云、「善嘯、嘯如百鳥雜鳴、或如風激衆林、或如伐鼓之音」、時在天市壇上、奮然北向、長嘯呼風、須臾雲翔其上、衝氣動林、或冥霧纒合、或零雨其濛矣、保命有四丞、此一人主爲暴雨水、及領五芝金玉草、若欲致洪雨者、將可辭詣之也〈又理禁伯亦主雨水、若請雨、宜併爲辭也〉、

其一丞是咸陽樂長治、東卿司命君鄉里人也、爲小君所舉用、漢桓帝中書郎、晚從中嶽李先生受道、行七元法得仙〈相去二百餘年、猶蒙〔卿〕〔卿〕之澤也〉、

一人是孟君入室弟子鄭雉正者、孟君所屬用〈孟君、京兆人、或呼爲孟先生、不知何名位〉、

其一人是西山唐「公」房⑤此則神仙傳所載、是蜀人、奉事李八百者也、

樂長治主災害、鄭雉正主考注、唐公房主生死、趙威伯主仙籍并記學道者并暴雨水靈芝草。〈洞宮官寮司察吳越⑥「兆」民、在任不過此四丞也、其下則有四⑦師⑦「帥」、事在第三篇中

定錄道此。〈右此有掾寫、依紙墨亦言前篇、而中間有此失缺、此行後又割、恐別復有事、竝遺落、深可恨惜耳

- (1) 愈本が「汗」を「汙」に作るのに従う。
- (2) 愈本が「千」を「干」に作るのに従う。
- (3) 愈本に従って「仙」の字を補う。
- (4) 意をもって「卿邦」を「郷邦」に改める。
- (5) 愈本に従って「公」の字を補う。
- (6) 意をもって「非」の字を「兆」の字に改める。
- (7) 意をもって「師」の字を「帥」の字に改める。

郭四朝は燕國の人である。兄弟四人そろって仙道を體得した。四朝は長兄である。眞仙界の定めでは、三官をつかさどる者は、六百

年間違反の罪がなければ、一足飛びの昇進をさせることになっている。四朝は職務が滿了すると、上昇して九宮左仙公に補任され、玉臺執蓋郎①を兼任した。それから長い間(三官をつかさどる者は)缺員となっていたが、茅思和を四朝の後任とした。山の麓の住民たちは、今でもまだ、ある平坦で水に潤った土地を「郭千」と呼んでいるが、これは四朝の姓がまだ人々の言葉に残っているのである。四朝はかつて人を使ってこの地に農業をさせたのである。毎年、四朝は出かけるたびに必ずこの山を訪れ、思和のもとに至り、野山を見まわるのである。〈これは『茅三君傳』中の言葉である。このように言っているところを見ると、「郭千」とはただ農業をやっていた所に過ぎず、住んでいた所ではない。住んでいた所は許長史の家がきつとそうであるのに違いない。今では溜池の土堤は崩壊し、もはや水が澤山溜まっていけないので、人々はみなそこを田としている。しかしその土地は濕潤で廣く、いささか水をせき止めれば今なお自ずと池ができ、舟を浮かべて歌うことができる。ただ遠い昔のひそみにならうことのできる者がいないだけである。なんとも嘆かわしいことだ。後に、この四朝が毎年訪れて見てまわると言っているのは、上昇して補任された後もなお昔住んでいた所が懐かしく心引かれるので、それでしばしば良常山に安らぎ、良き友②と舊交を温めるのである〉

張玄寶^③は定襄の人である。魏の武帝の時にかつて茂才に推舉されたが、郷里に歸つて西河の薊公^④に師事し、朮餌^⑤を服用し、あわせて洞房白元^⑥の事を行つた。後に少室山で眞人の樊子明^⑦に出會ひ、遼變隱景の道^⑧を授かつた。昔は天柱山中^⑨にいたが、今は華陽洞天^⑩にやつて來て、理禁伯^⑪となつてゐる。理禁伯はもろもろの水雨のことをつかさどる官である。この人は空無^⑫を論じること長けており、なかなかの論客である。いつも本無^⑬の理の立場に立つて言うのには、「無は大有の宅であり、小有の生まれるゆえんである。小有を積み重ねて小無を養ひ、大有を見て大無を本とする。有はまた無無であり、無無はまた有有でもある。故に自分の目にはまったく萬物が見えず、また萬物にも無は見えない。有に寄寓して無を成し、無に寄寓して無を得る。ここにおいて無は無の宅である。太空もまた無を宅とするのである。自分が生まれる以前は、天下はみな無無である」。その所論の端的な據り所はこのようなものである。桐柏眞人などの眞靈たちも言い負かすことができない。自ら言うには、「昔かつて蓬萊の宋晨生^⑭のもとに出かけた。晨生とは蓬萊の左公である。ともに無について論じ、あらまし私の考えを心得たが、それから先となると、本有すら分ならず、そんなことではどうして本無など分かるうか。その他の人と空無について論じて、天下の誰一人として話にならない」。氣位が高く理窟をこねることこのようである。東卿司命君、紫微夫人、玄清夫人すらちよつかいを出すことができない。理

禁伯の官職はまた保命君の監國でもある。ここに空無の理が論じられてゐるが、なかなかよく無の根本をつかんでゐる。それにしても道家の奥深い道理を詳しく明らかにすることはまことに難しい。眞人の才能學問にもまた大きく優劣の差が存在する。東卿、桐柏、紫微、玄清は、思うにみんなからそろつて談論の雄者として立てられており、それ故これらの人たちを擧げて代表としたのである。按ずるに、『左傳』に「國君の世子が（國君の行軍に）從えば撫軍^⑮と言ひ、留守を守れば監國^⑯と言ふ」とある。監國の任務に當たるのはつまり太子である。ここに監國と言ふのは、あるいは監司に作つてあつたからなのであらう。

趙威伯^⑰は東郡の人である。若い頃、邯鄲の張先生に學んだ。張先生は仙道の體得者であつた。晩年に中嶽で范丘林^⑱から『玉佩金璫經』を授かつた。范丘林は、漢の樓船將軍衛行道の妻である。仙道を學んで仙人となり、かくて日月の精氣を汲みとる道術を授かつて實踐した。さらに九靈明鏡^⑲華を服用し、かくて仙道を成就した。昔やはり華陽洞天^⑳にやつて來て、保命君の丞となつた。『河圖』に、「吳楚の地域には太平聖君に出會える者が澤山いる」とあるが、いつも人に、「この言葉は嘘ではない。そのあかしはもうすぐだ」と語つてゐる（そうだとすれば、修行者たちはどうして一層ますます勤め勵まずにおられようか）。その明鏡を存思する方法は、世間一般に行わ

れている普通の方法とは違う。范丘林から授かった口訣に、「上手な嘯とは、澤山の鳥たちが入り亂れて鳴くように、あるいは風が激しく林の木々を震わすように、あるいは鼓を打つ音のようになる」とある。ある時には天市壇の上で奮然と北に向き、長嘯して風を呼ぶと、たちまちにして雲が上空に舞い上がり、激しい氣が林を揺り動かし、またあるいは小暗い霧が疾風のごとくに集まり、またあるいはこぬか雨が濛々とたちこめる。保命君には四人の丞がいる。その一人(である趙威伯)は、暴雨を降らせるをつかさどり、また五芝や金玉草を管轄している²⁵。もし大雨を招きよせたいと思うならば、奏章をそのもとに届けるがよい(さらに理禁伯もまた雨をつかさどるので、雨を請うのならばあわせて奏章をしたためのがよい)。

その丞の一人は咸陽の樂長治²⁶であり、東卿司命君の同郷人である。小茅君によつて登用された。後漢の桓帝の時の中書郎であったが、晩年に中獄の李先生²⁷から仙道を授かり、七元法を行つて仙人となった(二百年以上も離れているのに、なおも同郷人としての恩澤を蒙つたのである)。

また一人は、孟君の入室の弟子である鄭雉正²⁸であつて、孟君の依頼で採用された(孟君は京兆の人。孟先生と呼ぶこともある。どのような官名官位であるのかは分からない)。

また一人は、西山の唐公房である²⁹(この人については『神仙傳』に記載がある。蜀の人であり、李八百に仕えた者である)。

樂長治は災害のことをつかさどり、鄭雉正は考罰と崇りのことをつかさどり、唐公房は生死をつかさどり、趙威伯は仙籍ならびに學道者の記録、暴雨や靈妙な芝草をつかさどる。(洞宮の官僚は、吳越の萬民を取り締まる。現任者はこの四人の丞だけである。その下には四帥がいる。そのことは第三篇中に見える)

定録君がこれを言われた。(右のこの言葉は許掾の寫しがある。紙や墨の様子からすると、これもやはり前の一篇のことを言っているのであるが、そこにはこの部分が缺落している。この行の後もちぎれている。恐らくさらに述べられた事柄があつたのだが、みな失われてしまったのであろう。まったくもつて残念である)

(1) 執蓋郎 『眞話』卷一五葉八表「顧和從遼東戍還、有事已散、北帝當用爲執蓋郎、蓋郎范明遷補典柄侯」、『眞靈位業圖』第二左位「正一左執蓋郎鄒偉玄」。

(2) 朋好 『北史』卷八八睦夸傳「婦父鉅鹿魏攀、當時名達之士、未嘗備婿之禮、情同朋好」。

(3) 張玄賓 『眞靈位業圖』第六右位「理禁張玄賓」、注「主雨水之官、亦保命書」。

(4) 西河釗公 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「西河釗公」、注

「張理禁之師」。

- (5) 洞房白元之事 『登真隱訣』卷上「洞房中有三眞、左爲無英公子、右爲白元君、中爲黃老君、三人共治洞房中、此飛眞之道、別自有經」、注「白元無英合爲一眞、又白元在肺、不入洞房」。
- (6) 樊子明 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「眞人樊子明」。
- (7) 遯變隱景之道 『三洞珠囊』卷三服食品「(登真隱訣第七)又云、…遯變隱景道」。
- (8) 天柱山 『天地官府圖』(『雲笈七籤』卷二七)七十二福地「第五十七天柱山、在杭州於潛縣、屬地仙王伯元治之」。
- (9) 理禁伯 『周氏冥通記』卷四「九月二十五日、忽夢見張理禁、令誦道德、…九月二十九日、夢見天西北一物、長數十丈、青赤色、首尾等大、狀似虹、因到張理禁處、問此爲何物、答云、…」注「張爲保命府禁伯、主請雨水、故以問之、事出眞話」。
- (10) 空無 『維摩經』菩薩行品「觀於空無而不捨大悲、觀正法位而不隨小乘」、『晉書』卷三五裴頠傳「蓋有講言之具者、深列有形之故、盛稱空無之美」。
- (11) 談士 慧遠「答何鎮南難沙門袒服論」(『弘明集』卷五)「但妙迹隱於常用、指歸昧而難尋、遂令至言隔於世典、談士發殊塗之論」。
- (12) 本無之理 王洽「與林法師書」(『廣弘明集』卷二八)「今本無之談、旨略例坦然、每經明之、可謂衆矣」、『肇論』不眞空論「本

無者、情尚於無、多觸言以賓無、故非有有即無、非無無即無」。

- (13) 有有、無無 『莊子』天地「泰初有无、无有无名、一之所起、有一而未形」。同在宥「頌論形軀、合乎大同、大同而无己、無己、惡乎得有有」、『肇論』答劉遺民書「且夫心之有也、以其有有、有不自有故、聖心不有有、不有有、故有無有、有無有故、則無無、無無故、聖人不有不無、不有不無、其神乃虛」。
- (14) 宋晨生 『眞靈位業圖』第四左位「蓬萊左公宋晨生」。
- (15) 玄玄 孔稚珪「北山移文」(『文選』卷四三)「談空空於釋部、覈玄玄於道流」。
- (16) 左傳稱：『左傳』閔公二年「晉侯使太子申生伐東山臯落氏、里克諫曰、太子奉冢祀、社稷之粢盛、以朝夕視君膳者也、故曰冢子、君行則守、有守則從、從曰撫軍、守曰監國、古之制也」。
- (17) 趙威伯 『眞靈位業圖』第六右位「趙威伯」、注「主仙籍并暴雨水」。
- (18) 范丘林 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「范丘林」、注「女眞、趙威伯六甲之師」。
- (19) 九靈明鏡華 『登真隱訣』卷中「使兩目中有白氣如雞子大在目、則復故也」、注「目中白氣、即是明鏡之道」、『三洞珠囊』卷三服食品「(登真隱訣第七)又云、…九靈明鏡守玄白術」。
- (20) 此一人主：『周氏冥通記』卷一注「此承依別自是趙、於保命四承居火者、名威伯、河東人、主記仙籍并風雨水、領五芝金玉

草、事出眞誥。『十州記』玄州「仙官宮室各異、饒金芝玉草」。

(21) 樂長治 『眞靈位業圖』第六右位「樂長治」、注「主災害」。

(22) 中嶽李先生 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位に見える。

(23) 鄭稚正 『眞靈位業圖』第六右位「鄭稚政」、注「主考注」。「無上祕要」卷八三得地仙道人名品「鄭稚政、戴孟弟子」。

(24) 西山唐公房 『眞靈位業圖』第六右位「唐公房」、注「主其死生」。また、『神仙傳』李八百を参照。

(25) 樂長治主災害 『周氏冥通記』卷二注「樂丞字長治、咸陽人、主災害、四丞中之一也」。

(26) 唐公房主生死 『周氏冥通記』卷三注「唐丞名公房、亦四丞之一、云主死生」。

(27) 仙籍 『紫陽真人內傳』「東海小童君藏之於靈景之城、琳霄之室、非有仙籍者不授矣」。

(28) 事在第三篇中 「三」は「二」の誤りか。『眞誥』卷七葉六裏および葉一〇表を参照。

杜〔契〕^①「契」者、字廣平、京兆杜陵人、建安之初、來渡江東、依孫策入會稽、嘗從之、後爲孫權作立信校尉、黃武二年、漸學道、遇介琰先生、授之以玄白術、隱居茅山之東面也、守玄白者能隱形、亦數見身出此市里、〔契〕「契」與徐宗度晏賢生合三人、俱在茅山之中、時

得人洞耳、或自採伐、貨易衣糧於虛曲、而人自不知之耳、〔猶〕^②「介」琰者即白羊公弟子也、今在建安方山中也〔琰即禁山符云、「爲孫權所殺、化形而去、往建安方山、尋白羊公」、杜必當於此時受道也、〕〔契〕音薛、即與舜同、〔契〕「契」字四畫、契三畫、分毫有異也、徐宗度、晉陵人、作孫皓左典軍呂悌司馬、受風谷先生氣禁道、故得〔契〕「契」俱、晏賢生是步陟外甥、即宗度之弟子也。

〔契〕「契」弟子二人、一人孫賁孫女寒華也、少時密與〔契〕「契」通情、後學道受介琰法、又以法受寒華、寒華初去時、先叛入建安、依邵武長張毅、毅即〔契〕「契」通親、故得免脫、事平乃歸茅山耳、寒華行玄白法而有少容、今嘗俱處也、玄白道忌房室、自〔契〕「契」受道、不得行此。〔吳豫章太守孫賁之〕^③「子」〔孫〕也、山陰王孫奚之子寒華也、尋此二人、乃因奔淫、無應入道、而用志能自抑斷如此、此宜其階也、賁是權同堂兄、有子四人、各名鄰安熙疏而無奚、或是小名、又無奚或爲王者也

其〔弟一〕^④「二弟」子是陳世京、世京、孫休時侍郎、少好道、數入佛寺中、與〔契〕「契」鄉里、故晚又授法、〔契〕「契」初將寒華入建安之時、時亦同舉、實賴世京濟其密計焉、此數子今處茅山之外、非常在洞中之客也、亦時得入耳、亦數至長史舍屋間遊戲、然多在大茅之間〔建安初至孫休即位六十二年、杜初從孫策、不減年二十左右、則

逃時已年八十許矣、不容此爾、世京今服朮澤瀉、寒華無所服。茅山通無石室、則必應起廬舍、既有服餌、使須藥具、兼猶資衣糧、不容都爲隱默、但于時林苑幽阻、無人尋迹耳」

守玄白之道、常旦旦坐臥任意、存泥丸中有黑氣、存心中有白氣、臍中有黃氣、三氣俱⑤「生」、如雲以覆身上、因變成火、火又繞身、身通洞徹、內外如此、旦行之、至日向中乃止、於是服氣百二十過、都畢、道止如此、使人長生不死、辟卻萬害、所謂知白守黑、求死不得、知黑守白、萬邪消卻、尤⑦「食」禁六畜肉及五辛之菜、當別寢靜思、尤忌房室、房室即死。

此道與守一相似、但如爲徑要以減之耳、忌房室甚於守一、守一之忌在於節之耳、初存氣出如小豆、漸大衝天、三氣纏繞繞身、共同成一混沌、忽生火在三煙之內、又合景以鍊一身、一身之裏、五臟照徹、此亦要道也。

此數人竝已三百餘年、正玄白之力也、竝是不死之學者、未及於仙道。玄白事已重抄出在第三篇修用中、計杜於建安初可年二十許、至晉興寧三年、始一百九十歲、諸人又晚學、而此云竝三百餘年、恐長三字、亦強可是耳

若欲守玄白者、當與其經、經亦少許耳、自可兼行以除萬邪卻千害、行之三十年、匿身隱形、日行五百里。一名此道爲胎精中景玄白法也」

爾
八月十四日夜、保命仙君告。此告必應是告牙、亦可是試以戲長史

牙守一、竟未起別寢邪。此一語是論玄白守一事、忽然憶黃獸、黃獸當是未免房中、因而及此也

淳景翳廣林、曖曖東霞升、晨風舞六煙、敦鬱八道騰、五嶽何必秀、名山亦足凌、矯手攝洞阜、棲心潛中興、吐納胎精炁、玄白誰能勝。
右杜廣平恆喜歡吟此、今疏相示。

篇
右定錄君道此。此亦應同十四夜告、從杜來九條、竝有掾寫、共一篇

- ① 愈本が「契」を「契」に作るのに従う。以下同じ。
- ② 愈本が「猶」を「介」に作るのに従う。
- ③ 意をもって「子」の字を「孫」の字に改める。

- (4) 愈本が「第一」を「二弟」に作るのに従う。
- (5) この段、『眞話』卷一〇葉二表および『登眞隱訣』卷中に見える。
- (6) 『眞話』卷一〇が「仙」を「生」に作るのに従う。
- (7) 『眞話』卷一〇が「食」を「禁」に作るのに従う。
- (8) 以下三條、『登眞隱訣』卷中に見える。
- (9) これ以下、『眞話』卷一〇葉二裏に見える。
- (10) この段、『雲笈七籤』卷九六保命仙君告許虎牙杜廣平常喜歌に見える。

杜契^①は字は廣平、京兆杜陵の人。建安の初年、江南に渡來し、孫策を頼つて會稽に入り、常に彼につき従つた。その後、孫權のために立信校尉となつた。黃武二年(二三三)、次第に仙道を學び、介琰先生^②に出會つて玄白の術を授けられ、大茅山の東側に隠れ住んだ。玄白を守る者は體を隠すことができるが、またしばしば姿を現してこのあたりの町中に出て來ることもある^③。契と徐宗度、晏賢生^④のあわせて三人はそろつて茅山中におり、時おり洞天内に入つて來ることができ、あるいは自ら草を摘み木を伐つて村里で衣服や食糧と交易することもあるのだが、人の方がそうと氣づかないだけのことだ。介琰は白羊公の弟子である。今は建安の方山中にいる(介琰のことは、『禁山符』^⑤に「孫權に殺されたが、體を變化させて逃げ去

り、建安の方山に出かけて白羊公を訪ねた」とある。杜契はきつとその時に仙道を授かつたのであらう。契の音は薛であつて、つまり舜(の時代の殷契)と同じ^⑥。契の字は四畫、契の字は三畫であつて、ほんのちよつぱり違いがある。

徐宗度は晉陵の人。孫皓の左典軍の呂悌の司馬となり、風谷先生の氣禁の道を授かつた。だから杜契と一緒にされるのだ。晏賢生は歩陟^⑦の外甥であつて、徐宗度の弟子である。

杜契の弟子は二人。一人は孫貫^⑧の孫娘の寒華^⑨である。若くして密かに杜契と情交を通じた。(杜契は)その後仙道を學んで介琰の仙法を授かり、さらにその仙法を寒華に授けた。寒華が最初駆け落ちした時には、まず建安に逃げこんで邵武の長官の張毅を頼つた。張毅は杜契の親族であり、それで無事にきり抜けることができた。事が落ち着いてからやつと茅山に戻つたのである。寒華は玄白の仙法を實踐して少女のような容貌をしている。今はいつも一緒にいる。玄白の道は房室を禁忌とし、杜契がその道を授けてからは、それを行うことができない。(吳の豫章太守孫貫の孫娘、山陰王孫奚の子の寒華である。この二人はなんと色欲に走つた縁なのだから仙道に進めるはずはないのだが、決心してよくここまで抑制できたのは、(仙道の)階梯を歩むにふさわしい。孫貫は孫權の同堂兄であつて四人の息子があり、それぞれ鄰、安、熙、疏を名とするが、奚を名とす

る息子はいない。あるいは幼名なのかも知れぬ。また奚の名で王となった者はいない

そのまた一人の弟子は陳世京である。陳世京は孫休の時の侍郎。若くして道を好み、しばしば佛教寺院に入った。杜契と同郷だったので、晩年になってからさらに仙法を授かった。杜契が最初寒華を伴なって建安に入った時、その時にも行動をともし、まったく陳世京のお蔭で内密のたくらみを遂げることができたのである。これら數人は、今は茅山の外に住んでいて、いつも洞天にいる者ではない。それでも時おり入って來ることができるとだ。またしばしば許長史の家のあたりに出かけてぶらぶらしているが、しかししたいはいは大茅山のあたりにいる《建安の初年から孫休の即位までは六十二年。杜契が最初孫策につき従った時は二十歳前後にはなっていたはずであり、そうだとするならば、逃避行の時にはすでに八十歳ばかりということになる。そんなはずはあるまい》。陳世京は、今は朮と澤瀉^①とを服用している。寒華は何も服用していない。《茅山にはどこにも石室がないから、きつと廬舎を建てたに違いない。服食をやるからには藥材が必要であるし、おまけに衣服や食糧の資に使ったのだから、まったくひっそりだんまりというわけにはゆくまい。だが當時は林や草むらが奥深く險阻で、誰も跡をつける者がなかったまでである》

玄白を守る道術。常に毎朝、坐っていても横になってもよいが、泥丸の中に黒氣があり、心臟の中に白氣があり、臍の中に黃氣があるさまを存思する。三氣がともに生じて雲氣のように身を覆い、それがそのまま變化して火となり、火がさらに體にまつわる。體全體が貫き通り、内と外が一つのようなになる。朝、これを行い、正午近くになってようやく止める。そこで、氣を百二十回復して、すべてが終わる。(玄白を守る)道術は以上のとおりである。人を長生不死にさせ、あらゆる障害を退ける。いわゆる白を知って黒を守れば死のうとしても死ねず、黒を知って白を守れば萬をもつて數える邪惡は消滅する^②というものである。六畜の肉と五辛の野菜は、とりわけ禁忌である。また、家族と寢所を別にし、靜思しなければならぬ。とりわけ房室のことは禁忌である。房室のことを行えば、すぐに死ぬ。

この道術は守一の法と似ているが、ただ直截端端であるので簡單になつていようだ。房室を禁忌とすること守一よりも甚だしく、守一の禁忌はひかえめにする點に存する。初め、小豆くらいの大さの氣が出てきて、それが次第に大きくなって天を衝くさまを存思する。三氣のからまりあつた煙が體にまつわり、それらが全部、一つの混然とした塊になる^③。突然、三氣の煙の中に火が生ずる。さら

に景と合體して體全體を鍊りあげる。體全體の中では五臟があか
かと輝きわたる。これもやはり重要な道術である。

これら數人がそろつてすでに三百餘歳であるのは、玄白の術のお
蔭に他ならぬ。いずれも不死の道の修行者ではあるが、まだ仙道の
域には達していない。〈玄白のことはすでに重複して第三篇の實修
法の中に抄出しておいた。計算してみると、杜契は建安初年(一九
六)に二十歳ばかりであつたから、晉の興寧三年(三六五)までで
やつと百九十歳である。その他の人たちは一層後輩の修行者であつ
て、ここにそろつて三百餘歳とあるのは、恐らく「三」の字が餘計
なのであり、せいぜいのところでも「二」なのであらう

もし玄白を守ろうとするならば、それに關する經典とともに行わ
なければならぬが、經典といつてもわずかばかりのものだ。それを
あわせ實踐することによつて、あらゆる邪惡や災厄を除き退けるこ
とができるであらう。これを三十年にわたつて實踐するならば、體
を匿し姿を隠し、一日に五百里を行くことができるであらう。〈この
道術の一名は胎精中景玄白法である

八月十四日の夜、保命仙君のお告げ。〈このお告げはきつと牙(許
聯)に告げられたものであらう。あるいは試して許長史をからかつ

てみたのかも知れない

許牙は守一を行いながら、結局まだ別棟の寢所を建てないのか。
〈この一條のお告げは、玄白と守一のことについて論じていて、ふと
寅獸(許聯)のことを思い出したのである。寅獸はきつとまだ房中
から解放されず、それでこのことに言い及んだのであらう

たゆたう光は廣大な林を覆い、

おぼろげなる中に東の空の朝焼け雲はたち昇る。

晨風に六つの方角のもやは舞い、

むらむらと八つの道にとかけ上がる。

五嶽とてそれほど秀拔なものではなく、

名山とて凌駕するのはたかが知れたこと。

手を挙げれば洞天の丘はわが手のうち、

心を棲まわせたいたの思ひは密かに湧き起こる。

胎精の氣を呼吸する

この玄白の術を誰かやれる者がおらうか。

右は杜廣平(契)がいつも好んで歌唱吟詠したものである。今書

きつけて示すこととする。

右は、定録君がこのように言われた。〈これもきつと十四日夜のお

告げであろう。「杜（契）」以下の九條はすべて許掾の寫しがあり、あわせて一篇をなしている。

- (1) 杜契 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「山外其東者、杜契」。
- (2) 介琰先生 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「介琰」、注「白羊弟子」、『搜神記』卷一を参照。
- (3) 隱形、見身 『抱朴子』對俗「隱形以淪於無象、易貌以成於異物」。同仙藥「懷其大根即隱形、欲見則左轉而出之」。同黃白「夫變化之術、何所不爲、蓋人身本見、而有隱之之法、鬼神本隱、而有見之方」。
- (4) 徐宗度、晏賢生 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「徐宗度、晏賢生」、注「二人契友」。
- (5) 禁山符 『眞誥』卷二〇葉三表「掾書西嶽公禁山符」。『無上祕要』卷八四得太清道人名品「赤將子、黃帝時人、授西嶽公禁山符、又服火法」。
- (6) 契音薛、即與舜同 『史記』殷本紀「殷契、…帝舜乃命契曰…、封于商、賜姓子氏」、正義「契音薛」。
- (7) 氣禁道 『抱朴子』至理「或有邪魅山精、侵犯人家、以瓦石擲人、以火燒人屋舍、或形見往來、或但聞其聲音言語、而善禁者以炁禁之、皆即絕、此是炁可以禁鬼神也」。『水經注』卷四〇

漸江水「孫權使賀齊討黠歙山賊、賊固夥之林歷山、山甚峻絕、又工禁五兵、齊以鐵杙柵山、升出不意、又以白楮擊之、氣禁不行、遂用奇功平賊」。

- (8) 步陟 步隲（『三國志』卷五二）の誤りであろう。『無上祕要』卷八三得地仙道人名品「晏賢生、步隲外甥」。
- (9) 孫賁 『三國志』卷五一宗室孫賁傳を参照。
- (10) 寒華 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「孫寒華」、注「女眞」。
- (11) 澤瀉 『重修政和證類本草』卷六草部上品之上「澤瀉、味甘鹹、寒、無毒、主風寒濕痺、乳難、消水、養五藏、益氣力肥健、補虛損五勞、除五藏痞滿、起陰氣、止洩精消渴淋瀝、逐膀胱、三焦停水、久服、耳目聰明、不飢、延年輕身、面生光、能行水上」。
- (12) 知白守黑、求死不得… 『老子』第二十八章「知其白、守其黑、爲天下式」。『抱朴子』地眞「玄一之道、亦要法也、無所不辟、與眞一同功、吾內篇第一名之爲暢玄者、正以此也、守玄一復易於守眞一、眞一有姓字長短服色目、玄一但此見之、初求之於日中、所謂知白守黑、欲死不得者也」。陶植「還金術」上「『雲笈七籤』卷七〇」「今謹按黃白內經、神農云、知白守黑、求死不得、白者金精、非世間金、黑者水銀、非世間銀」。
- (13) 混沌 『白虎通』天地「始起先有太初、然後有太始、形兆既成、名曰太素、混沌相連、視之不見、聽之不聞」。

(14) 胎精中景玄曰法『眞誥』卷五葉三表「君曰、仙道有九丹變化胎精中記」。『登眞隱訣』卷中「杜廣平所受介琰玄曰之術、一名胎精中景玄曰內法」。

(15) 曖曖『楚辭』離騷「時曖曖其將罷兮、結幽蘭而延佇」、王逸注「曖曖、昏昧貌」。

(16) 敦鬱 宋玉『風賦』(『文選』卷一三)「夫庶人之風、墮然起於窮巷之間、堀堦揚塵、勃鬱煩冤、衝孔襲門」、李善注「勃鬱煩冤、風迴旋之貌」。

(17) 矯手 陸機「吳趨行」(『文選』卷二八)「大皇自富春、矯手頓世羅」、李善注「說文曰、矯、舉手也」。

(18) 胎精 『洞眞太一帝君太丹隱書洞眞玄經』「修之三年、可以照鏡三田、以致神仙、朝適六合、夕守泥丸、堅執胎精、心中常歡」。

峩峩岑山、幽巖嶺芳、卓卓先生、乘和來翔、散髮頽穎、躬耕陵壠、三餐自足、不期裹糧、玉迹東映、鳳響西彰、公侯招之、凌風振裳、處不矜嘿、出不希揚、被褐容與、杖策頽頽。〈此一篇有異手書、乃接前詩後、而後又仍接以蕭寂輩門事、既眞書止說前一篇、已自右畢、則此詩非復是杜所作、而不知其義是誰〉

峩々として高く聳える山々^①、
奥深く切り立った巖の嶺々は美しい。

卓卓としてすぐれた先生は、

和氣に乗って翔け来る^③。

髪をだらりと振り亂し、

自ら丘陵に耕す。

三度の食事に事缺くこともなく、

食料を袋につめて遠方へ出かけようなどとは思わない。

すばらしい仙跡が東方に映え、

鳳凰の鳴き聲が西方にはつきりと聞こえる。

王侯が招けば、

風に乗って裳裾をひるがえらせ^⑤、

野に在っては沈黙を誇ることもなく^⑦、

出仕しても高く用いられることを願わない。

粗衣を着てゆったりと過ごし^⑧、

策を杖ついで上り下りしよう^⑨。〈この一篇は別人の書があり、(そ

れでは)前の詩の後を承けて、後はさらに「蕭寂輩門」のことに續

けている。眞書では前の一篇を説くだけで、すでに右で終わっているから、この詩は杜廣平が作ったものではないし、誰の事を意味し

ているのかも分からない〉

- (1) 岑山 『列仙傳』鹿皮公「岑山上有神泉、人不能至也、…上其巔、作祠舍、留止其旁」。
- (2) 卓卓 『世說』容止「有人語王戎曰、嵇延祖卓卓如野鶴之在雞羣、答曰、君未見其父耳」。
- (3) 來翔 『史記』五帝本紀「於是禹乃興九招之樂、致異物、鳳凰來翔」。
- (4) 三餐 『莊子』逍遙遊「適莽蒼者、三飡而反、腹猶果然、適百里者、宿舂糧、適千里者、三月聚糧」。
- (5) 裹糧 『孟子』梁惠王上「昔者公劉好貨、詩云、乃積乃倉、乃裹餼糧、于橐于囊、…故居者有積倉、行者有裹囊」。
- (6) 凌風振袂 謝朓「直中書省」(『文選』卷三〇)「安得凌風翰、聊恣山泉賞」。曹植「七啓」(『文選』卷三四)「動朱脣、發清商、揚羅袂、振華裳」。
- (7) 處不矜嘿 『周易』繫辭上「君子之道、或出或處、或默或語」。
- (8) 容與 『漢書』禮樂志「郊祀歌」練時日「俠嘉夜、蒞蘭芳、澹容與、獻嘉觴」。
- (9) 杖策頽頽 『莊子』讓王「大王賈父曰、…且吾聞之、不以所用養害所養、因杖策而去之、民相連而從之、遂成國於岐山之下、夫大王賈父可謂能尊生矣」。『毛詩』邶風燕燕「燕燕于飛、頽之頽之」、傳「飛而上曰頽、飛而下曰頽」。

(10) 蕭叔華門 『眞誥』卷一七葉一表を参照。

近所標靜舍地、此金鄉之至室、若非許長史父子、豈得居之、後世當有赤子賢者、乃得居此鄉爾、子孫事祕之、不可輕泄。(按此所標、即應是後云長史所營屋宅處也、金陵之地乃廣、則此爲最勝之地、非眞仙不得居、故唯長史據可居耳、赤子賢者、莫測爲誰、或是姓赤、或是大人、或將來英賢應運者、乃當復得居之、既方是後世子孫時事、則非今所宜預言、兼以此地福重、不欲宣廣、使人濫住、致有犯穢故也)

許長史今所營屋宅、對東面有小山、名雷平山、周時有雷氏養龍、來在此山、後有姜叔茂田翁亦居焉、其山北有柳汧水、或名曰田公泉、以其人曾居此山取此水故也。(雷平山在小茅北、基址相連、田公泉今具存、左右甚多水柳樹、故名柳汧、此泉即前所云浣衣不用灰者、長史宅自湮毀之後、無人的知處、至末初、長沙景王檀太妃供養道士姓陳、爲立道士廨於雷平西北、即是今北廨也、後又有句容山其王文清、後爲此廨主、見傳記、知許昔於此立宅、因博訪舊宿、至大明七年、有術虛老公徐偶、云其先祖伏事許長史、相傳識此宅只在今廨前烏柏樹處、應是似猶有齋堂前并存、于時草萊無沒、王即芟除尋覓、果得磚井、(上)「土」已欲滿、仍掘治、更加甃累、今有好水、水色

小白、或是所云似鳳門外水味也、於是審知是故宅、從來空廢、無敢居者、既云金鄉至室、便爲伏龍之膏腴矣、其西北卽有長岡連亘、呼爲長隱者也」

雷平山之東北有山、俗人呼爲大橫山、其實名鬱岡山也、名山記云所謂岡山者也、下有泉水、昔李明於此下合神丹而升玄洲、水邊今猶有處所、此山正東面有古時越翳王冢。〈本墓字、後人贗作冢、此山今連延甚長、後云古人合丹、猶應是此李明、但言在方隅、則疑其小近南、水邊不復見有基迹、或漸蕪沒故也、越翳王是句踐四世孫、初不肯立、逃入菁山穴、越人〈董〉^②「董」出之、後於吳徙還會稽、以周宣王十一年、爲孫諸咎所殺、越人又殺諸咎、不知那得遠來葬此、或當有神異處故也、今尋視未見指的墳冢、而如有兆域處者」

右定錄君言。〈右三條有掾寫〉

- (1) 俞本が「上」を「土」に作るのに従う。
- (2) 俞本が「董」を「薰」に作るのに従う。

最近明示した靜舎の場所は、これぞ金壇の郷の最上の部屋である。

許長史父子でなければ、誰が住めようものか。後世にはきっと赤子賢なる者が現れて、この郷に住むことができるはずだ。子孫の事は祕密にして、軽々しく漏らしてはならない。^①〈按ずるにここで明示したところというのは、きっとこの後に述べている許長史の營んだ家があった場所のことであろう。金陵の地は廣いが、ここが最もすぐれた土地であり、眞仙でなければ住めない。だから許長史と許掾の父子だけが住めたのだ。赤子賢とは誰のことか見當がつかない。あるいは赤という姓なのか、あるいは有徳の大人なのか、それとも將來のすぐれた賢者でそのようなめぐりあわせにある者にして、始めてまたここに住むことができるというのであろう。後世の子孫の時のことであるからには、今ここであらかじめしゃべるのはよくない。そのうえ、この土地は福が大きいので、あまり宣傳したくないのである。俗人をみだりに住まわせると、福地を穢すことになるからである〉

許長史が今營んでいる家は、東面に對して小さな山があつて、雷平山という。周の時代に雷氏という者がいて龍を飼っていたが、この山にやつて來た。その後、姜叔茂、田翁もまたここに住んだ。その山の北には柳汧水があり、またの名を田公泉ともいう。田翁がかつてこの山に住み、この水を汲んでいたからである。〈雷平山は小茅山の北にあつて、裾野が連なっている。田公泉は今もちゃんとある。

その周囲には水柳樹がとても多いので、柳汧というのである。この泉は、前に言及された衣服を洗うのに灰を必要としないという泉である。許長史の家は壊れてしまった後、はつきりとその場所を知る者はいない。宋の初めになって、長沙景王と檀太妃が陳という姓の道士を供養し、彼のために道士の庵を雷平山の西北に建てたが、それが現今の北廨である。その後また句容山其の王文清なる者があり、後にこの庵の主となり、(三茅君の)傳記を見て、許氏がその昔ここに家を建てたことを知り、土地の古老に廣く問いただした。大明七年(四六三)になって、述墟の老人の徐偶という者がおり、彼の先祖は許長史に仕えていたので、許長史の家の場所が現在の庵の前の烏柏の木のところであつたことを代々傳え知っている、きつとまだ齋堂^⑤の前の井戸も残っているだろうとのことであつた。當時、そのあたりは草ぼうぼうで何もかも埋もれており、王文清がすぐに草を刈って探してみると、果たして煉瓦積み^⑥の井戸が見つかったが、土がほとんど一杯に詰まっていた。そこで、きれいに掘り出してあらためて煉瓦を積んだ。今ではよい水が得られるが、水の色はやや白っぽい。これがいわゆる鳳門外の水の味に似ているという井戸なのだろうか。かくて、ここが許長史の故居であることがはつきりと分かった。これまでずっと廢墟となっていて、あえて住もうとする者はなかつたのである。「金壇の郷の最上の部屋」と言っているからには、ここが「伏龍の膏腴」の地なのであろう。その西北には長い

岡がずっと連なっており、長隱と呼ばれているものである。

雷平山の東北に山があり、世俗の間は大横山と呼んでいるが、本當の名前は鬱岡山という。『名山記』^⑦に、「いわゆる岡山」というものである。山麓に泉があり、昔、李明^⑧がこのあたりで神丹を鍊り合わせて玄洲に昇った。水邊には今なおその場所がある。この山の眞東の面には古の越の翳王^⑨の「冢」がある。へもとは「墓」の字であつたが、後人が塗りつぶして「冢」の字にしている。この山は今稜線が長々と連なっている。後に「古人が丹を鍊り合わせた」とあるのは、やはりきつとこの李明のことであらう。ただし方隅^⑩にあると言っているから、恐らくはやや南に近いのであらう。水邊にもはやその跡が見られないのは、次第に草に埋もれてしまったからであらう。越の翳王は句踐の四世の孫である。初め王位に就くことを肯んぜず、菁山の洞窟に逃げこんだが、越の國人がいぶり出した。その後、吳から會稽に戻つたのである。周の宣王の十一年に(太子の)孫諸咎に殺されたが、越の國人はまた諸咎を殺した。なぜこんな遠いところにやって来て葬つたのかは分からないが、あるいは神異のあるべき場所だからなのであらう。今探してみても確かな墳墓の跡は見られないが、墓域^⑪は残っているようである。

右は定録君のお言葉。(右の三條は許掾の寫しがある)

- (1) 不可輕泄 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「至士齋金寶效心、盟天而傳、輕泄漏慢、殃及九祖、長役鬼官」。
- (2) 大人 『周易』乾「九二、見龍在田、利見大人」。
- (3) 周時有雷氏養龍 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「雷氏」，注「周氏養龍」。
- (4) 長沙景王 陶弘景「許長史舊館壇碑」(『華陽陶隱居集』卷下)「宋初、長沙景王就其地之東、起道士精舍」。長沙景王の傳は、『宋書』卷五一を參照。
- (5) 齋堂 『周氏冥通記』卷一注「經堂被燒、移經出安靜中、堂屋四間、東二間作齋堂、西二間姨母住」。
- (6) 所云似鳳門外水味 『眞誥』卷一一葉四表を參照。
- (7) 名山記 『眞誥』卷一一葉四裏「名山內經福地誌曰、伏龍之地、在柳谷之西、金壇之右、可以高棲」。
- (8) 李明 『眞靈位業圖』第四左位「李明」、注「雷平台丹」。『華陽陶隱居內傳』卷中注「登眞隱訣云、昔李明於此下合九鼎丹、以升玄洲、發掘基址、屢得破瓦器、乃其舊用」。
- (9) 越醫王 『史記』越王句踐世家「句踐卒、子王鼫與立、王鼫與卒、子王不壽立、王不壽卒、子王翁立、王翁卒、子王翳立」。
- (10) 後云古人合丹 『眞誥』卷一四葉二裏を參照。

- (11) 方隅 『眞誥』卷一四葉二裏「雷平山之東北、良常山之東南、其間有燕口山、三小山相隔故也、一名曰方隅」。
 - (12) 越人薰出之 『莊子』讓王「越人三世弑其君、王子搜患之、逃乎丹穴、而越國無君、求王子搜不得、從之丹穴、王子搜不肯出、越人薰之以艾、乘以王輿」。
 - (13) 以周宣王十一年… 『史記』越王世家「王翳卒、子王之侯立」、索隱「紀年云、翳三十三年遷于吳、三十六年七月、太子諸咎弑其君翳、十月粵殺諸咎、粵滑、吳人立子錯枝爲君」。
 - (14) 神異 『後漢書』列傳七二下「方術薊子訓傳「薊子訓者、不知所由來也、…有神異之道」」。
 - (15) 兆域 『周禮』春官家人「家人掌公墓之地、辨其兆域而爲之圖」、注「圖謂畫其地形及壘所處而藏之」。
- 華陽中玉碣文在童初府西向、一云四面、其文曰、「解帶被褐、尋生理活、養存三亦、洞我玉文、領理八老、二十四眞、不眠內視、微氣綿綿、把錄太素、玄之又玄、神道在今、子來乃臻」、
- 易遷云、「鄧夫人語之、解此則得仙、此仙之要言」、易遷不解此、許侯可解注之。〈易遷則長史妻也、鄧夫人即鄧芝之母也、此碣文乃粗可領解、皆上道中事、但下挺者無由究知之、故令長史解釋、亦或試以戲之耳〉

右一條有某書。

華陽洞天中の玉碣文は、童初府にあつて西向きに立つている。一説に四面という。その文にいう。「帶を解いて粗衣を着、長生を求め活力を養い、三亦を養い存思し、わが玉文に通曉せよ。八老からなる二十四眞を統べ治め、眠らず内視して、微かな呼吸を連綿と絶やすな。太素の府に名録を握れば、玄妙なるが上にも玄妙。神仙の道は今にあり、汝來らんとすれば必ず至らん」。

易遷夫人が言われた。「鄧夫人が『この文意を理解すれば仙道を成就できます。これは仙道の要の言葉です』と言われました。でも、私には理解できません。許侯よ、文意を解説して下さいませんか」。〈易遷夫人は許長史の妻である。鄧夫人は鄧芝の母である。この碣文はおよそは理解できる。みな上道を修める者のことだ。ただ天分の劣った者には究め知るすべがない。だから許長史に解釋させたのである。あるいは試してからかってみたのかも知れない〉

右の一條は某の書がある。

(1) 領理八老、二十四眞 『無上祕要』卷八四得太清道人名品「此七條、竝太清之高眞、領理兆民者、悉應是學道所得」。『眞誥』

卷九葉二表「三八景二十四神、以次念之、亦可一時頓存三八、亦可平旦存上景、日中存中景、夜半存下景、在人意爲之也、…案苞玄玉籙白簡青經云、不存二十四神、不知三八景名字者、不得爲太平民、亦不得爲後聖之臣」。『紫陽真人內傳』「三眞者、乃身宅之帝君、混二十四氣、分入太微、又分號二十四眞、能善斯道於三寸之間、則三宮真人可見」。また、『太微帝君二十四神回元經』を參照。

(2) 綿綿 『老子』第六章「谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地根、縣縣若存、用之不勤」。

(3) 把錄 『元始無量度人上品妙經四注』卷三「執符把錄、保命生根」。

(4) 玄之又玄 『老子』第一章「此兩者、同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門」。

(5) 神道 『周易』觀「彖曰、…觀天之神道、而四時不忒、聖人以神道設教、而天下服矣」。

隱居今所安經昭靈臺前、欲立小石碣子、刻書華陽頌十五篇、皆讀述此山洞内外事、庶以標誠靈府、永垂遠世、而未辦作石、今且載其文於此、曰、

河篇徵往册、孔記昭昔名、三宿麗天序、兩金標地英、右樞域。

宅無乃生有、在有則還空、靈構不待匠、虛形自成功、右質象。

總神列三府、分途交五便、陰暉迎夜暫、晨精望曉懸、右形位。

南峯秀玄鼎、北嶺橫秦壁、表裏玉沙津、周回隱輪迹、右標貫。

左帶柳汧水、右浚陽谷川、土懷北邙色、井洌鳳門泉、右區別。

郭千峙流岸、姜巴亘遠蹤、廟貌或時饗、別宅乃恆恭、右迹號。

吳居非知地、越家詎隱遷、樹蓋徒低蔭、石竈未嘗煙、右類附。

果林鬱餘榛、蔬圃蔓遺辛、熒芝可燭夜、田泉常澣塵、右物軌。

降轡龜山客、解駕青華童、寢宴含眞館、高會蕭閑宮、右遊集。

清歌翔羽集、長嘯歸雲翻、子絃有逸調、空談無輿論、右才英。

標舍雷平下、立靜連石陰、上道已冲念、飛華當軫心、右學稟。

方嶠遊瓊刃、華陽棲隱居、重離儼或似、七元乃扶霄、右挺契。

號期行當滿、亥數未終丁、迨乃承唐世、將賓來聖庭、右機萌。

濟神既有在、去留從所宜、靈迹何顯晦、冥途自相知、右業運。

刊石玄窗上、顯誠曲階門、動靜顧矜錄、不負保舉恩、右誠期。

右此十五首下各兩字是其一篇中意、篇中文字、皆有義旨、後之人自以篇中事求之。

(1) 以下の十五首は『華陽陶隱居集』卷上に「華陽頌」として載せられている。

隱居わたりは、現在經典を安置している昭靈臺①の前に、小さな石碣を立て、華陽頌十五篇を刻もうと思う。これらはみなこの山の洞天の内外の事を讀え述べたものである。願わくは誠の氣持を眞靈の官府に示し、遠く後世に伝えたいと思うが、いまだ石碣を作る用意ができ

ていない。今ひとまず、その文だけをここに載せておこう。

『河圖』の諸篇は古の文書を證據立て、

『孔子福地記』は昔の地名を明らかにしている。

三つの星宿は天の秩序の中に正しく位置し、^②

金庭と金陵は地上のすぐれた場所を示す。

右、樞域。

無を宅として有を生じ、

有に在つては空にたち戻る。

靈妙な結構は大工の手を借りず、

空虚な存在は自ずから仕事を成し遂げる。

右、質象。^③

神々を總べて（太元定錄保命の）三つの役所に連ね、

さまざまに分岐する道が五便門に交錯する。

陰暉は夜を迎えて白く輝き、

日精は暁を待つて洞天に懸かる。

右、形位。

南の峯には玄帝の銅鼎が聳え、

北の嶺には秦始皇の白壁が横たわる。

洞天の内外には玉沙の川が流れ、

洞天の周圍には飄輪の迹が隠されている。

右、標貫。

左に柳汧の流れを巡らせ、

右に陽谷の川を浚う。

土は北邱の土の色を帶び、

井水は鳳門の泉より清冽である。

右、區別。

郭千は流れの岸に峙立し、

姜巴は遠い昔の史跡に連なる。

眞人の廟では、時に饗祀に賑わうが、

眞人の別宅はいつもひっそりとたたずんでいる。

右、迹號。

吳地の住民だからといって福地を知っているわけではなく、

越地の住民だからといって隱遁遷化できるわけではない。

大樹の蓋はただいたずらに影を落とすだけ、

石の竈は未だかつて煙を上げたこともない。

右、類附。

古の果樹の林のあとには、鬱蒼として名残の棕樹（かろな）が生え、昔の野菜畑のあとには、名残の五辛菜がはびこっている。

熒火芝はあかあかと夜の闇を照らすことができ、

田公泉はいつでも塵を洗いやすいでいる。

右、物軌。

手綱を降ろして龜山の客（西王母）が來臨し、

馬を解いて青華の童（青童君）が降臨する。

含眞の館に憩い安らぎ、

蕭閑の宮での盛大な會合。

右、遊集。

清らかに歌えば白鶴が來たり集い、

長く嘯けば歸り行く雲も翻る。

一絃の琴にはすばらしい調べがあり、

空についての談論には相手になれる者もない。

右、才英。

靜舎の場所を雷平山の麓に示し、

連石の北に庵を建てる。

最上の道を修めんとする者はすでに意念を空しくし、

丹華を飛ばさんとする者は眞心を動かさねばならぬ。

右、學稟。

方嶠は許玉斧を遊ばせ、

華陽はわれ隱居を住まわせる。

重離の明を建つべきことはともに似て、

七元の法がそれを助けてくれる。

右、挺契。

劫運の周期は行くゆく満ちるはずだが、

丁亥の数はまだ終わってはいない。

四十六丁亥の唐承の世になれば、

將來の聖帝の宮庭に賓客となるだろう。

右、機萌。

精神の救済は確かにある以上、

行くと止まるとは、時宜にまかせよう。

靈妙なはたらきの跡には隱顯の區別などあろうか、

幽冥な道は自ずから分かるものだ。

右、業運。

石を玄窗の上に刻み、

誠を洞天の曲がりくねった階の上の門に表します。

わが日常の行いを見そなわし憐れんで心に留めて下さい、

決して仙官への推舉のご恩に負いたりはいしません。

右、誠期。

右のこれら十五首の末尾それぞれの二字は、一篇の詩の中の大意を示す。詩中の一字一字には、すべてみな意味がある。後世の者は、篇中に記された事から探し求めるがよい。

- (1) 昭靈臺 『眞誥』卷一九葉一五裏注「弟子李果之又取一篇及豁落以去、所餘惟二十一篇、悉以還封昭靈臺」。
- (2) 麗天序 『周易』離「彖曰、：日月麗乎天、百穀草木麗乎土」。
- (3) 質象 陶弘景「答朝士訪仙佛體相書」(『華陽陶隱居集』卷上)「凡質像所結、不過形神、形神合時、是人是物、形神若離、則是靈是鬼、其非離非合、佛法所攝、亦離亦合、仙道所依」、『周氏冥通記』卷二「太者元始之極、而質象含眞」。
- (4) 廟貌 『毛詩』周頌清廟序鄭箋「清廟者、祭有清明之德者之

宮也、：廟之言貌也、死者精神不可得而見、但以生時之居立宮室象貌爲之耳」。諸葛亮「黃陵廟碑」「惜乎、廟貌廢去、使人太息」。

- (5) 清歌翔羽集 陶淵明「詠貧士詩」其三「榮叟老帶索、欣然方彈琴、原生納決履、清歌暢商音」。傅亮「感物賦序」(『宋書』卷四三)「于時風霜初戒、蟄類尙繁、飛蛾翔羽、翩翾滿室、赴軒幌、集明燭者、必以焦滅爲度」。

- (6) 歸雲 張衡「思玄賦」(『文選』卷一五)「馮歸雲而遐逝兮、夕余宿乎扶桑」。

- (7) 子絃 『抱朴子』微旨「所爲術者、內修形神、使延年愈疾、外攘邪惡、使禍害不干、比之琴瑟、不可以子絃求五音也、方之甲冑、不可以一札待鋒刃也」。

- (8) 才英 『文心雕龍』時序「今聖歷方興、文思光被、海岳降神、才英秀發」。

- (9) 冲念 沈約「齊竟陵王發講疏」(『廣弘明集』卷一九)「竟陵王殿下神超上地、道冠生知、樹實業於冥津、擬正解於冲念」。

- (10) 飛華 『雲笈七籤』卷六五太清金液神丹陰君歌「亦可先內鉛於器中、光火爲水、及內刀圭赤藥於其器中、臨而觀之、五色飛華、紫雲亂映、蒼鬱玄黃、若堯看景雲之集也」。『陶隱居內傳』卷中「先生有乘雲御龍心、自云、年十二時、於渠閣法書中、見郗愔以黃素寫太清諸丹法、乃忻然有志、：而十八年、飛華雖無

雜色、光彩特異、欲試作黃白以驗成否」。

(11) 方嶠遊瓊刃 『真誥』卷二〇葉九裏「小男名翻字道翔、小名玉

斧、正生、幼有珪璋標挺、長史器異之、郡舉上計掾主簿、竝不赴、清秀瑩潔、糠粃塵務、居雷平山下、修業勤精、恆願早遊洞室、不欲久停人世、遂詣北洞告終、即居方隅山洞方原館中、常去來四平方臺」。同卷二葉一三裏「瓊刃應數」、注「此瓊刃字即是掾小名玉斧也、與外傳青錄義同、故云應數」。

(12) 亥數未終丁 『真誥』卷一七葉一九表「義白、昔得小掾細白布青紙香珠之屬、然此逼左道虛妄之說、是故不復稍說耳、自當以此物期之甲申也、諸所曲屈、筆不能盡、謹白」、注「：爾來已經太元九年元嘉二十一年兩甲申矣、不知此所期謂在何時、謂丁亥數周之甲申乎」。

(13) 迨乃承唐世 『真誥』卷八葉一四表を参照。

(14) 來聖 何充「奏沙門不應盡敬」(『弘明集』卷一二)「豈曩聖之不達、來聖之宏通哉」。『淨住子淨行法門』開物歸信門(『廣弘明集』卷二七下)「非惟恐不見前佛後佛來聖近賢、深憂惡道无由可絕」。

(15) 冥途 『周氏冥通記』卷三注「：如何猶冀於冥途之中、既更通感耳」。慧遠「沙門不敬王者論」(『弘明集』卷五)「衆實於是始悟冥塗以開轍爲功、息心以淨畢爲道」。

(16) 保舉 『周氏冥通記』卷三「司馬君曰、子保舉既強、得業亦

美、道必可諧、但其流行之、必不怠也」。

真誥卷之十四

稽神樞第四

大茅山之西南有四平山、俗中所謂方山者也、其下有洞室、名曰方臺、洞有兩口、見於山外也、與華陽通、號爲別宇幽館矣、得道者處焉(此山去大茅山可二十許里、西南六七里有一洞口見外、近時有人入見一青蛇在洞中、因與呼爲青龍洞、山近上及北面西面亦竝有洞穴同、不知何者是此兩口耳、山上又有泉水、冬夏不竭、山□□□□□□□□□□、所以號爲四平及方山也、甚多南燭、今積金山東□□□□□□、此樹皆能高大、館中諸道士所資爲藥也)、

其中先止者有張祖常劉平阿呂子華蔡天生龍伯高、竝處于方臺矣、張祖常者、彭城人也、吳時從北來、得入此室、祖常託形墮車而死、故隱身幽館、而修守一之業、師事上黨鮑察者、漢司徒鮑宣五世孫也、察受道於王君。(鮑宣、漢司隸校尉、爲王莽所害、宣子永、永子昱、昱子某)

劉平阿者、無名姓、名姓不示人也、漢末爲九江平阿長、故以爲號、

行醫術、有功德、救人疾病如己之病、行遇仙人周正時、授以隱存之道、託形履帽、而來居此室、常服日月晨炁、顏色如玉、似年三十許人。二君何容不知其本名、既示不欲復說之耳、戴孟之本族乃亦已陳之在後矣。

呂子華者、山陽人也、陰君弟子、已服虹丹之液、而未讀內經、來從東卿受太霄隱書而誦之、常以幽隱方臺爲樂、不願造于仙位也。

蔡天生者、上谷人也、小爲嘯父、賣雜香於野外、以自業贍、情性仁篤、口不言惡、道逢河伯少女、從天生市香、天生知是異人、再拜上一檐香、少女感之、乃教其朝天帝玉皇之法、遂以獲仙、託形寫杖、隱存方臺、少女今猶往來之也、天生師之。

龍伯高者、後漢時人、漢伏波將軍馬援戒其兄子、稱此人之佳可法、即其人也、伯高後從仙人刁道林受服胎炁之法、又常服青飢方、託形醉亡、隱處方臺、師定錄君也。伯高名述、京兆人、漢建武中爲山都長、擢至零陵太守、馬援征南日、遺兄子嚴書曰、「龍伯高敦厚周慎、口無擇言、謙約節儉、廉公有威、吾愛之重之、願汝曹效之、效伯高不得、猶爲謹敕之士、謂刻鵠不成、尙類鶩者也」。

雷平山之東北、良常山之東南、其間有燕口山、三小山相隔故也、

一名曰方隅、山下古人曾合九鼎丹於此間也、幽人在此^①「世」時、心「嘗」樂居焉、今常遊此、方隅山下亦有洞室、名曰方源館、亦有二口常見外也、常有此五人爲旅。其山即是大橫西南、別有二墩壠相聚、今人不復有「乎」^②「呼」其名者、前云李明合丹、即是此矣、幽人者、揀去世後、不欲顯名、故號爲幽人、此是未受事、且停洞館修業也、山今亦有兩小口、五人爲旅、即向之四平山者、既去來相通、故時共遊處也、所以楊君夢揀云向從四平山來也、右六條是手新寫、應是保命君所告也。

① 『茅山志』卷六および『眞誥』卷二〇葉一〇表が「此」を「世」に作るのに従う。

② 『茅山志』卷六および『眞誥』卷二〇葉一〇表によって「嘗」の字を補う。

③ 意をもって「乎」の字を「呼」の字に改める。

眞誥卷十四

稽神樞第四

大茅山の西南に四平山^①がある。世間では方山と呼ばれている山で

ある。その山の下には洞室があり、方臺^②と呼ばれる。この洞には二つの入口があつて、山の外に現れている。(この洞室は)華陽洞天と通じあつており、別宇の幽館^③と名づけられている。仙道の體得者たちがここに身を置くのである(この山は大茅山から二十里ばかりの距離にあり、その西南六、七里のところに、洞への入口が一つ、外に現れている。近ごろ、そこに入つた人がおり、一匹の青蛇が洞の中にいるのを見た。そのことがあつて、青龍洞と呼ばれるようになった。山の頂上近く、および北面と西面にも、それぞれ同じような洞穴^④がある。だが、ここという二つの入口なのかは分からない。山の頂上には、さらに湧き水があつて、冬も夏も涸れることがない。山は平らである。それで四平山とも方山とも呼ばれるのである。南燭^⑤が澤山生えている。現在、積金山の東方には、これらの木はともに高く太く成長する。華陽館中の道士たちが、それらを材料にして藥を作るのである)。

この洞内に、これまで留まつたことのある者として、張祖常、劉平阿、呂子華、蔡天生、龍伯高^⑥がおり、そろつて方臺に居を定めた。張祖常は彭城の人である。吳の時代に北方からやつて来て、この洞室を見つけてそこに入った。張祖常は、車から墜ちて死んだと見せかけて尸解^⑦を遂げ、そこでこの幽館に身を隠して、守一の修行をし、上黨の鮑察に師事した者で、漢の司徒であつた鮑宣^⑧の五代の孫である。鮑察は西城王君から道を授けられた。(鮑宣は漢の司隸校尉

であり、王莽に殺害された。鮑宣の子が鮑永、鮑永の子が鮑昱、鮑昱の子が鮑某である)

劉平阿については、その名前が傳わつておらず、名前を人に明らかにしなかつたのである。漢代の末年に九江平阿の長となつた。それでその縣名を號としたのである。醫術を行つて功德を積み、他人の病氣をあたかもおのれの病氣であるかのようにみなして救護に盡くした。道を行く途中で仙人の周正時^⑨に出會い、彼から隱存の道^⑩を授けられた。肉體を履物と帽子とに託して尸解を遂げ、この洞室にやつて来て住んだ。いつも日月の晨氣^⑪を服しており、顔色は玉のごとくつややかで、三十歳ばかりの人のように見える。(定録と保命の二君が、どうして彼の本名を知らないなどということがあろうか。それを教えたのであるが、(楊羲が)他の人々に説くことを望まなかつたのである。戴孟^⑫の元來の姓については、後で説明されている)

呂子華は山陽の人である。陰君^⑬の弟子で、虹丹の液は服用したが、内經^⑭はまだ讀んでいない。ここにやつて来ると、東卿司命君から『太霄隱書^⑮』を授けられ、それを誦讀した。常々、方臺にその身を潜めることを楽しみとし、仙人の位に昇ることは望んでいないのである。

蔡天生は上谷の人である。幼い時、呼び賣りの行商人となり、さまざまな香を田舎渡りをして賣つて、生活をしていた。思いやりの深い性格で、他人の悪事を口にしなかった。行商の途中で河伯の末娘に出會い、(彼女は)蔡天生から香を買おうとした。蔡天生は、彼女がただ者ではないことを知り、再拜したうえ擔いでいる香をすべて献上した。末娘はこれに心を動かされ、そこで彼に、天帝と玉皇に朝見する法を教えた。このようにして、蔡天生は仙道を獲得すると、履物と杖とを肉體の代わりとして尸解を遂げ、身を隠して方臺に住んだ。河伯の末娘は今もなお彼のもとに通つて來ており、蔡天生は彼女を師として仕えている。

龍伯高は後漢時代の人である。漢の伏波將軍の馬援が、その兄の子を戒めて、「この人は立派であるから見習いなさい」と言っているのが、つまり彼のことである。龍伯高は、後に仙人の刁道林から胎氣^①を服する法を授かった。さらに加えて、常に青鮠^②を服する處方も授かった。酔いつぶれて死んだように見せかけて尸解を遂げ、身を隠して方臺に住まいし、定録君を師としたのである。(龍伯高は、名を述といい、京兆の人である。漢の建武年間(二五―五五)に山都の長となり、拔擢されて零陵太守まで昇進した。馬援が南方の征伐に従事していた頃、兄の子の馬嚴に手紙を送り、その中で次のように言った。「龍伯高は思いやりが深くても慎重、無用なこと

は一切言わない。謙虚でつましやかであり、清廉公平でびしとしたところがある。私は彼を愛し重んじている。おまえたちも彼に見習つてほしいと思う。龍伯高を見習つてうまくゆかなかったとしても、實直な人物とはなれるであらう。鵠の鳥を刻んでうまくゆかなかったとしても、家鴨に似たものとはなるといふやうだ」

雷平山の東北、良常山の東南、そのあたりに燕口山がある。三つの小さな山が寄り添つた形をしているので、そう呼ばれるのである。方隅山とも呼ばれる。この山の下は、古人がこのあたりで九鼎丹を調合したことがあるところである。幽人^③がこの世にあつた時、ここに住みたいといふ心に願つていた。現在もしばしばここを訪れて來るのである。方隅山の下にも洞室があつて、方源館と呼ばれる。ここにも二つの入口があり、いつも外に現れている。いつもこれら五人がたむろしている。(この山は大横山の西南にあつて、別に二つの丘が隣接しているのである。現在の人々には、もはやその元來の名前で呼ぶ者がない。前に、李明が丹藥を調合したとあつたのか、つまりこのことである。幽人^④というのは、許掾が世を去つた後、名前を露わにするのを望まず、それで幽人と呼ぶのである。これは、まだ仙界で役目がもらえず、ひとまず洞館に留まつて修行しているといふことなのである。この山にも、現在、二つの小さな入口がある。五人がたむろしているといふのは、前に見えた四平山にいる者

たちのことで、二つの山の間に道が通じあっているのです、しばしば一緒にやって来て滞在するのである。だから、楊君の夢の中で、許椽が「さきごろ四平山からやって来た」と言っているのである。^⑬右の六條は誰かが新しく書いたもの。きっと保命君が告げたものであらう。

- (1) 四平山 『眞誥』卷一八葉一表「三月十九日夜、夢小椽來在此靜中坐、良久自說、小茅山三會水處、極可看戲、向從四平山中來、路上見叔父…」。
- (2) 方臺 『眞誥』卷二〇葉九裏(許)翻「恆願早遊洞室、不欲久停人世、遂詣北洞告終、即居方隅山洞方原館中、常去來四方臺」。
- (3) 幽館 曹植「大暑賦」(『藝文類聚』卷五)「於是大人遷居宅幽、緩神育靈、…積素冰於幽館、氣飛結而爲霜」。
- (4) 洞穴 張衡「西京賦」(『文選』卷二)「赴洞穴、探封狐、陵重巘、獵昆駘」、薛綜注「洞穴、深且通也」。
- (5) 張祖常、劉平阿、呂子華、蔡天生、龍伯高 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「張祖常、劉平阿、呂子華、蔡天生、龍伯高、注「五人竝處方臺」。『眞誥』卷一八葉一裏注「…方山即四平山、所謂遊處方源、常與龍伯高等爲旅也」。

- (6) 託形 『眞誥』卷一六葉一裏注「在世行陰功密德、好道信仙者、既有淺深輕重、故其受報亦不得皆同、有即身地仙不死者、有託形尸解去者…」。

- (7) 鮑宣 『漢書』卷七十二鮑宣傳を参照。
- (8) 周正時 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位に見える。
- (9) 隱存之道 『無上祕要』卷三一遇經宿分品「子又无玄宮紫札上皇寶名太一玉籙東華隱圖、三元銘神、太帝參魂者、雖受天定性、既得暫聞至道、亦不能修爲、爲不能久、久如不固、固而不專、專不能洞、適可隱存、五嶽登行、常生之塗耳、不得八景超霄、浮煙控暉、飛騰靈羽、踊躍太无、…右出大丹隱書」。
- (10) 日月晨炁 『眞誥』卷一四葉一三裏「潁川劉瑋惠、漢景帝時公車司馬劉諷也、後事季主、晚服日月炁、爲入室弟子」。「無上祕要」卷二八・九天瓊文品「敷爛扶晨炁、耀羅煥玉階、…右出洞眞太霄琅書瓊文帝章」。
- (11) 戴孟 『眞誥』卷一四葉六表を参照。『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「戴孟」、注「本姓燕、名濟、字仲微、裴君弟子」。
- (12) 陰君 『抱朴子』金丹「近代漢末新野陰君、合此太清丹得仙、其人本儒生、有才思、善著詩及丹經讀竝序」。
- (13) 內經 『眞誥』卷一八葉九表「得佳清閑、云敕汝修內經」、注「內經或應是黃庭、不爾即應是洞房中法爾」。
- (14) 太霄隱書 『太元真人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一

○四「向說元始天王太帝君言、是太霄二景隱書玉佩金璫之文章也、…然不先聞明堂玄真之道、亦無由得太霄隱書也」。

- (15) 仙位 『道教義樞』卷一位業義「(太真科)又云、名乃有七、位乃有三、一者仙位、二者眞位、三者聖位」。

- (16) 嘯父 『眞誥』卷一八葉二三裏「八月三日夕、夢忽有一人弊衣長形容、從一小兒來、如徇簫」、注「簫作嘯音、謂如今徇嘯賣物人也」。

- (17) 馬援 『後漢書』列傳一四馬援傳を参照。

- (18) 刁道林 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「刁道林」、注「龍伯高之師」。

- (19) 胎炁 『上清黃庭內景經』百穀章第三十「雲笈七籤」卷一二「百穀之實土地精、五味外美邪魔腥、息亂神明胎氣零、那從反老得還嬰」。

- (20) 服青飢方 『重修政和證類本草』卷一四木部下品「南燭枝葉、…圖經曰、…謹按陶隱居登眞隱訣載太極眞人青精乾石髓飯法」。

- (21) 龍伯高… 注(5) 参照。『後漢書』列傳一四馬援傳「初兄子嚴敦立喜議議、而通輕俠客、援前在交趾、還書戒之曰、…龍伯高敦厚周慎、口無擇言、謙約節儉、廉公有威、吾愛之重之、願汝曹效之、杜季良豪俠好義、憂人之憂、樂人之樂、清濁無所失、父喪致客、數郡畢至、吾愛之重之、不願汝曹效之也、效伯高不

得、猶爲謹敕之士、所謂刻鵠不成、尙類鶩者也、效季良不得、陷爲天下輕薄子、所謂畫虎不成、反類狗者也、…伯高、名述、亦京兆人、爲山都長、由此擢拜零陵太守」。

- (22) 口無擇言 『孝經』卿大夫章「口無擇言、身無擇行、言滿天下、無口過、行滿天下、無怨惡」、注「言行皆遵法道、所以無可擇也」。

- (23) 幽人 『眞誥』卷二〇葉九裏「小男名翽、字道翔、小名玉斧、…恆願早遊洞室、不欲久停人世、遂詣北洞告終、即居方隅山洞方原館中、常去來四平方臺、故眞誥云、幽人在世時、心嘗樂居焉、又楊君與長史書亦云、不審方隅山中幽人、爲已設坐於易遷戶中未」。

- (24) 前云李明合丹 『眞誥』卷一三葉一七表を参照。

- (25) 楊君夢掾云向從四平山來也 注(1) 参照。

鹿迹山中有絕洞、絕洞者纔有二二畝空地、無所通達、故爲絕洞、洞室四面皆有青白石、亦以自然光明、如絲(舊作繖字如此)張形、下正平、自有石牀石榻、曲夾長短、障隔分別、有如刻成、亦整盛也、東北有小口、纔劣容人入、入二三百步乃得洞室、初入口甚急、愈入愈寬大也、口外南面有三積石、積石下有汧、索即可得也、亦或以一小石掩穴口、穴口大小俱如華陽三便門、便門亦用小石塞其口、自非

清齋久潔、索不可得、鹿跡洞子亦爾、不受穢氣故也。〔此山今屬南徐州界、正對茅山、北望見之、亦有道士住、鹿跡在石上、故仍以爲名、洞口處乃可知、而甚嚴潔、亦无人敢觸冒者、此云如華陽三便門、則南洞北洞本大開、餘東西及東南皆是塞矣〕

鹿跡〔華〕^①山中〔及〕^②洞主有謝稚堅主伯遼繁陽子、號名耳、是漢越騎校尉何苗叔達也、進之同母弟、少好道、曾居河東繁山之南服食、故自號爲繁陽子〔中君答長史問葛玄云、「在蓋竹山、恆與謝稚堅相隨」、今稚堅乃在此、不知爲去來往還、爲當兩人同姓名也、後漢書云、「何苗是何進異母弟、爲車騎將軍、黨附關勢、進被害時、苗於朱雀闕下與進將吳匡戰死、被斬、董卓又破棺出尸、支解之」、既非故爲兵解去、不知那遂得來居此、其母亦被刑、苗既非進同生、官位復興、^③〔且〕苗而字達、於義不類、恐別是一弟、不必是名苗戰死者耳〕、又有馮良、馮良、南陽冠軍〔軍〕^③人、少作縣吏、年三十爲尉從佐、迎督郵、自恥無志、因毀軍煞牛、裂敗衣幘遂去、從師受詩傳禮易、復學道術占候、家中謂已死、十五年乃還、整修志節、抗操嚴恪、州郡禮辟、不就、詔特徵賢良高弟、半道委之還家、時三公爭讓位於良、遂不降就、年六十七乃棄世、東渡入山、今在鹿跡洞中〔後漢安帝時人也、漢書所載、事亦略同〕、

又有郎宗者、字仲綬、北海安丘人、少仕官爲吳縣令、學精道術、占候風沬、後一旦有暴風經窗間、占知京師大火、燒大夏門、遣人往

參、果爾、諸公聞之、以博士徵宗、宗恥以占事就、夜解印綬、負笈遯去、居華山下、服胡麻丸得道、今在洞中〔後漢書載郎宗事云、「理京房易、善星算風角六日七分、能望氣占侯吉凶、常賣卜自奉、安帝徵、對策爲諸儒表、後拜吳令、時卒有暴風、宗占知京師當有大火、記識日月、遣人參候、果如其言、諸公聞而表上、以博士徵之、宗恥以占驗見知、徵書到、夜懸印綬於縣庭而遯去、遂終身不仕、子顗字稚元、傳父業研精、學徒常數百人、順帝陽嘉二年徵詣闕、上書十一事、拜郎中、還家、後爲同縣孫禮所害〕、

其餘其王叔明鮑元治尹蓋婦之徒、復二十餘人、竝在北山、不能復一二記之也、此數人是絕洞諸山之主耳、此絕洞仙人亦思得學道者、欲與之共處於洞室、困時无其人耳。〔此洞既无所通達、正是地仙棲處、必非三十六天之限也〕

道喪由簪、良可哀矣、寓家辱人哉。〔簪者謂人貪仕宦衣冠、坐此不得務道、家室本寄寓耳、此洞中乃是永宅、爲戀戀不去、實足辱敗人矣、此亦諷誘於長史耳〕

右保命君告。〔右三條楊書〕

〔①〕「華」は衍字とみなす。

- (2) 「及」は衍字とみなす。
- (3) 俞本が「具」を「且」に作るのに従う。
- (4) 「軍」は衍字とみなす。

鹿迹山の中には絶洞がある。絶洞というのは、やっと一、二畝の空地しかなく、どこへも通じてはいない。それで絶洞というのである。洞室の四面には、すべて青白石があり、やはりそれ自體で發光している。(洞室は) 絲(昔は繖の字をこのように書いた)を開いたような形をしており、下は眞つ平らで、そこには石の牀や石の塌が自然に備わっており、曲がり具合や長短がそれぞれはつきりと區別され、あたかも刻んで作つたようで、きちつと整つて立派なものである。東北に小さい入口があり、やつと人が入れるだけの大きさで、入つて二、三百歩行くと、洞室に行き着く。入口を入つたばかりのところはひどく狭いが、奥に入れば入るほど廣くなる。入口の外の南側には三つの積み石がある。積み石の下方には流れがあつて、探せばすぐ見つかる。一つの小さな石でその穴の入口が覆われているともいう。穴の入口の大きさは、ともに華陽洞天の三つの通用門と同じである。華陽の通用門も小さい石でその入口が塞がれており、久しく潔齋した⁽³⁾後でなければ、探しても見つからない。鹿迹洞も同様である。穢れた氣を受けつけないからである。(この山は、現在では

南徐州の境界に屬している。茅山と正面から向かい合つており、北を望むと見ることが出来る。ここにも道士が住んでいる。鹿の足跡が石の上にあることから、それを取つて名づけられた。洞の入口の場所は知ることが出来るが、ひどく嚴かで清らかであるため、誰もそれを犯そうとする者がいない。ここで、華陽洞天の三つの通用門と同じであると言つているのだから、南洞と北洞とはもともと大きく開いていたのに對し、他の東西と東南の通用門は、ともに塞がつていたのである)

鹿迹山の中の洞主として、謝稚堅、王伯遼、繁陽子⁽³⁾がいる。(繁陽子というのは) 號なのであり、漢の越騎校尉の何苗、字は叔達のことである。何進⁽⁴⁾の同母弟である。若くして道を好んだ。かつて河東の繁山の南に住んで服食を實修したことから、自ら繁陽子と號した(茅中君は、許長史が葛玄のことをたずねたのに答えて、「(葛玄は) 蓋竹山にいる。いつも謝稚堅と行動をとみにしている」と言つてゐる。今ここでは、謝稚堅はこの鹿迹山にいとされる。二つの山の間を行き來しているのであらうか。それとも別人で姓名が同じだけなのであらうか。『後漢書』には次のようにある。「何苗は、何進の異母弟である。車騎將軍となり、宦官一味とぐるになつた。何進が殺害された際、何苗は、朱雀闕のところで何進の部將の吳匡と戦つて死んだ。彼は斬られたうえに、董卓がさらにその棺を壞して死骸

を引きずり出し、死體をばらばらにした」。彼は意圖的に兵解^⑥によって仙去したのではないのに、どうしてここにやって来て住まいすることができたのであろうか。その母親も死刑に處せられた。何苗は、何進とは同母弟ではないうえに、その官位も異なっている。それに加えて、名が苗であるのに、字は(叔)達とするのも、意味のうえでそぐわない。恐らく、(繁陽子)というのは、何進の(別)のもう一人の弟なのであって、必ずしも名が苗で、戦いの中で死んだ人物ではないのであろう。

また馮良^⑦がいる。馮良は南陽冠軍の人である。若くして縣の吏となった。三十歳で縣尉の從佐として督郵を出迎える役になり、志のないのをわれながら恥じた。そこで車をこぼち牛を殺し、衣冠を裂き破つて、そのまま立ち去り、師匠について詩傳、禮、易の學を授かり、また道術と占候を學んだ。家族の者は死んでしまったと思っていたところ、十五年たつて歸つて來た。節義をきちんと守り、操も高く嚴格で慎み深く、州や郡が丁重に辟召したが、就かなかった。天子が詔して特に賢良科に召されて高第に擧げられたが、途中でうち捨てて家に歸つてしまった。その頃、三公が争つて位を馮良に譲ろうとしたが、志を曲げてまで就こうとはしなかった。六十七歳になつて俗世を棄て、江南に渡つて山に入つた。今は鹿跡洞の中にいる(後漢の安帝時代の人である。『後漢書』に記載されている事跡もほぼ同じである)。

また郎宗^⑧がいる。字は仲綏で、北海安丘の人である。若くして仕官し、吳縣の令となつた。道術を學んで精通し、風氣を占つて豫見した。その後ある朝のこと、暴風が窗邊を通過した時、占いによつて都に大火災が起こり、大夏門を焼くであろうことを知り、人を遣わして見に行かせたところ、果たしてそのとおりであつた。諸公はその事を聞き、博士として郎宗を徵召しようとしたが、郎宗は占いによつて職に就くことを恥とし、夜になつて印綬を解き、笈を背負つて逃げ去つた。華山の麓に住んで、胡麻丸を服用して仙道を體得した。現在は鹿跡洞の中にいる(『後漢書』に郎宗の事跡を載せて言う。「京房の易を修め、星算、風角、六日七分の術を善くし、望氣の術によつて吉凶を占うことができ、常に賣卜によつて生計を立てていた。安帝が召したところ、その對策は學者たちの手本となる出来ばえであつた。後に吳縣の令を拜命した。その時、にわかにも暴風が起こり、郎宗は占いによつて都に大火が起こるであろうことを知り、その日月を書き記して、人を遣わして様子を伺わせたところ、果たしてその言葉のとおりであつた。諸公はその事を聞いて上表し、博士として召そうとした。郎宗は占驗によつて知られたことを恥とし、徵召の文書が到着すると、その夜、縣役所の庭に印綬を懸けて逃げて去り、そのまま死ぬまで宮仕えしなかった。子の郎顗、字は稚元は、父の學問を傳えて研鑽に努め、生徒は常に數百人いた。順帝の陽嘉二年(一三三)、召されて朝廷に至り、十一事を上書し、郎中を拜命

したが、家に引き上げた。後に同郷安丘縣の孫禮に殺された」。

その他さらに王叔明、鮑元治、尹蓋の妻といった二十餘人が、いずれも北山にいるが、^①もはや一々記すことはできない。これら數人は、絶洞の諸山の主人である。これら絶洞の仙人たちも、やはり道を學ぶ者を得たいと心にかけて、一緒に洞室に住みたいと欲しているのだが、時あたかもそのような人がいないことに困っているのだ。これらの絶洞はどこにも通じてはいず、ただ地仙の住むところなのだから、きつと三十六の洞天の範圍外なのである」

道が喪われるのは簪に由るとは、まことに哀しいことだ。假住まいの家が人を汚辱にまみれさせるのであろうか。〈簪とは人が官職や衣冠を食ふことをいい、そのせいで道に努めることができないのである。家庭生活はもともと假の住まいに過ぎない。これらの洞室の中こそが永遠の住まいであるのに、戀々として去ろうとしないのは、まことに人を汚辱にまみれさせるのに十分だ。これも許長史を遠まわしに誘っているのである〉

右は保命君のお告げ。〈右の三條は楊羲の書

(1) 華陽三便門 『眞誥』卷一一葉六裏を參照。

(2) 清齋久潔 『抱朴子』論仙「四海之事、何祇若是、安得掩翳聰明、歷藏數息、長齋久潔、躬親爐火、夙興夜寐、以飛八石哉」。

(3) 謝稚堅、王伯遼、繁陽子 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「謝稚堅、王伯遼、繁陽子何苗、馮良、郎宗」、注「五人在鹿跡洞」。

(4) 進 『後漢書』列傳五九何進傳を參照。

(5) 中君答長史問葛玄云：『眞誥』卷一二葉三表を參照。

(6) 兵解 『元始無量度人上品妙經四注』卷一「後皆得作尸解之道」、李少微注「按上經尸解有四種、一者兵解、若嵇康寄戮於市、淮南託形於獄、…」。

(7) 馮良 注(3) および『後漢書』列傳四三周燮傳附馮良傳を參照。

(8) 郎宗 注(3) および『後漢書』列傳二〇下・郎顗傳、同列傳七二上・方術樊英傳注所引の謝承『後漢書』を參照。

(9) 星算風角 『後漢書』列傳二〇下・郎顗傳注「風角謂候四方四隅之風以占吉凶也、星算謂善天文算數也」。

(10) 六日七分 『易稽覽圖』(『後漢書』列傳二〇下・郎顗傳注)「甲子卦氣起中孚、六日八十分日之七」、鄭玄注「六以候也、八十分爲一日之七者、一卦六日七分也」。

(11) 其餘王叔明鮑元治尹蓋婦之徒：『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「王叔明、鮑元治、尹蓋婦」、注「三人之外、餘三十人並

北山下絶洞」。

(12) 三十六天 『眞話』卷二葉五裏「大天之內有地中之洞天三十六所、其第八是句曲山之洞、週廻一百五十里、名曰金壇華陽之天」。

范帥云、「三官有獄官、不名廷尉、名大理、李豐今爲大理都、餘一守缺、以擬王附子、不以與許虎也、守職如今獄之三官也」。李豐字安國、改字宣國、馮翊人、李義子、本寒微有才志、遂事魏爲尙書僕射^①、與夏侯玄謀廢晉景王、事泄召來、令人以刀鏹撞腰斃之、大理當爲大理、即古之獄官、前漢洎魏時、廷尉亦名大理、此職是仙官也、王附子是王ム之小名、許虎即虎牙也

鮑靚因吾屬長史、鼠子輩既爾、可語郡守令得反、映亦屬吾、其家比衰、欲非可奈何、可寫存之耶。鼠子恐是鮑靚小名、鮑爲南海郡、仍解化、兒輩未得歸都、所以屬之、鮑即許先生之師也

右二條有楊書。

(1) 「尉」は衍字とみなす。

鬼帥の范疆が言った。「三官に獄官があり、廷尉とは呼ばずに、大理と呼ぶ。李豐が今大理都である。一つの守のポストは空けてあり、王附子を當てるつもりであって、許虎には與えない。守の職は今の獄の三官のようなものである」。李豐は字は安國であつたが、字を宣國と改めた。馮翊の人で、李義の子である。もともと寒微の生まれであつたが、才志があり、かくて魏に仕えて尙書僕射となつた。夏侯玄と謀議して晉の景王(司馬師)を廢位させようとしたが、計劃が泄れ、呼び寄せて、人をして刀の柄で腰をたたいて殺させた。大理とはきつと大理のことであつて、つまり古の獄官である。前漢から魏に至る時期にも、廷尉をやはり大理と呼んだが、この職は仙官である。王附子とは王某の幼名で、許虎とは虎牙のことである

鮑靚は私を介して許長史に依頼している。鼠子(の子供)たちがそうであるからには、郡の太守に告げて歸れるようにさせてやるべきだ。許映(邁)もまた私に依頼している。その一家は近ごろ衰微して、どうしようもない状態になろうとしている。このことを書きとつて残しておくのがよからう。鼠子とは恐らく鮑靚の幼名であろう。鮑靚は南海郡の太守となり、そのまま尸解^②した。子供たちは都に歸ることができなかったので、それで依頼したのである。鮑靚は

許邁先生の師匠である

右の二條は楊羲の書がある。

(1) 大理當爲大理 注文に誤りがある。

(2) 解化 『雲笈七籤』卷八五太一守尸「夫解化之道、其有萬途、或隱遁林泉、或周遊異域」。

武當山道士戴孟者、乃姓燕名濟字仲微、漢明帝末時人也、夫爲養生者、皆隱其名字、藏其所生之時、故易姓爲戴、託官於武帝耳、而此人少好道德、不仕於世矣、少孤養母、母喪行服葬、服闋、遂入華陽山、服朮、食大黃及黃精、種雲母雄黃丹砂芝草、受法於清靈真人、即裴翼州之弟子也、得不死之道、裴真人授其玉珮金鑑經并石精金光符、遂能輕身健行、周旋名山、日行七百里、多所經涉、猶未得成仙人也。〔戴乃授行玉珮金鑑、而止不死而已、未得神仙、於理爲小難詳、後又云、「玄眞亦其鈔要、行之者神仙不死」、又與本經不同、及石精金光符、既不爲劔用、則止是解化一符單服者、此符主隱遯、不云健行也、種五品芝、世亦有法〕

仙人郭子華張季連趙叔達、晚又有山世遠者、此諸人往來與之遊焉、昔居武當、今來大霍、欲從司命君受書、故未許焉。〔山已得爲太和真人、則應居在南陽太和山矣、餘三人不見別顯出也〕

戴公拍腹有十數卷書、是太微黃書耳、此人即謝允之師也。〔按《金》「今」相傳太微黃書第八篇有目錄云、「凡有八卷、唯此一卷出世」、今戴公乃有十許篇、亦爲不同、拍腹之義、謂恆以繫腰也、其外傳事亦同此、謝允字道通、歷陽人、小時爲人所略賣、往東陽、後告官、被誣在烏傷獄、事將欲入死、夜有老公授其符、又有黃衣童子去來、於是得免、咸康中至襄陽、入武當山、見戴孟、孟即先來獄中者、因是受道、又出仕作歷陽新豐西道三縣、所在多神驗、年七十餘猶不老、後乃告終也〕

黃衣童子者、即玉珮金鑑之官耳、云坐上常有一人共坐塵者〔應是腴腴、不明狀也〕、即太極真人、時往來也。〔按說如此、似答問黃衣童、意亦可、是午時、既及謝、因此面訪其事〕

受行玉珮金鑑經、自然致太極真人、諺云、「服九靈日月華、得降我太極之家」、此之謂也、玄眞之法亦其鈔要也、行之者神仙不死。

裴真人有弟子三十四人、其十八人學佛道、餘者學仙道焉。〔應作編〕

字」《弟子劉顯林辛仲甫趙子常》

周眞人有十五人弟子、四人解佛法。《入室弟子王瑋達李建道泉法堅》

桐柏有二十五人弟子、八人學佛。《入室弟子于弘智慧三法靈鄭文成陳元子》《此當略舉標勝者耳、辛泉于竺皆似胡姓也、當是學佛弟子也》

右八條有掾寫、共一篇相連。

(1) 俞本が「金」を「今」に作るのに従う。

武當山の道士の戴孟は、姓は燕で名は濟、字は仲微、後漢の明帝末年の人である。そもそも養生する者は、すべてその名字を隠し、生まれた日時を隠すので、姓を戴と改め、武帝の官僚ということにした。ところでこの人は若い時から道と徳とを好み、世に仕えなかった。若くして父を喪い母を養っていたが、母が亡くなると喪に服し葬儀を行い、喪が明けると、そのまま華陽山に入った。朮を服用し、大黃と黃精を食らい、雲母、雄黃、丹砂、芝草を植え、道法を清靈

眞人から授かった。つまり裴冀州の弟子であって、不死の道を得た。裴眞人はその『玉珮金璫經』と「石精金光符」を授け、かくて身は軽くなり、健脚になることができた。名山を巡り、一日に七百里を歩き、跋涉したところは多いが、まだ仙人となることはできない。《戴孟は玉珮金璫の法を授けられて實踐しながら、ただ不死となっただけでまだ神仙となれないというのは、理窟のうえからはいささか詳らかにしたい。後文にまた「太上玄眞の法もやはりその要約で、これを行う者は神仙不死となる」とあって、また本經と同じではない。「石精金光符」については、劍解のための用をなさない以上は、ただ尸解のための一符で、單獨に服用するだけのものである。この符は隱遁のための效能があるのであって、健脚になるとは言わない。五種類の芝を植えるのは、俗世にもやはりその方法がある》

仙人の郭子華、張季連、趙叔達^①がおり、後にはまた山世遠がいる。これらの諸人は行き来して一緒に遊んでいる。昔は武當山に住んでいたが、今は大霍山にやって来て、司命君から辭令を受け取ることが希望しているが、まだ許されない。《山世遠はすでに太和眞人となることができたので、南陽の太和山に住んでいるはずである。他の三人については、他には明らかに出てこない》

戴公は拍腹して十數卷の書を持っている。それは『太微黃書』^②で

ある。この人は謝允^③の先生である。〈按ずるに、今世に傳わっている『太微黃書』の第八篇に目録があつて、「凡そ八卷あるが、この一卷のみが世間に出ている」とある。今ここに戴公は十篇ばかり持っている」とあり、やはり一致しない。拍腹とは、常にそれを腰に繫いでいるとの意味である。彼の外傳でも、事情はこと同じである。謝允は字は道通、歷陽の人である。子供の時に人にさらわれて賣りとばされ、東陽に連れて行かれた。後に官に訴え出たが、誣告の罪を着せられ、烏傷の獄に繋がれた。死刑にされようとする事態となつた時、夜に老人が現れて符を授け、また黃衣童子がやつて来て、そこで免れることができた。咸康年間(三三五—三四二)に襄陽に至り、武當山に入つて戴孟に會つた。戴孟は先に獄中にやつて來た者であり、これによつて仙道を授かつた。また出仕して歷陽、新豐、西道三縣の長となり、あちこちで神驗^④あらたかであつた。七十餘歳になつてもまだ老いることなく、その後ようやく亡くなつた。

黃衣童子とは、玉珮金璫の官である。その席にいつも一人が一緒に坐り^{ふつ}勝^{ふつ}と勝つてあつた。はつきりしないありさまである。としてゐるということだが、それがつまり太極真人なのであつて、時おりやつて來たのだ。〈按ずるに、このように説いてゐるのは、黃衣童子の事をたずねたのに答えたものようである。思うに午時のことかも知れぬ。謝允の事に話が及んだので、そのついでに目の當

たりにたずねたのである〉

『玉珮金璫經』を授けられて實踐すると、自然に太極真人を招くことになる。諺に「九靈日月華を服すと、わが太極の家に(太極真人を)降すことができる」というのは、この意味である。太上玄眞の法もやはりその要約で、これを行ふ者は神仙不死となる。

裴眞人(裴玄仁)には弟子が三十四人いる。そのうちの十八人は佛道を學び、他の者は仙道の^ま鑑へきつと^ま牖の字であらうを學んでゐる。《弟子として劉顯林、辛仲甫、趙子常がゐる》

周眞人(周紫陽)には十五人の弟子がゐる。そのうちの四人は佛法を解している。《入室の弟子として王瑋達、李建道、泉法堅がゐる》

桐柏眞人(王子喬)には二十五人の弟子がゐる。そのうちの八人は佛法を學んでいる。《入室の弟子として于弘智、竺法靈、鄭文成、陳元子がゐる》〈これらはきつとすぐれた者を略擧したのであらう。辛、泉、于、竺はすべて胡姓のようである。きつと佛法を學んでいる弟子であらう〉

右の八條は許掾の寫しがあり、あわせて一篇となつて連なつてゐる。

(1) 郭子華、張季連、趙叔達 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位

「郭子華、趙叔達、張季連」、注「三人在霍山」。

(2) 太微黃書 『道藏』中に『洞眞太微黃書天帝君石景金陽素經』および『洞眞太微黃書九天八籙眞文』がある。

(3) 謝允 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「謝允」、注「歷陽人、戴孟弟子、晉成帝時得道」。『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二十七)七十二福地「第二地肺山、在江寧府句容縣界、昔陶隱居幽栖之處、眞人謝允治之」。

(4) 凡有八卷 『洞眞太微黃書九天八籙眞文』太微黃書凡有八卷、太微八垣四門高上經第一、太微九靈中華素經第二、…太微九天八籙眞文交帶第八、右太微黃書八卷、其第一第二第三第四、不行於世、其第五第六第七、傳當爲眞人、其第八、此則是也」。

(5) 神驗 『三洞珠囊』卷一救濟品(「道學傳第四」)又云、劉凝之字志安、小名長年、南郡枝江人也、居衡山之陽、採藥服食、受天師化民之道、夫妻竝共佩帶、救物災厄、亟有神驗也」。

霍山中有學道者鄧伯元王玄甫、受服青精石飯吞日丹景之法、用思洞房已來、積三十四年、乃內見五藏、冥中夜書、以今年正月五日、太帝遣羽車見迎伯元玄甫、以其日遂乘雲駕龍、白日登天、今在北玄圃臺、受書位爲中嶽眞人。(伯元、吳人、玄甫、沛人)

華陰山中有學道者尹虔子張石生李方回、竝晉武帝時人、授仙人管成子蒸丹餌朮法、俱服得延年健行、又受蘇門周壽陵服丹霞之道、行已五十年、精心內視、不復飲食、體骨輕健、色如童子、以今年二月十二日、太一遣迎、以其日乘雲升天、今在玄州、受書爲高仙眞人、張石生爲東源伯。

衡山中有學道者張禮正治明期二人、禮正以漢末在山中服黃精、顏色丁壯、常如年四十時、明期以魏末入山、服澤瀉柏實丸、乃共同止巖中、後俱授西城王君虹景丹方、從來服此丹、已四十三年、中患丹砂之難得、俱出廣州爲沙門、是滕含爲刺史時也、遂得內外洞徹、眼明身輕、一日行五百里、又兼守一、守一亦已三十年、以三月一日、東華遣迎、以其日乘雲升天、今在方諸飄室、俱爲上仙。(滕含以永和十年甲寅年爲廣州刺史、此得仙乙丑歲十二年、是爲前服丹已三十二年、猶更出查也)

廬江潛山中有學道者鄭景世張重華、竝以晉初受仙人孟德然口訣、

以入山、行守五藏含日法、兼服胡麻、又服玄丹、久久不復飲食、而身體輕強、反易故形、以今年四月十九日、北玄老太一迎以雲耕、白日升天、今在玄州。

括蒼山有學道者平仲節、河中人、以大胡亂中國時來渡江、入括蒼山、受師宋君存心鏡之道、具百神行洞房事、如此積四十五年中精思、身形更少、體有真炁、今年五月一日、中央黃老遣迎、即日乘雲駕龍、白日升天、今在滄浪雲臺。〔大胡亂者是劉淵劉⁽¹⁾〕〔聰〕時也、石勒爲小胡

剡小白山中有學道者趙廣信、陽城人、魏末來度江、入此山、受李法成服炁法、又受師左君守玄中之道、內見五藏徹視法、如此七八十年、周旋郡國、或賣藥出入人間、人莫知也、多來都下市丹砂、作九華丹、丹成一服、太一道君以今年六月十七日遣迎、停三日、與山中同志別去、遂乘雲駕龍、白日登天、今在東華。

海中有狼五山、中有學道者虞翁生、會稽人也、昔受仙人介君食日精法、以吳時來隱此山、兼行雲炁廻形之道、精思積久、形體更少如童子、今年七月二十三日、東太帝遣迎、即日乘雲升天、今在陽谷山中。〔狼五山在海中、對白章岸、今直呼爲狼山〕

赤水山中學道者朱孺子、吳末入山、服菊花及朮餌、後遇西歸子、從乞度世、西歸子授以要言入室存泥丸法、三十年、遂能致雲雨於洞房中、今年八月五日、西王母遣迎、即日乘五色雲車登天、今在積石臺〔赤水山云在鄯縣南十里、從楠谿口入三百里、山正赤、週廻五十里、高千餘丈、如此則應是臨海永嘉東北名赤巖者也、許先生所住赤山、一名燒山、即此〕、

名山五嶽中學道者數百萬入、今年有得道而升天者、人名如別、年年月月、皆有去者如此、不可悉紀、今爲疏一年之得道人耳、有不樂上升仙而長在五嶽名山者、乃亦不可稱數、或爲仙官使掌名山者亦復有數千。

九月二十日夜、清靈疏出。〔右八條有掾寫、共一卷相隨、清靈猶是裴清靈也、此九月即應是乙丑歲、即疏其年中得道者〕

〔1〕 俞本が「總」を「聰」に作るのに従う。

霍山中で仙道を學ぶ者に鄧伯元と王玄甫⁽¹⁾がいる。青精石飯を服用し、日の丹景を吞む仙法⁽²⁾を授けられ、それでもって洞房を存思し續けて三十四年。かくて五臟を内視し、暗闇の中で夜中に文字を書く

ことができるようになった。今年の正月五日に太帝は羽車^③を差し向けて鄧伯元と王玄甫を迎えに來させられた。その日、かくて雲車に乗り龍に牽かせて、白日昇天した。^④今は北玄圃臺にあって、辭令を授かつて中嶽眞人の位に就いている。〈鄧伯元は吳の人、王玄甫は沛の人である〉

華陰山中で仙道を學ぶ者に尹虔子、張石生、李方回^⑤がいる。いずれも晉の武帝の時の人である。仙人管成子の蒸丹餌朮の仙法を授けられ、ともに服用して長壽で健脚となることができた。また蘇門先生と周壽陵^⑦の丹霞を服用する道術を授けられ、これを實踐することすでに五十年、精誠の心をもって内視し、もはや飲食せず、肉體骨格は輕やかで壯健となり、^⑧色艶も童子のように若々しくなった。今年の二月十二日に太一君は迎えを遣わされ、その日に雲車に乗って昇天した。今は玄州にあって、辭令を授かつて高仙眞人となっている。張石生は東源伯となっている。

衡山中で仙道を學ぶ者に張禮正、治明期^⑨の二人がいる。張禮正は後漢末に山中で黃精を服用し、顔色は壯年のごとく、いつもまるで四十歳の年齢のようであった。治明期は魏の末に山に入り、澤瀉^⑩柏實丸^⑪を服用していた。この二人は巖窟中で起居をともしにしていた。後、ともに西城王君の虹景丹方を授けられ、以來ずっとこの丹藥を

服用し續けてすでに四十三年。その間、丹砂が入手しにくいことから、ともに廣州に出かけて沙門となった。ちょうど滕含^⑫が廣州刺史であった時のことである。かくて身體の内外が透き通り、眼は明らかとなり身體は輕やかとなり、一日に五百里を行くことができるようになった。また守一の法を兼ね行った。守一の法を行うこともすでに三十年、三月一日に東華方諸君は迎えを遣わされ、その日に雲車に乗って昇天した。今は方諸宮の飄室^⑬にあって、ともに上仙となっている。〈滕含は永和十年(三五四)甲寅の歲に廣州刺史となつてゐる。ここに仙人となることができたのは乙丑の歲(興寧三年、三六五)であつて、十二年後のことである。それ以前に丹藥を服用すること三十二年であつたのだが、それでもなおさらに外へ探しに出かけたというわけである〉

廬江の潛山中で仙道を學ぶ者に鄭景世と張重華^⑭がいる。いずれも晉初に仙人孟德然^⑮の口訣を授けられて山に入り、五臟神を守し日を含む仙法を修行した。兼ねて胡麻を服用し、さらに玄丹を服用し、久しくもはや飲食することなく、身體は輕やかで強健となり、古びた肉體を若返らせた。今年の四月十九日に北玄老太一君は雲の幌車をもって迎えられ、白日昇天した。今は玄州にいる。

括蒼山^⑯で仙道を學ぶ者に平仲節^⑰がいる。河中の人である。大胡が

中國を亂した時、江南に渡來して括蒼山に入った。師匠宋君の心鏡を存思する道術^④を授けられ、もろもろの神々を取りそろえ、洞房存思の事を實修した。このようにすること四十五年、精思し續けていると、肉體はますます若返り、體內に眞氣が宿るようになった。今年の五月一日に中央黃老君が迎えを遣わされ、早速その日に雲車に乗り龍に牽かせて、白日昇天した。今は滄浪宮の雲臺にいる。(大胡の亂とは、劉淵と劉聰の時のことである。石勒は小胡といふ)

剡の小白山中で仙道を學ぶ者に趙廣信^⑤がいる。陽城の人である。魏の末に江南に渡來し、この山に入った。李法成^⑥の服氣の法を授けられ、また師匠左君(慈)の玄中を守る道術^⑦と體內に五臟を徹視する仙法を授けられた。このようにすること七、八十年、郡國を巡り歩き、時には藥を賣って巷間に入入りしていたが、誰もそうだと氣づく者はいなかった。しばしば都にやって來て丹砂を買い入れ、九華丹を作り、九華丹が完成して一たび服用すると、太一道君が今年の六月十七日に迎えを遣わされた。留まること三日、山中の同志に別れを告げ、かくて雲車に乗り龍に牽かせて、白日昇天した。今は東華方諸宮にいる。

海中に狼五山があり、その山中で仙道を學ぶ者に虞翁生^⑧がいる。會稽の人である。かつて仙人介君の日精を食する仙法を授けられ、

吳の時にこの山にやって來て隠れ住んだ。兼ねて雲氣廻形の道術^⑨を實修し、久しい間精思していると、肉體はますます若返って童子のようになった。今年の七月二十三日に東太帝は迎えを遣わされ、早速その日に雲車に乗って昇天した。今は陽谷山中にいる。(狼五山は海中にあつて白章の對岸である。今はただ狼山と呼んでいる)

赤水山中^⑩で仙道を學ぶ者に朱孺子^⑪がいる。吳の末に山に入り、菊花と朮餌を服用した。後に西歸子^⑫に出會い、彼に登仙せんことを乞うた。西歸子から要の言葉である、靜室に入つて泥丸を存思する仙法を授けられた。三十年すると、雲や雨を洞房中に招くことができるようになった。今年の八月五日に西王母は迎えを遣わされ、早速その日に五色の雲車に乗って昇天した。今は積石臺にいる(赤水山は、鄭縣の南十里、楠谿口から三百里入つたところにあり、山はまっ赤で、周圍は五十里、高さは千餘丈という。そうであれば、臨海と永嘉の東北にある赤巖山^⑬と呼ばれる山に違いない。許邁先生が住んでいた赤山、一名燒山とは、すなわちこのことである^⑭)。

名山五嶽中で仙道を學ぶ者は數百萬入る。今年、得道して昇天した者の名前は以上のとおりである。毎年毎月いつも仙去する者がこのようにおり、すべての名を書き記すことはできない。今はこの一年間の得道者を書き出しただけである。天界に昇る仙人となることを願わずに、いつまでも五嶽名山に留まる者がおり、これもまた

數えきれぬ。あるいは仙官の手下となって名山を管掌している者もやはり數千人いる。

九月二十日の夜、清靈真人が書き出させられたもの。〈右の八條は許掾の寫しがあり、全部で一巻で前後あい連なっている。清靈真人とは、やはり裴清靈のことである。この九月とは、きつと乙丑の歲(興寧三年、三六五)のことであり、その年一年間に得道した者を書き出したのである〉

(1) 鄧伯元、王玄甫 『眞靈位業圖』第五左位散位「鄧元伯、王玄甫」、注「霍山人」。

(2) 服青精石飯吞日丹景之法 『登眞隱訣』卷下注「青精餽飯、服之亦使人不病不災」。『無上祕要』卷八三得地眞道人名品「鄭景世、張重華、此二人、晉初人、俱在潛山中、受行守五藏吞日法、服胡麻及玄丹、北玄老君太一遣迎、在玄洲」。

(3) 羽軍 『無上祕要』卷一九天帝衆眞儀駕品「東方青帝消魔大王、常以春分之日、駕乘青輦羽軍、飛行雲中、遊宴五嶽、…右出洞眞金玄羽章玉清隱書」。

(4) 乘雲駕龍、白日登天 『紫陽真人內傳』「仙人曰、藥有數種、仙有數品、有乘雲駕龍、白日昇天、與太極眞人爲友、拜爲仙官

之主」。

(5) 尹虔子、張石生、李方回 『眞靈位業圖』第五左位散位「尹虔子(注：華山)、張石生(注：爲東源伯)、李方回(注：三人竝晉時服訖)」。

(6) 管成子 『眞靈位業圖』第五左位散位「管成子」、注「尹虔子師」。

(7) 蘇門、周壽陵 『眞靈位業圖』第五左位散位「蘇門先生、周壽陵」。

(8) 體骨輕健 『抱朴子』至理「乃咬吸寶華、浴神太清、…拘魂制魄、骨填體輕、故能策風雲以騰虛、竝混輿而永生也」。

(9) 張禮正、治明期 『眞靈位業圖』第五左位散位「張禮正(注：衡山、漢末服黃精)、治明期(注：衡山)」。

(10) 柏實丸 『重修政和證類本草』卷二二木部上品「柏實、味甘、平、無毒、…久服令人潤澤美色、耳目聰明、不飢不老、輕身延年」、陶弘景注「柏葉實亦爲服餌所重」。

(11) 滕含 『晉書』卷五七滕修傳附滕含傳を參照。

(12) 鄭景世、張重華 『眞靈位業圖』第五左位散位「鄭景世」、注「廬江潛山」。同第五右位散位「張重華」、注「晉初服胡麻」。

(13) 孟德然 『眞靈位業圖』第五左位散位「孟德然」、注「鄭景女師」。

(14) 括蒼山 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)十大洞天「第十

- 括蒼山洞、周廻三百里、號曰成德隱玄之洞天、在處州樂安縣、屬北海公涓子治之。
- (15) 平仲節 『眞靈位業圖』第五右位散位「平仲卿」、注「括蒼山受懋境」。
- (16) 宋君存心鏡之道 宋君は『眞靈位業圖』第五左位散位に見える。『三洞珠囊』卷三服食品「(登眞隱訣第七)」又云、：服玉液潮腦精心鏡道」。
- (17) 大胡亂者是劉淵劉聰時也 『晉書』卷一〇一劉元海載記および同卷一〇二劉聰載記を参照。
- (18) 趙廣信 『眞靈位業圖』第五右位散位「趙廣信」、注「魏末小白山」。
- (19) 李法成 『眞靈位業圖』第五左位散位「李法成」、注「趙廣信師」。
- (20) 守玄中之道 『三洞珠囊』卷三服食品「(登眞隱訣第七)」又云、：具百神守玄中道」。
- (21) 虞翁生 『眞靈位業圖』第五右位散位「虞公生」、注「海中狼山」。
- (22) 雲炁廻形之道 『三洞珠囊』卷三服食品「(登眞隱訣第七)」又云、：食日精雲氣廻行道」。
- (23) 赤水山 『周氏冥通記』卷四「臨海燒山中有仙人、遊在人間」、注「燒山即赤水山」。

- (24) 朱孺子 『眞靈位業圖』第五右位散位「朱孺子」、注「赤水山」。
- (25) 菊花 『抱朴子』金丹「南陽鄆縣山中有甘谷水、谷水所以甘者、谷上左右、皆生甘菊、菊花墮其中、歷世彌久、故水味爲變、其臨此谷中居民、皆不穿井、悉食甘谷水、食者無不老壽、高者百四五十歲、下者不失八九十、無天年人、得此菊力也」。
- (26) 西歸子 『眞靈位業圖』第三左位「西歸子」、注「未顯」。『無上祕要』卷八四得太極道人名品「文始先生西歸子半車童子、此三人竝栢成之師友」。
- (27) 赤巖 『陶隱居內傳』卷中「初欲入剡、或度天台、至浙江、值潮波甚惡、乃上東陽、仍停長山、聞南路有海、掠不可行、稍進赤巖、宿瞿溪石室、夢人告云、欲求還丹、三永之間、乃自思惟、知是永嘉永寧永康之際、：後入楠溪青嶂山、愛其稻田乃居」。
- (28) 許先生所住赤山： 『眞誥』卷四葉九裏を参照。
- 吳陸者、長安人也、少爲縣吏、掌局枉剋民人、民人訟之、法應入死、陸登委叛、遠遁山林、餓經日、行至石室、遇見孫先生在室中隱學、左右種黍及胡麻、室中恆盈食、陸至乞食、經月不去、孫先生知是叛人、初不問之、與食料理及誦經講道、說及禍福、陸聞之、於是心開意悟、因叩頭自搏、列其事源、立身所行、自首事實、求得改往、遂留石室、爲先生掃除驅使、經四十年後、先生受其道、俱採藥服食

胡麻、精修經教、得三百二十年、服丹白日升天。

朱狂者、陳留人也、爲人無道、專作劫盜、後人發覺收掩、狂得逸出遠他境、至汝南少室山中、見馮先生隱學、云後三年乃受其眞仙、留山服食修道三十八年、後入東阮山中、壽百四十七歲、仙人降、將入大有山洞中成眞人。

郭靜者、潁川人也、少孤無父母兄弟、窮苦依棲無所、年十六、縣召爲吏、後得罪、仍逃伏、經二月日不出、遇見鄭先生救度一切、以法勸化之、靜遂隨鄭負擔驅使、經七年、不敢懈怠、遂受其導引之要、餌服山朮茯苓、得壽三百歲、復於天維山赤松子降、受其二人眞道、今在大有洞中爲眞人。

范伯慈者、桂陽人也、家本事俗、而忽得狂邪、因成邪勞病、頓臥床席經年、迎師解事、費用家資漸盡、病故不愈、聞大道清約無所用、於是意變、聞沈敬作道士精進、理病多驗、乃棄俗事之、得五十日、病疾都愈《云云》、後詣陸玩之受眞內道、玩之不能入山、伯慈不樂於世、遂辭去入天目山、服食胡麻、精思十七年、大洞眞仙司命君下降、受三十六篇經、後服還丹、白日昇天、今爲玄一眞人。《所注云云云處、是抄事人不能併取、非本闕也、有「右」四條、有人於東閭鈔得、云是眞書、而不知誰跡、亦無所受者、而辭旨有用、故紀錄之、

又此四人各有所明、一則酷吏、二則凶劫、三則孤癯、四是事俗、竝世間薄運、遂能得道、足知心之所造、非關善惡者也

司馬季主後入委羽山石室、大有宮中受石精金光藏景化形法於西靈子都、西靈子都者、太玄仙女也、其同時今在大有室中者、廣寧鮑叔陽太原王養伯潁川劉璋惠岱郡段季正、俱受師西靈子都之道也、季主臨去之際、託形枕席、爲代己之像、墓在蜀郡成都升盤山之南、諸葛武侯昔建碑銘德於季主墓前、碑讀末曰、「玄漢太叔、混合陰陽、天地交泮、萬品滋彰、先生理著、分別柔剛、鬼神以觀、六度顯明」。《真誥云、「季主咽虹液、而頭足異處」、劍經註云、「吞刀圭而蟲流」、今東卿說云、「託形枕席、爲代己之像」、似當是作錄形靈丸兵解去也、漢史既不顯其終、无以別測其事也

廣寧鮑叔陽者、漢高帝時趙王張耳張敖之大夫也、少好養生、服桂屑而卒死於廁溷間、今墓在遼東薊城之北山《漢高置燕郡、以薊屬燕、當是未分時也、

太原王養伯者、漢高皇后攝政時中常侍中《琅「郎」《瑯「琊」王探也、少服澤瀉、與留侯張良俱採藥於終南山、而養伯不及、遂師事季主《前漢中常侍不用闡人、中郎非侍郎之官、或是後別爲此位耳、

潁川劉璋惠、漢景帝時公車司馬劉諷也、後事季主、晚服日月炁、爲入室弟子、道成、晚歸鄉里、託形杖履、身死桑樹之下、今墓在汝

南安城縣西山、

岱郡段季正、本隱士也、不聞有所服御、晚乃從季主學道、行度秦州溺水、拘得尸而葬川邊、今南鄭秦川是也、此人亦季主入室弟子。
 〈尋此四人竝是用靈丸難解之道〉

季主一男一女、俱得道、男名法育也、女名濟華、今皆在委羽山中、濟華今日正讀三十九章、猶未過竟（此理亦欲難詳、季主讀玉經、服明丹之華、挹扶晨之暉、今顏色如二十女子、鬚長三尺、黑如墨也。

昨日東卿君道此、如所疏、眞奇事也、不知果云何耳。（此一行楊君自記與長史、不知之辭、或云別有以

季主託形隱景、潛跡委羽、紫陽傳具載其事也、昨夜東卿至、聊試請問季主本末、東卿見答、令疏如別、爲以上呈、願不怪之、省訖付火。（此楊君與長史書、今有華撰周君傳、記季主事殊略、未見別眞手書傳、依此語則爲非也、此前似有按語、今闕失一行）

是後聖季君紀也、大都與前者略同、然東卿復兼有注解、注解近萬餘言、大奇作也、昨來多論神化之事、聊及季主耳、去月又見授神虎經注解、注解非世間所聞、亦自不掌其旨也、若更聞如季主比者、自當密白。（此亦楊君與長史書也、既是論季主事、故仍以相次、不復出

置下卷、長史撰眞仙傳、欲以季主最在前、所以楊君爲請問本末也、司命所注二經、竝未出世也

右十條有楊書。

（1）この段、『三洞珠囊』卷一教導品に同文が見える。

（2）意をもって「有」の字を「右」の字に改める。

（3）この段、『無上祕要』卷八四得太極道人名品および『雲笈七籤』

卷八五司馬季主に同文が見える。

（4）注に従って「琅」を「郎」に改める。

（5）「瑯」は衍字とみなす。

（6）これ以下、『三洞珠囊』卷八相好品に同文が見える。

吳睦^①は長安の人である。若くして縣吏となり、權限をかさにきて民衆をいためつけた。民衆はそれを訴え、法律上、死罪に當たることになった。睦はすぐさま逃亡し、遙か遠く山林に逃れた。何日も腹をすかせたまま、石室までたどり着くと、孫先生が室内で隱居學問^②をしているのにたまたま出會った。左右には黍と胡麻が植えてあり、室内はいつも食料で一杯である。睦は到着すると食べ物を乞い、

何箇月も立ち去らなかつた。孫先生は睦が逃亡者であることを知っていたが、まったく問いただすことはなく、食べ物を與えて世話してやったり、經典を誦し道を説き、禍福の道理にまで話が及んだ。睦はそれを聞き、そこではたと心に悟り、それで頭を地に打ちつけ體を激しくたたいて、事の起こりや世に出てから行ってきたことを述べ連ね、事實を白狀し、過去の過ちを悔い改めたいと懇願した。そのまま石室に留まり、先生のために掃除や下働きをした。四十年たつてから、先生は彼に仙道を授け、一緒に藥を採り、胡麻を服し、經典の教えをしっかり修めた。三百二十年たつて、丹を服用して白日昇天した。

朱狂^⑤は陳留の人である。その人柄は無道で、もっぱら強盜を稼業としていた。後に人が氣づいて取りおさえようとしたが、狂は逃れて遠い他郷に逃げおおせた。汝南の少室山にやつて来て、馮先生が隱居學問しているのに出會つた。先生は言つた。「三年たつたら、そなたに眞仙の教えを授けてやろう」。山に留まつて服食を行い仙道を進めること三十八年、後に東阮山に入り、壽命百四十七歳になつたところで、仙人が降つて来て、彼を連れて大有山洞の中に入り、眞人となつた。

郭靜^⑥は潁川の人である。若くして一人ぼっち、父母も兄弟もなく、

窮乏を極め、身を寄せる所とてなかつた。十六歳の時、縣から召されて吏となつた。その後、罪を得たので、逃亡して潛伏し、二箇月の間顔を出さなかつた。鄭先生があらゆるものを救済し、道法でもって勸化教導しているのにたまたま出會ひ、靜は鄭先生に随つて荷物をつぎ下働きをすることとなつた。七年の間怠けることなく勤めたので、導引の要法を授けられ、山朮と茯苓を服し、三百歳の壽命を得た。また天維山では赤松子が降つて来て、この二人に眞道を授けた。今は大有洞中にいて眞人となっている。

范伯慈^⑦は桂陽の人である。彼の家はもともと俗神に仕えていたが、突然狂邪の氣にとりつかれ、それがもとで邪勞の病となり、何年もベッドで寝たきりとなつた。祈禱師を招いて邪氣拂いをし、家の資産も使ううちにだんだん底をついてきたが、病氣はいくら變わらず治癒しなかつた。大道は清廉で質素^⑧、費用はいらないということを聞き、そこで氣が變わり、沈敬が道士となつて精進を重ね、病氣を治すにも靈驗あらたかだということを聞くと、俗神を棄てて彼に歸依した。五十日もすると病はすっかりよくなつた(云云)。後に陸玩^⑨を訪ね、眞内道を授けられた。玩之は山に入ることができず、伯慈は世間が好きでない。そこで辭去して天目山に入り、胡麻を服食し、精思すること十七年、大洞眞仙司命君が降つてきて、三十六篇の經を授けた。後に還丹^⑩を服し、白日昇天した。今は玄一眞人となつて

いる。「云云」と注しているところは、書き寫した者がそっくりそのまま書きとることのできなかつたもので、もともと缺けていたのではない。右の四條は、ある者が東方で書きとつてきて、眞書だと言っているが、誰の筆跡だか分からず、授けた者の名もない。しかし文の趣旨は役に立つので、ここに續けて記しておく。またこの四人の事跡はおのの發明するところがある。一番目は酷吏、二番目は凶惡強盜、三番目はみなし子、四番目は俗神に仕えた者。いずれも世間での運は薄かつたが、道を得ることができた。心の到達點は善惡に關係のないということがよく分かるであらう。

司馬季主は後に委羽山の石室に入り、大有宮^①中で石精金光藏景化形の法を西靈子都^②から授かつた。西靈子都は、太玄の仙女である。彼と同時に今大有室中にいる者は、廣寧の鮑叔陽、太原の王養伯、潁川の劉瑋惠、岱郡の段季正^③で、そろって師たる西靈子都の仙道を授かつたのである。季主は世を去るにあたつて、肉體を枕^{むしろ}と席^{むしろ}に託し、身代わりの姿とした。墓は蜀郡成都の升盤山の南にある。諸葛武侯は昔、季主の墓前に碑を立て徳を刻み記した。碑讚の終わりに「はこうある。」

玄冥茫漠、靜々寂々、

そこに陰と陽とが混ざりあう。

天と地はそれぞれに別れ、

萬物が盛んに姿を現す。^①

先生には理が顯著に備わり、

柔なるものと剛なるものとを分かつた。^②

鬼神の姿を伺い見ることだろう、

六度^③も明らかとなつた。〈眞詰〉には、「季主は虹丹の液を飲んで、頭と足とが別々になつた」とある。^④『劔經』の注には、「一匙呑みながら蟲が流れ出た」とある。^⑤今ここで東卿司命君が「肉體を枕と席に託し、身代わりの姿とした」と言っているのは、錄形靈丸^⑥による兵解を行つて世を去つたかのようなのである。漢代の史書がその最後を「はつきりと記述していないからには、その事を推測するすべはないのである」

廣寧の鮑叔陽は、漢の高祖の時の趙王であつた張耳と張敖^⑦の大夫である。若くして養生を好み、桂屑^⑧を服して、便所のところまづくり死んだ。今、墓は遼東の薊城の北山にある。〈漢の高祖は燕郡を置き、薊を燕に屬させた。きつと（燕と薊とが）まだ分かれていなかった時のことであらう。〉

太原の王養伯は、漢の高祖の呂皇后が攝政していた時の中常侍、中郎であつた王探である。若くして澤瀉を服し、留侯張良^⑨と一緒に終南山で藥を採つたが、養伯は追いつけず、そのまま季主に師事した。〈前漢では中常侍に宦官を用いず、中郎は侍郎の官ではない。あ

るいは後で別にこの位に就いたのかも知れない。

潁川の劉瑋恵は、漢の景帝の時の公車司馬であった劉諷である。後に季主に師事し、晩年は日月の氣を服して、入室の弟子となった。仙道が成就すると、晩年は郷里に歸り、肉體を杖と履物に託し、わが身は桑の樹の下で死んだ。今、墓は汝南の安城縣の西山にある。

岱郡の段季正は、もともと隱士である。何かを服用したということとは聞かない。晩年には季主について仙道を學び、秦州を旅して水に溺れた。死體をひっかけてすくいあげ、川べりに埋葬した。今の南鄭の秦川がその場所である。この人も季主の入室の弟子である。(この四人を調べてみると、いずれも靈丸雜解の道を用いたのである)

季主は息子一人、娘一人、そろって仙道を體得した。息子の名は法育である。娘の名は濟華。今はどちらも委羽山中にいる。濟華は今、日ごとに三十九章の『大洞眞經』をきちんと讀んでいるが、まだ讀み終えていない(この理窟も、もうひとつよく分らない)。季主は玉經を讀んで、明丹の結晶を服し、扶晨の光をすくい取っている。今、顔色は二十の娘のようである。あごひげは長さ三尺、まるで墨のように黒い。

昨日、東卿司命君がこのことを告げて下さいました。ここに書き

とったとおりだとすれば、本當にすばらしいことです。(しかし)一體どうだかは分かりません。(この一行は、楊君が自ら記して許長史に與えたものである。「一體どうだかは分からない」との言葉は、他にわけがあるのだとも言う)

季主は肉體を託し^{ひかり}景を隱し、委羽山中に潜んでいる。『紫陽傳』はつぶさにその事を記載している。昨夜、東卿司命君がやって來られたので、ちよつと試しに季主の一生についてたずねてみたところ、東卿君はお答え下さり、別記のとおり書きとらせられた。こういうわけであな上に呈致します。どうかいぶかられることなきよう。見終わったら火にくべて下さい。(これは楊君が許長史に與えた書簡。今は華僑撰述の『周君傳』があるけれども、季主についての記載はことに簡略である。他の眞人の手になる(季主)傳も見ることがない。ここでの言葉によれば、そうではないのである。この前には按語があるようだが、今は一行分缺けている)

これは『後聖季君紀』²⁷に載っていることです。だいたいは先にお傳えたのとほぼ同じですが、しかし東卿君はまた注解まで施しています。注解は一萬字餘りほど、非常にすばらしい作です。昨日やって來られて神祕的な變化の事を多く論じる中で、少し季主に言及されたのです。先月にはまた『神虎經』の注解をお授け下さいました。

注釋は俗世間では耳にしたことのないものであり、やはりその内容を理解することのできぬものです。もしさらに季主の消息のようなことを聞いたなら、もちろんこっそりお知らせします。〈これも楊君が許長史に與えた書簡である。季主のことを論じているので、やはり（前の書簡に）續け、別出して下巻に入れることはしない。許長史は『眞仙傳』を書き進めていて、季主を一番前に置こうとしていた。だから楊君は彼のためにその一生についてたずねてやったのである。司命君の注した二つの經典は、どちらもまだ世に出ていない〉

右の十條は楊羲の書がある。

- (1) 吳睦 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「吳睦」、注「長安人、少爲縣吏」。
- (2) 隱學 『水經注』卷二六澠水「澠水東北逕逢萌墓、萌、縣人也、少有大節、恥給事縣亭、遂浮海至遼東、復還、在不其山隱學、明帝安車徵萌、以佯狂免」。
- (3) 禍福 『老子』第五十八章「禍兮福之所倚、福兮禍之所伏」。
- (4) 經教 『無上祕要』卷七四啓志願品「仙公請問太極真人高上法師曰、人根本行何修、而見世受福、家門端正、子孫昌盛、與善因緣、世世不絕、上生天堂、下生人間侯王之家、聰明儒仁、敬

信經教、憂樂山水、常誦微言、終得仙道、…右出洞玄請問經」。

- (5) 朱托 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「朱托」、注「陳留人、昔作劫盜」。

- (6) 郭靜 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「郭靜」、注「潁川人、少孤、爲縣吏」。

- (7) 救度一切 『七部名數要記』（『雲笈七籤』卷九一）七報「善惡多端、福報難數、大而言之、其標有七、一者先身施功布德、救度一切、令身所行、與先不異」。

- (8) 勸化 『無上祕要』卷四六昇玄戒品「當宣目戒、勸化一切、…右出昇玄內教經卷第九」。

- (9) 范伯慈 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「范伯慈」、注「桂陽人、少曾邪病」。

- (10) 事俗 『無上祕要』卷二二・三界官府品「右東明公所治主、在世事俗、信道不篤、死經於此、…右出洞玄經及眞跡經」。

- (11) 大道清約 『三天內解經』卷上「蓋三道同根而異支者、無爲大道清約大道佛道、此三道同是太上老君之法、而教化不同」。

- (12) 陸玩之 『晉書』卷七七陸玩傳を参照。

- (13) 還丹 『抱朴子』對俗「又服還丹金液之法、若且欲留在世間者、但服半劑而錄其半、若後求昇天、便盡服之」。同金丹「第四之丹名曰還丹、服一刀圭、百日仙也、朱鳥鳳凰、翔覆其上、玉女至傍」。

- (14) 大有宮 『無上祕要』卷二一仙都宮室品「大有宮、…右出洞眞經」。
- (15) 西靈子都 『眞靈位業圖』第三右位に見える。『五嶽眞形神仙圖記』(『雲笈七籤』卷七九)「漢初有司馬季主師事太玄仙女、注「太玄仙女、號西靈子都、居委羽石室大有宮中、有諸妙法、五嶽備焉」。
- (16) 鮑叔陽、王養伯、劉偉惠、段季正 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「鮑叔陽、王養伯、段季正、劉偉惠」、注「四人師西靈子都」。
- (17) 萬品滋彰 張華「鶴鵠賦」(『文選』卷一三)「陰陽陶蒸、萬品一區」。「老子」第五十七章「民多利器、國家滋昏、人多伎巧、奇物滋起、法令滋彰、盜賊多有」。
- (18) 分別柔剛 『周易』說卦傳「昔者聖人之作易也、將以順性命之理、是以立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、…分陰分陽、迭用柔剛、故易六位而成章」。
- (19) 六度 『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷一「太虛拔精、二象個光、八道調和、乘穆運芳、化理九絕、德暢玉皇、…慶雲霄構、六度休祥、靈風散魔、法鼓徵兵」。「無上祕要」卷九「昇上清品上」「上灌下溉、六度吐精、…右出洞眞青要紫書金根上經」。
- (20) 眞誥云… 『眞誥』卷四葉一五裏を参照。
- (21) 劍經註云… 『眞誥』卷一四葉一七表を参照。
- (22) 錄形靈丸 『無上祕要』卷八七尸解品「以錄形靈丸以含唾、塗所持杖、與之俱寢三日、則杖化爲己形、在被中自徐遁去、傍人皆不覺知、…右出洞眞藏景錄形神經」。
- (23) 張耳、張敖 『漢書』卷三三張耳傳を参照。
- (24) 桂屑 「衆仙服雲母法」(『雲笈七籤』卷七五)「又方、先以桂屑一升蒸成水、乃內蜜雲母於中、又蒸之成膏、服美酒下之、一月覺效」。
- (25) 留侯張良 『史記』留侯世家を参照。
- (26) 今有華撰周君傳 『眞誥』卷二〇葉一四表注「今世中周紫陽傳即是僞所造」。「道藏」に「紫陽真人內傳」がある。
- (27) 後聖李君紀 『道藏』に「上清後聖道君列紀」がある。
- (28) 下卷 『眞誥』卷一七握眞輔第一のこと。
- (29) 長史撰眞仙傳 『眞誥』卷一七葉一六表を参照。
- 范安遠通云、「湛子不事齊、齊師伐之」、春秋傳曰、「湛无禮也」。
 「此則左傳上事、諱字作譚字、音譚、國名也、莊王十三年、爲齊桓所滅、不知何故述此、似有所指也」
- 莊子師長桑公子、授其微言、謂之莊子也、隱於抱犢山、服北育火丹、白日升天、上補太極閭編郎。〈長桑即是扁鵲師、事見魏傳及史

記、世人苟知莊生如此者、其書彌足可重矣

施存者、齊人也、自號婉盆子、得遁變化景之道、今在中嶽或少室、往有壺公、正此人也、然未受太上書、猶未成眞焉、其行玉斧軍火符、是其所受之枝條也、施存是孔子弟子三千之數。三千之限有此人、而不預七十二者、明夫子不以仙爲教矣、壺公即費長房之師、^①「玉斧」軍火符、世猶有文存、^②「有」三條有楊書

(1) 俞本が「軍」を「玉斧」に作るのに従う。

(2) 俞本が「有」を「右」に作るのに従う。

范安遠はたまたま次のように言った。「湛子は齊に仕えなかったの
で、齊の軍隊が征伐した」。『春秋』の傳に「湛が禮を失したからで
ある」^①とある。〈これは『左傳』中の事柄で、「謹」の字を「譚」の
字に作っている。發音は譚で、國名である。莊王の十三年、齊の桓
公に滅ぼされた。なぜこのことを述べたのか分からないが、指し示
すところがあるようだ

莊子は長桑公子に師事して微言を授かった。^②これを『莊子』と呼

ぶ。(莊子は)抱犢山^③に隱棲して、北育火丹^④を服用して白日昇大し、
太極閣編郎^⑤に任命された。〈長桑は扁鵲の師であつて、事柄は『魏
傳』と『史記』に見える。世の人がもし莊子がこのようであること
を知つたならば、その書物はいよいよもつて重視するに値するであ
らう

施存^⑦は齊の人である。自ら婉盆子と號し、遁變化景の道を體得し
て、今は中嶽かあるいは少室山にいる。以前にいた壺公が、まさに
その人なのだ。しかしまだ太上の辭令を授かつていないので、やは
りまだ眞人にはなっていない。彼が用いている「玉斧符」や「軍火
符」^⑧は、彼が授かつたものの中の末節である。施存は孔子の弟子三
千人の中に數えられる。^⑨三千人の範圍内にこの人は入っているが、
七十二弟子の中に加えられないのは、明らかに孔子が仙道を教えと
しなかつたからである。壺公^⑩は費長房の先生である。「玉斧符」と
「軍火符」は世間にまだその符の模様が残っている。右の三條は楊羲
の書がある

(1) 春秋傳曰：『春秋』莊公十年「冬十月、齊師滅譚」、左傳「齊
侯之出也、過譚、譚不禮焉、及其入也、諸侯皆賀、譚又不至、
冬齊師滅譚、譚無禮也、譚子奔莒、同盟故也」。

- (2) 莊子師長桑公子、授其微言 『眞誥』卷一九葉一裏「仙書莊子內篇、義窮玄任之境、…所以莊篇亦如此者、蓋長桑公子之微言故也、俗儒觀之、未解所以」。
- (3) 抱朴子 『抱朴子』金丹「又按仙經、可以精思合作仙藥者、有華山泰山…抱朴子、…此皆是正神在其山中、其中或有地仙之人」。
- (4) 北育火丹 『三洞珠囊』卷三「(登眞隱訣第七) 又云、…北育火丹」。
- (5) 太極闡編郎 『眞靈位業圖』第三右位「韋編郎莊周」。
- (6) 事見魏傳及史記 『史記』は卷一〇五扁鵲傳を参照。
- (7) 施存 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「施存」、注「一號婉盆子、孔子弟子三千人數、得道」。
- (8) 玉斧軍火符 『抱朴子』遐覽「其次有諸符、則有自來符…軍火召治符玉斧符十卷、此皆大符也、其餘小小、不可具記」。
- (9) 孔子弟子三千之數 『史記』孔子世家「孔子以詩書禮樂教、弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人」。
- (10) 壺公 『神仙傳』壺公を参照。

九疑真人韓偉遠、昔受於中嶽宋德玄、德玄者、周宣時人、服此靈飛六甲得道、能一日行三千里、數變形爲鳥獸、得玄靈之道、今在嵩高、偉遠久隨之、乃得受法、行之道成、今處九疑山。

其女子有郭与藥趙愛兒王魯連等、竝受此方法而得道者、復數十人、或遊玄州、或處東華方諸臺、今見居也。

南嶽夫人言此云、「郭与藥、漢度遼將軍東平郭墓女也、少好道篤誠、眞人因授其六甲、趙愛兒者、幽州刺史劉虞別駕漁陽趙該姊也、好道得尸解、後又受此符、王魯連者、魏明帝城門校尉范陽王伯綱女也、亦學道、一旦忽委墮李子期、入陸渾山中、眞人授此法、子期者、^(同)「司」州魏人、清河王傳也、其常言此婦狂走、云一旦失所在」。

〈此事乃出靈飛六甲經中、長史抄出之〉

漢大將軍霍光有典衣奴子名還車、伺見二星、得年六百歲、今猶在焉。〈此事出方諸洞房經後、長史抄出、按魏書云、「青龍元年、并州刺史畢軌送漢度遼將軍范明友鮮婢奴、年三百五十歲、言^(諸)「語」飲食如常人、奴云、「霍顯者、光祿小妻、^(胡)「明」友妻是光祿前妻」、如依此妻、便非虛矣〉

⁽⁴⁾ 吞琅玕之華而方營丘墓者、衍門子高丘子洪涯先生是也、衍門子墓在漁陽潞縣〈幽州漁陽有潞縣、^(今)「上」黨亦有潞縣、衍門即羨門也〉、高丘子墓在中山聞喜縣〈中山有安喜縣、聞喜乃屬河東、洪涯先生墓在武威姑臧縣〈涼州記作姑臧縣、此三郡縣人竝云上古死人之

空塚矣、而不知高丘子時以尸解入六景山、後服金液之末、又受服琅玕華於中山、方復託死、乃入玄州、受書爲中嶽真人、于今在也。

衍門子今在蒙山大洞黃金之庭、受書爲中元仙卿、洪涯先生今爲青城真人。

漱龍胎而死訣、飲瓊精而叩棺者、先師王西城及趙伯玄劉子先是也。

〈王君昔用劍解、非龍胎諸丹、恐瓊精即是曲晨耳〉

服金丹而告終者、臧延甫張子房墨狄子是也。

挹九轉而尸臭、吞〔乃〕圭而蟲流、司馬季主寧仲君燕昭王王子晉是也。〈桐柏亦用劍解、當是此吞刀圭者、非九轉也、司馬季主亦以靈丸作兵解、故右英云頭足異處、燕昭學仙而不見別跡、景純云无靈炁、則爲〔先〕〔末〕究其事矣〉

周穆王北造崑崙之阿、親飲絳山石髓、食玉樹之實、而方墓乎汲郡〔此則穆天子傳所載、見西王母時也〕、

夏禹詣鍾山、啖紫柰、醉金酒、服靈寶、行九眞、而猶葬於會稽〔此事亦出五符中、茅傳又云受行玄眞之法〕、

北戎長胡大王獻帝舜以白琅之霜十轉紫華、服之使人長生飛仙、與

天地相傾、舜即服之、而方死葬蒼梧之野、此諸君竝已龍奏靈阿、鳳鼓雲池矣、而猶尸解託死者、欲斷以生死之情、示民有終始之限耳、豈同腐骸太陰以肉餉螻蟻者哉、直欲遏違世之夫、塞俗人之願望也。〔古來英聖之王、唯未見顯葬及湯得道及鬼官之迹耳〕

至於青精先生彭鏗鳳綱南山四皓淮南八公、竝以服上藥、不至一劑、自欲出處嘿語、肥遁山林、以遊仙爲樂、以升虛爲戚、非不能登天也、弗爲之耳、此諸君自展轉五嶽、改名易貌、不復作尸解之絕也。〔鏗則彭祖名也、青精亦出彭傳及王君傳飢飯方中、鳳綱并諸仙人各有別顯〕

軒轅自採首山之銅以鑄鼎、虎豹百禽爲之視火參鍾、鼎成而軒轅疾崩、葬喬山、五百年後山崩、空室無尸、唯寶劍赤鳥在耳、一旦又失所在也。〔列仙傳云御龍攀髯及子晉馭鶴、竝爲不同、亦可是化後更出而爲之也〕

(1) 宮内廳所藏正統道藏本(宮本)が「同」を「司」に作るのに従う。

(2) 俞本が「諸」を「語」に作るのに従う。

(3) 意をもつて「胡」の字を「明」の字に改める。

(4) この段、『無上祕要』卷八七尸解品に同文が見える。

- (5) 愈本が「今」を「上」に作るのに従う。
- (6) 宮本が「乃」を「刀」に作るのに従う。
- (7) 愈本が「先」を「未」に作るのに従う。

九疑真人韓偉遠^①は、その昔中嶽の宋德玄^②に教えを受けた。德玄は周の宣王の時の人で、この「靈飛六甲符」^③を服用して仙道を體得し、一日に三千里を行き、しばしば鳥獸に姿を變えることができた。玄靈の道を體得して今は嵩山にいる。偉遠は長い間彼に付き従ってやると仙法を授かることができ、それを行って仙道が成就した。今は九疑山にいる。

女性では郭芍藥、趙愛兒、王魯連などがいずれもこの方法を授かって仙道を體得した者である。さらに數十人がおり、玄州に遊んだり、東華万諸臺に留まったりして、今も現にいる。

南嶽夫人はこのことについて言われた。「郭芍藥は漢の度遼將軍、東平の郭蹇の娘です。年若くして篤く仙道を好んだので、真人が「六甲符」を授けました。趙愛兒というのは、幽州刺史劉虞^④の別駕、漁陽の趙該の姉です。仙道を好んで尸解を遂げることができ、その後さらにこの符を授かりました。王魯連というのは、魏の明帝の城門

校尉、范陽の王伯綱の娘です。彼女もやはり仙道を學んで、ある日突然、夫の李子期を棄てて陸渾山中に入り、真人がこの仙法を授けました。子期というのは、司州の魏の人で、清河國王の守役でした。彼はいつも、「妻が氣が狂って出て行ってしまう」と言っていました。ある日行方が知れなくなったとのことでした。〈この事は『靈飛六甲經』にあり、許長史が書き出した〉

漢の大將軍霍光^⑤に還車という名の衣服係の下僕がいて、(北斗九星の)二星を觀測して六百歳の長壽を得、今もまだ健在である。^⑥この事は『方諸洞房經』の後にあり、許長史が書き出した。按ずるに、『魏書』に次のようにある。^⑦「青龍元年(二三三)、并州刺史の畢軌が、漢の度遼將軍范明友の鮮卑族の下僕を送って來た。年は三百五十歳とのことだが、言語や食事の様子は普通の人と變わらなかつた。下僕は『霍顯』^⑧というのは光祿(霍光)の妾であつて、明友の妻は光祿の前妻(の娘)である」と言つた。もしこのように妻について言っているのに基づけば、嘘ではない」

琅玕の華を呑みながら同時にやはり墳墓を築いた者は、衍門子、高丘子、洪涯先生^⑨がそれである。衍門子の墓は漁陽の潞縣にある(幽州の漁陽に潞縣があるが、上黨にも潞縣がある。衍門は羨門である。^⑩高丘子の墓は中山の聞喜縣にある(中山には安喜縣があるが、聞喜

は河東に屬する。洪涯先生の墓は武威の姑臧（藏？）縣にある『涼州記』は姑臧縣に作る。これら三つの郡縣の人々はいずれも「大昔の死者の空っぽの墓だ」と言っていて、次の事を知らない。高丘子はその時尸解によって六景山に入り、その後金液を服用したあげく、さらに中山で琅玕の華を服用する法を傳授されたが、同時にまた死にこと寄せて玄州に入り、辭令を授かつて中嶽真人となつて、今も生きている。

衍門子は今は蒙山の大洞黄金の庭におり、辭令を授かつて中元仙卿になつてゐる。洪涯先生は今は青城真人になつてゐる。

龍胎の仙藥を口にしながら死んでこの世と別れたり、玉のエキスを飲みながら棺を中からたいた者は、先師の西城王君と趙伯玄、劉子先がそれである。〔王君は昔劍解を用いたのであつて、龍胎などの丹藥によつたのではない。恐らく玉のエキスとは曲晨にはかなるまい〕

金丹を服用しながらこの世に別れを告げた者は、臧延甫、張子房、墨狄子がそれである。

九轉の丹藥をすくいとつて呑みながら死體から死臭を發したり、

一匙呑みながら蟲が流れ出たのは、司馬季主、寧仲君、燕の昭王、王子晉がそれである。〔桐柏真人も劍解によつたが、それはきつとこの一匙呑んだというものであり、九轉の丹藥ではないであらう。司馬季主も靈丸で兵解を遂げたので、それで右英夫人は「頭と足が別々になつた」と言っている。燕の昭王は仙道を學んだが、格別の事跡は見當たらぬ。郭景純（郭璞）が「靈妙な氣はなかつた」と言っているから、仙道を究められなかつたのであらう〕

周の穆王^①は北のかた崑崙の丘へ出かけて、自ら絳山の石髓を飲み、玉樹の實を食べたが、同時にやはり汲郡に墓がある（これは『穆天子傳』に載つており、西王母に會つた時のことである）。

夏の禹は鍾山へ出かけ、紫柰^②を食べ、金酒に酔い、靈寶を身につけ、九眞の法を實踐したが、やはり會稽に葬られた（この事も『靈寶』五符^③に見える。『茅三君傳』にも「玄眞の法を授かつて實踐した」とある）。

北戎の長胡大王が帝舜に白琅の霜と十轉紫華を獻上したが、これを服用すると長生して飛仙となり、天地と同じくらい生きられるもので、舜は早速服用したが、やはり死んで蒼梧の野に葬られた。これらの諸君はいずれもすでに龍となつて靈妙な丘で演奏し、鳳となつて雲池で演奏することもできた。それなのにやはり尸解して死に託したのは、生死への思いを斷ち切つて、始めと終わりのけじめがあ

ることを人々に示そうとしたのである。太陰宮で身體を腐らせ、肉體を蟲けらどもに食わせる者と同じであるはずはない。ただひたすら俗世から去ろうとする者をおし止め、俗人の願望を塞ごうとしたのである。〈古來のすぐれた聖王のうちで、ただ堯と湯だけが仙道を體得したとか鬼官になったとかの事跡がはっきりと見られない〉

青精先生、彭鏗、鳳綱、南山四皓、淮南八公について言えば、みな上藥^{②7}を服用したが、一劑すべてを服用するまでには至らず、自分から身の處し方を決めて山林に隱遁し、名山に遊ぶ仙人であることを樂しみとして、虚空に昇ることを憂いとした。天に昇れなかったわけではない。昇ろうとしなかっただけである。これらの諸君は自ら五嶽を次々に巡り、名を改め姿を變え、もはや尸解によって命を絶つことは行わなかったのである。〈鏗は彭祖の名である。青精先生も『彭祖傳』や『王君傳』^{③1}、「飢飯方」に見える。鳳綱と諸仙人は、それぞれ別に明らかにされている〉

軒轅は自ら首山の銅を採取して鼎を鑄造したが、虎豹や禽獸たちが彼のために火加減を見て爐のまわりに集まった。鼎が完成すると軒轅は病死し、喬山に葬られた。五百年後、山が崩れると、墓室は空っぽで死體はなく、ただ寶劍と赤い靴があるだけであったが、ある日突然、また行方が分からなくなってしまった。『列仙傳』には、

龍に乗ってそのひげをつかまえて天に昇ったことと、王子晉が白鳥に乗ったことを述べており、いずれも違いがあるが、仙化した後であらためて出て来てそのようなことを行ったのかも知れない

(1) 韓偉遠 『眞靈位業圖』第四右位に見える。

(2) 宋德玄 『眞靈位業圖』第四右位「中央眞人宋德玄」。『太清眞人傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「太清眞人宋倫、字德玄、洛陽人也」。

(3) 靈飛六甲 『眞話』卷一八葉一一裏「掾、泰和元年八月服六甲符」、注「此靈飛六甲法、別有經」。『道藏』に『上清瓊宮靈飛六甲籙』および『上清瓊宮靈飛六甲左右上符』がある。

(4) 郭芍藥、趙愛兒、王魯連 『眞靈位業圖』第四右位「郭芍藥、趙愛兒、王魯連」、注「此三人女眞」。

(5) 劉虞 『後漢書』列傳六三劉虞傳を参照。

(6) 霍光 『漢書』卷六八霍光傳を参照。

(7) 有典衣奴子… 『雲笈七籤』卷二四總說星「玄門寶海經曰、…北斗九星、七見二隱、其第八第九是帝皇太尊精神也、漢相國霍光家有典衣奴子、名還車、忽見二星在斗中、光明非常、乃拜而還、遂得増年六百、內輔一星在北斗第三星、不可得見、見之長生、成神聖也、外輔一星在北斗第六星下、相去一寸許、若驚恐

厭魅、起視之吉」。

(8) 魏書云…『三國志』明帝紀を参照。

(9) 衍門子、高丘子、洪涯先生 『眞靈位業圖』第四右位「中嶽仙卿衍門子、…青城真人洪崖先生」。高丘子は『眞誥』卷五葉九裏に見える。

(10) 衍門即羨門也 『史記』封禪書「於是始皇遂東遊海上、行禮祠名山大川及八神、求僊人羨門之屬」。

(11) 蒙山大洞黃金之庭 『眞誥』卷一七葉一一表「十月二十三日夜、夢在一大山上、有人見告、此是蒙山大洞室中也」。

(12) 趙伯玄、劉子先 『眞靈位業圖』第四左位に見える。

(13) 劍解 『太平御覽』卷六六五に劍解の項がある。

(14) 臧延甫 『眞靈位業圖』第四左位に見える。

(15) 寧仲君、燕昭王 『眞靈位業圖』第四左位に見える。

(16) 右英云… 『眞誥』卷四葉一五表を参照。

(17) 景純云… 郭璞「遊仙詩」(『文選』卷二一)「燕昭無靈氣、漢武非仙才」。

(18) 周穆王 『眞靈位業圖』第三左位「周穆王」、注「至崑崙見西王母」。

(19) 穆天子傳所載 『穆天子傳』卷三「吉日甲子、天子賓于西王母」、注「紀年、穆王十七年、西征崑崙丘、見西王母、其年來見、賓于昭公」。

(20) 夏禹 『眞靈位業圖』第三左位に見える。『無上祕要』卷八四得太極道人名品「夏禹、姓姒、名文命、承舜王天下、受鍾山眞公靈寶九行九眞、又行玄眞法得道」。

(21) 紫素 『三洞珠囊』卷三服食品「(上清消魔經)又云、…仰握玄圃之瓊精、俯摘園丘之紫素」。

(22) 出五符中 『太上靈寶五符序』卷上「巡狩於鍾山、祀上帝於玉闕、歸洪勳於天后、還大成於萬靈、…忽得此書、禹乃更恭齋罄林幽岫、請奉佩身、真人告禹曰、汝功德感靈、天人竝助、而年命向彫、嶮矣哉、乃口訣以長生之道、示以眞寶服御之方、分璫而別還、乃計功勞於會稽之野、召會羣神於東越之山」。

(23) 玄眞之法 『太元真人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「然不先聞明堂玄眞之道、亦無由得太霄隱書也」。

(24) 北戎長胡大王… 『雲笈七籤』卷八五戎胡授舜十轉紫金丹敘を参照。

(25) 以肉餉螻蟻 『莊子』列禦寇「在上爲鳥鳶食、在下爲螻蟻食」。

(26) 青精先生、彭鏗、鳳綱、南山四皓、淮南八公 青精先生は『眞靈位業圖』第三左位「青精先生」。同第四左位「彭鏗(注：西入流沙)、鳳綱、…商西四皓、淮南八公」。南山四皓は『史記』留公世家、淮南八公は『史記』卷一一八淮南衡山傳索隱をそれぞれ参照。

(27) 上藥 『抱朴子』仙藥「神農四經曰、上藥令人身安命延、昇爲

天神」。

(28) 出處嘿語 『周易』繫辭上「君子之道、或出或處、或默或語」。

(29) 遊仙 『周氏冥通記』卷四「范監云、此是遊仙之廬」。

(30) 升虛 『楚辭』九歎「升虛凌冥、沛濁浮清、入帝宮兮」。

(31) 彭傳、王君傳 「彭傳」は『神仙傳』彭祖、「王君傳」は『清

虛真人王君內傳』であらうが、青精先生なる者は見えない。

(32) 列仙傳云：『列仙傳』黃帝「仙書云、黃帝採首山之銅、鑄鼎

於荆山之下、鼎成、有龍垂胡髯、下迎帝乃昇天」。同王子喬「王

子喬者、周靈王太子晉也、好吹笙作鳳凰鳴、遊伊洛之間、道

士浮丘公接以上嵩高山、三十餘年、後求之於山上、見栢良曰、

告我家、七月七日待我於緱氏山巔、至時、果乘白鶴、駐山頭、

望之不得到、舉手謝時人、數日而去、亦立祠於緱氏山下及嵩高

首焉」。

〈玉〉^①「王」子者、帝侑也、曾詣鍾山、獲九化十變經、以隱遁日

月、遊行星辰、後一旦疾崩、營塚在渤海山、夏中衰時、有發王子墓

者、室中無所有、唯見一劍在北寢上、自作龍鳴虎咆之聲、人遂無敢

近者、後亦失所在也。〈帝侑則堯父、外書作寧子〉

王子喬墓在京陵、戰國時復有發其墓者、唯見一劍在室、人適欲取

視、忽飛入天中也。

變巴昔作兵解去、入林慮山中、積十三年、而後還家、今在鶴鳴赤石山中。〈漢書云、「巴爲桂陽豫章太守、後下獄死」、當仍是用靈丸解

云〉^②「去」也、亦出仙傳中

右此三條、皆出掾寫劍經中、經非可輕見、既是說諸仙人事迹、隱居謹抄出以相輔類耳。

① 意をもって「玉」の字を「王」の字に改める。

② 俞本が「云」を「去」に作るのに従う。

王子^①というのは、帝侑である。かつて鍾山へ出かけて『九化十變經』を入手し、日月に身を隠して星辰の間を遊行したが、その後突然病死して、渤海の山に墓が造られた。夏が途中で衰微した時に、王子の墓を暴いた者がいたが、墓室には何もなかった。ただ一本の劍が北の部屋にあるだけであり、自然に龍が鳴き虎が吠える聲があるので、近づこうとする者は誰もなく、その後やはり行方が分からなくなった。〈帝侑は堯の父で、世俗の書物では「寧」の字に作って

いる

王子喬の墓は京陵にあって、戰國時代にその墓を暴いた者がいたが、ただ一本の劍が墓室にあるだけで、人がたまたまそれを手に取って見てみようとする、突然天空へ飛んで行ってしまった。

樂巴は昔兵解を行つてこの世から去り、林慮山に入つて、十三年たつてから家に戻つて來た。今は鵠鳴赤石山にいる。《(後)漢書》に、「樂巴は桂陽、豫章の太守となり、後に獄に下つて死んだ」とある。きつとやはり靈丸を服用して尸解して去つたのであらう。『神仙傳』にも見える。

右のこの三條はいずれも許掾が書寫した『劍經』に見える。その經は容易に見られるものではない。仙人たちの事跡について述べているので、隱居が謹んで書き出して、事例の補いとする次第である。

(1) 王子 『眞靈位業圖』第三左位「王子帝嚳」、注「黃帝曾孫、受靈寶五符」。

至人焉在、眼曜南辰、含靈萬世、乘景上旋、化成三道、日月爲隣、實玄實師、號曰元人、變成三老、友帝之先。

安知至人、不有來遊、觀化兆間、混俗爲儔、釋羽沈鈴、安此南壩、豈將好兆、染俗久留。《七聖玄紀》中云、「赤君下教、變迹作沙門、與六弟子俱」、皆顯姓名也。

爲世染俗、不適生期、赤怪潛駭、三柱爲災、賢者南遊、三嶽是之、玄君來行、人其誰知。《赤怪則災惑星也、三柱者五車星中三柱也、》^①「陟」屢反。

在元炁爲元君、在玄宮爲玄師、在南辰爲南極老人、在太虛爲太虛真人、在南嶽爲赤松子、此乃天帝四真人之師太一之友。《此四條是長史抄出、不審本是何經書中事、竝是說南嶽赤君下教之旨、師友之目、小異諸經》。

(1) 宮本が「歩」を「陟」に作るのに従う。

至人はどこにいるのだろうか、

明るく輝く南の星^①。

いつの世までも續くすぐれた靈性を持ち、
景^{ひかり}に乗って旋回しつつ空に上った。

三つの(根本の)道を作り上げ^③、

太陽や月と竝んでいる。

實に玄妙であり、實に人の師であり、
號して元人と言う。

姿を變えて三老^①となり、

天帝よりも先にある道と友となった。

誰が知っているだろう、かの至人が

(地上に)やって來ることがないわけではないことを。

變化のきつかけを民の間に見て取り^⑥、

世俗に混じってその仲間となり、

羽の衣を釋き、鈴の音を靜めて、

この南の山のくまに身を置く。

これは民を好んでのことなのだろうか、

世俗に染まって長らく留まっている。『七聖玄紀^⑧』の中に、「赤君
は地上に下って教えを説き、姿を變えて沙門となり、六人の弟子と
一緒にいる」とある。みな、姓名を明らかにしている」

世のために世俗に染まって、

永遠の生命を求めようとはしない。

赤く怪しげなものが密かに人々を驚かせ、

三柱の星が災いをなしている。

賢者は南遊し、

三嶽へと向かう。

玄君がやって來るのだ、

誰がこのことを知っているだろうか。『赤く怪しげなもの』とは、
熒惑星のことである。「三柱の星」とは、五車星^⑨の中の三柱である。

(「柱」は)陟屺^⑩の反

元氣の中にいる時は元君^⑪となり、玄宮にいる時は玄師となり、南

の星では南極老人^⑫となり、太虚においては太虚眞人となり、南嶽で
は赤松子となる。これは天帝四眞人の師であり、太一の友である。

この四條は許長史が書き出したものである。もともと、どの經書
に書かれていたものなのか分らない。いずれも、南嶽赤君が地上
に下って教えを説いたという趣旨を述べている。(ただし、南嶽赤君
の)師となり友となった者の名については、諸經とは少し異なる

(1) 南辰 『上清太上八素眞經』「飛登火星之道、…此所謂奔南辰

之法、不傳地仙、傳之、犯泄漏之罪」。

- (2) 含靈 『宋書』符瑞志上「夫體睿窮幾、含靈獨秀、謂之聖人、所以能君四海而役萬物、使動植之類莫不各得其所」。

- (3) 化成 『周易』賁「彖曰、…觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下」。

- (4) 三老 『無上祕要』卷三「衆聖傳經品」玄都仙王昔受之於太微三老、…右出洞真太微黃書經」。

- (5) 帝之先 『老子』第四章「道沖而用之或不盈、淵兮似萬物之宗、挫其銳、解其紛、和其光、同其塵、湛兮似或存、吾不知誰之子、象帝之先」。

- (6) 觀化 『莊子』至樂「滑介叔曰、亡、予何惡、生者假借也、假之而生、生者塵垢也、死生爲晝夜、且吾與子觀化而化及我、我又何惡焉」。

- (7) 混俗 『眞誥』卷二〇葉八裏「雖外混俗務、而內修真學」、『三洞珠囊』卷六立功禁忌品「黃順請問上經云、受老子經、不奉混俗祠祀」。

- (8) 七聖玄紀 『道藏』に『上清七聖玄紀經』および『上清五帝七聖玄紀廻天九霄經』なる書があるが、對應する記事はない。

- (9) 五車星 『晉書』天文志上「五車五星、三柱九星、在畢北、…三柱、一曰三泉、天子得靈臺之禮、則五車三柱均明有常」。

- (10) 元君 『抱朴子』金丹「復有太清神丹、其法出於元君、元君

者、老子之師也」。

- (11) 南極老人 『史記』天官書「狼比地有大星、曰南極老人、老人見、治安、不見、兵起」、正義「老人一星在弧南、一曰南極、爲人主占壽命延長之應、常以秋分之曙見於景、春分之夕見於丁、見、國長命、故謂之壽昌、天下安寧、不見、人主憂也」。

桐柏山高萬八千丈、其山八重、周廻八百餘里、四面、視之如一、在會稽東海際、一頭亞在海中、金庭有不死之鄉、在桐柏之中、方圓四十里、上有黃雲覆之、樹則蘇栞琳碧、泉則石髓金精、其山盡五色金也、經丹水而南行、有洞交會、從中過行三十餘里則得。〈此山今在剡及臨海數縣之境、亞海中者、今呼括蒼、在寧海北鄞縣南、金庭則前右弼所稱者、此地山外、猶如金靈而靈奇過之、今人无知此處、聞探藤人時有遇入之者、陽陳甚多、自可尋求、然既得已居吳、安能復覓越、所以息心、桐柏眞人之官自是洞天內耳

紫微夫人言。

右一條某書。

桐柏山は高さ一萬八千丈。その山は八重で、周圍は八百餘里ある。四つの面があり、それを見ると、同じように見える。會稽の東海の

際にあり、一つの山頭は低くなって海中に落ちこんでいる。金庭に
は不死の郷^①があり、それは桐柏山の中にある。四十里四方、上には
黄色い雲が覆っている。そこに生えている樹は蘇珥や琳碧^②、泉には
石髓や金精があり、その山はことごとく五色の金で出来ている。丹
水^③を経て南行すると、洞窟が交錯している所がある。そこを三十里
餘り進み行くと、(金庭を)見つけることができる。この山は、今
は剡縣と臨海郡の數縣の境界にある。「低くなって海中に落ちこむ」
ものは、今は括蒼(山)と呼んでいる。寧海の北、鄞縣の南にある。
「金庭」というのは、前に右弼王(王子喬)が言っていたものでは
ある^④。この地は山の外にある。あたかも金靈^⑤と同じであるが、靈奇は
それ以上である。今の人で、この場所を正確に知っている者はいな
い。藤を採りに行く人が、時おり偶然にここに入りこむことがある
と聞いている。小高くなった所や奥まった所などが澤山あるから、
自ずとこの場所をたずね求めることができるであらう。しかし、す
でに吳の地に居ることができているのであるから、どうして、その
うえさらに越の地(の洞天)を求めることができるのか。だからよ
そに心を向けないのだ。桐柏真人のもとに置かれる官は、當然、洞
天の中のものである。

紫微夫人のお言葉。

右の一條は、某の書。

① 不死之郷 『呂氏春秋』求人「南至交趾孫樸續構之國、羽人
裸民之處、不死之郷」。

② 蘇珥琳碧 『雲笈七籤』卷二中央太和寶眞無量國「其一角正
東、名曰崑崙宮、上生金銀之樹、瓊柯丹寶之林、垂蘇瑚以爲
枝、結玉精以爲實」。張衡「西京賦」(『文選』卷二)「珊瑚琳
碧、瑤琨璚珉、珍物羅生、煥若崑崙」、張銑注「琳碧瑤琨、皆
玉石」。

③ 丹水 『山海經』南山經「又東五百里、曰丹穴之山、其上多金
玉、丹水出焉、而南流注于渤海」。

④ 金庭則前右弼所稱者 『眞詰』卷二葉五裏を參照。

⑤ 金靈 『無上祕要』卷二・三界官府品「金靈宮、通氣府、右
小有玉眞萬華先生主圖玉君所居、右出洞眞經及道迹眞迹經」。

八溱山高五千里、周市七千里、與滄浪方山相連比、其下有碧水之
海、山上有乘林眞人鬱池玄宮、東王公所鎮處也、此山是琳琅衆玉青
華絳實飛聞之金所生出矣、在滄浪山之東北蓬萊山之東南。(此即扶桑
大帝所居也、方山即方丈山也、海中山名多載在五嶽序中耳)

方丈之西北有陰成大山、滄浪西南有陽長大山、山周迴各一千四百

里、高七百里、其山多眞仙之人所居處焉、此二山是陽九百六曆數之標揭也、百六之運將至、則陽長水竭、陰成水架矣、陽九之運將至、則陰成水竭、陽長水架矣、頃者是陰成山水際已高九千丈矣、百六之來、無復久時。《陰成水際出山高則是高、乃應云陽九而言百六、似是誤言、亦可是水起際如此高、非先水退際爾、但水性平、又非湍瀨、二山相去不遠、未解那得頓孤懸如此》

右二條有長史寫。

八淳山^①は高さ五千里、周圍七千里で、滄浪山、方山と連なっている。その下には青々とした大海原がある。山の上には乗（桑？）林眞人の鬱池玄宮がある。東王公が鎮座している所である。この山は、琳や琅などの多くの玉、青い華や赤い實、飛間の金などが産出する所である。滄浪山の東北、蓬萊山の東南にある。《これがつまり、扶桑太帝^②の居る所である。方山とは、方丈山のことである。海中の山の名前は、『五嶽序』の中に多く載せられている》

方丈山の西北に陰成大山があり、滄浪山の西南に陽長大山がある。山の周圍はそれぞれ一千四百里、高さは七百里で、その山には眞人や仙人が住んでいる所が多くある。この二つの山は、陽九、百六の

大災厄が起る曆數^③についての目印である。百六の運りが間もなくやって来る時には、陽長大山のまわりの海水は盡きてなくなり、陰成大山のまわりの水位が高くなる。陽九の運りが間もなくやって来る時には、陰成大山のまわりの海水は盡きてなくなり、陽長大山のまわりの水位が高くなる。近ごろ、陰成大山のまわりの水位がすでに九千丈の高さになった。百六の運りがやって来るのも、もうまもないことであろう。《陰成大山のまわりの水位が、山の高さ（七百里）以上になれば、高いということになる。《ところが、今は高さ九千丈なのだから》「陽九」（の運りがやって来る）と言うべきであるのに、「百六」と言っているのは、誤って言っているようである。あるいは、水がかさを増し始めた時の水位がこのよう（に九千丈の高さ）なのであって、それ以前の水位から退き始めた時の高さではないということなのかも知れない。しかし、水の性は平らかであるし、《ここが》急流であるわけでもない。二つの山はあまり遠く離れていないのに、なぜにわかにこのように水位の高低がかけ離れるのか分からない》

右の二條は、許長史の寫しがある。

① 八淳山 『登眞隱訣』卷下注「又云、入淳山在滄浪之東北、蓬

萊之東南、入淳山即太帝所治處也。『無上祕要』卷二・三界宮府品「扶桑宮、明眞殿、素林臺、積霄房、右在八淳山、太帝君所居、…右出洞眞經及道迹眞迹經」。

(2) 扶桑太帝 『元始上眞衆仙記』「扶桑大帝住在碧海之中、宅地四面、竝方三萬里」。

(3) 曆數 『論語』堯曰「堯曰、咨爾舜、天之曆數在爾躬」。『漢書』律曆志上「曆數之起上矣」。

未至廟第一高山西頭龍尾北汧、洪水一所、發地長六丈餘、廣五丈、入土六尺、水流勢撻地二百餘步、去路三里。

對廟後第二高山西頭汧、洪水一所、發地長四丈餘、廣三尺餘、入土四尺、水勢撻地三百餘步、去路二里。

近廟後汧脇、一所洪水、發地長五丈餘、廣四丈餘、入地二尺餘、水勢流入汧中、去廟一百五十步。

右蔣山北凡三處發洪、水流勢西北行。

此三條是異迹、既不見眞手、未審是非、又不知此發洪當是何時事、

山南乃經有發處、以積石塞之、世呼爲蔣侯飲馬汧、而山後不見有此、或當是將來期運之時乎。

廟に至る手前の、第一高峰の西側の龍尾^①の北の溪谷で、一箇所に洪水が起こった。長さ六丈餘り、幅五丈、地中の深さ六尺の規模で、穴があいて湧き出し、その水流の勢いは、二百歩餘りにわたって地をたたいて進み、道路から三里のところまで迫った。

廟の眞後ろの方角の、第二高峰の西側の溪谷で、一箇所に洪水が起こった。長さ四丈餘り、幅三尺(丈?)餘り、地中の深さ四尺の規模で、穴があいて湧き出し、水の勢いは、三百歩餘りにわたって地をたたいて進み、道路から二里のところまで迫った。

廟に程近い後ろ側の溪谷の脇のところ、一箇所に洪水が起こった。長さ五丈餘り、幅四丈餘り、地中の深さ二尺餘りの規模で、穴があいて湧き出し、水の勢いは溪谷の中に流れ入り、廟から百五十歩のところまで迫った。

右、蔣山の北側のおよそ三箇所において洪水が発生し、水流の勢いは西北に向かった。

この三條は、別の人の筆跡である。眞跡が見えないので、本當なのかどうか分らない。また、これらの洪水の發生がいつの時のことなのか分らない。山の南の方には、かつて洪水が發生した所がある。積み重ねた石でそこを塞いでおり、世間では蔣侯^②飲馬汧と呼んでいる。しかし、山の後ろ（北側）の方には、このような場所は見當たらぬ。あるいは、將來の（陽九、百六の）運りがやってくる時^③のことを言っているのであろうか。

① 龍尾 『南史』陳本紀上「（太平元年）六月甲辰、齊兵潛至鍾山龍尾」。

② 蔣侯 『搜神記』卷五「劉赤父者、夢蔣侯召爲主簿」。

③ 將來期運之時 左思「吳都賦」(『文選』卷六)「迴時世而淵默、應期運而光赫」、李善注「春秋說題辭曰、尚書者、所以推期運明命授之際」。

眞誥卷之十五

闡幽微第一

羅鄴山在北方癸地（此癸地未必以六合爲言、當是於中國指向也、則當正對幽州遼東之北、北海之中、不知去岸幾萬里耳）、山高二千六百里、周廻三萬里、其山下有洞天、在山之周廻一萬五千里、其上其下竝有鬼神宮室、山上有六宮、洞中有六宮、輒周廻千里、是爲六天鬼神之宮也（周廻一萬五千（五百）^①「里」、爲宮周廻一千里者、（三）^②「二百二十五所、今此六宮、止得六所爾、其餘空尙（三）^③「二百一十九所、計不容頓耳、恐所言或有舛漏處也」、山上爲外宮、洞中爲內宮、制度等耳。（此山既非人跡所及、故山上可以得立容、不知山復有幾洞門也）

第一宮名爲紂絕陰天宮、以次東行（以周廻論之、洞中直東西有三千七百五十里、今一宮周廻（二）^④「千里、是徑二百五十里、六宮若併列、合居千五百里耳、其兩邊各餘二（十）^⑤「千」餘里、南北有殊遠、悉悉當爲藩屏故也、不爾莫測所以也、

第二宮名爲泰煞諒事天宮、

第三宮名爲明晨耐犯武城天宮、

第四宮名爲恬昭罪氣天宮、

第五宮名爲宗靈七非天宮、

第六宮名爲敢司連宛屢天宮。（凡此六天宮亦皆應有義旨、乃粗可領解、自不容輕說）

凡六天宮是爲鬼神六天之治也、洞中六天宮亦同名、相像如一也。

〔此即應是北酆鬼王決斷罪人住處、其神即應是經呼爲閻羅王所住處也、其王即今北大帝也、但不知五道大神當是何者爾、凡生生之類、其死莫不隸之、至於地獄、所在盡有、不盡一處、泰山河海亦各有焉、此山外宮當是曹局、職司主領文簿、洞中內宮是住止及考謫之處也、今書家說有人死而復生者、竝云「初北同行、詣宮府考署、或如城」〔關〕檢課文書、恐此皆是至山上外宮中爾、如胡毋班往泰山府君處、亦不覺入洞中、恐鬼神恍惚、不使知見實事耳〕

世人有知酆都六天宮門名、則百鬼不敢爲害、欲臥時、常北向祝之三遍、微其音也〔前云宮名、今云門名、是爲門亦因宮爲名、宮直是虛號、門則有榜題、百鬼皆見、而人今亦知之、故所以畏伏也〕、祝曰、「吾是太上弟子、下統六天、六天之宮、是吾所部、不但所部、乃太上之所主、吾知六天之宮名、故得長生、敢有犯者、太上當斬汝形〔此云下統六天者、不爲六天所統也、不但吾自所部領、乃太上令吾主之、故復以爲威、猶如郡縣官爵有臺除、非白版之例也〕、第一宮名紆絕陰天宮、以次東行、第二宮名〔此二字、楊君書際紙下如此、據寫不熟詳、乃作七字、今世中諸本皆作第七、此誤爾、宮唯有六、豈容是有七耶、此呪復說以次東行四字者、是欲令鬼輩訝吾知其次第位例也〕、從此以次、訖六宮止、乃啄齒六下乃臥、辟諸鬼邪之氣。〔此一

遍呪訖、六啄齒、畢又呪、如此三過乃臥耳、此法已重抄在第三篇修事中耳〕

人初死、皆先詣紆絕陰天宮中受事、或有先詣名山及泰山江河者、不必便徑先詣第一天、要受事之日、罪考吉凶之日、當來詣此第一天宮耳〔此宮是北帝所治、故後悉應關由、猶如今州縣之獄、初雖各有執隸、終應送臺定其刑書、秦檄諒事宗天宮諸煞鬼是第二天也、卒死暴亡、又經於此〔此宮當得專主收煞也、其卒死暴亡、恐文書未正、或姓名相同者、所以先來檢問之也〕、賢人聖人去世、先經明晨第三天宮受事〔後云四明公各治一宮、不知此秦檄明晨兩宮當是何公所居、暴亡及賢聖、雖先暫經、亦猶應詣紆絕爲正也〕、禍福吉凶、續命罪害、由恬昭第四天宮、鬼官〔地〕〔北〕斗君治此中、鬼官之北斗〔非道家之北斗也、鬼官別有北斗君、以司生殺爾。〔按孫皓敗將張悌軍人柳榮病死、已三日、〔旦〕忽起大呼云、「至北斗門下、見人縛悌來」、因是驚〔誤〕〔寤〕、爾日晚、悌戰死、如此即應是第四宮也、今第五第六宮不顯所主者、恐是考責之府也〕

鬼官之天帝者、北帝君也、治第一天宮中、總主諸六天宮、餘四天宮、其四明公各在其中治。〔雖云各治一宮、又不顯各在何宮、宮既竝列、復不得依位作四方言之、尋其公次第高下、則第二宮名爲西明公治、第三宮東明公治、第四宮北斗君治、及次南次北也〕

二天宮立一官、六天凡立爲三官、三官如今刑名之職、主諸考謫、常以眞仙、司命兼以總御之也、竝統仙府、共司生死之任也、大斷制皆由仙官。《道家常呼三官者》是此也、而消魔經云、「俗宗又有左火官右水官及女官、亦名三官、竝主考罰」、今三茅君通掌之、大君爲都統、保命爲司察矣、所以隸仙官者、以爲天下人不盡皆死、其中應得眞仙、則非北帝所詮、或有雖死而神化反質者、如此皆在眞仙家簡錄、故司命之職應而統之也

鬼官北斗君乃是道家七辰北斗之考官、此鬼一官又隸九星之精、上屬北晨玉君。《天上北斗有所司察、故鬼官亦置此職、以精象相應、統領既關璇璣、是以仰隸太上之曹也》

①項梁城作鄧宮誦曰、

紂絕標《帶》①「帝」晨、諒事遘重阿、炎如霄中煙、勃若景曜華、武陽帶神《鋒》①「峰」、恬昭吞青河、閭闔臨丹井、雲門鬱差義、七非通奇蓋、連宛亦敷魔、六天橫北道、此是鬼神家、

誦有二萬言、今略道六天之官名、抄出之耳、夜中亦可微讀之、亦云辟鬼邪。《前第三宮名武城、今云武《關》①「陽」、或當是有兩《白》①「名」也、蘇韶傳云、「是」①「鬼」之聖者有項梁《義》①「城」、賢者有《美》①「吳」季子、但不知項是何世人也、或恐是項羽之叔項梁、而不

應聖於季子也》

鄧都稻名重思、其米如石榴子、粒異大、色味如菱、亦以上獻仙官。《後又有敘重思事、既是異日所說、兩出自非嫌、石榴子卽世之安石榴也》

炎慶甲者、古之炎帝也、今爲北太帝君、天下鬼神之主也。《炎帝神農氏、造耕稼、嘗百草、其聖功不減軒轅顓頊、無應爲鬼帝、又黃帝所伐大庭氏稱炎帝、恐當是此、非神農也、又外書云神農生首、今佛家作地獄中主煞者亦牛首、復致疑焉、四明公升擢既有年限、太帝位秩亦應加崇極、此雖已三千餘年、或恐如世中帝王不轉而公輔屢遷也》

武王發今爲鬼官北斗君。《文王之子、周武王也、姓姬名發、伐殷紂而爲天子、卽位二年崩、禮云年九十三、竹書云年四十五、按後云四明公竝得昇仙階、而不道北《年》②「斗」君、既仰隸玉晨、亦應預同遷品耳》

夏啓爲東明公、領斗君師。《禹之子也、姓姒、竹書云、「《卯》②「卽」位三十九年亡、年七十八」、自崩滅後至今已卯歲、允二千四百二十五年、《安》②「按」司命說格、在位二《十》②「千」四百年、得上補九宮、如此則宋元徽四年去矣》

文王爲西明公、領北帝師。〈文王名昌、禮云年九十七亡、此父子竝得稱聖德、而不免官鬼、雖爲煞數之過、亦當是不學仙道故也〉

邵公爽爲南明公。〈邵公名爽、文王庶子、食采於邵、〈卦〉「封」於燕國、按周公邵公太公俱佐命剋紂、公在不殊、而周公有聖德、仙鬼之中竝無顯出、太公執〈飽〉²³「旄」秉鉞、威罰最深、乃載出列仙、邵公恩流甘棠、翻爲〈魁〉²⁴「鬼」職、亦復難了、皆當各緣其根本業分故也、酆都唯有六宮、而周文王父子頓處其三、明周德之崇深矣〉

吳季札爲北明公。〈吳王壽夢之少子、闔閭之叔父、太伯之後也、亦姬姓、讓國居乎延陵、今季子廟是也、雖有仁賢之德、乃亞乎先聖、亦有殊例、尋此諸公、前後參差、當是道時代謝用人也、自夏啓已來二千餘年、方得遷改、乃十倍於地下〈生〉²⁷「主」者之數、明仙家品例、故爲貴妙〉

四明公復有賓友四人、然此四公後竝當升仙階也、四明主領四方鬼。〈賓友四人、其事在後、又按後定錄告云、「邵爽爲東明公、行上補九宮右保」、此乃仙階之證、而與前不同、且啓尙未去、邵理不得仙、恐脫「耳」²⁸「爾」誤云邵耳、既云東明公、則應猶是啓也、其疑事別在後也〉

西明郎十六人、主天下房廟鬼之血食。〈此郎亦應是隸西明公、房廟血食是受命居職者、非謂精邪假附也〉

周顒爲鬼官司命帥、今以鄧嶽程遐二人代、以其多事故也。〈周顒字伯仁、汝南安城人、仕晉過江、位至尚書僕射、元帝永昌元年、王敦南下、遣收、於石頭南門被害、年五十四、追贈光祿開府、諡康侯、鄧嶽字伯山、陳郡人、討郭默有功、咸〈寧〉²⁹「康」初爲平南將軍廣州刺史、於州病亡、辛亥子後云鄧嶽爲謝幼與司馬、此當是已遷也、程遐、代郡人、爲石勒謀臣、妹爲勒妻、官至右僕射開府代郡公、勒死、爲石虎所煞也〉

西明都禁郎賈誼、昔爲治馬融事不當、被黜守泰山、泰山君近請爲司馬、已被可。〈賈誼、前漢文帝時爲梁孝王傅、憂憤嘔血而死、後云、「荀顒爲泰山君、用曹洪爲司馬」、今當代曹也、馬融字季長、扶風人也、博學有才理、鄭玄之師也、仕後漢爲南郡太守、未嘗按劍殺人、忤梁冀、被徙朔方、於路自刺不死、後赦還拜議郎、延〈壽〉³⁰「熹」九年病亡、年八十九、融別傳復小異此耳〉

南門亭長、今用周撫代鄒鑒、一門有二亭長、輒有四修門郎、一天門凡八修門郎也、門郎爲天門亭長下官、此是北帝門也。〈後〈漢〉³¹云

主南北門簷、則一宮有三門也、蘇紹傳云修門郎有八人、乃言顏淵卜商今見居職、恐此不然、周撫字道和、潯陽柴桑人、周〔訪〕〔鮒〕子也、先爲王敦將、東下伐都、事敗、與鄧嶽俱走西陽蠻中、敦被殺、〔赫〕〔赦〕出、又爲將討蘇峻、後伐蜀平李勢、封建成公、爲鎮西將軍益州刺史、乃三十許年、興寧三年病亡、贈征西將軍、諡襄公、都鑒字道微、高平人、即愷父也、永昌元年、率諸流民、來渡江東、後討平王敦、封高平公、又爲車騎大將軍兖州刺史、鎮廣陵、復鎮徐州、蘇峻平、拜司空、改封南昌公、猶鎮京〔兆〕〔口〕城、咸康五年病亡、年七十一也、贈太宰、諡文成公也

北斗君天門亭長、今是臧洪、臧洪代隗囂、又一人是王波、新補〔此亦正是南門爾、其餘四明公四宮門、亦應大有、竝不顯出、臧洪字子源、廣陵射陽人、慷慨有節義、漢末、洪舉義兵誅董卓、後爲〔清〕〔青〕州、及東郡太守、背袁紹、紹攻圍、食盡被擒、乃害之、隗囂字季孟、天水人、有才德、爲物所附、前漢末、據隴西自稱王、建武元年、光武伐之、憤逼得病、兼餓遂亡、王波、渤海人也、晉尚書〔金〕〔令〕史、有才能、投石虎爲中書監、〔彼也〕〔被殺〕

紀瞻本爲撫河將軍司馬、今爲北天修門郎、代田〔錄〕〔銀〕、瞻與虞潭更直一日守天門、〔北天猶應是北帝門也、紀瞻字思遠、丹陽句容人、初仕吳爲中郎將、吳平還洛、舉秀才、稍遷爲會稽太守、遷侍中

尚書僕射驃騎將軍、泰寧三年病亡、年七十二、贈開府、諡穆侯、田〔錄〕〔銀〕、魏武帝時爲程昱參軍、後爲河間太守、反叛、爲閭柔所破爾、虞潭字思輿、會稽餘姚人、即虞〔查〕〔番〕孫也、位至衛將軍右光祿開府武昌侯、咸〔陽〕〔康〕八年病亡、年七十、贈光祿、諡孝列侯也

魏釗領廬山侯。〔釗〕字君思、會稽人、仕晉成穆公世、司徒左長史丹陽尹至左民尚書平壽侯、永和七年病亡矣

顧和從遼東戍還、有事已散、北帝當用爲執蓋郎、蓋郎范明遷補典柄侯。〔顧和字君孝、吳郡人、少孤有志操、仕晉爲吏部侍郎御史中丞吏部尚書領軍尚書僕射尚書令、永和七年病亡、年六十四、贈侍中司徒、諡穆公、〔外〕書不顯范明、唯前漢有范明友、恐非是此人、又詰試許先生者稱典柄侯周鮒主非吏者嚴曰虎、尋典柄侯猶應是典柄、呼之脫到爾、周〔訪〕〔鮒〕字子魚、吳郡陽羨人、周處父也、仕吳爲鄱陽太守、甚有威惠、嚴曰虎者、吳郡人也、以孫策時入山聚衆、策討之乃散、奔餘杭死、弟名輿亦勇健、策僞與會、乃戟刺殺之爾

殷浩侍帝晨、與何晏對。〔此有八人、事在後、殷浩字淵原、陳留長平人、康帝建元初爲楊州刺史、永和六年、進中軍將軍都督五州、北伐姚襄、敗還、爲桓溫所廢、徙東陽、永和十二年以憂亡、善能譚論、

〔後〕^④「故」與何晏對也、晏字平叔、何進孫、善言玄理、位至侍中尚書、黨曹爽、爲司馬宣王所誅

溫太眞爲監海開國伯、治東海、近取杜預爲長史、位比大將軍長史。
 〈溫嶠字太眞、太原祁人、仕晉爲江左平南將軍江〔則〕^④〔州〕刺史、下平蘇峻、位至驃騎將軍開府、封始〔五〕^④〔安〕公、咸和四年病亡、年四十二、贈太將軍、諡中武公、杜預字元凱、京兆杜陵人、博識多智、注春秋、仕晉、起家尚書郎、位至都督荊州、鎮襄陽、伐吳有功、封當陽侯、太康五年還洛、於鄧縣病亡、年六十三、葬洛陽、贈征南大〔州〕^④〔將〕軍、諡成侯

何次道始從北帝內禁御史得還朱火宮受化、以其多施惠之功故也。
 〈後辛〕^④〔十〕^④〔玄〕子亦云如此、次道名充、廬江潛人、位至尚書令驃騎將軍、除楊州刺史錄尚書、輔正、世業奉佛、多施惠、立功德、每爲善事、以永和二年正月戊寅病亡、年五十五、贈司空、諡文穆公、按如此旨、鬼職雜位、非四明公而猶得受化朱宮、升居仙品者、此當是深功厚德之所致也

魏武帝爲北君太傅。〔北君則北斗君、周武王也、四明各有賓友、恐北斗君不置此職、當以太傅准之、魏武帝曹操、沛國譙人、英〕^④〔雄〕撥亂、匡定天下、封魏王、加九錫、獻帝建安二十五年正月病

亡、年六十六、此年十月、魏文仍受禪、追贈太祖武皇帝也

其餘多不能復一二、蓋鬼神之事不足示於世也。《荀公言也》《荀公即是荀中侯、既隸司命、統諸鬼官、故究知之、但論事參差、前後遞互、如似隨問隨答、非自然敘述〔手〕^④〔事〕也、世人多不信幽冥鬼神、故戒勿宣示、若致疑謗、益漏失爾、右此前一段所說不記何年月、以後王逸少事檢之、則猶應是乙丑年也

(1) 意をもって「五百」の二字を「里」の字に改める。

(2) 意をもって「三」の字を「二」の字に改める。

(3) 意をもって「三」の字を「二」の字に改める。

(4) 意をもって「二」の字を「千」の字に改める。

(5) 意をもって「十」の字を「千」の字に改める。

(6) 宮内廳藏正統道藏本(宮本)が「關」を「闕」に作るのに従う。

(7) この段、『眞誥』卷一〇葉一〇表に同文が見える。

(8) 宮本が「地」を「北」に作るのに従う。

(9) 以下原文に錯簡あり。原テキスト卷一三葉三裏三行「非道家之北斗也」から同葉四表一〇行までと、卷一五葉三裏一行注「是復籍先身之功罪乎」から同葉四表八行「皆一進再進得入此」までを入れ換える。

- (10) 意をもって「且」の字を「旦」の字に改める。
- (11) 兪本が「誤」を「寤」に作るのに従う。
- (12) この段、『登眞隱訣』巻中に同文が見える。
- (13) 官本が「帶」を「帝」に作るのに従う。
- (14) 意をもって「鋒」の字を「峰」の字に改める。
- (15) 官本が「賁」を「陽」に作るのに従う。
- (16) 官本が「白」を「名」に作るのに従う。
- (17) 官本が「是」を「鬼」に作るのに従う。
- (18) 官本が「義」を「城」に作るのに従う。
- (19) 官本が「美」を「吳」に作るのに従う。
- (20) 官本が「年」を「斗」に作るのに従う。
- (21) 官本が「卯」を「即」に作るのに従う。
- (22) 官本が「安」を「按」に作るのに従う。
- (23) 兪本が「十」を「千」に作るのに従う。
- (24) 兪本が「卦」を「封」に作るのに従う。
- (25) 官本が「飽」を「施」に作るのに従う。
- (26) 兪本が「魁」を「鬼」に作るのに従う。
- (27) 官本が「生」を「主」に作るのに従う。
- (28) 意をもって「耳」の字を「爾」の字に改める。
- (29) 意をもって「寧」の字を「康」の字に改める。
- (30) 意をもって「壽」の字を「熹」の字に改める。
- (31) 「漢」は衍字とみなす。
- (32) 兪本が「訪」を「魴」に作るのに従う。
- (33) 意をもって「赫」の字を「赦」の字に改める。
- (34) 意をもって「兆」の字を「口」の字に改める。
- (35) 兪本が「清」を「青」に作るのに従う。
- (36) 兪本が「金」を「令」に作るのに従う。
- (37) 兪本が「彼也」を「被殺」に作るのに従う。
- (38) 意をもって「錄」の字を「銀」の字に改める。以下、同じ。
- (39) 官本が「查」を「番」に作るのに従う。
- (40) 意をもって「陽」の字を「康」の字に改める。
- (41) 官本が「月」を「外」に作るのに従う。
- (42) 兪本が「訪」を「魴」に作るのに従う。
- (43) 官本が「後」を「故」に作るのに従う。
- (44) 官本が「則」を「州」に作るのに従う。
- (45) 官本が「五」を「安」に作るのに従う。
- (46) 官本が「州」を「將」に作るのに従う。
- (47) 官本が「十」を「玄」に作るのに従う。
- (48) 官本が「在」を「雄」に作るのに従う。
- (49) 官本が「手」を「事」に作るのに従う。

眞誥卷十五

闡幽微第一

羅鄴山^②は北方の癸の地にある(ここで「癸の地」と言っているのは、必ずしも世界全體の中の位置のことではなく、中國からの方角を指し示しているのに違いない。とすれば、ちょうど幽州の遼東の北の、北海の中であるはずである。岸から何萬里隔たっているのかは分からない)。その山は、高さ二千六百里、周圍は三萬里である。その山の下には洞天があり、山の周圍一萬五千里の内に位置している。その山の上にも下にも、ともに鬼神たちの宮殿がある。つまり、山の上に六つの宮殿があり、(山の下)洞天中にも六つの宮殿があり、どれもみな周圍が千里である。これが六天の鬼神たちの宮殿である(洞天は)周圍一萬五千里であり、宮殿のつくりが周圍一千里であれば、二百二十五箇所になる。今ここに「六宮」とあるので、ただその中の六箇所のみが得られる。その餘りの空間にはなお二百十九箇所あることになるが、計算してみると合點がゆかない。言っていることに、あるいは間違いや遺漏があるのかも知れない。山の上にあるのが外宮であり、洞天の中にあるのが内宮である。そのつくりは等しい。(この山は人跡の及ぶところではないので、だから山上に建てることのできるのである。山にさらに幾つの洞天の門があるのかは分からない)

第一の宮殿は、紂絶陰天宮と名づけられている。(以下)順次、東に進む。(周圍というところで言うならば、洞天の内部は、東西の直線が三千七百五十里である。ところで今、一つの宮殿の周圍が千里であるから、そのさしわたしは二百五十里である。六つの宮殿がもし横に並んでいるとすれば、合わせて一千五百里である。それぞれの兩端がおの二千餘里ほど餘り、南北が特に遠く空いているのは、ことごとく藩屏をなすからである。そうでなければ、理由が分からない)

第二の宮殿は、泰然諒事天宮と名づけられている。

第三の宮殿は、明晨耐犯武城天宮と名づけられている。

第四の宮殿は、恬昭罪氣天宮と名づけられている。

第五の宮殿は、宗靈七非天宮と名づけられている。

第六の宮殿は、敢司連宛屢天宮と名づけられている。(およそこれら六つの天宮(の名)には、やはりみな意味があるはずであり、あらかたは了解できるが、そう輕率に話すわけにはゆかない)

およそ六天宮は、鬼神の六天の治所である。洞天内部の六天宮も同じ名稱であり、一つのようによく似ている。(ここが、とりもなおさず北鄴の鬼王^③が罪人を裁判する場所なのである。その鬼神は、經典に閻羅王^④と呼ばれている者で、その住處であるのに違いない。そ

の王は、つまり今の北大帝^⑤にはかならない。ただし五道大神^⑥なる者が果たして何者であるのかは分からない。およそ生きとし生けるものは、死ねばすべてこれに隸屬する。地獄といえ、至るところすべてに存在するのであって、一箇所だけと決まったわけではなく、泰山や大河、大海にもそれぞれ存在する。この山の外宮はきつと各部局であつて、職員が文書や帳簿をつかさどつてゐる。洞天の中の内宮は、(鬼神が)居住し罪の取り調べをする所である。今、小説家が、ある人が死んで再び生き返つた話を語る場合、いずれも「初めは北に向かつて行き、官府の取り調べの部署に至つたが、城門の所で文書を取り調べるようであつた」と言つてゐるが、恐らく、これはみな山上の外宮の中に赴いたのである。胡毋班が泰山府君のもとに出かけた時も、やはり氣づかぬうちに洞天の中に入つて行つた。恐らく、鬼神はつかまへどころがなく、實際を知らせたり見せたりしないのである。

世間の人で羅酆都の六天宮の門の名稱を知つてゐる者があれば、多くの邪鬼は害を及ぼそうとはしない。横になろうとする時には、いつもまず北を向いて、呪文を唱へること三回、小聲でつぶやく(前には「宮殿の名稱」と言つてゐたのに、今こゝで「門の名稱」と言つてゐるのは、門もやはり宮殿(の名稱)をそのまま名稱としてゐるのである。宮殿の名稱はただ假にそう呼ぶに過ぎないが、門には額が

掲げられてゐる。多くの邪鬼がみなそれを見、人間も今それを知つてゐるとなれば、恐れて屈伏するのである。その呪文の言葉。「私は太上君の弟子であり、下は六天を統括してゐる。六天の宮殿は私が管轄するところである。ただ管轄してゐるだけではなく、太上君から支配をまかされてゐるところである。私は六天宮の宮殿の名稱を知つてゐる。だから長生することができのだ。あえて私を犯す者がいれば、太上君はおまえの體を斬り裂くだろう(こゝで「下は六天を統括してゐる」と言つてゐるのは、六天によつて統括されてゐるというわけではない。ただ單に私が管轄してゐるだけではなく、さらに太上が私に治めさせてゐるというのであつて、だからこそ威嚇になるのである。それはたとへば、郡縣官の官爵には、中央の紋任にかかるものがあり、それは地方採用の類ではないようなものである)。第一宮の名は糾絕陰天宮。順番に東に進んで、第二宮の名は：(この「二」の字は、楊君は繼目の紙の下にこのように書いてゐる。許掾は寫すに當たつて充分に詳らかにせず、「七」の字に作つてゐる。今、世間の諸本もみなすべて「第七」に作つてゐるが、これは誤りである。宮殿はただ六つあるだけであつて、七つあるはずはない。この呪文でまた「順番に東に進んで(以次東行)」という四字を説いてゐるのは、邪鬼たちに、私が宮殿の順序や配列を知つてゐるのだらうかと、訝しがらせようとしてのことである)。それから順次、六宮まで言い終つてから、六回叩齒したうえで横にな

る。もろもろの鬼邪の氣を退けるのである。へこで呪文を一遍唱え終わってから、六回叩齒する。叩齒し終わってから、さらに呪文を唱える。このように三回繰り返してから、横になるのである。この方法は第三篇の實修法の中にすでに重複して抜き書きしてある。

人が死ぬと、誰しもまず最初に糾絶陰天宮の中に赴いて處分を受ける。あるいは先に名山および泰山や大河に赴く場合もあり、必ずしもそのまますぐにまず第一天宮に赴くとは限らないが、處分を受ける日や罪の取り調べによって吉凶が決まる日に、この第一天宮にやって来なければならぬのである(この天宮は北帝が治めている所である。だから(先に他の宮殿に行った者も)後にはことごとく經由しなければならぬのである。それはたとえれば、今、州縣の獄では、まず最初それぞれ逮捕拘留するが、最終的には中央に送られて求刑書が確定するようなものである)。

秦煞諒事宗天宮の殺鬼たちの所が第二天宮である。急死など不慮の死を遂げた場合は、さらにここを經由する(この天宮は、獨斷で捕えて殺すことができる。急死など不慮の死を遂げた者は、文書がまだ正式なものになっていない恐れがある。あるいは、姓名が同じ場合もあろう。だから、まずここにやって来させて検問するのである)。

賢人や聖人が世を去った場合には、まず明晨(耐犯武城)という

第三の天宮を經由し、處分を受ける(後に「四明公がそれぞれ一宮を取り仕切る」とある。秦煞宮と明晨宮の兩天宮はいつたどの公が在任しているのか分からない。不慮の死を遂げた者と賢人聖人とは、まず暫時これらを經由するけれども、やはり糾絶陰天宮に赴くことになるのが正規の手順である)。

禍福吉凶や、壽命が繼續するか有罪として殺害されるかは、恬昭(罪氣)の第四天宮にまかされる。鬼官の北斗君がその中を治めている。鬼官の北斗君は、神仙家の北斗君ではない。鬼官に別に北斗君がいて、生殺をつかさどっているのである。(按ずるに、孫皓の敗將の張悌の軍人の柳榮は病死したが、やがて三日目の朝、突然起き上がって、「北斗の門下に至ると、ある者が張悌様を縛って来るのを見た」と大聲で叫ぶと、それで意識が戻った。その日の晩に張悌は戦死した。このようなのが、きつと第四天宮なのであろう。今ここで、第五と第六の天宮については、所管がはっきり書かれていないが、恐らく考罰の官府なのであろう)。

鬼官の太帝とは、北帝君である。第一天宮を取り仕切り、六つの諸天宮を統括している。残りの四天宮は四明公がそれぞれその中を取り仕切っている。(「それぞれ一宮を取り仕切る」と言っているけれども、それぞれの天宮にいるのか明記していない。天宮は横に並んでいるのだから、もはや方位に基いて、東西南北の順序で言う

ことはできない。それぞれの公の順位の上下を考えれば、第二天宮を「西明公の治所」と名づけ、第三天宮が「東明公の治所」、第四天宮が「北斗君の治所」、その次に「南（明公）」、さらにその次に「北（明公）」が續く。

二つの天宮ごとに一官が設けられており、六天宮であわせて三官が設けられている。三官は、今の司法の職と同様に、もろもろの罪の取り調べをつかさどり、常に眞仙をこれに任用し、司命君が兼務としてこれらを統括している。（三官は）いずれも仙界の役所に統べられており、ともに生死に關わる任務をつかさどっている。重大な裁判は一律に仙官によって行われるのである。（神仙家が通常三官と稱しているのは、このことである。ところが、『消魔經』に「岱山にも、また左火官、右水官および女官があり、やはり三官と名づけられ、いずれも考罰をつかさどっている」とある。今、三茅君が通じてこれらをつかさどっており、大茅君が長官であり、保命君（小茅君）が檢察官である。（三官が）仙官に隸屬している理由は、天下の人々はことごとくみな死ぬというわけではなく、その中で眞仙となる資格のある者は、北大帝が詮議する対象ではなく、あるいはまた、死にながらも精神が鍊化されて形質を取り戻す者もいて、このような者はみな眞仙界の簿録に記されている。だから、司命の職が、それに對應して統べるのである。）」

鬼官の北斗君は、やはり神仙家の北斗七星の配下の考罰の官なのである。この鬼官は、さらに九星の精靈に從屬し、上は北辰玉君に屬している。（天上の北斗が伺察しているので、鬼官の中にもこの職を置いて、星の精と鬼の形象とが對應するようにするのである。統括が北斗星に關わるので、それで上は太上の役所に屬するのである。）」

項梁城が「酆宮誦」を作った。

紂絶（陰天宮）は天帝の庭にそそり立ち、

（秦煞）諒事（宗天宮）は重なる丘に構えられ、

炎のように、大空に煙り、

意氣盛んに、光に輝く華のように。

（明晨耐犯）武陽（天宮）は神祕の峰に取り巻かれ、

恬昭（罪氣天宮）は青々とした河を呑み、

閭闔の門は丹色の井戸に臨み、

雲門は鬱蒼と聳え立つ。

（宗靈）七非（天宮）には奇妙な天蓋の車が行き交ひ、

（敢司）連宛（屢天宮）にも魔どもがあふれ、

これらの六天宮は北に向かう道に横たわり、

これぞ鬼神たちの住まいなのだ。

誦は二萬語ある。今ここに六天の宮殿の名が略説されているので、

書き出したまでである。夜中に小聲で讀誦してもよい。鬼邪を避けるとも言われる。〈前文では第三宮は「武城」という名であったのに、今ここでは「武陽」と言っているのは、二種の名があるのであろう。『蘇韶傳』に「鬼の聖者に項梁城があり、賢者に吳季子²³がいる」とある。ただし、項がいつの時代の人なのかは分からない。あるいは、項羽の叔父の項梁であるのかも知れないが、季子よりも聖であるとするのは當たらぬ〉

酈都の稻は重思と呼ばれる。その米粒は石榴子²⁷のようであり、粒は異常に大きく、色と味は菱のようであり、やはり仙官に献上している。〈後にまた重思の事を述べている。異なる日に話されたものであるから、二箇所に出てもかまわない。石榴子とは、世に言う安石榴である〉

炎慶甲は古の炎帝である²⁹。現在は北太帝君となり、天下の鬼神の主である。〈炎帝神農氏は、農耕の技術を發明し、多くの藥草をなめ、その聖人としての功績は軒轅黃帝氏や顓頊にも劣らず、鬼神の帝王³⁰になどなるはずがない。また、黃帝が討伐した大庭氏も炎帝と稱した。恐らくきつとこちらの方であって、神農氏ではないであろう。また、世間の書物に「神農氏は牛の頭をしている」とある³¹。今佛教でも、地獄の中で殺害を執り行う者は牛の頭をしている、とす

³²。この點でもまた疑問を残す。四明公の昇進には決まった年限があるのだから、北太帝の位階秩祿も當然昇級するはずである。もうすでに三千年餘りたっているけれども、あるいはこの世の帝王は轉任せずに、補佐する大臣だけがしばしば官を遷るようなものなのかも知れない〉

武王發、現在は鬼官の北斗君である³³。〈文王の子で、周の武王である。姓は姬、名は發。殷の紂王を征伐して天子となり、即位して二年で死去した。『禮記』には「九十三歳(で死去した)」とあり、『竹書紀年』には「四十五歳(で死去した)」とある。按するに、後の所で「四明公はみな神仙の位階に昇進することができる」とあるけれども、北斗君については何も述べていない。しかし、北農玉君に隸屬している以上、やはり當然同様の遷官の例に與かっているはずである〉

夏の啓は東明公であり、北斗君の師を兼領している³⁴。〈禹の子であり、姓は姒である。『竹書紀年』には「即位して三十九年で亡くなった。享年七十八」とある。(啓が)崩御してから、今年の己卯の年(永元元年、四九九)までで、二千四百二十五年に當たる。按するに、司命君が規定を説明して「(四明公の)位に二千四百年いたならば、仙界に昇って九宮の官に補任される」と言っている³⁵。そうで

あるのであれば、宋の元徽四年（四七六）に仙去したのであろう。

文王は西明公であり、北帝の師を兼領している。³⁸（文王の名は昌。『禮記』には「九十七歳で亡くなった」とある。³⁹この父子はいずれも聖人の徳を讀えられながら、鬼神の官となることを免れなかった。殺戮の罪を犯したとはいえ、やはりきつと仙道を學ばなかったためにこうなったのであろう）

邵公爽は南明公である。⁴⁰（邵公の名は爽、文王の庶子である。邵に領地を持ち、燕國に封ぜられた。按ずるに、周公と邵公と太公はともに（武王の創業を）補佐して紂王に打ち勝った。いずれも「公」であることには何の違ひもない。ところが、周公には聖人の徳があったが、仙人や鬼神の中にはまったく名前が見えていない。太公は軍旗を持ち、まさかりを握り、威嚴と刑罰はただごとではなかったのに、『列仙傳』に載せられている。邵公はその恩愛が甘棠にまで流れるほどであったのに、かえって鬼神の官職についているのは、また了解し難いものがある。すべて各人本来の宿業の分際によるために、に違ひない。羅酆都には六つの宮殿が存在するだけであるのに、周の文王父子がそのうちの三つをいとも簡単に占めているのは、周王朝の徳が高く、深いことの證明である）

吳の季札は北明公である。⁴¹（吳王壽夢の末子、闔閭の叔父、太伯の末裔である。やはり姫姓である。國を讓つて延陵に居住した。今の子子廟のある所がそれである。仁賢の徳があったからこそ、先聖と肩を並べているのではあるが、やはり特例があつてのことである。これらの四明公について見てみると、時代は前後して異なっている。時代ごとに代わる代わる新しく人を任用しているのだと言ふべきであらう。夏の啓は任官してから二千年餘りたつて、やっと轉任することができたのであつて、なんと地下主者の十倍もの年数がかかっているのである。⁴²仙界の官品の仕組みが、まったくこの上もなく玄妙なものであることは明らかである）

四明公にはさらに賓友が四人いる。しかし、この四明公は後にみな眞仙の位階に昇進するのである。四明公はもつぱら四方の鬼神を統領している。（賓友が四人いる事は、後に見える。⁴³また、按ずるに後の所で定録君が「邵爽は東明公である。行くゆく仙界に昇つて九宮右保に補任されるであらう」と告げているのは、眞仙の位階に昇進する證據であるけれども、前の所とは異なっている。その上、啓でさえまだ仙去できないのに、邵爽が道理として仙人になれるはずがない。恐らくは、うっかり邵爽と言ひ間違つたのであらう。東明公と言っているからには、やはり啓の事であるのに違ひない。この疑問點は、別に後に述べてある）⁴⁴

西明郎十六人。天下の祠廟^④の鬼神の血食の祭りのことをつかさどっている。〈この西明郎もやはり西明公に隸屬しているのであらう。祠廟で血食の祭りを受けるのは、命令を受けて鬼官の職にある者であつて、たまたま取りついた精魅邪鬼^⑤ではない〉

周顗^⑥は鬼官の司命帥である。現在は鄧嶽と程遐の二人に交替させた^⑦。ごたごたが多かつたからである。〈周顗、字は伯仁、汝南安城の人である。晉に仕えて長江を渡り、位は尙書僕射にまでなつた。元帝の永昌元年(三三二)、王敦が南下すると、捕えさせ、石頭の南門で殺害された。享年五十四。光祿、開府を追贈され、康侯と諡された。鄧嶽、字は伯山、陳郡の人である。郭默を討伐するのに功績があつた。咸康(三三五―三四二)の初めに平南將軍、廣州刺史となり、州で病死した。辛玄子が後の所で「鄧嶽は謝幼輿の司馬である」と言っている。これはきつとすでに官職を遷つたのに違ひない。程遐は代郡の人である。石勒の參謀役となり、妹は石勒の妻となつた。官は右僕射、開府、代郡公にまでなつた。石勒が死ぬと、石虎に殺された〉

西明都祭郎の賈誼^⑧。昔、馬融^⑨の事件の處理が不當であつたので、退けられて守泰山となつた。泰山君が最近司馬にしようといひ出て、

すでに許された。〈賈誼は前漢文帝の時に、梁孝王の守り役となつた。(孝王が死んだ時)哀しみ憤り、血を吐いて死んだ。後に「荀顗は泰山君である。曹洪を司馬に任用した」とあるから、今は曹洪と交替したのに違ひない。馬融、字は季長、扶風の人である。博學で頭が切れた。鄭玄の師匠である。後漢に仕えて南郡太守となり、一度も劍に手をかけて人を殺したことがなかつた。梁冀に逆らい、朔方郡に流された。途中でわが身を刺したが死ななかつた。後に赦されて都に歸り、議郎を拜命した。延熹九年(一六六)に病死した。享年八十九。『馬融別傳』はまたこれと少し違っている〉

南門亭長、現在は周撫を任用して郗鑒と交替させた^⑩。一つの天門に二人の亭長がおり、(亭長一人につき)四人の修門郎がいる。だから一つの天門には全部で八人の修門郎がいることになる。修門郎は天門亭長の下僚である。これは北帝の(宮殿の)門である。〈後に「南北の門の鍵を管理する」とあるから、一つの宮殿には二つの天門があるのである。『蘇韶傳』に「修門郎は八人いる」とあり、なんと「顔淵と卜商が今現に職務に就いている」と言っているが、恐らくそうではないのであらう。周撫、字は道和、潯陽柴桑の人であり、周勳の息子である。最初、王敦の武將となり、長江を東に下つて都を攻めたが、事は失敗し、鄧嶽と一緒に西陽蠻中に逃げこんだ。王敦が殺されると、赦されて世に現れ、また武將となつて蘇峻を討

伐した。その後、蜀を征伐して李勢を平定した。建威公に封ぜられ、鎮西將軍、益州刺史となった。(益州にいること)三十年餘りで、興寧三年(三六五)に病死した。征西將軍を贈られ、襄公と諡された。郗鑒、字は道微、高平の人、すなわち愷の父親である。永昌元年(三二二)、多くの流民を引き連れ、長江を渡って江南にやって来た。その後、王敦の亂を討ち平らげ、高平公に封ぜられた。また、車騎大將軍、兖州刺史となり、廣陵に鎮守し、また徐州に鎮守した。蘇峻の亂が平定されると司空を拜命し、あらためて南昌公に封ぜられたが、それでもまだ京口城に鎮守した。咸康五年(三三九)に病死した。享年七十一。太宰を贈られ、文成公と諡された。

北斗君の天門亭長、今は臧洪である。臧洪は隗囂と交替したのである。もう一人は王波で、新しく補任されたのである。(これもやはり南門の事にはかならない。これ以外の四明公の四つの宮殿の天門にも、(天門亭長の官は)確かにあるが、しかしみな明らかにされていない。臧洪、字は子源、廣陵射陽の人である。感情が激しく節義があった。後漢末に臧洪は義兵を擧げて董卓を誅滅した。後に青州を治めた。東郡太守となるに及んで、袁紹に叛いた。袁紹は攻撃して包圍し、食料が盡きて生け捕りにされ、殺された。隗囂、字は季孟、天水の人である。才能仁徳があり、人々に頼りにされた。前漢末に隴西に割據し王を自稱した。建武元年(二五)、光武帝が討伐

し、憤慨のあまり病氣になり、また飢餓のために死亡した。王波は渤海の人である。晉の尙書令史となり、才能があった。石虎の旗下に入って中書監となったが、殺された。

紀瞻はもととも撫河將軍の司馬であったが、現在は北天修門郎である。田銀と交替したのである。紀瞻は虞潭と代わる代わる一日ずつ宿直して、天門を守護している。(北天とはやはり北帝の(宮殿の)門に違いない。紀瞻、字は思遠、丹陽句容の人である。初め吳に仕えて中郎將となり、吳が平定された後、洛陽に歸った。秀才に擧げられ、次第に官が遷って會稽太守になり、侍中、尙書僕射、驃騎將軍に遷った。泰寧三年(三三五)に病死した。享年七十二。開府を贈られ、穆公と諡された。田銀は魏の武帝の時、程昱の參軍となり、後に河間太守となったが、反亂を起こして閭柔に擊破された。虞潭、字は思輿、會稽餘姚の人である。虞翻の孫である。位は衛將軍、右光祿、開府、武昌侯にまでなった。咸康八年(三四二)に病死した。享年七十。光祿を贈られ、孝列侯と諡された。

魏釗は廬山侯を拜領している。(魏釗、字は君思、會稽の人である。晉の成帝、穆帝の世に仕え、司徒左長史、丹陽尹から左民尙書、平壽侯にまでなった。永和七年(三五二)に病死した。

顧和⁶⁴は遼東の衛戍から歸つて來た。事件があったが、もう解決した。北帝は執蓋郎に任用するはずである。(現在の)執蓋郎である范明は、典柄侯に轉任するのである。〈顧和、字は君孝、吳郡の人である。小さい時に父を失ったが、志操があった。晉に仕えて吏部侍郎、御史中丞、吏部尚書、領軍(將軍)、尚書僕射、尚書令となった。永和七年(三五二)に病死した。享年六十四。侍中、司徒を贈られ、穆公と諡された。世間の書物には范明の事は見えていない。ただ前漢時代に范明友なる人物がいたが、多分この人物ではないであろう。また、お告げの中で許先生(許邁)を試験した者は「典柄侯の周勳と主非使者の嚴白虎」と言っている。典柄侯は、やはりきつと典柄であり、彼を呼ぶ時にうっかり「侯」まで言ってしまったたであろう。周勳⁶⁵、字は子魚、吳郡陽羨の人、周處の父親である。吳に仕えて鄱陽太守となり、威嚴と恩愛が充分に備わっていた。嚴白虎は吳郡の人である。孫策の時代に、山に入って手下を集めた。孫策が討伐すると、散りぢりになり、餘杭に逃亡して死亡した。弟の名は輿といい、やはり勇猛であった。孫策は詐つて會合し、戟を投げて刺し殺した〉

殷浩は侍帝晨である。何晏の相棒である。⁶⁶〈この職には八人いる。その事は後に見える。殷浩、字は淵源、陳留長平の人である。康帝の建元(三四三—三四四)の初めに揚州刺史となった。永和六年(三

五〇)、中軍將軍、都督五州に進んだ。北方に遠征して姚襄を討ったが、敗れて歸った。桓溫に退けられて東陽に移った。永和十二年(三五六)、心勞のため死去した。談論が上手であったので、そのため何晏の相棒になっているのである。何晏、字は平叔、何進の孫である。巧みに玄學の道理を口に操った。位は侍中、尚書にまでなった。曹爽と黨派を組み、司馬宣王(司馬懿)に殺された〉

溫太眞は監海開國伯で、東海を治めており、⁶⁷近ごろ杜預をその長史に採用した。(杜預の)位は、大將軍の長史に比せられる。〈溫嶠、字は太眞、太原祁の人である。晉に仕えて江南の平南將軍、江州刺史となった。長江を下つて蘇峻(の亂)を平定し、位は驃騎將軍、開府となり、始安公に封ぜられたが、咸和四年(三二九)に病死した。享年四十二。大將軍を贈られ、中武公と諡された。杜預、字は元凱、京兆杜陵の人である。博識で才智に長け、『春秋』に注した。晉に仕え、尚書郎から起家して、位は都督荊州に至り、襄陽に鎮守した。吳の討伐に勳功があり、當陽侯に封ぜられた。太康五年(二八四)、洛陽に戻る途中、鄧縣で病死した。享年六十三。洛陽に葬られ、征南大將軍を贈られ、成侯と諡された〉

何次道はやつと北帝の内禁御史から朱火宮に戻つて鍊化を受けることができた。しばしば施し恵みを與えた功德のためである。(後に

辛亥子もやはりこのように言っている。^⑦何次道、名は充、廬江潛の人である。位は尚書令、驃騎將軍に至り、揚州刺史、錄尚書に敘任され、輔政した。代々佛法を奉じ、しばしば施し恵みを與えて、功德を積み、常に善事を行った。永和二年（三四六）正月戊寅に病死した。享年五十五。司空を贈られ、文穆公と諡された。按ずるに、この趣旨のごとくであれば、鬼職の雜位にあり、四明公でもないのに、やはり朱火宮で鍊化を受けて仙品に昇ることができたのは、深く厚く功德を施したからなのであろう。

魏の武帝は北君の太傅である。^⑧（北君とは北斗君であり、周の武帝のことである。四明公にはそれぞれ賓友がいるが、恐らく北斗君はこの職を置かず、太傅の職をそれになぞらえているのであろう。魏の武帝曹操は沛國譙の人である。英雄として亂世を治め、天下を正し定め、魏王に封ぜられ、九錫を加えられた。獻帝の建安二十五年（二二〇）正月に病死した。享年六十六。その年の十月、魏の文帝が譲りを受けると、太祖武皇帝を追贈した）

これ以外のことも澤山あるが、とても一つ一つ詳しく述べることはできない。思うに鬼神の事は世間に示してはならぬからである。《荀公の言葉である》（荀公とは荀中侯のことである。司命君に隸屬し、多くの鬼官を統領しているので、よく知っているのである。し

かし敘述がばらばらで、前後が入り組んでおり、問われるままに答えたものようである。自然に順序立てて述べられたものではない。世間の人は冥界の鬼神の事をさっぱり信じない。それではつきりと示すことのないよう戒めているのである。もしも相手に疑い誇られるようなことになれば、ますますいらぬ事まで漏らしてしまうことになる。右の一段の所説には年月が記されていないけれども、後の王逸少（羲之）の事から検討してみると、やはり乙丑の年（興寧二年、三六五）の事なのであろう）

① 闡幽微 『眞誥』卷一九葉一表の「眞誥敘錄」に「眞誥闡幽微第五」とあり、「此卷竝鬼神官府、官司氏族、明形識不滅、善惡無遺、分爲二卷」と解説している。

② 羅鄴山 羅鄴山の高さや周廻の長さについての記述は『太上慈悲道場消災九幽懺』、『太上元始天尊說北帝伏魔神呪妙經』、『上清天關三圖經』、『無上祕要』、『酉陽雜俎』などにも見える。

③ 北鄴鬼王 『無上祕要』卷九衆聖會議品「元始靈寶西南天大聖衆至眞尊神无極大道天皇老人南極元眞君洞陽太靈、常以月二十四日、上會靈寶太玄都玉京朱宮、共集考校三官九府五嶽北鄴太山二十四獄罰刑簿目、…右出洞玄元始五老赤書玉篇經」。『太上洞淵神呪經』卷一誓魔品「此有赤頭殺鬼、鬼王身長萬丈、領三

- 十六億殺鬼、鬼各持赤棒、遊歷世間、專取生人」。
- (4) 閻羅王 『太上救苦天尊說消愆滅罪經』「爾時救苦天尊、設大慈悲、爲諸衆生、滅除一切罪業、救拔沈淪、即令修齋布施、廣建功德、大起福田、召請天龍地祇四梵天王阿修羅王諸大帝主閻羅天子泰山府君司命司錄五道大神獄中典者、各恭敬禮拜、稽首叩類、上白天尊曰：」。『眞誥』卷一三葉三裏を参照。
- (5) 北大帝 『眞靈位業圖』第七中位「酆都北陰大帝」、注「炎帝大庭氏、諱慶甲、天下鬼神之宗、治羅酆山、三千年而一替」。
- (6) 五道大神 注(4) 参照。
- (7) 泰山河海亦各有焉 『三洞珠囊』卷七・三十二中法門名數品「東嶽太山東門下獄、：河伯九江水帝門下獄、十二河平候中帝門下獄、北帝鹹河門下獄」。
- (8) 考謫 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「超凌三界、逍遙上清」、薛幽棲注「五苦者、一曰刀山苦、：五曰考謫苦」、『宋書』孝武帝紀「(大明七年)八月丁巳、詔曰、：并詳省律令、思存利民、其考謫質襲、在大明七年以前、一切勿治」。
- (9) 書家 『重修政和證類本草』卷一五人物「髮髮、味苦、溫：」、陶弘景注「書家亦呼亂髮爲髻、恐髮即髻音也」。同卷二〇蟲魚部上品「龜甲、味鹹甘、平、有毒：」、陶弘景注「書家載之甚多、此不具說也」。
- (10) 胡毋班：『搜神記』卷四を参照。
- (11) 鬼神恍惚 『論衡』論死「人見鬼神之形、故非死人之精也、何則鬼神荒忽不見之名也」。
- (12) 郡縣官爵有臺除、非白版之例也 『宋書』孝武帝紀「(大明五年)：制方鎮所假白版郡縣、年限依臺除、食祿三分之一、不給送故」。
- (13) 後云四明公各治一宮 『眞誥』卷一三葉三裏を参照。
- (14) 續命 『無上祕要』卷二九・三十二天讚頌品「長更續命、玉燈朗謁、：右出洞玄空洞靈章經」。
- (15) 鬼官北斗君 『眞誥』卷一五葉五表「武王發今爲鬼官之北斗」。
- (16) 按孫皓敗將張悌軍人柳榮：『搜神記』(『三國志』卷四八・三嗣主傳注)に見える。
- (17) 考責 『後漢書』列傳六三公孫瓚傳「(袁)紹既興兵、涉歷二載、不恤國難、廣自封植、乃多引資糧、專爲不急、割刻無方、考責百姓、其爲痛怨、莫不咨嗟」。
- (18) 消魔經云：『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷一眞藥玄英高靈品を参照。
- (19) 神化反質 『眞誥』卷一六葉七表注「溺水致命、事同王衍之女、恐即此形骸皆不復得生、竝是反質胎神耳」。『無上祕要』卷八七尸解品「但當日服五合、以清酒飲送之、神變反質、各自鎮養五藏矣、：右出洞眞太極帝君壇生五藏上經」。
- (20) 簡錄 『眞誥』卷一六葉一三表「齊桓公今爲三官都禁郎、主生

死之簡錄。

- (21) 九星 『周氏冥通記』卷一「北斗有九星、今星七見、二隱不出」。
- (22) 北晨玉君 『無上祕要』卷一八衆聖冠服品下「北極星、天之太常、主昇進、…號曰北晨飛華君、…右出洞眞九眞中經」。
- (23) 項梁城 『眞靈位業圖』第七右位「項梁成」、注「作鄴都宮頌者」。
- (24) 蘇韶傳云… 王隱『晉書』(『太平廣記』卷三一九)に見える。
- (25) 吳季子 『眞靈位業圖』第七左位「北明公吳季札」、注「吳王壽夢之子、闔閭之叔、延陵季子」。
- (26) 項梁 『史記』項羽本紀「項籍者、下相人也、字羽、…其季父項梁、梁父即楚將項燕、爲秦將王翦所戮者也」。
- (27) 石榴子 『重修政和證類本草』卷二三果部下品「安石榴、味甘酸、無毒、主咽燥渴、損人肺、不可多食、酸實殼、療下痢、止漏精、東行根療蛇蟲寸白」、陶弘景注「石榴、以花亦可愛、故人多植之、尤爲外國所重、入藥惟根殼而已、其味有甜醋、藥家用醋者、子爲服食者所忌」。
- (28) 後又有敘重思事 『眞誥』卷一五葉一一表を参照。
- (29) 炎慶甲者、古之炎帝也 注(5) 参照。
- (30) 鬼帝 『雲笈七籤』卷五二迴元行事訣「陰匿賊惡、伏姦藏欺、事有億萬、列在鬼帝」。
- (31) 外書云… 『帝王世紀』(『史記』五帝本紀正義)「神農氏、姜姓也、母曰任姒、…遊華陽、有神龍首、感生炎帝、人身牛首、長於姜水」。
- (32) 佛家作地獄中主煞者亦牛首 蕭琛「難神滅論」(『弘明集』卷九)「憚閻羅之猛、畏牛頭之酷」。
- (33) 武王發… 『眞靈位業圖』第七左位「鬼官北斗君周武王」、注「治一天宮」。
- (34) 禮云… 『禮記』文王世子「文王九十七乃終、武王九十三而終」。
- (35) 按後云… 『眞誥』卷一五葉六表を参照。
- (36) 夏啓爲東明公… 『眞靈位業圖』第七左位「東明公領斗君師夏啓」。
- (37) 按司命說格… 『眞誥』卷一六葉一〇裏を参照。
- (38) 文王爲西明公… 『眞靈位業圖』第七左位「西明公領北帝師周文王」、注「比少傳」。
- (39) 禮云… 注(34) 参照。
- (40) 邵公爽爲南明公 『眞靈位業圖』第七左位「南明公召爽」、注「一云東明公、已度九宮右保公」。
- (41) 恩流甘棠 『毛詩』召南甘棠序「甘棠、美召伯也、召伯之教明於南國」。
- (42) 吳季札爲北明公 注(25) 参照。
- (43) 十倍於地下主者之數 『眞誥』卷二三葉一裏、卷一六葉一〇表および卷一六葉一一表を参照。

- (44) 其事在後 『眞誥』卷一六葉一表を参照。
- (45) 其疑事別在後也 『眞誥』卷一六葉六表を参照。
- (46) 房廟 『宋書』卷四八毛脩之傳「脩之不信鬼神、所至必焚除房廟、時蔣山廟中有佳牛好馬、脩之竝奪取之」。
- (47) 精邪 『登眞隱訣』卷下「惡逆賓服、精邪消散」。
- (48) 周顒 『眞靈位業圖』第七左位「中護軍周顒」。また、『晉書』卷六九周顒傳を参照。
- (49) 鄒嶽、程遐 『晉書』卷八一鄒嶽傳および『晉書』卷一〇五石勒載記下を参照。
- (50) 辛玄子後云… 『眞誥』卷一六葉八裏を参照。
- (51) 賈誼 『史記』卷八四賈生傳を参照。
- (52) 馬融 『眞靈位業圖』第七右位に見える。また、『後漢書』列傳五〇上馬融傳を参照。
- (53) 後云… 『眞誥』卷一六葉四表を参照。
- (54) 南門亭長… 『眞靈位業圖』第七右位「北帝南門亭長二人、郗鑒、周撫」、注「字道和、代郗鑒」。また、『晉書』卷五八周撫傳、同卷六七郗鑒傳を参照。
- (55) 後云… 『眞誥』卷一五葉一三裏を参照。
- (56) 蘇韶傳云… 王隱『晉書』(『太平廣記』卷三二九)「顏淵卜商、今見在爲修文郎、修文郎凡有八人」。
- (57) 臧洪 『眞靈位業圖』第七右位「北斗君天門亭長二人、臧洪、王放」。また、『三國志』卷七臧洪傳を参照。
- (58) 隗囂 『後漢書』列傳三隗囂傳を参照。
- (59) 王波 『無上祕要』卷八三得鬼官道人名品「王波、晉尚書令史、臧洪等二人、北斗君天門亭長」。『眞靈位業圖』では、注(57)のように王放とし、「晉中書郎」と注する。『晉書』卷一〇六石季龍載記上を参照。
- (60) 紀瞻 『眞靈位業圖』第七右位「北天脩門郎二人、虞諱、紀瞻」。また、『晉書』卷六八紀瞻傳を参照。
- (61) 田銀 『無上祕要』卷八三得鬼官道人名品「田銀先亦爲之、…北斗南門亭長」。また、『魏書』(『三國志』卷一四程昱傳注)を参照。
- (62) 虞譚 『無上祕要』卷八三得鬼官道人名品「虞譚、字思奧、晉衛將軍、…北斗南門亭長」。また、『晉書』卷七六虞譚傳を参照。
- (63) 魏劔… 『眞靈位業圖』第七右位「廬山侯魏劔」、注「會稽人也」。
- (64) 顧和 『眞靈位業圖』第七右位「北帝執蓋郎顧和」、注「字君孝、晉吏部尚書」。また、『晉書』卷八三顧和傳を参照。
- (65) 范明友 『漢書』昭帝紀を参照。
- (66) 又詒試許先生者… 『眞誥』卷四葉一〇表を参照。
- (67) 周魴 『眞靈位業圖』第七右位「周魴」、注「字子魚、主察試」。また、『三國志』卷六〇周魴傳を参照。

(68) 殷浩、何晏 『眞靈位業圖』第七左位「北帝侍晨八人、位比侍中」として殷浩と何晏の名が見える。また、『晉書』卷七七殷浩傳、『三國志』卷九曹爽傳を参照。

(69) 此有八人、事在後 『眞誥』卷一五葉一一裏を参照。

(70) 溫太眞… 『眞靈位業圖』第七左位「監海伯治東海溫太眞、位比大將軍」。また、『晉書』卷六七溫嶠傳を参照。

(71) 杜預… 『眞靈位業圖』第七左位「長史杜預」、注「晉征南將軍、位左傳」。また、『晉書』卷三四杜預傳を参照。

(72) 何次道 『晉書』卷七七何充傳を参照。

(73) 後辛玄子亦云如此 『眞誥』卷一六葉九表を参照。

(74) 魏武帝… 『眞靈位業圖』第七左位「北帝太傅魏武帝」。また、『三國志』武帝紀を参照。

(75) 後王逸少事 『眞誥』卷一六葉四裏を参照。

人臥床當令高、高則地氣不及、鬼吹不干、鬼氣之侵人、常依地而逆上。鬼者陰物、多因藉以宜其氣、或附人畜、或依器物、或託飲食、然後得肆其凶毒耳、昔有人病在地臥、於病中乃見鬼於壁穿下、以手爲管而吹之、此即是鬼吹之事也

人臥室宇、當令潔盛、潔盛則受靈炁、不盛則受故炁、故炁之亂人

室宇者、所爲不成、所作不立、一身亦〔耳〕〔爾〕、當洗沐澡潔、不爾无冀矣。故炁皆謂鬼神塵濁不正之炁、此等皆承人爲惡、既靈助無主、道豈可議也

勿道學道、道學道、鬼犯人、事亦不立、使人病、是體未眞故也。〔眞誥〕亟多此戒、云、「一言一事、泄乃減算」、豈但疾病而已、所謂仙者心實學、何趣說之耶、群魔伺察、有如影響也

山世遠受孟先生法、暮臥、先讀黃庭內景經一過乃瞑、使人魂魄自制練、但行此道二十一年亦仙矣、是爲合萬過也、得三四過乃佳、北嶽蔣夫人云、「讀此經亦使人無病、是不死之道也」。〔此四條並是可承用、事已別抄在第三篇中、孟先生即應是京兆孟君、及屬用鄭承者、前篇有西嶽蔣夫人、今〔火天下〕〔又云北〕嶽、未審有兩人、爲是誤也

- (1) この段、『眞誥』卷一〇葉七裏に同文が見える。
- (2) この段、『眞誥』卷一〇葉八表に同文が見える。
- (3) 意をもって「耳」の字を「爾」の字に改める。
- (4) この段、『眞誥』卷一〇葉八表に同文が見える。
- (5) この段、『眞誥』卷九葉二三裏に同文が見える。

(6) 宮本が「火天下」を「又云北」に作るのに従う。

人が寢臺に寝る時は、その高さを高くしなければならぬ。高ければ地氣は上つてこないし、鬼吹が犯す事もない。鬼氣が人間を犯す時は、いつも地面をつたつてさか上つて來るのである。(邪鬼は陰の存在であつて、しばしば取りついてその惡氣をまき散らすのである。あるいは人や畜生につき、あるいは器物により、あるいは飲食物に身を託し、そのうえで凶惡な毒氣を發揮することができるのである。昔、ある人が病氣で地面に寝ていたところ、病中に、邪鬼が壁の穴の下で手を丸めて管にして吹くのを見た。これがつまり鬼吹の事である)

人が部屋で寝る時は、清潔にしなければならない。清潔であれば靈氣を受けるし、不潔であれば故氣を受ける。故氣が人間の部屋を亂すと、やる事は成就しないし、なす事もうまくゆかない。身體についても同様である。沐浴して洗い清めなくてはならない。そうでなければ(仙道成就の)望みはない。(故氣とはすべて鬼神の穢れ汚れた不正の氣のことを言う。これらはすべて人が惡をなすのにつけこむのである。神靈の助けが當てにならぬのだから、仙道のことなどどうして議することができよう)

仙道を學んでいると言つてはならない。仙道を學んでいると言つと、邪鬼がその人を犯すし、ものごとくうまくゆかず、人間を病氣にさせる。身體がまだ眞實でないからである。(眞人のお告げにはしばしばこのような戒めがあつて、「一言でも一事でも漏らせば、一算を減らす」と説いている。病氣になるだけではないのである。いわゆる「仙とは心にしっかりと學ぶもの」なのであつて、どうしてそのことをおいそれと口にするのであろうか。多くの魔物が(人の行爲を)監視しているのは、影が(形に)伴い、響きが(聲に)従うようなものである)

山世遠が孟先生から授かつた法。夕暮れに横になつて、まず『黃庭內景經』を一度讀んでから眠る。すると人の魂魄が自然と鍊磨される。ひたすらこれを二十一年間行つと仙人になれる。つまり全部で一萬回になるからである。(夕方に)三、四回讀むことができれば、ずっとよい。北嶽蔣夫人が言われた。「この經を讀めば、病氣にもかからなくさせる。これは不死の道です」。(この四條はいずれもその通りに實踐すべきであり、事柄はすでに別に第三篇中に書き出されている。孟先生とは京兆の孟君であり、また鄭承を依頼して採用させた者のことであらう。前篇には西嶽蔣夫人があり、今こゝでは北嶽と言っている。二人がいるのであろうか、それとも誤つてい

るのであろうか。

(1) 陰物 『周易』繫辭傳下「乾、陽物也、坤、陰物也」。

(2) 所謂仙者心實學 『眞誥』卷一八葉五表「仙者心學」、注「出二十四神經也」。

(3) 孟先生即應是京兆孟君 『眞誥』卷一三葉一三表を参照。

(4) 前篇有西嶽蔣夫人 『眞誥』卷一葉四表を参照。

(1) 夜行常啄齒、啄齒亦無正限數也、煞鬼邪鬼常畏啄齒聲、是故不得

犯人也、若兼之以漱液祝說亦善（叩齒即神存、故鬼邪不得干、今修上道者、日夜既恆有此事、所以竝得長生爾、

昔鮑助者、濟北人也（助既「少」「卑」微、外書不顯、都不學道、

亦不知法術、年四十餘、忽得面風氣、口目不正、悉入口而兩齒上下恆相切拍、甚有聲響、如此晝夜不止、得壽年百二十七歲、後乃遇寒過大冰、墮長壽河中死耳、

北帝中間亦比遣煞鬼及日遊地殃使取之、而此數煞鬼終不敢近助、鬼官問其故、天煞答云、「此人乃多方術、以制於我、常行叩齒、鳴打天鼓、以警身中諸神、神不敢散、鬼氣不得入、是以无有緣趣得煞之耳」、以此論之、若助不行冰渡河、亦可出千歲壽不害也、當是遇大

寒凍、步行冰上、口噤不能復叩齒、是故鬼因溺着河中耳、患風病而齒自叩動者、猶尚辟死卻煞鬼矣、何患道士眞叩齒、鳴天鼓、具身神耶。（仙方云、「常吞液叩齒、使人反少」、以此而言、人命便无定限、一切皆是天過耳、若修道精勤、如鮑助啄齒、何容不得永年、正患有時懈替、則爲鬼所襲、同於溺河之斃也、凡諸鬼亦是不能靈智、乃以風病爲多術、豈勝謬邪）

(1) この段、『眞誥』卷一〇葉九裏に同文が見える。

(2) この段、『三洞珠囊』卷一教導品および同卷一〇叩齒嚙液品に同類の文が見える。

(3) 宮本が「少」を「卑」に作るのに従う。

夜に歩く時は、常に叩齒しなくてはならない。叩齒には決まった回数はない。殺鬼や邪鬼はいつも叩齒の音を恐れる。だから人間を犯すことができないのだ。もし、それに合わせて唾液でうがいをして呪文を唱えればもっとよい（叩齒すれば神が存する。だから殺鬼や邪鬼が犯すことができないのである。今、上道を修めている者たちは、晝も夜も常にこの事をやっている、そろって長生することができるのである）。

昔、鮑助は濟北の人であつた（鮑助は若くして微賤であつたので、世俗の書物には明らかではない）。まったく仙道を學ばず、また方術も知らなかつた。四十餘りの年となつた頃、にわかに顔の風氣の病にかかり、口や目はゆがみ、氣が口から入つて、上と下の齒がいつもがちがちと打ち合さり、ひどく音がした。このようにして晝も夜も止まらず、百二十七歳の壽を得た。後に寒氣の際、大きな氷の上を渡つた時、長壽河に落ちて死んだ。

北帝はこの間、何度も殺鬼とその日にさまよい出る地殃をやつて召し取ろうとしたが、これらの殺鬼たちはあくまで鮑助に近づこうとはしなかつた。鬼官がそのわけをたずねると、天煞は答えた。「この男はなんと多くの方術によつて、私を制するのです。いつも叩齒を行つて天鼓を打ち鳴らし、身體内の神々を警めますので、神々は散りぢりにならうとはせず、鬼氣は侵入することができません。だからおいそれと殺すわけにはゆかないのです」。このことから論すれば、もし鮑助が氷上を行き、河を渡らなかつたならば、千歳の壽を超えることさえできたであろう。きっと大變な寒さと凍えに遇つて氷の上を歩いた時、口をつぐんだので叩齒できなくなり、それで鬼がそれに乗じて河に溺れさせたのに違ひない。風氣の病を患つて齒がひとりでにがちがちと振動する者ですらやはり死を避け、殺鬼を退けることができるのである。道士がまじめに叩齒して天鼓を鳴らし、身體神を備えたならば、何を憂えることがあろうか。〈仙

方⁽⁴⁾」には、「常に唾液を呑み叩齒すれば人を若返らせる」とある。このことから言えば、人の命には定められた限度はないのだから、一切すべて天死⁽³⁾ということになる。もしひたむきに仙道を修行し、鮑助のように叩齒していれば、どうして永遠の年壽を得られないことがあろうか。ただ、時として怠り、なおざりにすれば、邪鬼に襲われて（鮑助と）同じように河に溺れて死ぬような羽目になるのが問題なのである。およそ邪鬼どもに靈妙な知慧があるはずはなく、なんと風氣の病持ちを方術に長けた者と考へたのである。とんでもない間違ひである」

(1) 法術 『晉書』卷九五藝術傳序「然而詭託近於妖妄、迂誕難可

根源、法術紛以多端、變態諒非一緒、眞雖存矣、僞亦憑焉」。

(2) 日遊地殃 『無上祕要』卷八三得鬼官道人名品「殺鬼地殃、日

遊三鬼、北帝常使殺人者、無姓名」。「女青鬼律」卷六「斬死之

鬼故死之鬼：地殃之鬼：宅家訟逮之鬼：右三十六鬼、皆遊行世

間、乘人衰隙、伺候有惡、助佐凶殃、造作禍害」。

(3) 鳴打天鼓 『無上祕要』卷六六叩齒品「中央上下相對叩、名曰

鳴天鼓、…右出洞眞太上隱書經」。

(4) 仙方 『重修政和證類本草』卷三玉石部上品玉屑注「陶隱居

云：仙方名玉爲玄眞」。『紫陽眞人內傳』「君每曾聞仙方說云、

仙人目瞳子正方」。

(5) 天遏 賈誼『新書』修政語下「聖王在上、則君積於仁、而吏積於愛、而民積於順、則刊罰廢矣、而民無天遏之誅」。

鄆都山上樹木水澤如世間、但稻米粒幾大、味如菱、其餘四穀不爾、但名稻爲重思耳、杜瓊作重思賦曰、「霏霏春茂、翠矣重思、靈烝交被、嘉穀應時、四節既享、祝人以祀、神木鬱乎浩京、巨穗橫我玄臺、爰有明祥、帝者以熙、此之謂矣。」此更說鄆都中事、仍復及重思耳、說祝人有祠者、不容有蒸嘗之義、當即是前所云獻奉仙官故也、又鬼年限足、應受餘生亦復死、便有祠事矣、杜瓊字伯瑜、蜀人也、博學有才思、注韓詩、兼明數術、逆記魏當代漢、仕劉禪時爲鴻臚太常、延熙十三年亡、年八十餘耳。

侍帝晨有八人、徐庶龐德爰愉李廣王嘉何晏解結殷浩、竝如世之侍中。《李廣、漢武驍騎將軍、征匈奴時、被吏譴、憤慨自刎而死、王嘉、蜀郡人、平帝時爲郎中、至王莽、乃棄官還鄉、不肯臣公〔孫〕述、伏劍而死、徐庶字元直、潁川人、薦諸葛亮於劉備、後魏武虜其母、乃歸魏、仕至中丞、明帝大和中病亡、龐德字令明、南安人、隨張鎮南降魏武、拜立義將軍、屯樊城、爲關羽所害、諡杜侯、迎喪葬鄴、身首如生、爰愉字世都、濮陽人、有才辨、多術藝、事晉武、辟

司徒魏舒府、位至侍中書令監、解結字稚連、濟南人、係弟也、一仕晉、黃門侍郎中丞荊豫州刺史尚書、趙王倫時爲孫秀所害也、何殷二人以注在前、前所說唯道二人、今當是更請問、乃悉具顯之。

四明公及北斗君竝有侍帝晨五人、其向者八人是北大帝官隸耳、選用亦同。《侍帝晨之號、仙官亦有、俱是侍中位也、此言選用竝同、不知止取名位、當品才識、兼論功德耶、此諸人才位、永不相類、恐幽途所詮、別當有以耳。

又有中郎直事四人、如世之尚書也、戴淵公孫度劉封郭嘉、今見在職、封者是玄德之養子。《此職應是太帝領僚、如今散曹尚書耳、戴淵字若愚、廣陵人也、仕晉、歷位至護軍尚書僕射驃騎將軍、與周顒俱爲王敦所害、贈光祿、諡簡侯、公孫度字叔濟、遼東人、淵之祖也、初爲遼東太守、建安中、遂僭號稱王、建天子羽儀、傳國子康、至孫淵、被司馬宣王所煞、《開》〔劉〕封本羅侯寇氏子、劉備未有兒、養爲息、性剛猛、有氣力武藝、後建節度賜死、此異族爲嗣、亦是仍得襲姓也、郭嘉者、字奉孝、潁川陽翟人、魏武謀臣、爲軍謀祭酒、病亡、年三十八、諡貞侯也。

玄德今爲北河侯、與韓遂對統、今屬仙官。《仙官又有北河司命禁保侯、亦司三官中事、乃隸東華宮、保命君領之、此則是北河侯必是相

統屬矣、劉備字玄德、涿郡人、初起義兵、後遂據蜀、稱尊號、三年病亡、年六十三、諡昭烈皇帝、尋于時同爲三國之主、魏武孫策、今位任皆高、劉此職雖小而隸仙官、其優劣或可得相匹也、韓遂字文紂、某某人、漢末阻兵、構亂西土、建安二十五年、魏武伐之、奔金城之內、爲其將趙雲等所害、遂乃驍雄而未免寇難、乃得與劉備對仕、殊爲不類、兼隸仙官、益復超顯也

又有大禁農二人、如今尙書令、漢光武及孫文臺二人居之。〈光武劉秀字文叔、高祖八代孫、起兵討王莽赤眉、平定天下、即位三十三年病亡、年六十三、孫堅字文臺、吳郡人、策父也、袁術表爲破魯〉〔虜〕將軍豫州刺史、討董卓、後伐劉表、初平二年、爲表將軍黃祖部下人所射亡、年三十七、堅雖忠烈而位微、今與天子同職、亦似韓遂之匹玄德也

又有中禁農、如今之中書令監、有二人、顏懷楊彪二人居之、懷字思季、彪字文先者。〈顏懷字思季、未德〉〔得〕此人、楊彪字文先、弘農人、漢司空、楊修父也、值董卓〔博〕〔悖〕亂、扶濟獻帝、東西危苦、備經三司、至魏文黃〔初〕〔初〕六年乃亡、年八十四

許長史父今爲彈方侯、彈方侯有二人、各司南北、許長史爲南彈方侯、劉贊爲司馬、鮑勛爲北彈方侯、韋遵爲司馬、亦各主南北門衛、

許領威南兵千人、鮑勛領威北兵千人、大都備門主收執而已、如今世有羽林監、威南威北兵如道家天丁力士甲卒之例也。二禁農及南北彈方侯亦應如是北帝官屬也、受此語時、未必不呼許名、恐是楊自不疏之耳、北帝呢所謂威南威北、即謂此兵、當是驍勇者也、許氏事具在別篇、劉贊字正明、會稽長山人、少爲〔郡〕〔郡〕吏、好讀兵書、慷慨有大志、擊黃巾賊、傷足、一腳屈、遂自割筋得伸、後爲左護軍、與孫峻征淮南、未至病困、爲魏將蔣班所逼被害、年七十〔王〕〔三二〕〔約〕〔鮑〕助字叔業、鮑宣九世孫、即鮑信子也、清白有高節、漢建安中爲中庶子黃門郎、魏文帝御史中丞、數諫諍忤旨、左遷治書執法、後被誅、韋遵字公藝、吳人、即韋昭之孫也、博學有文才、善書、仕晉成穆之世、爲尙書左民郎中書黃門侍郎、代王逸少爲臨川郡守、以母憂亡、年六十四也

孫策爲東明公賓友。〈孫堅長子、字伯符、漢末嗣父領衆、先制江東、乃欲定中國、拜討逆將軍、封吳侯、臨過江輕獵、爲仇客所射、瘡發而亡、年二十六、弟權代任、後追諡長沙桓王、策初從東出、煞道〔七千〕〔士千〕吉、後照鏡見之、驚念叫、故瘡潰而死、尋項羽之英傑逾於孫遠矣、俱是不得王、而獨不顯出、乃歷世相傳云、爲吳興十山王、常居郡廳上、故太守不敢上、上者輒死、亦別爲立廟、呼爲霸王也

- (1) 兪本に従って「孫」の字を補う。
- (2) 兪本が「開」を「劉」に作るのに従う。
- (3) 兪本が「魯」を「虜」に作るのに従う。
- (4) 兪本が「德」を「得」に作るのに従う。
- (5) 宮本が「博」を「悖」に作るのに従う。
- (6) 宮本が「紉」を「初」に作るのに従う。
- (7) 宮本が「部」を「郡」に作るのに従う。
- (8) 宮本が「王」を「三」に作るのに従う。
- (9) 宮本が「釣」を「鮑」に作るのに従う。
- (10) 兪本が「七千」を「士干」に作るのに従う。

鄴都山上の樹木や水澤は、まるで俗世間のもののようであるが、ただ稻米の粒だけはいくら大きく、味は菱のようである。その他四穀はそうではない。ただ稻だけを重思と呼ぶのである。杜瓊^①が

「重思賦」を作って、

勢い盛んに春に繁茂し、

翠なす重思よ。

靈妙なる氣をしきりに身に浴び、
めでたき穀物^③は時候になかう。

四季ごとに（重思を）献上しては、
祝人^④は祀りを行う。

神異の禾^⑤は廣大なる羅鄴の都に鬱蒼と生い茂り、

巨大なる穗はわが玄臺に横溢する。

ここに明らけし祥瑞^⑥現れ、

帝者はかくて熙^⑦こぶ。

このように歌っているのは、このことなのだ。〈これはあらためて鄴都のことを述べ、そのついでに重ねてまた重思に言及したのである。〉「祝人^④が祀りを行う」と述べているのは、（先祖を祀る）烝や嘗の祭祀の意味ではあるまい。恐らくつまり、前の所で「（重思を）仙官に献上する」と言っているからなのであろう^⑧。また、鬼としての年限が満ちると、きつとまた別の生命を受けて、やはりまた死ぬのであつて、そこで祠りの問題が出てくるのである。杜瓊、字は伯瑜、蜀の人である。博學にして才智にすぐれ、『韓詩』に注釋を施し、同時に術數に明るく、魏が漢に取って替わるであろうことを預言した。劉禪の時代に仕えて、鴻臚、太常となった。延熙十三年（二五〇）に死んだ。享年八十餘

侍帝晨には八人いる。徐庶、龐德、爰愉、李廣、王嘉、何晏、解結、殷浩である。いずれも俗世の侍中のようなものである。〈李廣は漢の武帝の驍騎將軍である。匈奴を征討した時、軍吏の譴責を受

け、憤慨して自刎して果てた。王嘉は蜀郡の人、平帝の時に郎中となった。王莽の時代になると、官を棄てて歸郷した。公孫述に臣従しようとはせず、劍を突きたてて死んだ。徐庶、字は元直、潁川の人である。諸葛亮を劉備に推薦した。後に魏の武帝が彼の母を捕虜にすると、そこで魏に歸順し、官は中丞にまで至った。明帝の太和中(二二七—二三二)に病死した。龐德、字は令明、南安の人である。張鎮南(張魯)につき従って魏の武帝に投降し、立義將軍を拜命した。樊城に駐屯していたおりに、關羽に殺害された。杜侯と諡された。柩を迎えて鄴に葬ったが、體も首も生けるがごとくであった。爰倫、字は世都、濮陽の人である。口が達者でさまざまな技藝を身につけていた。晉の武帝に仕え、司徒魏舒^①の幕府に召された。位は侍中、中書令、中書監にまで至った。解結、字は稚連、濟南の人であり、解係の弟である。いったん晉に仕えるや、黃門侍郎、中丞、荊州刺史、豫州刺史、尙書を歴任した。趙王倫の時、孫秀に殺害された。何晏と殷浩の二人については、すでに前の箇所注がある。前にはただこの二人について言及しただけであった。今きつとあらためて問われたので、そっくり全員について明らかにしたのであろう。

四明公と北斗君にはいずれも五人の侍帝晨がいる。先ほどの八人(の侍帝晨)は、北大帝に隸屬する官であり、任用(のやり方)も同

様である。侍帝晨という呼稱は、仙官にもあり、どちらも侍中の位である。ここで「任用(のやり方)はいずれも同様である」と言っているのは、ただ單に名稱位階のことだけを念頭に置いているのか、それとも(人物の)才識を鑑定しあわせて功德を論評するのであろうか。これらの人々の(生前の)才能位階は、まるでさまざまである。恐らく幽界^①の評定では、きつと別に理由があるのであろう。

また中郎直事が四人いる。俗世の尙書のようなものである。戴淵、公孫度、劉封、郭嘉が今現在この職に就いている。^①封は劉玄徳の養子である。(この職はきつと北大帝の屬僚であり、今の散曹尙書のよなものであろう。戴淵、字は若愚、廣陵の人である。晉に仕えて、護軍(將軍)、尙書僕射、驃騎將軍を歴任した。周顒とともに王敦に殺害された。光祿の位を贈られ、簡侯と諡された。公孫度、字は叔濟、遼東の人、公孫淵の祖父である。初め遼東太守であったが、建安年間(一九六—二一〇)に王號を僭稱し、天子の羽儀を整えた。國を子の康に傳えたが、孫の淵に至り司馬宣王(司馬懿)に殺された。劉封はもともと羅侯寇氏の子である。劉備にはまだ男兒がいなかったため、養子としたのである。性格は剛猛で、氣力があり、武藝を備えていた。後におとなしくなったが死を賜った。これは、異姓が後繼ぎとなっても、やはりそのまま(養父の)姓を襲ぎ得る、というわけである。郭嘉、字は奉孝、潁川陽翟の人である。魏の武

帝の參謀で、軍謀祭酒となったが、病死した。享年三十八。眞侯と諡された。

劉玄德は今北河侯として、韓遂とベアになつて統領している。^⑬今は仙官に屬している。〈仙官にはさらに北河司命禁侯がいて、やはり三官中のことをつかさどつており、東華宮に隸屬して、保命君が管轄している。そうだとするならば、北河侯はきつと仙官の統領に屬するのである。劉備、字は玄德、涿郡の人である。初め義兵を起こし、後に蜀に據つて尊號を稱し、三年後に病死した。享年六十三。昭烈皇帝と諡された。考えてみるのに、その當時、同じく三國の主であつたのに、魏の武帝と孫策とは、今その位階任務がいずれも高い。劉備のこの職は、位が低いとはいへ、仙官に隸屬している。その優劣は、もしかしたら、ほかの二人と匹敵するのも知れない。韓遂、字は文紂、どこそこの人である。漢末に兵を恃んで西方の地に亂を構えた。建安二十五年（二二〇）、魏の武帝が討伐すると、金城の中に逃げこみ、自軍の將麴演たちに殺害された。遂は猛々しい梟雄で、しかも反亂軍の難を免れなかつたのに、劉備とベアで任官しているのは、まったく釣り合いがとれない。おまけに仙官に屬しているのは、ますます異例の出世である。〉

また大禁晨二人がいる。今の尙書令のようなものである。漢の光

武帝と孫文臺の二人がその職に就いている。^⑭〈光武帝劉秀、字は文叔、高祖劉邦の八代の孫である。兵を起こして王莽と赤眉の賊とを討伐し、天下を平定した。即位してから三十三年にして病死した。享年六十三。孫堅、字は文臺、吳郡の人、孫策の父である。袁術は上表して彼を破虜將軍、豫州刺史とした。董卓を討ち、後に劉表を征伐し、初平二年（一九一）、劉表の將軍黃祖の部下に射殺された。享年三十七。孫堅は忠烈ではあつたが位は低かつた。今、天子と職を同じくしているのは、やはり韓遂が劉玄德と對等であるようなものである。〉

また中禁晨がいる。今の中書令と中書監のようなもので、二人いる。顏懷と楊彪の二人がこの職に就いている。^⑮顏懷は字は思季、楊彪は字は文先という者である。〈顏懷、字は思季、まだこの人物は見つからない。楊彪、字は文先、弘農の人、漢の司空であり、楊修の父である。董卓の謀叛に遭遇するや、獻帝を保護して、東西に奔走して危難辛苦を味わつた。〈太尉、司空、司徒の〉三公の職すべてを歴任し、魏の文帝の黃初六年（二三五）に至つて死んだ。享年八十四。〉

許長史の父は今北彈方侯となつてゐる。彈方侯は二人おり、おのの南と北とをつかさどつてゐる。許長史（の父）は南彈方侯であり、劉贊が司馬である。鮑勛が北彈方侯であり、韋遵が司馬である。^⑯

やはりおのおの南と北との門の鍵を主管している。許長史(の父)は威南の兵千人を統領し、鮑勛は威北の兵千人を統領しており、おのおの門を準備して追捕を任務としている。今の俗世に羽林監が存在するようなものだ。威南と威北の兵は、神仙家の天丁力士や甲卒の類のようなものである。(二禁農も南北彈方侯もやはりきつといずれも北帝の屬官なのであろう。この言葉を授かった時には、必ずしも許長史(の父)の名を明言しなかったわけではなく、恐らくは楊羲自身が書き記さなかったまでのことであらう。北帝の呪文にいうところの「威南威北」とは、つまりこの兵のことであり、さだめし猛々しい勇者なのであろう。許氏のことは別篇に詳細である。劉贊、字は正明、會稽長山の人である。若くして郡吏となり、兵書を読むのが好きで、感情が激しく、大志を有した。黃巾の賊を攻撃して足を負傷し、片方の脚が曲がってしまったが、そこで自ら筋を割いて伸ばすことができるようになった。後に左護軍となり、孫峻と淮南を征討しようとしたが、目的地に到着しないうちに危篤になり、魏の將軍蔣班に迫られて殺害された。享年七十三。鮑勛、字は叔業、鮑宣の九世の孫であり、つまり鮑信の子である。清廉潔白にして氣高い節義があった。漢の建安年間(一九六—二一〇)に中庶子、黃門郎となった。魏の文帝の御史中丞として、繰返し諫諍して主上の意向に逆らったため、治書執法に左遷され、後に誅された。韋遵、字は公藝、吳の人であり、韋昭の孫である。博學で文才があり、書

法に巧みであった。晉の成帝、穆帝の世に仕え、尙書左民郎、中書黃門侍郎となり、王逸少(羲之)に代わって臨川郡守となった。母の死を悲しむあまり死んだ。享年六十四

孫策は東明公の賓友である。²⁰ 孫堅の長子で、字は伯符。漢末に父の跡を繼いで衆徒を統領し、まず江東を制壓すると、そこで中國を平定しようと考えた。討逆將軍を拜命し、吳侯に封ぜられた。長江を渡ろうとした時に輕はずみにも獵をし、仇敵の客分に射られ、傷口が破れて死んだ。享年二十六。弟の權が代つて跡を繼ぎ、後に長沙桓王を追諡された。孫策が江東から出てきた當初、道士の千吉を殺した。その後、鏡に自分の姿を映すと千吉が見える。驚いて怒り叫び、それで傷口がづぶれて死んでしまった。考えてみるのに、項羽の英傑ぶりは孫策より遙かに拔き出ている。どちらも王となり得なかったが、項羽のことだけは明らかにされていない。そこで歴代相傳えて、「吳興の十(下)山の王となって、いつも郡役所のホールに住みついている。だから太守は上ろうとしない。上った者は必ず死ぬ」と言っている。²³ また別に項羽のために廟を建立して、霸王と呼んでいるのである

(1) 杜瓊 『眞靈位業圖』第七右位に見える。また、『三國志』卷

四二杜瓊傳を参照。

- (2) 霏霏 『毛詩』小雅采芣「今我來思、雨雪霏霏」、毛傳「霏霏、甚也」。

- (3) 嘉穀 『抱朴子』博喻「嘉穀不芸、則莠莠彌蔓」。

- (4) 祝人 『韓詩外傳』卷一〇「爲宗廟而不血食邪、則祝人太宰在」。

- (5) 明祥 謝朓「永明樂」(『樂府詩集』卷七五)「明祥已玉燭、寶瑞亦金輪」。

- (6) 蒸嘗 『毛詩』小雅天保「禴祠蒸嘗、于公先王」、毛傳「春日祠、夏日禴、秋日嘗、冬日烝」。

- (7) 前所云：『眞誥』卷一五葉四裏を参照。

- (8) 徐庶、龐德、爰愉、李廣、王嘉、何晏、解結、殷浩 いずれも『眞靈位業圖』第七左位に「北帝侍晨八人、位比侍中」として見える。また、徐庶は『三國志』卷三五諸葛亮傳、龐德は同卷一八龐德傳、李廣は『漢書』卷五四李廣傳、王嘉は『漢書』卷八六王嘉傳、解結は『晉書』卷六〇解結傳を参照。

- (9) 魏舒 すなわち南嶽魏夫人之父。『晉書』卷四一魏舒傳を参照。

- (10) 幽途 「建康平司馬鑒答」(『弘明集』卷一〇)「皇上今旨、理妙辭縟、致極鉤深、究至寂而更闡、啓幽途以還晰」。『無上祕要』卷五五太眞下元齋品「脫離幽途、上昇南宮」。

- (11) 戴淵、公孫度、劉封、郭嘉 いずれも『眞靈位業圖』第七左位に「中郎直事四人、如世尙書」として見える。また、それぞ

れ『晉書』卷六九戴若思傳、『三國志』卷八公孫度傳、同卷四〇劉封傳、同卷一四郭嘉傳を参照。

- (12) 玄徳、韓遂 いずれも『眞靈位業圖』第七左位に「河北侯二人」として見える。また、それぞれ『三國志』卷三三先主傳、同武帝紀を参照。

- (13) 北河司命禁保侯 『眞誥』卷一二葉九裏を参照。

- (14) 漢光武、孫文臺 いずれも『眞靈位業圖』第七左位に「大禁晨二人、位比尙書令」として見える。また、それぞれ『後漢書』光武帝紀および『三國志』卷四六孫堅傳を参照。

- (15) 顔懷、楊彪 いずれも『眞靈位業圖』第七左位に「中禁二人、位比中書令監」として見える。また、楊彪については『後漢書』列傳四四楊震傳を参照。

- (16) 許長史父、劉贊、鮑勛、韋遵 『眞靈位業圖』第七右位「南彈方侯許副、領威南兵仙人」(注：已度九宮、未委誰代)、主南門鑰司馬留贊(注：長山人、爲吳將)、北彈方侯勛、領威北兵千人(注：字叔業、魏中丞)、主北門鑰司馬韋遵(注：吳時昭孫、備門主收執、如世羽林監)。また、劉贊は『吳書』(『三國志』卷六四孫峻傳注)、鮑勛は『三國志』卷一二鮑勛傳を参照。

- (17) 天丁力士甲卒 『無上祕要』卷九五昇紫晨品「召六甲於五行、役武卒於天丁、…右出洞眞神州七變儼天經」。

- (18) 北帝呪：『眞誥』卷一〇葉一〇裏を参照。

(19) 許氏事具在別篇『眞誥』卷二〇葉六表を参照。

(20) 孫策…『眞靈位業圖』第七左位「東明公領斗君師夏啓、賓友孫策」。また、『三國志』卷四六孫策傳を参照。

(21) 項羽『史記』項羽本紀を参照。

(22) 歷世相傳云…『南史』卷一八蕭思話傳「(蕭)惠明…亦有時譽、泰始初、爲吳興太守、郡界有下山、山下有項羽廟、相承云羽多居郡聽事、前後太守不敢上、惠明謂綱紀曰、孔季恭嘗爲此郡、未聞有災、遂盛設筵榻接賓、數日、見一人長丈餘、張弓挾矢向惠明、既而不見、因發背、旬日而卒、…(蕭惠休)永元元年、徙吳興太守、徵爲尚書右僕射、吳興郡項羽神舊酷烈、人云惠休事神謹、故得美遷」。

眞誥卷之十六

闡幽微第二

漢高祖爲南明公賓友。〈劉邦字季、沛郡豐人、起自布衣、伐秦平項、創漢之基、即位十二年病亡、年六十二〉

晉宣帝爲西明公賓友。〈司馬懿字仲達、河內人也、魏世爲大將軍太

傅、嘉平三年病亡、年七十二、贈相國、諡宣文侯、晉武受禪、追諡高祖宣皇帝〉

荀彧爲北明公賓友。〈荀彧字文若、潁川人、漢〔武〕末爲尚書令、有風儀識鑒、初爲魏武謀臣、欲以安漢社稷、被疑懼、服藥自盡、年五十、諡敬侯、追贈太尉、荀之列在賓友、亦如延陵之匹四明、位雖非亞而德望賢矣〉

其中宿運先世有陰德惠救者、乃時有徑補仙官、或入南宮受化、不拘職位也、在世之罪福多少、乃爲稱量處分耳、大都行陰德、多恤窮厄、例皆速詣南宮爲仙。〈在世行陰功密德、好道信仙者、既有淺深輕重、故其受報亦不得皆同、有卽身地仙不死者、有託形尸解去者、有既終得入洞宮受學者、有先詣朱火宮煉形者、有先爲地下主者乃進品者、有先經鬼官乃遷化者、有身不得去、功及子孫、令學道乃拔度者、諸如此例、高下數十品、不可以一概求之〉

庚元規爲北太帝中衛大將軍、取郭長翔爲長史、以華歆爲司馬、此所謂軍公者也、領鬼兵數千人。〈辛玄子所說、與此大異、恐是受有前後、或能幾被迴換故耳、庾亮字元規、潁川人、咸和中爲征西將軍江荆豫三州刺史、鎮武昌、咸康六年、於鎮病亡、年五十二、贈太尉、諡文康公、未病時、乃獨見陶侃乘輿來讓之、於此得病而亡、郭翻字

長翔、武昌人、少有高志、庾亮引爲上佐、不肯就、亡後與其兒靈語云、「庾公作撫東大將軍、治在東海之東、統十萬兵、取吾爲司馬、聞者本欲取謝仁祖、選官以爲資望未足、蔣大侯先取爲都尉、是以拘逼王長豫爲長史、委以軍事、甚有高稱」、又云、「王丞相爲尙書令、大用事、決萬機」、按如此語、即玄子所說如復似應在前、今以郭爲長史、當是後更轉任、但謝仁祖在世爲僕射鎮西將軍、乃言資望未足、殊爲難辨、王丞相即王導、長豫是導之元子、早亡、華歆字子魚、平原人、爲豫章太守、同孫策、策亡、從魏武帝、歷顯位爲司徒太尉、封博平侯、太和五年亡、年七十^②〔五〕、諡敬侯

孔文學爲後中衛大將軍、以張繡爲司馬、唐固爲長史。〈孔融字文舉、魯人、孔子二十代孫、漢末名士、爲北海太守、後爲曹公所害、張繡、武威人、濟從子也、漢末因亂起兵、後降魏武、爲破羌將軍、從征烏丸、未至柳城亡、諡定侯、唐固字子正、丹陽句容人、修身謹行、博學儒術、注國語公羊穀梁傳、孫權漢武四年爲尙書僕射、年七十餘病亡耳〉

陶侃爲西河侯、亦領兵數千、近求滕含自代、猶未許、侃以徐寧爲長史、寧坐收北關叛將不擒免官、當以蔡謨代寧。〈陶侃字士衡、先自丹陽人、遷居鄱陽、後徙廬江、而屬潯陽柴桑、晉世累經征討、大有功、位至侍中太尉都督八州荆江二州刺史長沙公、咸和四年、還長沙、

亡於樊谿、年七十六、贈大司馬、諡桓公、庾亮代之、而郭長翔靈語云、「陶公正有罪謫、未得敘用」、又別記云、「陶公亡後少時、遣先舊死傳教與其兒相傳云、「公謝郎連與庾公相言語、天上事始判、故令郎知」、于時庾猶存、後三四年而亡、滕含、字子竝^③〔竝子〕、南陽西鄂人、永和中爲平南將軍廣州刺史、于州病亡、諡戴侯、陶以其自代、資位復是奇懸、徐寧字安期、東海剡人、義之祖也、初桓彝舉、與庾亮爲護軍功曹、稱爲〈添〉^④〔海〕岱清士、後仕至正員吏部郎冠軍江州順陽簡侯、義之年少時、嘗來形見、自稱我是汝祖、戒其禍福、後竝如言、蔡謨字道明、陳留考城人、克子也、位至揚州刺史、又授司徒、不受、永和十二年病亡、年七十六、贈司空、諡文穆公、尋此不擒叛將亦是鬼、鬼不能相制、由如人也、人皆非自然威攝、仙真猶尚握節持鈴、以勒〈比〉^⑤〔此〕輩、而況其問類乎〉

四鎮皆領鬼兵萬人、中官領兵不過數千、四鎮有泰山君盧龍公東越大將軍南巴侯四官、各領萬人。〈四鎮非正是四方、今此處竝在中國、迴還不過數千里耳、他方復應大有、所以後言數百處也〉

何曾爲南巴侯。〈何曾字穎考、陳郡陽夏人、何夔子也、性豪侈而博學孝悌、初仕魏世、稍遷尙書征北將軍司徒、封朗陵侯、晉太尉太保太宰朗陵公、太始四年^⑥〔十〕〔亡〕、年八十餘、諡曰元公

曹仁爲盧龍公。《曹仁字子孝，魏武從弟，雄勇冠世，善弓馬，數從征伐有功，位至車騎將軍都督荆》〔陽〕〔揚〕益州諸軍事大將軍，封陳侯，黃初四年病亡，年五十六，諡曰忠侯也〕

劉陶爲東越大將軍。《漢魏晉凡有三劉陶，後漢者，字子奇，潁川人也，靈帝侍中尚書令，後繫獄，閉烝而死，魏世者，字季治，淮南人，劉曄之子也，才辨而无行，曹爽用爲選部郎，後出平》〔源〕〔原〕太守，景王誅之，晉初者，字正興，沛國人，永嘉中爲楊州刺史，此三人不知何者是東越大將軍，以意言之，多是正興耳〕

荀顗爲太山君。《荀顗字景倩，或第四子也，》〔傳〕〔博〕學有詞理，佐命晉世，起家爲黃門郎，遷尚書僕射司空太尉太傅，太始十年亡，年七十，諡曰康公，蘇韶傳云，「劉孔才爲太山公，欲反，北帝已誅滅之」，孔才卽劉邵也，又梅頤爲豫章太守，夢被召作太山府君，克日便亡，不知此二位與君復各是異職否耳，又云有太山令〕

領一萬兵鎮處亦有數百處也，領數千兵鎮處亦有數百處，更相統隸耳，皆有長史司馬。《王文度鎮廣陵，忽見卒來，召作平北將軍徐亮二州刺史，王云我今已作此官，卒云此是天上職耳，須臾去，尋迎至而亡，》〔失〕〔夫〕天地間事理，乃不可限以胸臆而尋之，此幽顯中都是三部，皆相關類也，上則仙，中則人，下則鬼，人善者得爲仙，仙

之謫者更爲人，人惡者更爲鬼，鬼福者復爲人，鬼法人，人法僊，循還往來，觸類相同，正是隱顯小小之隔耳，達者監之，便无復所關〕

荀顗取顧衆爲太山將軍，用曹洪爲司馬，桓範爲長史。《顧衆字長始，吳郡人，顧》〔愷〕〔悌〕孫，顧祕子也，仕晉，丹陽尹領軍尚書僕射，永和二年亡，年七十三，追贈特進，諡靖伯，曹洪字子廉，魏武從弟，家大富而儉恪，數征伐，爲驍騎將軍，封樂成侯，太和六年病亡，桓範字元則，沛國人，有才學籌策，仕魏世，位至太司農，黨曹爽被誅也〕

王逸少有事繫禁中已五年，云事已散。《卽王右軍也，受時不欲呼楊君名，所以道其字耳，逸少卽王虞兄曠之子，有風烝，善書，後爲會稽太守，永和十一年去郡，告靈不復仕，先與許先生周旋，頗亦慕道，至昇平五年辛酉歲亡，年五十九，今乙丑年，說云五年，則亡後被繫，被繫之事，檢迹未見其咎，恐以懟憾告靈爲謫耳〕

蔣濟爲南山伯，領二千兵。《蔣濟字子通，楚國平阿人，仕漢魏，歷位至太尉，從宣王誅曹爽，其年亡，諡景侯，爲領軍時，有其婦夢亡兒爲太山五伯，來迎太廟西孫阿爲太山令，求囑阿乞轉在好處，濟卽爲仍之，阿亦卽亡，後又夢云已蒙轉錄事，凡如此例，鬼官職位，雖略因生時貴賤，而大有舛駁，皆由德業之優劣，功過之輕重，更品其

階級、不復得全依其本基耳

王廙爲部鬼將軍。〈廙字世將、琅琊人、修齡父也、多才藝、〈政^③「攻」書、善屬文、解音聲、位至平南將軍荊州刺史、年四十七病亡、贈驃騎、諡康侯也〉

此有〈識^①「職」位者、粗相識耳、其無位者、不可一二盡知之、如此散者無限數也。〈此皆後段所說似猶是荀中候、所以止道〉或^⑤「或」不稱姓、而顓復云姓、恐以分別周顓也、所說人多是近世、當由代謝參差、兼易〈億^⑥「臆」識者矣、三代乃遠、而兩漢魏晉實有一段才名人、如劉向董仲舒揚雄張衡蔡邕鄭玄王弼阮嵇之儔、竝不應空散、數術有如管郭、亦無標迹、故當多不隸三官、頗得預於仙家驅任矣、前論帝王中亦不均、魏文晉武受命之主而不顯、反言魏武晉宣、孫權應與劉備同、亦不載道策、此竝當啓國之基、功高樂推故也、其繼體守文之君都無所出矣

右以前後兩過受事、皆是楊君受旨、書多僞治、又掾更寫、兩本悉無異、竝各成一卷相隨、始末訖此耳。

(1) 「武」は衍字とみなす。

- (2) 宮内廳藏正統道藏本(宮本)が「三」を「五」に作るのに従う。
- (3) 意をもつて「子竝」を「竝子」に改める。
- (4) 宮本が「添」を「海」に作るのに従う。
- (5) 愈本が「比」を「此」に作るのに従う。
- (6) 愈本が「十」を「亡」に作るのに従う。
- (7) 愈本が「陽」を「揚」に作るのに従う。
- (8) 愈本が「源」を「原」に作るのに従う。
- (9) 愈本が「傳」を「博」に作るのに従う。
- (10) この段、劉義慶『幽明錄』(『法苑珠林』卷五六)に同文が見える。

- (11) 愈本が「失」を「夫」に作るのに従う。
- (12) 意をもつて「愷」の字を「悌」の字に改める。
- (13) 宮本が「政」を「攻」に作るのに従う。
- (14) 學本が「識」を「職」に作るのに従う。
- (15) 意をもつて「或」の字を「或」の字に改める。
- (16) 愈本が「億」を「臆」に作るのに従う。

眞誥卷十六

闡幽微第二

漢の高祖は南明公の賓友である。^①劉邦、字は季、沛郡豐の人である。無位無冠から身を起こして、秦を討伐し、項羽を平らげ、漢の基を築いた。即位して十二年で病死した。享年六十二

晉の宣帝は西明公の賓友である。^②司馬懿、字は仲達、河内の人である。曹魏の時代に大將軍、太傅となり、嘉平三年(二五二)に病死した。享年七十二。相國を贈られ、宣文侯と諡された。晉の武帝が譲りを受けると、あらためて高祖宣皇帝と諡された

荀彧は北明公の賓友である。^③荀彧、字は文若、潁川の人である。漢の末に尚書令となった。立派な風貌と人材を見抜く力があつた。最初、魏の武帝の參謀となった時、漢の社稷を安泰にしたいと願つたが、疑いの目をかけられて恐怖に驅られ、服毒して自殺した。享年五十。敬侯と諡され、太尉を追贈された。荀彧が賓友の位に列せられているのは、やはり延陵の季子が四明公に仲間入りしているようなものである。位は匹敵するわけではないが、徳望が立派だからである

中には、過去世^④において、また先祖が惠施や救済^⑤を行う陰徳のあつた者で、時としてただちに仙官に補任されたり、あるいは南宮に入つて鍊化を受けることがあり、それは(在世中に)どのような官職や

地位にあつたかには關わらないのである。在世中に積んだ罪業あるいは福徳^⑥の多少こそが、評價されて處遇が決まるのである。およそ陰徳を行つて、飢窮災厄に苦しむ者をしばしば賑恤するならば、おしなべてみな速やかに南宮に赴いて神仙になるのである。(在世中に人知れず密かに功徳を行い、仙道を好み信する者は、そこに深淺輕重の違いがあるのであるから、それによつて受ける果報も、すべて同じというわけにはゆかない。ある者は、生身のままで地仙になつて不死を得る。ある者は、肉體を何かに託して尸解して仙去する。ある者は、死んでから洞天の宮殿に入つて修行の道を授かることができる。ある者は、まず朱火宮に赴いて肉體を鍊化する。ある者は、まず地下主者となつたうえで神仙の階位を進んでゆく。ある者は、まず鬼官の位を経たうえで神仙に變化する。ある者は、本人は仙去することはできないが、功徳が子孫に及んで仙道を學ばしめることとなり、そのことによつて濟度される。このような諸例は、高下數十の種類があつて、ひとしなみにたずね求めることはできない

庾元規は北太帝の中衛大將軍である。^⑧郭長翔を登用して長史とし、華歆^⑨を司馬としている。これはいわゆる軍公である。鬼兵數千人を統領している。(辛玄子の説くところは、^⑩これとは大いに異なっている。恐らく、お告げを授かつた時に前後があるのであろう。あるいは何度か官位を取り替えられたからかも知れない。庾亮、字は元規、

潁川の人である。咸和中（三三六—三三四）に征西將軍、江荆豫三州刺史となつて、武昌に鎮守した。咸康六年（三四〇）、鎮所において病死した。享年五十二。太尉を贈られ、文康公と諡された。まだ病氣にならない時のこと、陶侃が輿に乗つてやつて來て責めるのをひとり見た。かくして病氣になつて死んだ。^① 郭翻、字は長翔、武昌の人である。若い頃から氣高い志があつた。庾亮が上佐に引き立てようとしたが、就任しようとはしなかつた。その死後、その子に次の靈語を與えた。^②「庾公は撫東大將軍となり、治所は東海の東にある。十萬の兵を統率し、私を司馬に登用している。先ごろ、本來は謝仁祖を登用したいと思つたのだが、人事擔當官はキヤリアも名望も足りぬと考え、蔣大侯が先に都尉に採用した。それで王長豫を無理矢理引つ張つてきて長史とし、軍事のすべてを一任している。大變評判が高い」。また言つた。「王丞相は尙書令になつてゐる。大いに腕を振るひ、萬機の一切を決裁している」。按ずるに、この言葉どおりだとすると、玄子の説しているところはどうかやらこれよりも以前のこのようなのである。今、郭長翔を長史としているのは、きっと後に新たに轉任したのであらう。ただ、謝仁祖は在世中に僕射、鎮西將軍であつたにも関わらず、「キヤリアも名望も足りぬ」と言つてゐるのは、まったく理解し難い。王丞相とは王導、長豫は王導の嫡男であつて、若くして死んだ。華歆、字は子魚、平原の人である。豫章太守となつて、孫策に味方した。孫策が死ぬと、魏の武帝に従

い、顯位を歴任して司徒、太尉となり、博平侯に封ぜられた。太和五年（二三一）に死んだ。享年七十五。敬侯と諡された

孔文學は後中衛大將軍である。^① 張繡を司馬とし、唐固を長史としている。^② 孔融、字は文學、魯の人であり、孔子二十世の孫である。漢末の名士であつて、北海太守となつた。後に曹公に殺害された。張繡は、武威の人、濟の從子である。漢末、戰亂に便乘して兵を起したが、後に魏の武帝に降つて破羌將軍となつた。烏丸討伐に従つたが、柳城に到着しない前に死んだ。定侯と諡された。唐固、字は子正、丹陽句容の人である。わが身の修養に努め、行いを謹んだ。儒術を博く學び、『國語』『公羊傳』『穀梁傳』に注釋した。孫權の漢武（黃武）四年（二二五）に尙書僕射となつた。七十餘歳にして病死した

陶侃は西河侯である。^① やはり兵數千人を統領している。最近、滕含を自分の後任にするよう求めたが、まだ許可されていない。陶侃は徐寧を長史にしたが、徐寧は、北關の叛將を逮捕するに當つて、捕らえられなかつた罪に坐して免官された。きつと蔡謏を徐寧に交替させるであらう。^② 陶侃、字は子衡、もともとは丹陽の人であつたが、鄱陽に移り住み、後に廬江に移つて、潯陽の柴桑に屬している。晉の世において、しばしば征討を重ねて大功があつた。位

は侍中、太尉、都督八州、荆江二州刺史、長沙公に至った。咸和四年(三二九)、長沙へ戻る途中、樊谿で死んだ。享年七十六。大司馬を贈られ、桓公と諡された。庾亮がその後任になった。郭長翔の『靈語』に言う。²³「陶公は、目下のところ罪謫があつて、まだ敘任されていない」。また『別記』に言う。「陶公が死んでしばらくしてから、あらかじめ蘇らせた使者を遣わして、その子に次のように教令を伝えさせた。『公は、ぼっちゃんがしきりに庾公と談判し、お蔭で天上の事がやつとけりがついたことを感謝しておられます。それでぼっちゃんにお知らせになったのです』。その當時、庾亮はまだ存命しており、その後三、四年ほどしてから死んだ。滕含は竝の子、南陽西鄂の人である。永和中(三四五—三五六)、平南將軍、廣州刺史となった。廣州において病死し、戴侯と諡された。陶含は自分と交替させるようにしているけれども、官位はやはりかけ離れている。徐寧、字は安期、東海剡の人である。徐羨之の祖父である。最初、桓彝が推舉して、庾亮のために護軍功曹とした時、「海岱の清士だ」と稱讃した。その後、仕えて正員吏部郎、冠軍(將軍)、江州(刺史)、順陽簡侯となった。徐羨之の年少の頃、ある時やつて來て姿を現し、「わしは汝の祖父であるぞ」と名のつて、彼の禍福について戒めた。後に、すべてその言葉どおりとなった。蔡謨、字は道明、陳留考城の人、蔡克の子である。位は揚州刺史に至った。また、司徒を授けられたが受けなかった。永和十二年(三五六)に病死した。

享年七十六。司空を贈られ、文穆公と諡された。考えてみるのに、ここの捕えられなかった叛將というのも、やはりまた鬼である。鬼どもも、互いに相手を抑えられないことは、人間と同様である。人間は、誰しも自然のままでは威服させることができない。仙眞ですら符節を握り鈴を手を持つことによって、これらの鬼どもを拘束するのである。ましてや(徐寧は)同類の鬼を探し求めているのであるから、なおさらのことである」

次の四鎮は、すべて鬼兵萬人を統領している。²⁴中官の者が統領している兵は、數千人を過ぎることはない。四鎮には、泰山君、盧龍公、東越大將軍、南巴侯の四官があり、それぞれ萬人の兵を統領している。(四鎮は、正確に四方にあるわけではない。今、それらの場所はいずれも中國に存在している。周圍も數千里に過ぎない。他方にも澤山あるのに違いない。だから、後で「數百箇所」と言っているのである)²⁵

何曾は南巴侯である。²⁶(何曾、字は穎考、陳郡陽夏の人、何夔の子である。性格は豪膽、しかも博學で孝悌であつた。最初魏の世に仕えて、次第に尙書、征北將軍、司徒に遷り、朗陵公に封ぜられ、晉の太尉、太保、太宰、朗陵公になった。太始四年(二六八)に死んだ。享年八十餘。元公と諡された)

曹仁は盧龍公である。²⁷〔曹仁、字は子孝、魏の武帝（曹操）の従弟である。雄々しく勇壯なことは世に冠絶した。弓馬に熟達し、しばしば征伐に従軍して手柄を立て、位は車騎將軍、都督荆揚益州諸軍事、大將軍になり、陳侯に封ぜられた。黃初四年（二三）に病死した。享年五十六。忠侯と諡された〕

劉陶は東越大將軍である。〔漢、魏、晉の三代に、およそ三人の劉陶がいる。後漢の者は、字は子奇、潁川の人である。靈帝の侍中、尙書令となつたが、後に獄に繋がれて、息を詰めて自殺した。魏の世の者は、字は季治、淮南の人であり、劉曄の子である。才能と辯舌にすぐれていたが、行いに缺けた。曹爽が選部郎に登用した。後に平原太守に轉出したが、景王（司馬師）が誅殺した。晉の初めの者は、字は正興、沛國の人である。永嘉中（三〇七—三一三）に揚州刺史になった。これらの三人のうち、誰が東越大將軍になつてゐるのか分らない。意をもって言えば、多分正興なのであろう〕

荀顗は太山君である。²⁸〔荀顗、字は景倩、荀彧の第四子である。博學で文章は筋が通り、晉王朝に佐命の功があつた。起家して黃門郎となり、尙書僕射、司空、太尉、太傅に累遷した。太始十年（二七四）に死んだ。享年七十。康公と諡された。『蘇韶傳』に言う。〕劉

孔才とは太山公となつて反亂を起こそうとしたが、北帝がすでに誅滅した。孔才とは劉邵である。また、梅顗は豫章太守であつた時、召し出されて太山府君になる夢を見、定められたその日に死んだ。これら二人の位と太山君とがそれぞれ異なつた官職であるのかどうかは分らない。さらに太山令があるともいう〕

一萬人の兵を統領して鎮守する場所もまた數百箇所ある。數千人の兵を統領して鎮守する場所も同様に數百箇所あつて、それぞれ統屬關係にある。いずれも長史と司馬がいる。〔王文度は廣陵に鎮守してゐた時、突然、卒吏がやつて來るのを見た。平北將軍、徐兗二州刺史に召し出そうとのことである。王文度が「私は今もうその官職に就いてゐる」と言つと、卒吏は「これは天上の官職である」と言つて、しばらくして立ち去つた。やがて間もなく迎えがやつて來て、（王文度は）死んだ。そもそも、この天地の範圍内の道理というもの、胸の内だけで思ひはかるべきものではない。この幽界と顯界は全部で三部から成つており、互いに關係しあつてゐる。上部は仙界、中部は人界、下部は鬼界である。人の中の善人は仙となることができ、仙の中の罪を負つてゐる者はあらためて人となる。人の中の惡人はあらためて鬼となる。鬼の中の福德ある者は人に戻る。鬼は人のあり方にのっとり、人は神仙のあり方にのっとり、（三世界を）ぐるぐると行き來し、何事につけ違いがなく、ただ目に見える

か見えないかという僅かの違いがあるに過ぎない。道理に通達した者は、その事を洞察して、もはやそれに關わることはない」

荀顗は顧衆を太山將軍に取り立て、曹洪を司馬に採用し、桓範を長史としている。³⁶「顧衆、字は長始、吳郡の人。顧悌の孫であり、顧祕の子である。晉に仕えて丹陽尹、領軍(將軍)、尙書僕射となり、永和二年(三四六)に死んだ。享年七十三。特進を追贈され、靖伯と諡された。曹洪、字は子廉、魏の武帝の從弟である。家は大金持ちであつたが、けちんぼだつた。しばしば遠征して敵を討ち、驃騎將軍となり、樂城侯に封ぜられた。太和六年(三五〇)に病死した。桓範、字は元則、沛國の人。才能、學問と策略があり、魏の世に仕えて、大司農にまで昇進した。曹爽に味方して殺された」

王逸少(王羲之)³⁷は、ある裁判事件がもとで禁中に繋がれ、すでに五年がたつたが、事件はもうけりがついたとのことである。(つまり王右軍である。(この言葉を)授けた時楊君の名を呼びたくなかつたので、(王羲之のことを)字で言つたのである。逸少は王廙の兄の王曠の子である。風格があり能書であつた。後に會稽太守となつたが、永和十一年(三五五)に郡太守の職を去るに當たつて、父母の靈に二度と仕官しないと誓つた。かねてから許先生(許邁)とつきあひがあり、³⁸いささか神仙の道に想いを寄せていたが、昇平五年辛

酉の年(三六一)になつて死んだ。享年五十九。今は乙丑の年(興寧三年、三六五)であるから、「禁中に繋がれて」五年」というのは、つまり、死後に繋がれたのである。獄に繋がれた事件は、彼の事跡を調べてもその罪狀がはつきりしない。恐らく恨みの氣持を抱いて靈に告げたことが罪となつたのであろう」

蔣濟は南山伯であり、³⁹二千人の兵を統領している。蔣濟、字は子通、楚國平阿の人。漢と魏に仕え、諸官を歴任して太尉にまでなつた。宣王(司馬懿)に従つて曹爽を誅し、その年に死んだ。景侯と諡された。領軍將軍であつた時、彼の妻は、亡き子が太山の伍伯となつており、太廟の西に住む孫阿を太山令として迎えに来るから、自分をもつとまじな所に轉任させてくれるよう孫阿に頼んでほしい、と言う夢を見た。蔣濟はただちにその言葉どおりにしてやり、孫阿もすぐに死んだ。後日、子が再び夢に現れて、「おかげでもう錄事に轉任されました」と言つた。およそこれらの事例のように、鬼官の職位は、あらまし生前の貴賤によつて決まるのではあるが、それと大いに違いが生じることもあり、すべて徳や行いの優劣や功罪の輕重に基づいてあらためて階位づけが行われるのであつて、すべてがすべて生前本來の身分に基づくというわけにはゆかないのである」

王廙は部鬼將軍である。⁽⁴⁾王廙、字は世將、琅瑯の人。王修齡（王胡之）の父である。多才多藝で書に秀で、文章をつづるのがうまく、音樂がよく分かった。位は平南將軍、荊州刺史にまでなった。四十七歳で病死し、驃騎（將軍）を贈られ、康侯と諡された。

これら職位のある者たちについてはあらかた分かるが、職位のない者たちについては、一々知り盡くすことができない。そのような散官の者たちは無数にいるのである。⁽⁵⁾これらすべて後段の所説はやはり荀中候（の言葉）のようである。だからただ（荀彧を）彧とだけ言つて姓を稱さないのである。ところが荀顗については繰り返し姓が言われているのは、恐らく周顗と區別するためなのであろう。以上に述べられているのは、大部分が近代の人である。ごたごたと人事の交替があり、かねて記憶しやすかったためなのであろう。（夏、商、周の）三代は遙か昔のことだが、兩漢、魏晉の時代には、確かに才能に秀でた一群の名士が現れた。たとえば劉向、董仲舒、揚雄、張衡、蔡邕、鄭玄、王弼、阮（籍）、嵇（康）といった人々であつて、いずれもみなただ空位とか散官とかであるはずはない。術數家としては、たとえば管（輅）や郭（璞）がおり、やはり仙界での際立った經歷は知られないが、きつとおおむねは三官に隸屬せず、むしろ仙官の使いの任務に當てられているのであろう。前に帝王について論じている内容にも不釣合いな所がある。魏の文帝や晉の武帝は天

命を受けた君主だったのに現れず、かえつて魏の武帝や晉の宣帝のことが述べられている。孫權は劉備と同格であるはずなのに、やはり神仙家の書籍に記載されていない。これらの人々はいずれもみな、國の基礎を築いたその功績が、人民から推戴されて初代皇帝の位に就いたことよりも高いからである。王位を繼承した君主たちについて⁽⁶⁾はまったく記載がない。

右は前後二度にわたつて授けられた事柄であり、すべて楊君が教えを授かつたものである。書き直されているところが多い。また許掾が書寫し直したものもある。兩本ともまったく違いはなく、ともにそれぞれ一卷仕立てとなつて續いているが、全體はここで終わりである。

(1) 漢高祖：『眞靈位業圖』第七左位「南明公召爽、賓友漢高祖」。また、『史記』高祖本紀および『漢書』高帝紀を参照。

(2) 晉宣帝：『眞靈位業圖』第七左位「西明公領北帝師周文王、賓友晉宣帝」。また、『晉書』宣帝紀を参照。

(3) 荀彧：『眞靈位業圖』第七左位「北明公吳季札、賓友荀彧」。また、『三國志』卷一〇荀彧傳を参照。

(4) 宿運：『無上祕要』卷三二遇經宿分品「若有金書東華、得見此

- 文、則宿運應仙、…右出洞眞紫度炎光神元經」。
- (5) 惠救 『眞誥』卷六葉九裏「夫學道者、行陰德莫大於施惠解救、志莫大於守身奉道」。
- (6) 罪福 『周氏冥通記』卷四「八日、復夢見韓侯紫微楊君定錄等多爲論性命之致、因緣罪福之源、若疏此可三四紙許」。
- (7) 受報 『無上祕要』卷七四啓志願品「或致見世收福、命終受報、…右出洞玄請問經」。
- (8) 庾元規… 『眞靈位業圖』第七左位「右禁監侍帝晨庾元規、注「名亮、晉時位比侍中、領右衛、又云元規前爲中衛大將軍」。また、『晉書』卷七三庾亮傳を参照。
- (9) 郭長翔 『眞靈位業圖』第七左位「長史虞翻」、注「字長翔、武昌人、庾亮江州引爲上佐、不就」。また、『晉書』卷九四隱逸郭翻傳を参照。
- (10) 華歆 『眞靈位業圖』第七左位「司馬馮懷、華歆」。また、『三國志』卷一三華歆傳を参照。
- (11) 辛玄子所說 『眞誥』卷一六葉八裏を参照。
- (12) 未病時、乃獨見陶侃乘輿來讓之… 『冤魂志』(『法苑珠林』卷九一)「晉時庾亮誅陶稱、後咸康五年冬節、會文武數十人、忽然悉起、向階拜揖、庾驚問故、竝云陶公來、陶公是稱父侃也、…陶公謂庾曰、老僕舉君自代、不圖此恩、反戮其孤、故來相問、陶稱何罪、身已得訟於帝矣、庾不得一言、遂寢疾、入年一日死」。
- (13) 亡後與其兒靈語云… 『太平廣記』卷三二「晉郭翻、字長翔、武昌人、敬言之弟子也、徵聘不起、亡數日、其少子忽如中惡狀、不復識人、作靈語、音聲如其父、多知陰世、所問皆答、而昔時庾亮欲取爲上佐、不就、家問曰、君生有令德、沒爲神明、今豈有官職也、答曰、我本無仕進之志、以庾公欲見取、不願、放得脫、今復爲羈繫、不得從初願、故爾戚戚也、問庾今何官、答云、爲天所用、作撫軍大將軍、現居東海之東、統領神兵、取吾爲司馬、本欲取謝仁祖爲之、選官以爲資望未足、且蔣大侯先取爲都尉、是以不能、問陶太尉何官、答云、陶、辛苦不可言、方在罪謫之候、過此、大得敘用也、又問、王丞相今何職、答曰、王公爲尚書郎、大屈事、更萬機、位雖不及生時、而貴勢無異也」。
- (14) 謝仁祖 『晉書』卷七九謝尚傳を参照。
- (15) 王長豫 『幽明錄』(『法苑珠林』卷九五)「魏中書郎王長豫有美名、父丞相至所珍愛、…(蔣侯)謂王曰、中書命盡、非可救者、言終不見」。また、『晉書』卷六五王悅傳を参照。
- (16) 孔文學… 『眞靈位業圖』第七左位「後中衛大將軍孔文學」、注「名融」。また、『後漢書』列傳六〇孔融傳を参照。
- (17) 張繡… 『眞靈位業圖』第七左位「司馬張繡」、注「後漢將軍」。また、『三國志』卷八張繡傳を参照。
- (18) 唐固… 『眞靈位業圖』第七左位「長史唐固」、注「爲吳尚書」。

また、『三國志』卷五三唐固傳を参照。

- (19) 陶侃…『眞靈位業圖』第七右位「西河侯陶侃」、注「字士行、亦領兵數千」。また、『晉書』卷六六陶侃傳を参照。

- (20) 滕含…『晉書』卷五七滕脩傳を参照。

- (21) 徐寧…『眞靈位業圖』第七右位「長史」、注「先用徐寧被彈、今用蔡謨字道明、晉司徒」。また、『晉書』卷七四徐寧傳を参照。

- (22) 蔡謨…前注の『眞靈位業圖』および『晉書』卷七七蔡謨傳を参照。

- (23) 郭長翔靈語云…注(13)参照。

- (24) 四鎮皆領鬼兵萬人…『眞靈位業圖』第七右位「泰山君荀顗…盧龍公曹仁…南巴侯何曾…東越大將軍劉陶、右號爲四鎮、各領鬼兵萬人、各有長馬、復有小鎮數百、各領鬼兵數千人」。

- (25) 後言數百處…『眞誥』卷一六葉四表を参照。

- (26) 何曾…注(24)および『晉書』卷三三何曾傳を参照。

- (27) 曹仁…注(24)および『三國志』卷九曹仁傳を参照。

- (28) 後漢者…『後漢書』列傳四七劉陶傳を参照。

- (29) 魏世者…『三國志』卷一四劉曄傳を参照。

- (30) 晉初者…『晉書』卷五二華譚傳「揚州刺史劉陶、素與譚不善、因法收譚、下壽陽獄」。

- (31) 荀顗…注(24)および『晉書』卷三九荀顗傳を参照。

- (32) 蘇韶傳云…王隱『晉書』(『太平廣記』卷二一九)を参照。

- (33) 王文度…『晉書』卷七五王坦之傳を参照。

- (34) 幽顯…『眞誥』卷一七葉一九表注「世中多不愜信幽顯」。

- (35) 鬼法人、人法僊…『老子』第二十五章「人法地、地法天、天法道、道法自然」。

- (36) 顧衆、曹洪、桓範…『眞靈位業圖』第七右位「將軍顧衆(注：字長始、晉丹陽尹僕射)、長史桓範(注：字元則)、司馬曹洪(注：魏武帝操弟、字子廉、又云先用賈誼、前漢人)」。

- (37) 王逸少…『眞靈位業圖』第七右位に見える。また、『晉書』卷八〇王羲之傳を参照。

- (38) 先與許先生周旋…『眞誥』卷二〇葉七裏「先生名邁、字叔玄、小名映、…與王右軍父子周旋」。

- (39) 蔣濟…『眞靈位業圖』第七右位「南山伯蔣濟」、注「字子通、魏太尉」。また、『三國志』卷一四蔣濟傳および『搜神記』卷一六を参照。

- (40) 王廙…『眞靈位業圖』第七右位「部鬼將軍王廙」、注「字世將、晉時荊州刺史」。また、『晉書』卷七六王廙傳を参照。

- (41) 此皆後段所說…『眞誥』卷一五葉九表「其餘多不能復一二、蓋鬼神之事不足示於世也、荀公言也」。

- (42) 樂推…『老子』第六十六章「是以聖人處上而民不重、處前而民

不害、是以天下樂推而不厭、以其不爭、故天下莫能與之爭」。

(43) 繼體守文之君 『史記』外戚世家「自古受命帝王及繼體守文之君、非獨內德茂也、蓋亦有外戚之助焉」、索隱「按繼體謂非創業之主、而是嫡子繼先帝之正體而立者也、守文猶守法也、謂非受命創制之君、但守先帝法度爲之主耳」。

許肇今爲東明公右帥晨、帥晨之任如世間中書監。〈許肇字子阿、卽長史七代祖司徒敬也、雖有賑救之功而非陰德、故未蒙受化、既福流後葉、方使上拔、然後爲九宮之仙耳、此帥晨之官、四明亦竝應有之〉

邵爽爲東明公、云行上補九宮右保公。〈前云邵爲南明公、今乃是東、若非名號之誤、則東南之差、既尋當遷擢、則必應是啓、中君脫爾云邵耳、亦可是有甘棠之德、故不限其年月耳〉

右七月十六日夜、定錄君所告。

此二條別受、不關鄭記部。

許肇は今東明公の右帥晨である。帥晨の任務は、俗世間の中書監のようなものである。〈許肇、字は子阿、つまり許長史の七代前の

祖先の司徒許敬である。賑恤し救済した功德はあったけれども陰德ではなかった。だから、まだ鍊化を受けてはいない。だが、福德が子孫に流れている以上、きっと引き上げられて、そのうえで九宮の仙官となることであろう。この帥晨という官職は、四明公のいずれにもきつと存在するのである〉

邵爽は東明公である。いずれ引き上げられて九宮右保公に補任されるであろうとのことである。〈前には「邵爽は南明公である」と言われていたのに、今ここでは東（明公）である。もし名前の誤りでなければ、東と南がくい違ってゐる。やがて仙界に遷されて（九宮に）拔擢されるというからには、きつとかの夏啓なのである。茅中君がうっかり邵と言ったのである。あるいはまた（邵爽には）甘棠にまで及ぶ徳があつたが故に、（昇進の）年月に縛られることがないのかも知れない〉

右は七月十六日の夜に、定錄君が告げられたもの。

この二條は別の詰授であつて、『鄭都宮記』の部類とは關係がない。

(1) 前云邵爲南明公 『眞詰』卷一五葉五裏を參照。

(2) 不限其年月 『眞話』卷一五葉五表に「按司命說格、在位二十四百年、得上補九宮」とあるのを参照。

① 辛玄子自敘并詩（此下剪除半行去、不知當是何字也）

玄子字延期、隴西定谷人、漢明帝時諫議大夫上洛雲中趙國三郡太守辛隱之子（辛隱字某某、檢外書未得此位業、按諸辛舊關隴豪族、前漢有辛慶忌、後漢有辛繕、竝高直之士、辛毗是其七世孫、則隱是毗之八世祖、但一百四五十年中而已八世、嫌其太促耳）

玄子少好道、遵奉法戒、至心苦行、日中菜食、鍊形守精、不遵外物、州府辟聘、一無降就、遊山林、棄世風塵、志願憑子晉於緱岑、侶陵陽於步玄、故改名爲玄子、而自字延期矣、

不圖先世之多愆、殃流子孫、結書刊於帝簡、運沈逮於後昆、享年不永、遂沒命於長梁之津、西王母見我苦行、鄴都北帝愍我道心、告敕司命、傳檄三官、攝取形骸、還魂復眞、使我頤胎、位爲靈神、於今二百餘年矣（溺水致命、事同王衍之女、恐即此形骸皆不復得生、竝是反質胎神耳、雖有道心而無道業、故不得便居仙品也、近得度名南宮、定策朱陵、藏精待時、方列爲仙、而大帝今且見差領東海侯代庾生、又見選補禁元中郎將、爲吳越鬼神之司、王事靡盬、斯亦勞矣、若夫冠屨佩青、蕭條羽袂、鳴鈴仙階、轉轡瓊室者、雖實素心而卒日也、恨未便得與玄眞併羅、同晏瑤壖、察鈞韶之遺音、掇靈芝之平幽

峯、振翠衣於九霄、舞玄關於十方耳、方當攝御群鬼、領理是非、處衆穢之中間、聲交於邪魔之紛紜、事與道德爲閭、眼與盱眞爲疎、（熟）「孰」比熙叙於玄境、逍遙於太初哉、夫同聲偕合、物亦類分、相聞邈矣、係景委積、是以名書上清、丹錄玄殖、有道之氣、與靈合德、託體高輝、故來相從、今贈詩三篇、以敘推情之至也、

其辭曰（楊君既爲吳越司命、董統鬼神、玄子職隸、方應相（開）「關」、故先造以陳情也、尋鬼書既異、不應是自運筆、亦當口受疏之耳、

④ 曠昔入冥鄉、順駕應靈招、神隨空無散、忝與慶雲消、形非明玉質、玄匠安能彫、蹀足吟幽唱、仰首翫鳴條、林室有逸歡、絕此軒外交、遺景附圓曜、嘉音何寥寥（此篇敘事迹之本志也）、

寂通寄興感、玄烝攝動音、高輪雖參差、萬仞故來尋、蕭蕭研道子、合神契靈衿、委順浪世化、心標竊窈林、同期理外遊、相與靜東（衣）「岑」（此篇申情寄之來緣也）、

命駕廣鄴阿、逸跡超冥鄉、空中自有物、有中亦無常、悟言有無際、相與會濛梁、目擊玄解了、鬼神理自忘。（此篇論人鬼之幽致也）

玄子云、「魏時辛毗字佐治、是七世之孫也、漢建武一年、從隴西徙居潁川陽翟縣、毗仕魏世、使持節大將軍司馬宣王軍帥衛尉、封侯、毗子名敞、爲河內太守太常卿」。（所說竝與魏書同也）

玄子云、「庾生者、晉庾太尉也、北帝往用爲撫東將軍、後又轉爲東海侯、今又用爲鄧臺侍帝晨右禁監、近取馮懷爲司馬、〔侍〕帝晨如今世侍中、右禁監如世右衛將軍而甚重〔如說與前大異、當是後遷侍中領衛、便是勝中〔懷〕〔衛〕將軍也、帝晨無司馬、此是右禁之職耳、馮〔衛〕〔懷〕字祖思、長樂人、晉成帝時爲太常散騎常侍、卒、追贈金紫光祿階也、

左禁監是謝幼輿、以鄧嶽爲司馬〔此則准左衛將軍也、幼輿名鯤、即謝安伯謝尚之父也、爲王敦長史豫章郡太守、年五十三病亡、贈太常、諡康侯、鄧嶽已在前、而云代周顗爲司馬帥耳、

鄧南昌公先爲北帝南朱陽大門靈關侯、後〔天〕〔又〕轉爲高明司直、昔坐與劉慶孫爭免官、今始當復職也、高明司直如世尚書僕射〔前云鄧爲南門亭長、亭長恐即靈關之職、既以周撫代、故得轉司直、而郭長翔靈語亦云、〔鄧公甚屈爲大門亭長、舊選常用州征二千石、未有三公作也〕、如此所以得速遷、劉慶孫名輿、中山人、劉越石之兄也、才識辯贍、爲東海王越長史、永嘉中、病指疽而亡、年四十七、贈驃騎將軍、諡眞侯也、

何次道今在南宮承華臺中、已得受書、行至南獄中、此人在世、施惠之功甚多、故早得返形〔前荀公說何始得還朱火、今言已受書、則玄子所受後成在後耳〕、

周伯仁近見用爲西明公中都護、中都護如世太傅之官也、坐選鄧攸

不平、左降爲中護、中護准少傅〕。〔周本司命帥、當得程遐代而遷此官也、鄧攸字伯道、平陽襄陵人、仕晉爲太子洗馬吏部郎河東太守、爲石勒所沒、後得還江東、爲吳郡太守吏部尚書、自咸和元年病亡、贈光祿、攸從胡叛還時、乃棄其已兒、自攜亡弟之子來渡江、遂自無兒、絕後嗣、謝安歎曰、「天道無知、令鄧伯道無兒」

右辛玄子所言、說冥中事亦多矣、今粗書其麤者耳、不復一一具說。〔此記雖玄子所受、而雜有楊君之辭也、楊書不存、今有掾寫本耳、此紙後又被剪缺、恐事亦未必盡

(1) この段、『雲笈七籤』卷九六辛玄子詩に同文が見える。

(2) 愈本が「熟」を「孰」に作るのに従う。

(3) 愈本が「開」を「關」に作るのに従う。

(4) 以下の詩、『雲笈七籤』卷九六辛玄子詩および『道跡靈仙記』に見える。

(5) 官本が「衣」を「岑」に作るのに従う。

(6) 愈本が「侍」を「侍」に作るのに従う。

(7) 愈本が「懷」を「衛」に作るのに従う。

(8) 愈本が「衛」を「懷」に作るのに従う。

(9) 愈本が「天」を「又」に作るのに従う。

辛玄子の自叙ならびに詩（これ以下、半行分が切り取られている。それが一體どんな文字であったのか分からない）

玄子、字は延期、隴西定谷の人である。（後）漢の明帝の世の諫議大夫であり上洛、雲中、趙國三郡太守であった辛隱の子である（辛隱、字は某某。世俗の書物を檢索してもこのような官位、事跡は見當たらない。按ずるに、辛氏一族はもともと關隴の豪族であつて、前漢には辛慶忌^①、後漢には辛繕^②があり、そろつて高潔廉直の人士であつた。辛毗^③は（辛玄子の）七代の孫であるから、辛隱は辛毗の八代の祖先である。だが、百四、五十年中に八世代とは、あまりにもつまり過ぎてゐるのが氣にかかる）。

玄子^{それがし}は若い頃から仙道を好み、教戒をしっかりと守つた。心を盡くして苦行し、正午に菜食し、肉體を鍊成し精氣をしっかりと保つて、世俗のものごとを構いつけなかつた。州や幕府から召されても、一度たりとて志を曲げて職に就くことはなかつた。山林に遊び、世俗の穢れを棄て、王子晉に従つて緱氏山の峰に遊び^④、また陵陽子明と連れだつて幽玄の境に歩を進めたいと望んだ。かくして名を玄子と改め、自ら延期を字としたのである。

ところが豫期せぬことに、私の祖先にさまざまな罪過があつて、まがごとが子孫へと流れ、結ばれた災いが上帝の簡札に刻まれ、運

命が衰えて子孫に及び、享年は長からず、かくて長梁の津で命を落とすこととなつた。（しかし）西王母が私の苦行を見そなわし、鄧都の北帝が道を求める私の心を憐れんで下さつて、司命に敕命して檄文を三官に傳え、亡骸を回收させ、魂を取り戻して眞氣を復活させ、私に肉體のもとを養わせ、靈神の位に就かせてくれた。今では二百年餘りになる（水に溺れて命を落としたことは、王衍の娘と同様である^⑤。恐らくこうした亡骸はどれも蘇生できないのであり、いづれも胎神に肉體となるべきものを戻すのである。道を求める心があつても道にかなつた行爲が伴わなかつたので、すぐには仙官の位に就けなかつたのである）。近ごろ南宮に名前を登録され、朱陵宮に書類が整えられることができて、精氣を藏して機會がやつて來るのを待ち、今やつと仙位に列せられた。そして大帝から今ひとまず差し遣わされ、東海侯を兼領して庾生と交替し、さらに禁元中郎將に選拔補任され、吳越地方の鬼神の司となつてゐる。公務は手が抜けず、なかなか大變だ。

いったい、晨冠をかぶり青綬を帯び、さっぱりとして羽の袂を翻し、神仙の階に鈴を鳴らし、幌車を瓊室に向かわせることは、本當にかねてからの願いとして日ごと明け暮れては來たが、殘念なことに、玄眞たちと肩を並べ、ともに崑崙山の墉臺で安らぎ、天上の音樂の餘韻を聞き分け、幽玄の峰で靈芝を摘み、九霄のかなたに翠の衣を振るつて、玄妙の翼を十方に舞わす、というまでにはまだ至らな

い。今や群鬼たちを取り抑え、是非に裁きをつけ、さまさまの汚穢のただ中に身を置き、ざわめく邪惡な魔物どもの中に聲は飛び交つて、行いは道徳と乖離し、眼は眞を目にすることから疎遠となつてしまつた。玄境にやわらいで寂漠とし、太初の世界に逍遙することなど、とてもできぬありさまだ。そもそも、同聲のものはびたりと合致し、物もまた類ごとに分かれるもの。あなたの名聲を遙か遠くから聞き、期待の氣持は積もり重なっています。かくして上清の天界に名が書され、赤き名簿が玄妙に備えられ、道になつた氣は神靈と徳を一つにする。そのように燦然と輝くあなたと一體にならうとして、やつて來てつき従うのです。今、三篇の詩を贈つて、あなたに寄せる思いのありつたけを表現することとします。

その言葉は次のとおり。〈楊君は吳越の司命となり鬼神を統べ治めることになつてゐるので、玄子はその部下となつてきつと關係を持つたろうから、先立つてやつて來て思いを述べたのである。考えてみるのに、鬼書^①は一般の書體とは違ふから、自ら筆をとつたはずはなく、やはり口授して書きとらせたのに違ひない〉

その昔、冥郷に入り、

車の赴くままに神靈の招きに應じた。

神は空無とともに消散し、

氣はめでたき雲とともに消え去つた。

私の體は明玉の質ではないので、

不思議の工匠^②はどうして彫り刻むことができたのか。

足踏みをして幽冥の歌を吟じ、^③

首をもたげては風に鳴る枝の音を賞玩する。^④

林中の館には逸樂があり、

屋外の交わりとは斷絶している。

私のかそけき景^⑤を太陽にたぐえるあなたへ寄せようとするものの、

佳き訪れの何と寥々たることか。^⑥〈この一篇は、それまでの事跡に

おける本來の志を述べる〉

靜寂なる感通に心の感興^⑦を託し、

根元の一氣の中にすべての雜音が收めとられる。

高貴な車が入れ替わり立ち替わりやつて來るではあろうが、

私は遙かな高みからわざわざ訪ねてやつて來たのだ。

さびさびとした修道の人よ、

精神は一つになつて神靈の心とびたりとかなう。

世俗の轉變^⑧に身をまかせて波打たれていても、

心はひっそりとした林に高く掲げている。

ともに常理を超えたところに遊び、

あいともに東の嶺で靜かに安らごうではないか。〈この一篇は、思

いを寄せるもとなった因縁について述べる

廣大な鄴都の丘で車の支度を整え、

ひと飛びで冥郷を超え出る。

空の中には自ずとものがあるが、

有の中にはやはり常なるものはない。

有と無の際で語らい、

あいともに濛梁で會うとしよう。

一目見て玄妙に了解し、

鬼神のことわりなど自ずと忘れてしまふ。〈この一篇は、人と鬼の奥深い趣を論する〉

玄子は言った。「魏の時の辛毗、字は佐治、これは七世の孫である。漢の建武一年（二五）に、隴西から居を潁川の陽翟縣に移した。毗は魏の世に仕えて、使持節大將軍司馬宣王（司馬懿）の軍帥、衛尉となり、侯に封ぜられた。毗の子、名は敏は、河内太守、太常卿となった」。〈言うところはみな『魏書』と同じである〉

玄子は言った。「庾生とは、晉の庾太尉のことである。北帝は先に撫東將軍に起用したが、後にまた東海侯に轉任し、今はさらに鄴臺侍帝晨右禁監に任用されている。近ごろ馮懷を司馬に採用した。侍

帝晨は今の世の侍中のようなものであり、右禁監は世俗の右衛將軍のようなもので、職務は甚だ重い（ここで言っていることは、前とは大きく異なる）。きつと後に侍中（侍帝晨）に遷つて、右衛將軍を領し、だから中衛將軍より勝るのである。侍帝晨には司馬はない。これは右禁監の官職である。馮懷、字は祖思、長樂の人である。晉の成帝の時、太常、散騎常侍となった。死後、金紫光祿の位階を追贈された。

左禁監は謝幼輿である。鄧嶽を司馬としている（これは左衛將軍になぞらえられる。幼輿の名は鯉、つまり謝安の伯父、謝尚の父である。王敦の長史、豫章郡の太守となった。五十三歳で病死した。太常を贈られ、康侯と諡された。鄧嶽はすでに前に見えたが、そこでは「周顗に代わつて司馬帥となった」とある。

郗南昌公は先に北帝の南朱陽大門靈關侯となったが、後にまた高明司直に轉任した。昔、劉慶孫と争つた罪で免官となったが、今やつと復職することになった。高明司直は、世俗の尙書僕射のようなものである（前には「郗は南門亭長である」とあるが、亭長は恐らく靈關侯の職なのであろう。その職は周撫に交替したので、高明司直に轉任できたのである。そこで郭長翔の『靈語』にも次のように言っている。「郗公は随分と不當に扱われて天門亭長に甘んじている。舊來の登用では常に（在世中の）州刺史や四征將軍や二千石の官職の者を採用し、三公の者がなつたことはない」。そういうわけで、速や

かな昇進を遂げたのである。劉慶孫、名は輿、中山の人で、劉越石の兄である。才識にすぐれ、辯舌が巧みで、東海王越の長史となった。永嘉中(三〇七—三一三)に指のはれものを病んで死んだ。享年四十七。驃騎將軍を贈られ、眞侯と諡された。

何次道は今は南宮の承華臺中にいるが、すでに辭令を授かつており、もうすぐ南嶽中へ行くことになっている。この人は生前人々に恵み施す功德がとても多かったので、早々と肉體を取り戻す^⑩ことができたのである。〈前のところで荀公は「何はようやく朱火宮に戻ることができた」と言っているが、ここには「すでに辭令を授かった」とあるから、玄子の口授の方が遅くに成ったものであり、後に置いてあるのである〉

周伯仁は近ごろ西明公の中都護に起用された。中都護は、世俗の太傅の官のようなものである。鄧攸^⑪の選拔が不公平であつたために罪せられ、中護に左遷された。中護は少傅になぞらえられる。〈周はもと司命帥であつたが、きつと程遐と交替できたのでこの官に選つたのであろう。鄧攸、字は伯道、平陽襄陵の人である。晉に仕えて太子洗馬、吏部郎、河東太守となつた。石勒に捕えられたが、その後江南へ移ることができて、吳郡太守、吏部尚書となつた。咸和元年(三二六)に病死した。光祿(大夫)を贈られた。鄧攸は胡のものとから逃げ歸つて來る際に、わが子を棄て、自ら亡き弟の子を攜えて長江を渡つた。かくして自分には子供がなくなり、後嗣が絶たれ

ることとなつた。謝安は歎じて言つた。「天道には見識がない、鄧伯道に子供を亡くさせてしまうとは」

右は辛玄子の言つたこと。幽冥界の事についてやはり澤山述べている。今そのあらましを大ざっぱに書きつけておく。一々つぶさに述べることはしない。〈この記述は玄子が口授したものであるが、楊君の言葉も混じっている。楊君の書は残つておらず、今は許掾の寫本があるのみである。この紙の後にはまたもや切り取られている。恐らく事柄は必ずしもまだ盡くされてはいないのであろう〉

(1) 辛慶忌 『漢書』卷六九辛慶忌傳を参照。

(2) 辛緒 『三輔決錄注』(『藝文類聚』卷九〇)を参照。

(3) 辛毗 『三國志』卷二五辛毗傳を参照。

(4) 憑子晉於緱岑 『列仙傳』王子喬「王子喬者、周靈王太子晉也、好吹笙、作鳳凰鳴、遊伊洛之間、道士浮丘公接以上嵩高山三十餘年、後求之於山上、見栢(桓)良曰、告我家、七月七日

待我於緱氏山嶺、至時、果乘白鶴駐山頭、望之不得到、舉手謝時人、數日而去、亦立祠於緱氏山下及嵩高首焉」。

(5) 侶陵陽於步玄 『列仙傳』陵陽子明「陵陽子明者、銓鄉人也、好釣魚於旋溪、釣得白龍、子明懼、解鉤拜而放之、後得白魚、

腹中有書、教子明服食之法、子明遂上黃山、採五石脂、沸水而服之、三年、龍來迎去、止陵陽山上百餘年、…」。

- (6) 殃流子孫 『抱朴子』微旨「若算紀未盡而自死者、皆殃及子孫也」。

- (7) 帝簡 『無上祕要』卷一六衆聖本迹品下「即奏名四天、刻書帝簡、壽同四天之人、九年飛行上昇天宮、…右出洞眞外國放品經」。

- (8) 還魂 『太上黃庭外景經』中部經第二(『雲笈七籤』卷一一)「魂欲上天魄入淵、還魂返魄道自然」。

- (9) 溺水致命、事同王衍之女 『眞誥』卷一三葉六表を参照。

- (10) 胎神 『三洞珠囊』卷六立功禁忌品「或令人三魂七魄流競、或胎神所憎、三官受惡之時也。『上清黃庭內景經』務成子注敘(『雲笈七籤』卷一一)「胎神即明堂三老君、所謂胎靈大神也、此最爲黃庭之本」。

- (11) 藏精 『太上黃庭外景經』中部經第二(『雲笈七籤』卷一一)「服天順地合藏精、七日之午迴相合」。

- (12) 王事靡盬 『毛詩』小雅四牡「豈不懷歸、王事靡盬、我心傷悲」、毛傳「盬、不堅固也、…靡盬者、公義也」。

- (13) 楊君既爲吳越司命、董統鬼神 『眞誥』卷二〇葉一一表「楊君名羲、成帝咸和五年庚寅歲九月生、…得眞職任、略如九華所言、當輔佐東華爲司命之任、董司吳越神靈人鬼、一皆關攝之」。

同卷二葉八表「於是眞妃乃笑、良久、見授書此曰、明君夷質虛閑、祕構玉朗、…必三事大夫、侍晨帝躬、高佐四輔、承制聖君、理生斷死、賞罰鬼神、攝命千靈、封山召雲、主察陰陽之和氣、而加爲吳越鬼神之君也、…三官中常有謗謠云、楊安大君、董眞命神、正我等之謂耳」。

- (14) 鬼書 『雲笈七籤』卷七·八顯「八顯者、一曰天書、八會是也、…六曰鬼書、雜體微味、非人所解者也、…」。『太平廣記』卷三二一「晉郭翻、字長翔、…靈語兒、求紙筆、欲作書與親舊、捉筆以命兒書之、皆橫行似胡書、已成一紙、曰、此是鬼書、人莫能識」。

- (15) 玄匠 朱廣之「疑夷夏論」(『弘明集』卷七)「誠欲審方玄匠、聊申一往耳」。

- (16) 蹀足吟幽唱 『淮南子』道應「惠孟見宋康王、蹀足警歎疾言曰、寡人所說者、勇有功也、不說爲仁義者也、客將何以教寡人」。釋僧敏「戎華論」(『弘明集』卷七)「故乃跡臨西土、協同幽唱」。

- (17) 仰首翫鳴條 曹植「遠遊詩」(『藝文類聚』卷七八)「瓊蕊可療飢、仰首漱朝霞」。陸機「猛虎行」(『文選』卷二八)「崇雲臨岸駭、鳴條隨風吟」。

- (18) 嘉音何寥寥 謝靈運「酬從弟惠連詩」(『文選』卷二五)「傾想遲嘉音、果枉濟江篇」。潘岳「寡婦賦」(『文選』卷二六)「仰神

- 宇之寥寥兮、瞻靈衣之披披」。
- (19) 興感 「正誣論」(『弘明集』卷一)「夫人情從所觀而興感、故聞鼓鼙之音、觀羽麾之象、則思將帥之臣」。
- (20) 世化 『雲笈七籤』卷八五太極真人飛仙寶劍上經敘「或欲長觀世化、憚仙官之劬勞也」。
- (21) 逸跡 『抱朴子』名實「頓雲禽於千仞、騁逸迹以追風」。
- (22) 相與會濠梁 『莊子』秋水「莊子與惠子遊於濠梁之上、莊子曰、儻魚出游從容、是魚之樂也、惠子曰、子非魚、安知魚之樂、莊子曰、子非我、安知我不知魚之樂、惠子曰、我非子、固不知子矣、子固非魚也、子之不知魚之樂、全矣、莊子曰、請循其本、子曰、汝安知魚樂云者、既已知吾知之而問我、我知之濠上也」。
- (23) 解了 『淨住子淨行法門』斷絕疑惑門(『廣弘明集』卷二七下)「由其無明惑、故妄起顛倒、不能解了三世業相」、『老君存思圖』(『雲笈七籤』卷四三)「坐臥無寧、急存久行、行之檢身、心存口誦、解了無疑、以定三業、三業既定、衆災自消」。
- (24) 馮懷：『眞靈位業圖』第七左位「司馬馮懷」、注「字相思、晉太常」、『世說新語』文學「莊子逍遙篇、舊是難處、…支道林在白馬寺中、將馮太常共語」、注「馮氏譜曰、馮懷字祖思、長樂人、歷太常護國將軍」。
- (25) 如說與前大異 『眞誥』卷一六葉一裏を参照。
- (26) 左禁監是謝幼輿 『眞靈位業圖』第七左位「右禁監謝幼輿」、注「名鯤、晉官太常」。また、『晉書』卷四九謝鯤傳を参照。
- (27) 鄧嶽已在前 『眞誥』卷一五葉六表を参照。
- (28) 劉慶孫 『眞靈位業圖』第七右位に見える。また、『晉書』卷六二劉輿傳を参照。
- (29) 前云郗爲南門亭長 『眞誥』卷一五葉六裏を参照。
- (30) 返形 『元始無量度人上品妙經四注』卷一「世人受誦、則延壽長年、後皆得作尸解之道、魂神暫滅、不經地獄、即得反形、游行太空」。
- (31) 前荀公說何始得還朱火 『眞誥』卷一五葉八裏を参照。
- (32) 鄧攸 『眞靈位業圖』第七右位に見える。また、『晉書』卷九〇良吏鄧攸傳を参照。
- 夫至忠至孝之人、既終、皆受書爲地下主者、一百四十年乃得受下仙之教、授以大道、從此漸進、得補仙官、一百四十年聽一試進也(此地下主者亦即是洞中所記李^②「東」等者、非別鬼官復爲主者也、一百四十年一進、便入第二等、給仙人使、乃得稍受道教耳)、至孝者能感激鬼神、使百鳥山獸巡其墳塋也、至忠者能公犯直心、精貫白日、或剖藏煞身、以激其君者也、比于今在戎山、李善今在少室、有得此變鍊者甚多、舉此二人爲標耳。(比于剖心、可爲至忠、至

於孝子感靈者、亦復不少、而今止舉李善、如似不類、當李善之地、乃可涉忠而非孝迹也、恐以其能存李元後胤、使獲繼嗣、因此以成其孝、功所不論耳、若程嬰〔公〕孫杵臼亦應在孝品矣、李善字次遜、本南陽育陽李元家奴、漢建武中、元家人之死盡而巨富、唯〔善〕〔存〕一孤兒名續祖、尚在孩抱、諸奴復共欲煞之而分其〔才〕〔財〕、善乃密負續祖、逃瑕丘山中、哺養乳、乃爲生計、至十歲餘、出告縣令鍾離意、意於是表薦、悉收其群奴煞之、而立續祖爲家、光武拜善爲太子舍人、後遷日南九江太守、其事迹正是如此、而鍾離傳所說少復有異耳〕

夫有上聖之德、既終、皆受三官書爲地下主者、一千年乃轉補三官之五帝、或爲東西南北明公、以治鬼神、復一千四百年乃得遊行太清、爲九宮之中仙也。〔以年限言之、是聖德更不及忠孝也、計此終後凡二千四百年乃得入仙階、益知前應是夏啓非召公明矣、季子亡後、至晉興寧始八百八十許、未滿千歲、不知那已爲明公耶、鄴都中所記都无頓說五帝者、恐此如北帝之例復有五耶、所以後言英雄者爲五帝上相、而北帝有秦皇矣、又蘇韶傳云揚雄張〔衡〕〔衡〕等爲五帝、揚張既非上聖、爵位亦卑、不應得與炎帝爲儔、復當或有小五帝不論耳、揚張之事亦或不然也〕

夫有蕭邈之才、有絕衆之望、養其浩然、不營榮貴者、既終、受三官

書爲善爽之鬼、四百年乃得爲地下主者、從此以進、以三百年爲一階。〔此事是高士逸民之品也、從主者以去、是入仙階、不復爲鬼官耳〕

夫有至貞至廉之才者、既終、受書爲三官清鬼、二百八十年乃得爲地下主者、從此以漸得進補仙官、以二百八十年爲一階耳〔此格復是小勝高士、而年數倍於忠孝、故知忠孝貞廉爲行之最耳〕、

夫至廉者、不食非己之食、不衣非己之布帛、王陽有似也〔此目應以夷齊爲標、高士中亦多此例、而今乃舉王陽、當年淳德自然、非故爲皎潔者也、王陽、先漢人也〕、

夫至貞者、紛華不能散其正炁、萬乘不能激其名操也、男言之、務光之行有似矣、女言之、宋金漂女是也。〔貞者非止不淫於色、亦是悛平榮利也、務光辭湯讓、而負石投河、宋女恐是子胥所逢浣〔紗〕於漂水之陽者、後既投金以報之、故謂之金漂、漂字或應作〔漂〕〔漂〕字耳〕

先世有功在三官、流逮後嗣、或易世鍊化、改氏更生者、此七世陰德、根葉相及也、既終、當遺腳一骨以歸三官、餘骨隨身而遷也、男留〔在〕〔左〕、女留右、皆受書爲地下主者、二百八十年乃得進受地仙之道矣、臨終之日、視其形如生人之肉、脫死之時、尸不強直、足指不青、手足不皺者、謂之先有德行、自然得尸解者也。〔此是先世有陰功密德、不拘於迹者、既非己身所辦、故以一骨酬副三官也、此骨

恐是質形之骨、非神形之骨、既被遺落、當復重生之耳、(火)^①「大」都論仙鬼中諸人、在世有剝腹刎頸、支體分裂死者、永自不關後形、其神先以離出、故今形可得而斃傷殘、初不斷神矣、而世或有見鬼身不全者、蓋是尸魄託骸者耳、非其大神本經之主也、尸解之說、復有多條、已抄記在第三篇中耳

右此五條、皆積行獲仙、不學而得、但爲階級之難、造道用年歲耳、要自得度名方諸、不復承受三官之號令矣。(此雖五條而有七事、事中復有輕重、非至志者、亦不辦得此例也、今預在學道之品、微微小業、便可與之比肩、況乃眞妙者乎、由是言之、可不自督耳)

- (1) この段、『雲笈七籤』卷八六地下主者に同文が見える。
- (2) 意をもつて「更」の字を「東」の字に改める。
- (3) 愈本が「齊」を「公」に作るのに従う。
- (4) 愈本が「盡」を「存」に作るのに従う。
- (5) 學本が「才」を「財」に作るのに従う。
- (6) この段、『雲笈七籤』卷八六地下主者および『無上祕要』卷八七尸解品に同文が見える。
- (7) 愈本が「衝」を「衡」に作るのに従う。
- (8) この段、『雲笈七籤』卷八六地下主者および『無上祕要』卷八

七尸解品に同文が見える。

- (9) この段、『雲笈七籤』卷八六地下主者および『無上祕要』卷八七尸解品に同文が見える。

- (10) 意をもつて「沙」の字を「紗」の字に改める。

- (11) 愈本が「漂」を「漂」に作るのに従う。

- (12) この段、『雲笈七籤』卷八六地下主者および『無上祕要』卷八七尸解品に同文が見える。

- (13) 宮本が「在」を「左」に作るのに従う。

- (14) 愈本が「火」を「大」に作るのに従う。

そもそも至忠至孝の人は、死後にみな辭令を授かつて地下主者となり、一百四十年すると下仙^②としての教えを授かることができ、大道を授けられるのである。それから徐々に昇進し、仙官に補任されることが出来る。一百四十年ごとに一回、試験を受けて昇進することが許される(この地下主者は、やはり洞天中の記述にあった李東^③たちのことであつて、鬼官を區別してさらに(地下)主者としてのわけではない。一百四十年で一度昇進して第二等へと入り、仙人の使い走りとなり、そこで次第に道についての教えを授かることができるのである)。

至孝の者は、鬼神を感動させ、鳥たちや山獸にその墳墓を見回ら

せることになる。至忠の者は、公正な立場で諫言して心をまつぐに保ち、その誠意が太陽をも貫く^④。ある時は五臓を剖かれ、その身を殺されても、主君を奮い立たせるのである。比干は今戎山におり、李善^⑤は今少室山にいる。このように變化鍊成を遂げた者はとても多いが、この二人を擧げて代表とする。〔比干が胸を剖かれたことは、至忠とすることができよう。孝子で神靈を感動させた者は少なくないのに、今ここで李善だけを擧げているのは、どうもそぐわないように思われる。李善の立場は、忠に關わるものであつて、孝の事跡ではない。恐らく李元の子孫を残し、その後嗣を得さしめ、そのことで（その子に）孝を成し遂げさせたからなのであつて、彼の功德については問題にしないのである。程嬰、公孫杵臼^⑥もやはり孝の部類に入るに違いない。李善、字は次遜、もともと南陽育陽の李元の家の下僕であつた。漢の建武年間（二五—五六）、李元一家の人たちはことごとく死に絶えたが巨萬の富があり、ただ一人續祖という名の孤兒が残されたものの、まだ赤ん坊であつた。下僕たちがそろつてこの子を殺してその財産を分けようとするや、李善はそこで密かに續祖を背負つて瑕丘山中に逃げこみ、養ひ育てて暮らしを立てた。十歳餘りになると、山から出て縣令の鍾離意にこのことを告げた。鍾離意はそこで上表文を奉つて彼を推薦し、下僕たちをことごとく捕えて殺し、續祖を立てて一家を興した。光武帝は李善を太子舍人に任命し、その後、日南太守、九江太守に遷つた。その事

跡はまさしくこのようであるが、しかし「鍾離意傳」に言うところには若干異なる點がある^⑦。

そもそも上聖^⑧の徳を備えた者は、死後にみな三官の辭令を授かつて地下主者となり、一千年すると三官の五帝^⑨に轉任する。あるいは東西南北の四明公となつて鬼神を治めることになる。さらに一千四百年たつと、太清天を遊行することができるようになり、九宮の中仙となる。〔年限の點から言えば、聖徳は忠孝にさつぱり及ばない。計算をしてみると、死後およそ二千四百年でやつと仙階に入ることができるといふのだから、前に述べられていたのが、夏啓であつて召公ではないことがますます明らかとなる。季子の死後、晉の興寧年間（三六三—三六五）になつてやつと約八百八十年ほどであり、まだ一千年にもなつていない。どうして彼がすでに（北）明公になつているのか分らない。『鄴都記』の記事には五帝のことをずばりと説明しているものはない。恐らく北帝の類のようなものであつて、やはり五人いるのであろう。だから後に「英雄は五帝の上相となる」とあり、北帝（の上相）には秦始皇帝がいるのである^⑩。また、『蘇韶傳』に「揚雄や張衡たちは五帝となつてゐる」とある。揚雄も張衡も上聖の人ではないし、爵位も低いので、炎帝と同列に並ぶことはできないはずである。またあるいは（五帝の他に）小五帝なるものがあつて、そのことを論じていないだけなのであろう。揚雄と張衡

の二人の事はあるいは正しくないのかも知れない)

そもそも蕭々邈々たる才を備え、衆に拔きん出た譽れがあり、浩然の氣を養い、榮華富貴にあくせくしない者は、死後に三官の辭令を授かつてすぐれた魂氣を持った鬼となり、四百年たつと地下王者となることができる。これより順次昇進してゆき、三百年で一段階昇進する。(この記事は、高士や逸民の部類のことである。地下王者から以後は、仙階に入るのであつて、もはや二度と鬼官とはならない)

そもそも至貞至廉の才がある者は、死後に辭令を授かつて三官の清鬼となり、二百八十年たつと地下王者となることができる。これより次第に昇進して仙官に補任されることができ、二百八十年で一段階昇進する(この規定は前條の高士よりやや勝るが、年數が忠孝の者たちの倍かかる。だから忠孝貞廉の徳は行いの中の最上のものであることが分かるのである)。

そもそも至廉の者は、自分のものでない食物は食らわず、自分のものでない衣服は着ない。王陽がそれに近い(この項目では伯夷、叔齊をその代表とすべきであり、高士の中にもこのような類が多いのに、今ここで王陽を擧げているのは、その當時ありのままの淳徳を備え、ことさらに皎潔な生き方をした者ではないからである。王

陽は前漢の人である)。

そもそも至貞の者は、絢爛華麗なものもその正しい氣を散じさせることはできず、天子ですらその名節を動搖させることはできない。男性では務光の行いがそれに近く、女性では宋金漂女がそれに當たる。(貞とは、女色に溺れないことだけではなく、榮華利益にも恬淡であることをいう。務光は湯王の王位讓渡の申し出を斷つて、石を背負つて河に身を投げた。宋女とは、恐らく伍子胥が出會つた、漂水の北で紗を洗っていた者のことであろう。伍子胥が後に河に金を投げてこれに報いたので、金漂と言うのである。「漂」の字はあるいは「漂」の字に作るべきなのかも知れない)

先祖に三官に記された功德があつて、それが子孫にまで及んでいる者、あるいは何代にもわたつて繰り返し肉體を鍊化し、名を改めて生まれ變わる者は、七世の陰徳が根を張り葉が生えるように影響しているのである。彼らは、死後に脚の骨を一本残しておいて三官にそれを返さなければならず、残りの骨は身につけたまま仙去する。男性の場合は左の骨を、女性の場合は右の骨を残す。彼らはみな辭令を授かつて地下王者となり、二百八十年たつてやつと昇進して地仙としての道を授かることができる。死を迎えるに際して、その肉體がまるで生きている者のように見え、また、死んでから、その屍が硬直せず、足の指も青く變色せず、手足にも皺ができない者は、

先祖に德行があつて、自然に尸解を遂げた者というのである。(これは、先祖に陰功や密徳があつて、本人の行狀には關わらない場合である。自分がなし遂げたところではないので、骨一本を三官に酬いるのである。この骨は恐らく肉體に關わる骨であつて、精神に關わる骨ではない。だから骨を脱落しても、きつとまた生えてくるのである。あらずし仙界や鬼界の中の人たちを論じてみると、俗世において腹を剖かれ首を刎ねられ、四肢がばらばらになつて死んだ者は、そのことが後の肉體にまったく關係しない。精神がまず先に肉體を離れるので、今の肉體はぼろぼろに傷つき損なわれてもかまわないのであつて、精神を斷ち切ることはまったくない。しかるに、世間であるいは體の損なわれた幽靈を見ることがあるのは、恐らく死者の魄が生前の亡骸に憑依したものであらう。靈魂本來のあり方で存在しているのではない。尸解の説についてはさらに澤山あるが、すでに第三篇に抄記してある²³⁾。

右のこの五條は、すべて行いを積んで仙人となることができ、仙道を學ばずして得仙する場合である。しかし、仙人の階級は困難なために、仙道に至るまでに年數がかかるのである。要するに、名を方諸宮に登録することさえできれば、もはや二度と三官の命令に指圖されることがないのである。(ここで五條と言っているが、實際には七事あるし、それらそれぞれにも輕重がある。よほど志のある者

でなければ、このような例に與かることはできない。今、仙道修行者の列に與かる者は、取るに足らぬほんの少しの行いで彼らと比肩することができるのである。ましてや眞妙なる者ならばなおさらのことである。このことから言つて、自らを督責しないでよからうか。

- ① 至忠至孝之人…『道教義樞』卷一位業義「(四極明科及眞跡)又云、至忠至孝、至廉至眞者、改化更生、得爲鬼官也」。
- ② 下仙 『紫陽真人内傳』「仙人曰、藥有數種、仙有數品、有乘雲駕龍、白日昇天、與太極真人爲友、拜爲仙官之主、其位可司眞公定元公太生公及中黃大夫九氣丈人仙都公、此位皆上仙也、或爲仙卿、或爲仙大夫、上仙之次也、…若食穀不死、日中無影、下仙也、或曰尸解、過死太陰、然後乃下仙之次也」。
- ③ 李東等 『眞話』卷一三葉一裏を參照。
- ④ 精貫白日 『三國志』魏武帝紀「君執大節、精貫白日、奮其武怒、運其神策、致屈官渡、大殲醜類、俾我國家拯于危墜、此又君之功也」。
- ⑤ 比干今在戎山 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「比干」、注「在戎山」、『紫陽真人内傳』「乃登戎山、遇趙伯玄、受三九素語」。
- ⑥ 李善 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「李善」、注「南陽人」。また、『後漢書』列傳七一獨行李善傳を參照。

- (7) 比干剖心 『史記』殷本紀「紂愈淫亂不止、微子數諫不聽、乃與大師少師謀、遂去、比干曰、爲人臣者、不得不以死爭、適強諫紂、紂怒曰、吾聞聖人心有七竅、剖比干、觀其心」。
- (8) 程嬰、公孫杵臼 『史記』趙世家を参照。
- (9) 鍾離傳所說少復有異耳 『後漢書』列傳三二に鍾離意の傳があるが、李善に關する記述は見られない。
- (10) 上聖 『史記』卷八八蒙恬傳「周書曰、必參而伍之、…察於參伍、上聖之法也」。
- (11) 三官之五帝 『洞眞太上智慧消魔眞經』卷一注「三陰者、五帝之三官也、治罪人之死生矣」。
- (12) 益知前應是夏啓非召公明矣 『眞誥』卷一六葉上八表を参照。
- (13) 後言英雄者爲五帝上相、而北帝有秦皇矣 『眞誥』卷一六葉一二裏を参照。
- (14) 養其浩然 『孟子』公孫丑上「我善養吾浩然之氣」。
- (15) 善爽之鬼 『登眞隱訣』卷中「鬼有三被此祝者、眼睛盲爛而身即死」、注「此謂諸殺鬼邪鬼及天地間自有惡強鬼輩、聞此而死耳、非人死之魂爽爲鬼者也」。
- (16) 眞元妙道修丹歷驗抄(『雲笈七籤』卷七二)「蓋住心無心、即眞道自會、名虛無之身、實有之質矣、此得性遺形之妙、不得鍊形之要、名爲清虛善爽之鬼」。
- (17) 至貞至廉之才 注(1) 参照。
- (18) 不衣非己之布帛 『眞誥』卷一〇葉一九表「凡存神光行眞仙之事者、又不得以衣服借人、亦不服非己之物」。
- (19) 王陽 『漢書』藝文志「傳齊論者、昌邑中尉王吉少府宋畸御史大夫貢禹尚書令五鹿充宗膠東庸生、唯王陽名家」、注「師古曰、王吉字子陽、故謂之王陽」。また、『漢書』卷七二王吉傳を参照。
- (20) 宋金漂女 『眞靈位業圖』第六女眞「宋漂金母」。
- (21) 吳越春秋 卷三王僚使公子光傳「伍子胥」遂行至吳、疾於中道、乞食溧陽、適會女子擊綿於瀨水之上、宮中有飯、子胥遇之、謂曰、夫人、可得一餐乎、…女子知非恆人、遂許之、發其簞宮、飯其盞漿、長跪而與之、…子胥已餐而去、又謂女子曰、掩夫人之貞明、不願從適、何宜饋飯而與丈夫越虧禮儀、妾不忍也、子行矣、子胥行、反顧女子、已自投於瀨水矣。同卷四闔閭內傳「子胥等過溧陽瀨水之上、乃長太息曰、吾嘗飢於此、乞食於一女子、女子飼我、遂投水而亡、將欲報以白金、而不知其家、乃投金水中而去」。
- (22) 神形 蔡邕「王子喬碑」「棄世俗、飛神形、翔雲霄、浮太清」。
- (23) 已抄記在第三篇中 第三篇は第一篇の誤りであろうか。『眞誥』卷四葉一四裏以下を参照。

① 諸有英雄之才、彌羅四海、誅暴整亂、拓平九州、建號帝王、臣妾四海者、既終、受書於三官四輔、或爲五帝上相、或爲四明公賓友、以助治百鬼、綜理死生者、此等自奉屬於三官、永無進仙之冀、坐斂伐積酷害生死多故也。《鄆宮中諸人、職皆是矣、疑荀彧一人、清秀整潔、非跋扈虐害、唯以謀謨智策佐魏武耳、乃得爲賓友、與漢高等比位、恐當別有旨趣、凡在世有才識藝解、爲一時所稱者、既沒、竝即隨才受其職位、不必執其在生之小罪、先充諸考謫也、若過爲非理、是所不論、若悠悠冗散、不辯異人者、罪無大小、悉當安之。

② 秦始皇今爲北帝上相、劉季今爲南明公賓友、有其人甚多、略示其標的耳。《此是舉建號帝王者之宗耳、北帝之有上相、亦當如四明之有賓友也》

③ 齊桓公今爲三官都禁郎、主生死之簡錄、晉文公今爲水官司命、其楚嚴公趙簡子之徒數百人、今猶散息於三官府、未見任也、此等名位、自是三官之寮耳、无豫眞仙家事矣。《五霸亦一時之雄、齊桓晉文、處職竝要、楚嚴公即莊王也、簡子雖非霸限、亦擅命專制、所夢天帝使射熊之事、必是北帝之府矣、劔經序稱燕昭亦得仙、燕昭、六國時英主、遂不墮於三官、乃知鍊丹獨往、亦爲殊拔也、從論忠孝已來至此、竝出掾寫劔經中東卿司命所說、即是鬼神事、謹抄出繼此、以相證發、自三代已來賢聖及英雄者爲仙鬼中不見殷湯周公孔子闔閭勾踐、春秋

時諸卿相大夫、及伍子胥孫武白起王翦、下至韓信項羽輩、或入仙品、而仙家不顯之、如桀紂王莽董卓等、凶虐過甚、恐不得補職僚也、而異域有冒頓蹋頓石塊石勒諸驍傑、亦都不預及言之耳。

① この段、『雲笈七籤』卷八六地下主者および『無上祕要』卷八七戸解品に同文が見える。

② この段、『雲笈七籤』卷八六地下主者および『無上祕要』卷八七戸解品に同文が見える。

③ この段、『雲笈七籤』卷八六地下主者および『無上祕要』卷八七戸解品に同文が見える。

英雄の才があつて、天下を覆い包み、暴動反亂を懲らしめ鎮壓し、九州を平定し、帝王の號を建てて、天下を服従させた者で、死後に三官の四輔から辭令を授かり、あるいは五帝の上相となり、あるいは四明公の賓友となつて、百鬼を取り抑えることを助け、生死を統べ治める者も、自ずから三官の管轄下に屬し、仙階に進む望みはまったくない。殺伐で残酷な行いを積み重ね、人の生死を損なつたことが多くからである。《鄆都宮の面々はもっぱらすべてこの類である。不審なのは、荀彧一人だけは、ひととき清潔できちんとした人柄で

あつて、横暴に振舞つて人をしいたげ害したりはせず、ただ謀略と智策をもつて魏の武帝を助けた。それなのに(四明公の)賓友となり、漢の高祖たちとその位を並べている。恐らく何か別に理由があるのに違いない。およそ俗世において才能、識見、技藝があり、一時に名を稱せられた者は、死ぬとみなだちにその才に應じて職務と位を授かる。必ずしも生前の小さな罪にこだわつて、まず考罰に當てることはいらない。もし餘りにも道理にはずれている場合は論外である。平々凡々で鳴かず飛ばず、際立つた人間として辨別されない者は、罪の大小に關わらずすべてその罪に當てるべきである。

秦の始皇帝は今北帝の上相である^①。劉季(漢の高祖)は今南明公の賓友である。この類の人は非常に多いが、その代表となる者をあらまし示しておく。(これは帝王を號した者の代表を擧げたのである。北帝に上相がいるのは、四明公に賓友がいるようなものである。)

齊の桓公は今三官都禁郎であり、生死の名簿を管理している。晉の文公は今水官司命である^②。楚の嚴公や趙簡子たち數百人は、今なお三官の役所でぶらぶらしており、まだ任命されていない。これらの職名と位階は自ずから三官の官僚のものであり、眞仙家の事には與かつていない。(五霸も一時の英雄であり、齊の桓公と晉の文

公はどちらも要職に就いている。楚の嚴公とは莊王のことである。趙簡子は霸者の中には入らないが、やはり思ひのままに獨裁を行つた。彼が夢に見たところの、天帝が熊を射させた事は、きつと北帝の役所で事に違いない。『劍經』序に、「燕の昭王も仙人となつた」とある。燕の昭王は六國の時の英主であるが、三官に墜ちなかつた。彼は鍊丹術に飛び抜けてすぐれていたから、それで特別に拔擢されたと分かるのである。忠孝について論じている所からこまで、すべて許掾が書寫した『劍經』の中の東卿司命君の言葉に基づいている。つまり鬼神の事であり、謹んでそれを抄出してここに繋ぎ、互いに發明することとする。(夏、殷、周の)三代以來の賢人、聖人および英雄で仙人や鬼神となつてゐる者の中に、殷の湯王、周公、孔子、吳の闔閭、越の勾踐、春秋時代のもろもろの卿、相、大夫、および伍子胥、孫武、白起、王翳、さらに下つて韓信や項羽たちが見えない。あるいは仙品に入つてはいるが、神仙家がそれを明らかにしないのかも知れない。桀、紂、王莽、董卓たちなどは、その凶惡殘虐さが餘りに過ぎており、恐らくは職位に補任されなかつたのであろう。そして、異域には冒頓、躑頡、石塊、石勒などの驍勇英傑がいるが、やはり彼らについてもまったく言い及んではない。

(1) 秦始皇：『眞靈位業圖』第七左位「北帝上相秦始皇」。

- (2) 齊桓公…『眞靈位業圖』第七左位「三官都禁郎齊桓公」、注「姓姜、名小白」。
- (3) 晉文公…『眞靈位業圖』第七左位「水官司命晉文公」、注「姓姬、名重耳」。
- (4) 楚嚴公、趙簡子、『眞靈位業圖』第七右位「楚嚴公（注：即楚莊王熊鸞）、趙簡子（注：此二人先未有職、今方受位）」。
- (5) 所夢天帝使射熊之事『史記』趙世家「趙景叔卒、生趙鞅、是爲簡子、…趙簡子疾、五日不知人、大夫皆懼、醫扁鵲視之、出、董安于問、扁鵲曰、血脈治也、而何怪、…居一日半、簡子寤、語大夫曰、我之帝所甚樂、與百神游於鈞天、廣樂九奏萬舞、不類三代之樂、其聲動人心、有一熊欲來援我、帝命我射之、中熊、熊死、又有一羆來、我又射之、中羆、羆死、帝甚喜、賜我二笥、…」。
- (6) 冒頓、踰頰、石塊、石勒 冒頓は『史記』卷一一〇匈奴列傳、踰頰および石塊は『後漢書』列傳八〇烏桓鮮卑列傳、石勒は『晉書』卷一〇四、一〇五石勒載記を参照。